GAME NOVELS

FINAL FANTASY® IV THE AFTER

ファイナルファンタジーIV
ジ・アフター

月の帰還



手塚一郎
イラスト:オグロアキラ
原案・監修:時田貴司

SQUARE ENIX.

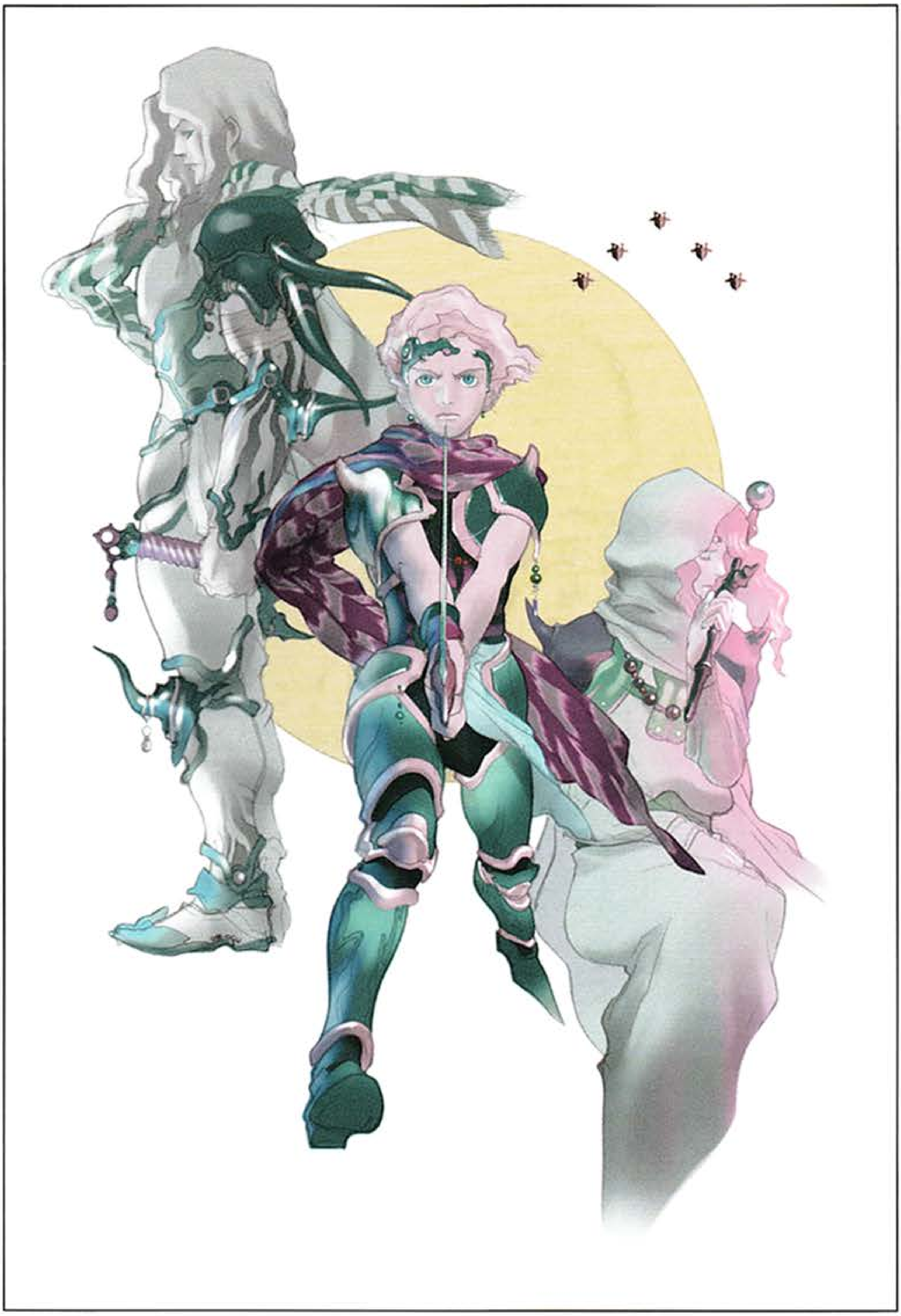
GAME NOVELS

FINAL FANTASY IV THE AFTER

ファイナルファンタジーIV ジ・アフター

月の帰還

手塚一郎

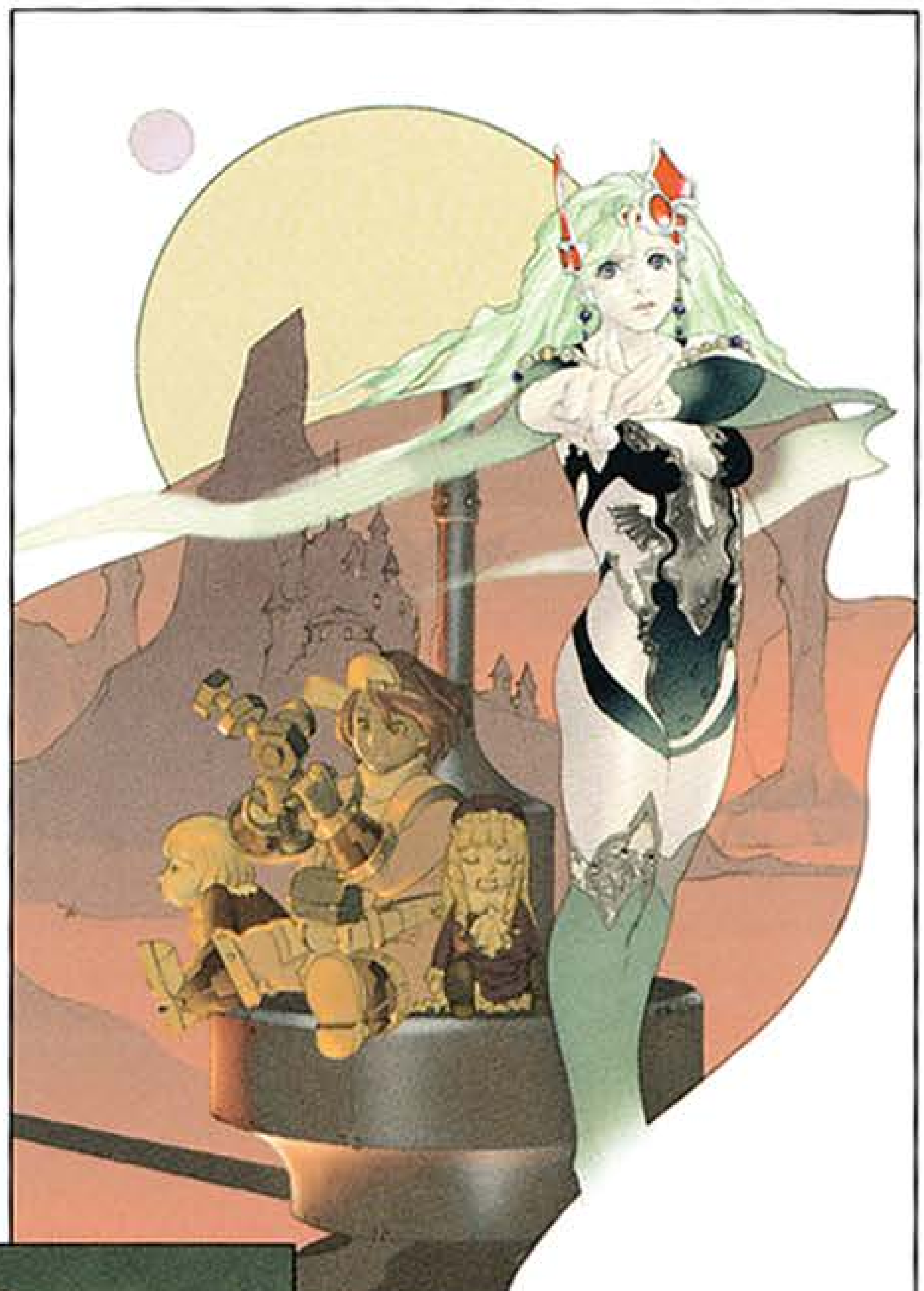


セオドア編
最後の赤き翼

かつての大戦から十余年。大国バロンの王となったセシルは、ローザとの間にひとりの息子を授かっていた。その少年の名はセオドア。周囲からの過剰な期待から逃れるように飛空艇団《赤き翼》の一員に志願した彼は、騎士となるための試練を自らに課すのだが…。

リディア編
閉ざされた幻獣たち

リディアは、第二の故郷である幻界を訪れるが、そこで思いもよらぬ事件に遭遇する。空色の髪をした少女の手によって幻獣たちが心を奪われ石化してしまったのだ。まるで過去が蘇ったかのようにしてくり返される悲劇。リディアは、その真相を探ろうと決意する。





ヤン編
ファブールの師父

ファブールの王となったヤンだがその生きかたは変わらず、モンク僧たちとの修行に明け暮れていた。そんなある日、城を飛び出したひとり娘のアーシュラを連れ戻すべく、ホブス山へ向かったヤンは、そこでファブールへ迫る《赤き翼》の船影を目にするのだった。

パロム編
魔道士、森と水の都へ

長老の命により、森と水の都トロイアへ旅立ったパロム。そこで神官候補の少女レオノーラに黒魔法の手ほどきをすることになるが様子がおかしい。白魔法の総本山とも呼ばれるトロイアが、なぜ黒魔法を必要とするのか。異変はトロイアをも呑みこもうとしていた。





エッジ編
バブイルの鼓動

亡き両親の跡を継ぎ、エブラーナの王となったエッジ。だが、ふと見上げた空にふたつの月が浮かんでいた。彼方へと飛び去った月が、なぜ戻ってきたのか——。異変の予兆を感じ取ったエッジは、彼を慕う四人の忍たちを密偵として各地へ放つことになったのだが。

ポロム編
月へ消えた魔導船

竜の口より浮上した魔導船が空の彼方へと飛び去っていった。そして平和なミシディアを襲う魔物の群れ。事態を重く見た長老は、試練の山へ向かうようポロムに命じる。その目的は、祖国バロンを捨てて行方をくらませていた竜騎士カインの力を借りることだった。





ギルバート編
星落つるダムシアン

ダムシアンの王ギルバートは、各地の復興に尽力していた。ある晩、城の東に流れ星が落下する。その影響は甚大で、大地が腐りはじめていることを知る。しかしギルバートの不安をよそに、突然やってきたバロンよりの使者は、その調査の禁止を告げるのだった…。



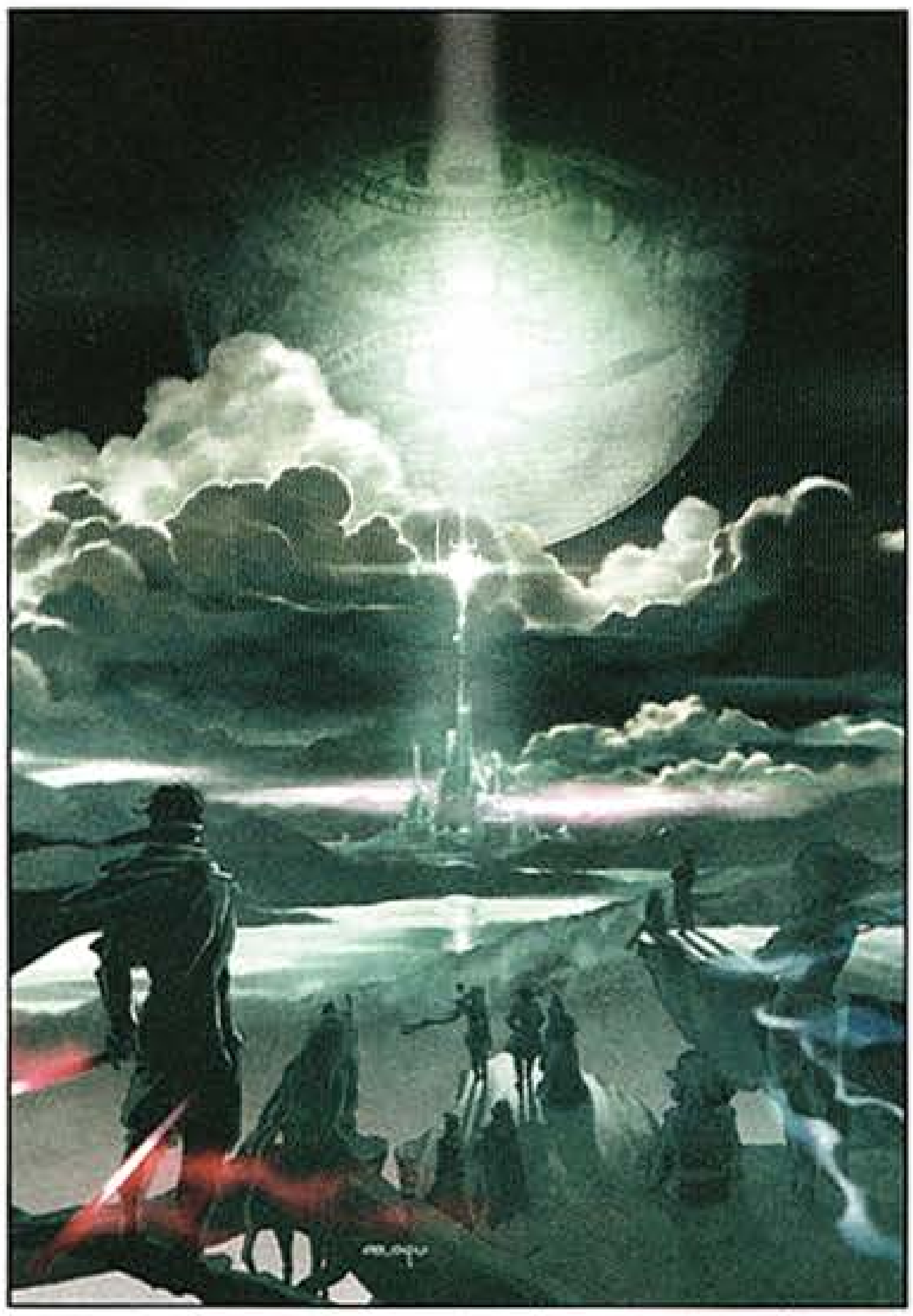
カイン編
竜騎士の帰還

試練の山を降りたカインは、ミシディアからクリスタルを奪うと、空色の髪の少女に導かれるようにしてバロン城へ向かう。セシルを殺すと呟くカインの心に燃えたぎっているのは、ローザへの捨て切れぬ想いである。だがそんなカインの命を狙うひとりの男がいた。

月の民編
追憶の青き星

かつての戦乱ののち、ゴルベーザは月の民のひとりとして同胞たちとともに永き眠りについていた。しかし忍び寄る異変が、彼を目覚めさせてしまう。原因を究明すべく月の民の館を訪れると、そこにはクリスタルが不気味な赤い光を発し、警告をくり返していた…。

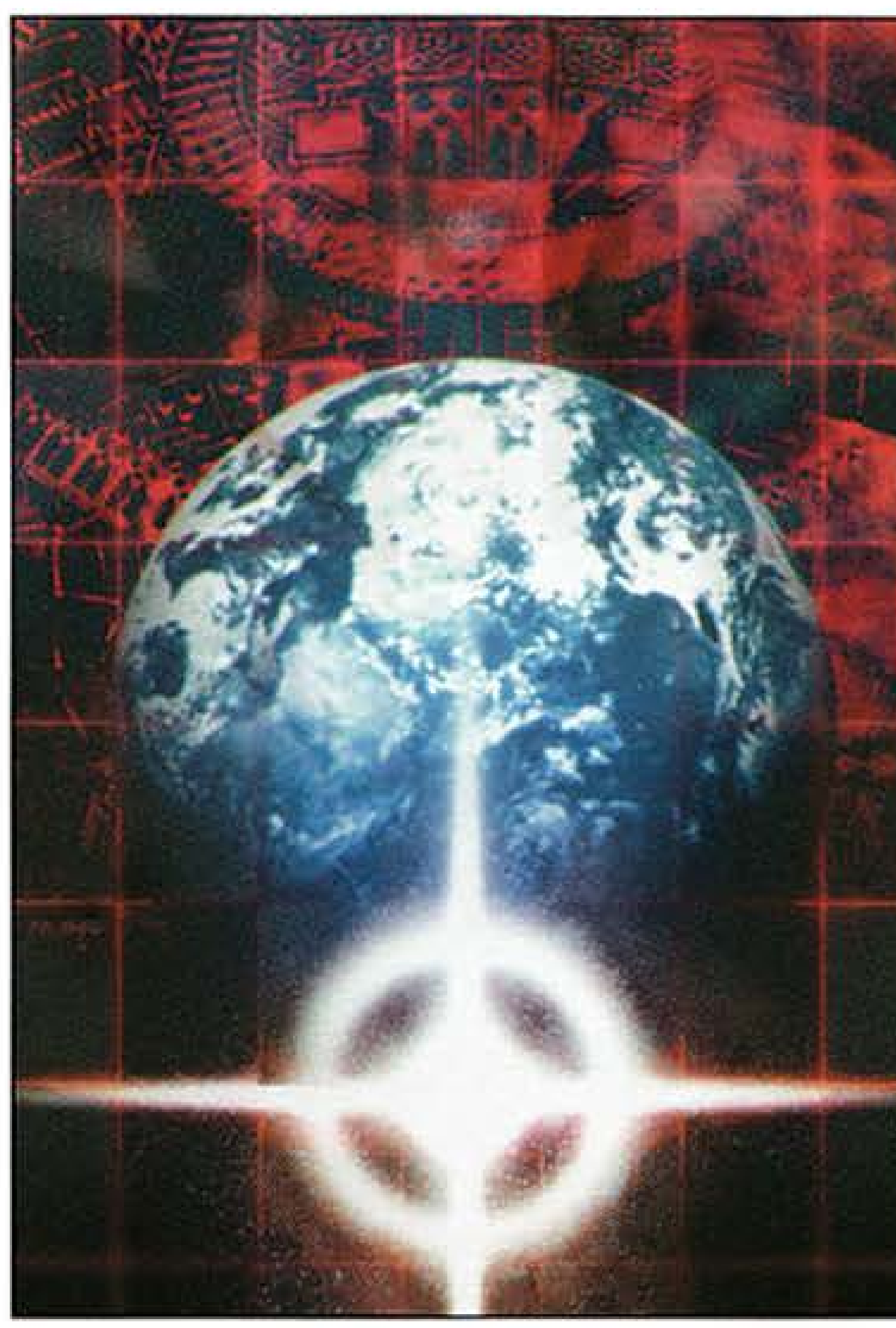




集結編

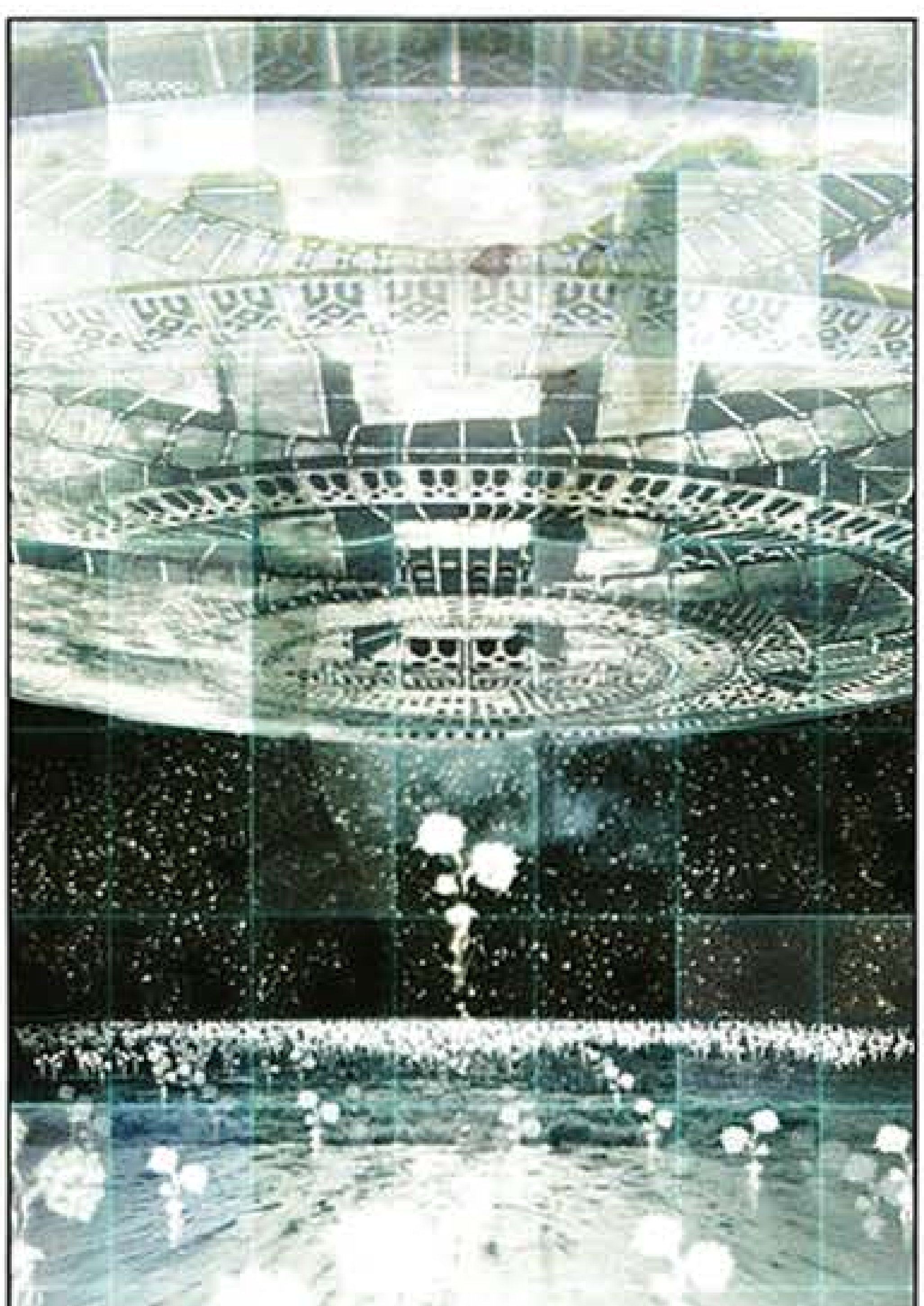
月の引力

接近する月と降り注ぐ無数の流れ星によって荒廃してゆく青き星。リディアやエッジらは、各地に散った仲間たちを求めて飛空艇ファルコンを駆る。ときを同じくしてバロン城では、王セシルが愛する妻ローザ、息子セオドア、そして親友カインに刃を向けていた…。



終章　前編

真月



終章　後編

星喰

GAME NOVELS

FINAL FANTASY IV THE AFTER

ファイナルファンタジーIV ジ・アフター

月の帰還

CONTENTS

カバー・口絵・本文イラスト／オグロアキラ
カバー・表紙・帯・目次・章扉デザイン／渡辺宏一



序章

FINAL FANTASY IV THE AFTER

ファイナルファンタジーIV ジ・アフター

月の帰還

——お前たちを祝福する。

ふたりが結ばれたことを心から喜んでいたのならば、意識せずともその言葉は自然と口から流れ出たはずだった。そうならなかったのは、やはり己の弱さ、未熟さを痛感していたからなのだろう。あのときカインは、背にすがる女を振り返る代わりに無言で故郷を発った。時は決して巻き戻すことはできない。過去をくり返すこともできない。ならば、この冷酷な現実と向き合えるまでに己を鍛え、胸のうちに巣食う闇を打ち払うまでだった。

カインは今、鏡に映った自分の姿を、ただ見つめている。

魔道士たちの村ミシディアの遥か東方。広大な森を穿つようにして、その岩山はそびえ立っていた。山頂に眩(まばゆ)い光が宿っているとされており、魔道士たちに聖地と崇められている。ここが試練の山と呼ばれるのは、光を求める魔道士たちを拒むかのように〝生ける屍(アンデッド)〟どもが蔓延(はびこ)っているからなのだ。カインは精神の浄化のためにここで修行に明け暮れた。魔物を相手に槍を振るい、邪念に打ち勝とうと努力する毎日がつづいた。しかし、十年を越える月日が過ぎ去っても、いまだに探し求める光を目にすることはなかった。

カインは、なおも鏡が映す己の姿を見つめている。

こうしている間にも時は容赦なく流れ、多くの民が生まれては土へ還ってゆく。世界はゆっくりとだが、確実に変化している。その中で生き抜くには、自分が変わらなければならない。わかっている。わかりきっていることだ。

今日こそは、俺は変わる——

それは何百、いや何千回と、毎日のようにくり返されてきた決意。朝日が昇るたびに高鳴る胸が、夕日とともに萎んでゆく日々が心をよぎる。今日が昨日と何ら変わらない一日だったとしたら……。そう考えるたびに己の無力に絶望する。

しかし、今日はいつもと何かがちがっていた。

草木の一本さえ生えない不毛の地。青空の下にありながら納骨堂の不気味さにも似た雰囲気を漂わせた山道を、カインは登る。途中、今にも消え入りそうな声を聞いた。風の囁きにも似たその声に導かれて山頂を目指す。そこには古びた石碑が建っていた。石碑の前で足を止めると無造作に左手を伸ばし、その苔むした表面に触れる。つぎの瞬間、視界が歪んだ。気がつくとカインは奇妙な小部屋にいた。周囲を見まわす。四方の壁と床、そして天井までもが鏡張りという一室だった。視線を向ける先々に、青黒い甲冑を身にまとった己の姿がある。あらゆる方向から自分を見つめてくる目に、心の奥底まで見透かされているような気分になった。

『――そなたも光を求め、やってきたのか』

どこからともなく聞こえてきた声に、カインは弾かれたように身構えた。同時に鏡の中の竜騎士も浅く腰を落とした。視線だけを左右に動かす。声の主は見当たらない。しかしその姿を捜そうとは思わなかった。憂いを含んだその声に、敵意や殺意がまったく感じられなかったからだった。加えて声は〝そなたも〟と言っていた。思い浮かべたのは、バロンの王となったセシルの顔である。もとは光を拒む暗黒騎士だったセシルは、この試練の山で魂に巣食う闇を駆逐、聖騎士（パラディン）となった。恐らくは、この鏡張りの部屋で光の加護を受けたのであろう。

「俺は、己の胸のうちに潜む闇を滅せねばならぬ」正面の鏡を凝視し、カインは叫んだ。
『そなたが望むのならば、私の力を授けよう』声はそこで言葉を切り、相手の反応を見るかのように沈黙した。カインが黙したままでいると、やがて声はつづける。『だが、そのことで、そなたはさらなる悲しみに包まれるであろう。それでも――』
「構わぬ」そう言い放つと、カインは浅く腰を落としたままで、正面の鏡に映る己の姿を見つめる。その青黒い鏡像の兜の下、くちびるがあるかなしかの笑みを浮かべているように思えたのは錯覚だろうか。つぎの瞬間、鏡の中のカインだけが、頭上高くに跳躍した。それを追い、上方を見やる。天井の鏡に、見上げる姿の自分は映っていなかった。四方の鏡も同様で、そこから己の鏡像が消えていた。自分へ向けられた殺気に気づき、再び頭上を仰ぎ見る。槍の切っ先を下に向けて急降下する竜騎士を、上方の鏡が映し出していた。カインは弾かれたように後方へ跳躍。同時に天井の鏡を突き破り、もうひとりのカインが無数の破片とともに着地した。衝撃で、床の鏡に亀裂が入る。
　再び、どこからか声が聞こえてきた。『忌まわしき過去と、今こそ決別するのだ。これまでの自分を克服せねば、聖なる力はそなたを受け入れることは――』
　それを哄笑が遮った。鏡から抜け出てきたほうのカインだった。「笑止。この男の本質は闇に他ならない。今にも消え入りそうな光に、いったい何ができる」
「貴様が俺の心に巣食っていた闇――」カインは、自分と寸分違わぬ相手を睨み、手にしていた槍を強く握った。「貴様を滅し、俺は変わる」

ふたりは同時に動いた。渾身の力をこめて突き出された相手の切っ先を、互いに体をひねってかわす。両者の距離は一気に詰まり、面頬同士がぶつかった。その奥に隠された双眸が、怒りに燃える。押すと見せかけて後方へ跳躍、間合いからはずれる寸前に、槍を横に薙ぐ。が、切っ先は空を斬っただけだった。間髪入れずに滑るようにして一歩踏み出し、得物の長さを利用し、相手の足を払おうとする。相手が同じ動きをしていると気づき、上方へ跳んだ。同時に槍を振り上げ、無防備なはずの頭部へ叩きつける。手応えはあった。しかし打ち据えたのは、相手の槍。何のことはない、互いにまったく同じ動きをしていただけだったのだ。

たった数瞬の攻防に過ぎなかったが、カインは自分でも信じられないほど疲弊していた。極度の緊張による力み、そして理性を呑みこまんとする怒りが体力を浪費させていたが、それだけではない。刃を交えてみて、相手が己自身であることに気づいたからだった。剣の腕や癖、そして戦略まで一切に差がない。相手の裏をかこうとしても、それと同じことを向こうも考えていたら——そういった思考の堂々巡りが焦りとなり、精神と肉体の双方を消耗させる。

圧倒的な力量のちがいがあれば、勢いだけで押し切ることもできよう。しかしそこに差がない場合は、いかに相手の虚を突けるかが勝負の分かれ目となるのは、剣術では常識だ。ならば、〝己〟を相手にしたときはどうすれば——？

答えなどないことは、カインも承知していた。だから焦燥感に心を炙（あぶ）られる。怒りに任せて闘えば、さらに疲弊し、形勢は悪くなるばかりだった。つぎに打つ手が見つからない今、無駄に体力を消耗するべきではない。

そんなカインの考えを読み取ったのか、闇の具現化した竜騎士が動いた。つぎつぎに突き出される切っ先を、カインはかろうじてかわしつづける。その速度は、まったく落ちる気配がなかった。やがて狂気に彩られた刃のいくつかが、カインの体に浅くない傷を刻みはじめた。滴り落ちる血が、鏡の床を赤く染めてゆく。相手の手の内は読めたとしても、それに対応できるかどうかは、また別の問題なのであった。

「どうした、貴様の覚悟はその程度か」と鏡像が吠える。

カインは、己の死を予感した。

ふと、ふたりは――セシルとローザは、どうしているだろうかと考えた。

セシルは、これまでに三度、この試練の山へ使者を送ってよこしている。いずれも早くバロンへ戻ってくるように、といった内容だったが、それをカインは拒んだ。三度目は、抜き放った切っ先を使者の首すじに突きつけ、「つぎに姿を見せたら、二度とバロンへ戻れなくなる」と凄んだ。以来、セシルが使者を遣わすことはなくなった。

カインが恐れたのは、セシルやローザ本人がここへやってくることだった。だが、それは杞憂に終わった。カインの心情を慮ってか、あるいは単に面倒に巻きこまれたくないと考えたのかは定かではない。その後、風の噂でバロン王国の竜騎士団が解体されたと耳にした。故郷へ戻る理由が、またひとつ消えたのだった。

無言のまま、じりじりと後退するカインに、闇の竜騎士が迫ってくる。カインの背が壁にぶつかった。これ以上、間合いを広げることはできない。カインは動かなかった。否、動けな

かった。どこへ逃げようとも、血に濡れた切っ先で刺し貫かれるだけのように思えてくる。こちらの考えなど、すべて読まれているはずだ。何といっても相手は、自分自身なのだから。
　奇声を上げ、鏡像のカインが槍を突き出す。欲望に満ちたその切っ先は、しかし微動だにしない獲物を捉えることはできず、背後の壁の鏡を粉々に砕いただけ。カインが動いた。相手が床の血だまりに足を取られ、狙いをはずしたのだと悟ったのだ。勝機は、これをおいて他にない。カインは態勢を低くして相手の懐へ飛びこむと、右肩のあたりで鏡像の顎をかち上げる。その衝撃で闇に支配された竜騎士の手から得物が落ちた。追撃に槍を横へ薙ぐ。手応えがあった。相手はそのまま後方へと吹き飛び、背中から壁へと激突する。衝撃で鏡が砕けた。カインは攻撃の手を緩めない。床へ崩れ落ちた偽者を槍で何度も打ち据える。
　と——振り上げた槍がカインの頭上で静止した。
　鏡像のカインのくちびるに強烈な笑みが浮かんでいた。
「待ち望んでいたときが、ようやく訪れる」鏡像が言った。
「死を欲するか」そう言って、カインは頭上に掲げていた槍を下ろし、その切っ先をゆっくり相手の喉元へと突きつけた。「その望み、叶えてやろう」
　鏡から抜け出た竜騎士は、命乞いする様子もなく嗤(わら)った。それがカインの怒りに再び火をつけた。槍を後方へ引くと、渾身の力をこめて突き出す。切っ先が喉を穿つ直前で静止した。カインの顔に浮かぶのは驚愕の表情。
　偽者のカインは、突きつけられた刃を軽く左手で払いのけて立ち上がった。彫像のように立

ち尽くすカインの横を悠然と歩き、床に落ちていた自分の槍を拾い上げる。振り返らずに言った。「臆病者め」鏡像はどこへともなく姿を消した。

たったひとり残されたカインは、先刻と同じ姿勢のままで立ち尽くす。己の見た光景が信じられなかった。奴の姿は、半ば透けていた。そして自分の体も。目の錯覚などではない。断じてちがう。いったい、ふたりの肉体に何が起こったのか。長い思考の末に導き出された答えは、残酷なものだった。理由こそ定かではなかったが、はっきりしたことがある。奴を消せば、自分もこの世から消滅してしまうのだ——。

解き放たれた闇は、行く先を告げずに姿を消してしまった。どこへ向かったのかは考えるまでもない。バロンだ。カインは、槍を床に落とし、両の掌をじっと見つめた。先刻よりはいくぶん濃さを取り戻しはしたものの、まだわずかに向こう側が透けて見えた。

奴の狙いはセシル、そしてローザ。それがわかってしまう自分を、カインは嫌悪した。その凶行を止めなければならない。だが、どうやって——？

鏡像を葬り去るとは、自分もこの世界から消えることである。思わず天を仰いだ。己の分身が現出する際に突き破っていたためにそこに鏡はなく、代わりにわずかな光も存在しない闇が見えた。光を手に入れるための試練は、いつしか破滅への旅へと一変していた。溢れる涙を止めることができなかった。

お前たちを祝福する——。

その言葉を口にする日は、訪れないような気がした。



第1章

FINAL FANTASY IV THE AFTER

ファイナルファンタジーIV ジ・アフター

月の帰還

1

軽く肩を叩かれ、我に返った。顔を上げると、心配そうな表情をしたウェッジの顔があった。しばし目を合わせたあとで、セオドアは無言のまま視線をそらせた。

見渡す限りが空だった。頭上の雲が近いように思えるのは錯覚などではない。ひんやりとした大気を胸いっぱいに吸いこむと、少しだけ冷静さが取り戻せた。足元から腹へ伝わってくる規則正しい低音が航行の順調さを物語っている。もうじきだ、と思った。

セオドアは右舷の手すりへ歩み寄り、そこから眼下を見下ろした。遠くに大洋が広がっている。こんなに高度を上げる必要などないのにと思ったが、周囲の目を気にしてその言葉を呑みこんだ。そういえば以前、父からこんな話を聞かされたことがあった。到達した高度は、そのまま《赤き翼》の誇りと覚悟なのだ、と。今、少しだけその言葉の意味を理解できるような気がするのは、実際に《赤き翼》の一員として天翔ける飛空艇へ乗りこむことができたからなのかもしれない。北西の彼方へ視線を転じるが、故郷のバロン城はすでに見えなかった。

「セオドア様、お顔の色がすぐれませんが」背後でウェッジの声がした。

会話を拒む意味で下界を眺めているというのに、なぜそれに気づいてくれないのだろう。放っておいてくれ、と言うことができたら、どんなに楽なことか。ウェッジはこの《赤き翼》では先輩に当たる上に、こうやって親身になって心配してくれる。それを邪険に扱うべきではないのは、まだ少年と呼ばれる年頃のセオドアにもよくわかっていた。とはいえ、一兵士に過

ぎない子供に対して《赤き翼》の甲板上で〝セオドア様〟と呼ぶのは勘弁してほしかった。

沈黙を守り通す少年に、ウェッジが声をかけた。「ご心配なさるお気持ちは、とてもよくわかります。ですが、ご自身に流れる血をもっと信じるべきかと」

セオドアは、大きく息を吐いたあとで、ウェッジを振り返った。兵士に似つかわしくない、柔和な顔をした男が立っていた。体の線も細い。甲冑に身を固めていなければ、竪琴を手にして各地を放浪する吟遊詩人といっても通用するだろう。そのウェッジが、心配そうな表情で言った。「セオドア様には、偉大なご両親の血が流れているのですから」

ぼくの体の中に流れている血——。

バロン王セシルと白魔道士ローザ——ふたりの英雄の間に生まれたセオドアが、その血筋ゆえに将来を嘱望されたのは当然のことだった。彼に剣の力強さと白魔法の聡明さを期待したのは民衆だけではない。王族や兵士たちも、いずれバロンを率いることになるその少年に、王国の輝ける未来という重荷を無自覚なまま背負わせていた。少年には、セオドアという立派な名前があった。誰もがそれを知っていた。にも関わらず、彼の内面を見ようとする者は非常に少なく、あのセシルとローザの子といった認識しか持たれていないのが現実だった。努力を重ねて何かを成し遂げても、すべて偉大な父と母から受け継いだことによる手柄とされた。また周囲を失望させるような失敗をしでかすと、両親が幼少のころは、と言われる。王セシルと王妃であるローザは、セオドアをひとりの人間として扱い、心から愛した。セオドアもまた、そんなふたりを尊敬していたものの、身内以外の者たちからの過剰なまでの期待に押し潰され、や

がて己の出自や境遇を疎ましく思うようになっていったのだった。

　物心ついたときには、近衛兵団への入隊を薦められた。いろいろと理屈を並べられたが、それはセシルやローザの意向であったとも聞いている。結局のところ両親は、自分たちの目の届くところに息子を置いておきたかっただけなのだ、とセオドアは解釈した。これ以上、城にいたくない。そこでセオドアは、自ら志願して《赤き翼》へ入隊した。

《赤い翼》とは、バロンが誇る飛空艇団の呼称である。大空を飛翔する船は、バロンを軍事大国たらしめる最大の戦力で、戦のありかたを根底から覆した。とはいえバロンが世界征服の野望を抱くわけもなく、他国を牽制し、戦を抑止することが目的だった。その隊長の座はセシルが王に即位したことで一時空席となったが、そこに王の命によってビッグスが就いている。じつの兄のように接してくれるビッグスにならば、自分の悩みをきっと理解してもらえるはずだとの期待がセオドアになかったわけではない。しかし――。

「関係ない」セオドアは、己の爪先に視線を落とした。「今のぼくは、騎士を目指すただの一兵士だ。父さんや母さんの血なんて」言ってから、しまったと思った。案の定、

「思い上がるな」エンジン音を切り裂く怒号があった。

　誰の声なのかは見ずともわかった。セオドアは恐るおそる顔を上げる。《赤き翼》の隊長ビッグスが目の前に立っていた。その表情は怒りに引きつっている。つぎの瞬間、拳が飛んできた。身構える暇もなく頬に衝撃を受けたセオドアは、右舷の手すりに強く背中を打ちつけ、その場に崩れ落ちた。口の中に血の味がした。

ウェッジが必死でなだめるが、ビッグスの怒りは収まらなかった。「今のお前は、兵士以前の見習いに過ぎん。この飛空艇団《赤き翼》は、セシル様の時代ほど甘くはない」
「わかってる。ぼくも、そのつもりでここへ――」
ウェッジを押しのけたビッグスは、倒れていたセオドアの喉をつかんで力ずくで立たせると、その目を覗きこむようにして言った。「幸いにして、ここには俺のやり方に異を唱える者はおらん。言葉遣いから、みっちりと叩きこんでやることにしよう」
ビッグスが、指先に力をこめた。気道を圧迫され、セオドアの喉が壊れかけた笛のように鳴った。そこまでが少年の限界だった。視界が闇に染まり、意識を失った。

2

顔に感じた水の冷たさで、セオドアは目を覚ました。
闇の中に、無数の炎の赤が揺れている。岩肌の持つ複雑な陰影が、その温かみを感じさせる明かりによって幻想的に浮かび上がっていた。大気が湿り気を帯びている。どこかの洞窟の中だろうか。だが、なぜこんな場所に自分が横たわっているのかわからない。
「見習いの分際で、いつまで居眠りをしているつもりだ」
その声で、セオドアは跳ね起きた。踵を合わせ、背すじを伸ばす。目の前に、険しい表情のビッグス隊長の姿があった。そのうしろには不安げな顔のウェッジ、そして三名の兵士が立っ

ている。それでここがアダマン島の洞窟だと理解した。バロン王国より遥か東南。大洋の果てにアダマン島と呼ばれる小さな陸地がある。この島にある洞窟へと入り、〝騎士の証〟を手に入れることが今回のセオドアの任務だった。飛空艇団《赤き翼》は、バロンの誇る精鋭部隊である。王子という身分だけで務まるほど甘くはない。見習いとして特例での入隊が認められたものの、それは猶予期間との意味合いが強い。仲間からの尊敬を勝ち取れない者に、この神聖な甲板を踏ませるわけにはいかないのだ。だからセオドアは、騎士となることを志願した。自らの力でその位をつかみ取れば、誰にも文句は言わせない。すなわち今回の遠征は、セオドアに《赤き翼》の一員としての資質が備わっているかを試す、入隊試験なのだった。

セオドアの双眸に宿る強い光に気づいたのか、ビッグスがにやりと笑った。「それなりの覚悟はできているようだな。ここには、お前の望む世界がある。存分にやれ」

言われた意味がわからず、セオドアは首をかしげる。「ぼくの望む世界……」

「お前と同じように、魔物は平等という言葉が好きらしい。相手が王族だろうが平民だろうが区別しない。奴らにすれば、俺たちは食い物に過ぎないからな。もっとも旨いものをたらふく食って甘やかされて育った王子様だ、魔物どもの喜ぶ顔が目に浮かぶ」

ビッグスは腰の剣を抜き放つと、洞窟の深部へ向けて歩きはじめた。ウェッジはセオドアに頷いたあとで、それに倣う。セオドアも慌ててふたりのあとを追った。残る三人の兵士たちは敬礼の姿勢を崩さない。ここで待機するよう命じられているようだった。

ビッグスを先頭に、洞窟の内部を進んでゆく。最初に感じたのは腐臭だった。魔物の発する

ものか、あるいは騎士を夢見た哀れな犠牲者の放つ臭いかはわからない。セオドアは薄く開いたくちびるから呼吸するように努めたが、そのせいか口内がからからに渇く。つぎに身に沁みたのは寒さ。先刻、目を覚ました場所は適度の湿気もあって快適だったが、ここは足元から這い上がってくる冷気に肌が粟立った。吐き出す息が白い。

しばらく進んだところで、突然ビッグスが立ち止まった。「ここから先は、ひとりだ」

隊長の背を見つめながら、セオドアは小さく頷く。いよいよだ、と思った。もう誰にも頼ることはできない。己の力のみが生死を決める。洞窟の最奥部にあると言われる〝騎士の証〟を手に入れ、晴れて騎士の位をつかみ取るか、あるいは——。

「心配などいりませんよ。セオドア様には、セシル様やローザ様の血が——」

ウェッジの言葉を、セオドアは遮った。「関係ありません」

「ほう、多少は意地があるようだな」ビッグスが王子を振り返る。「生きて戻ってこられぬ奴は、我ら《赤き翼》に必要ない」

隊長の双眸に強い光を認めたセオドアは、小さく頷くと剣を握り直し、単身、最奥部を目指して進みはじめた。心細くないと言えば嘘になる。歩を進めるたびに濃く、深くなってゆく周囲の闇。目を凝らせば、その奥に人ならざる者の姿が見えるような気がした。耳元で何者かが囁く。お前は、生まれながらにして王となる定めにある。あいつらとはちがうのだ。安っぽい自尊心など捨てちまえ。セオドアは耳を塞ぎ、大声を上げたい衝動に駆られた。なおも声は囁く。闇に背を向け、一目散に陽光の下へと逃げ出せばすべては終わる。この汚らわしき洞窟に

唾を吐き、本来歩むべき道へ戻ればいいだけだろう？　駄目だ、とセオドアは思った。緊張と不安と恐怖がない交ぜとなり、魂を凍てつかせようと画策している。それに乗ってはいけない。騎士を目指す少年は歯を食いしばり、ひたすら歩きつづけた。

突然、暗がりから一体の影が飛び出した。四肢を持ち、直立するその影はしかし人間などではなかった。鼻が前方へ大きくせり出し、その下に耳まで裂けた口がある。そこからだらしなく垂れ下がるのは長い舌。犬を思わせる頭部をした魔物は、獲物を見つけた喜びからか、ひとしきり奇妙な踊りを披露したのちに奇声を上げ、セオドアへ飛びかかった。

つぎつぎとくり出される鋭い爪を、セオドアは剣を立てて懸命にかわす。殺らなければ殺られるのはわかっていたが、体が思うように動かない。避けきれない爪が少年の肌に浅くない傷を刻んでゆく。溢れ出すのは血と涙。攻撃に転じる機会を見出せないまま、じりじりと後退を余儀なくされた。セオドアは、自分が無意識のうちに悲鳴を上げていることに気づいた。

——殺される。死を覚悟した瞬間に思い出したのは、父セシルの顔。セシルもまた、セオドアと同じ年のころにこのアダマン島の洞窟へひとりで乗りこみ、〝騎士の証〟を手にして帰還したという。当時を知る者に言わせれば、卓越した剣さばきで魔物を屠り、まったく危なげなく任務をこなしたらしい。当然、息子にも同じことが期待された。その結果が、こうだ。口だけは達者な若き王子は、無謀にも騎士の試練に挑戦して魔物の餌食となった。そして彼が主張していた血と資質に因果関係がないことは、その死によって証明されたのだった……。

いやだ。セオドアの足が止まった。こんなところで命を落とすわけにはいかない。いったい

何のために厳しい修行を積んできたのか。すべては父に追いつき、越えるためだったのではないのか。セオドアは、相手の圧力に負けじと自ら間合いを詰めた。魔物が奇声を発しても怯まない。持ち主の闘志が乗り移ったかのように、剣が本来の役割を果たしはじめた。両者は足を止め、相手をつぎの一撃で葬り去ることだけを目的とし闘う。策を弄することもなく、虚を突こうともしない。無骨なまでのど突き合いである。こうなれば、あとは気力の勝負だった。互いが抱く欲望の、より大きなほうが勝つ。

人間の意地が魔物の飢餓を上まわった。セオドアは両膝に手を当てて体を支え、荒い息遣いのまま、絶命した魔物を見下ろす。生き延びたという高揚はなかった。だが、どこか吹っ切れたような感じがする。急ぐことはない。父の幻影は、いつも見えるところにある。その背を見失わずに、自分の歩幅で追いかけ、いずれ追い越してゆけばいいだけなのだから。周囲の雑音は、もう気にするまいと思った。先刻通ってきたばかりの道を振り返る。そこには、ただ闇が横たわるばかり。ビッグスやウェッジの姿がないことに安堵の息を漏らした。

「行こう」自らを鼓舞するように呟くと、セオドアは再び歩きはじめた。

3

賊を捕えたとの報告を耳にし、幻界の王妃アスラはわずかに目を細めた。

かつての大戦の終結後、光と闇の八つのクリスタルは、母なる大地をあまねく照らしていた。

その神秘的な加護に永久の平穏が約束されたと誰もが信じて疑わなかった。だが、この数日というもの、大気に異様な緊張感が満ちている。原因究明のために幻獣王リヴァイアサンは瞑想に入り、現と幻の間を漂っていた。アスラがその留守を預かっているのである。

淡い光に包まれた、質素な王の間でアスラは連行された侵入者を見つめ、嘆息した。

「よもや、賊がそなたとは思いませんでした」人払いをし、ふたりきりになったあとでアスラは切り出した。「いったい何用です、ここにリディアはいませんよ」

「だから来たんだけどな」ぶっきらぼうに答えたのは人間の男だった。

地底世界の辺境にあるこの幻界を訪れようとする人間は皆無だ。人間と幻獣の両者が交わるのは、召喚士と呼ばれるごく一部の人間を媒介として呼び出されたときに限られている。幻獣たちは人間との過度の干渉を嫌い、強固な結界を張って来訪者を拒んでいるのだった。だが、この男はそれを容易くすり抜け、人ならざる者の里へ入りこんだ。こんなことができる人間は、アスラの知る限りひとりしかいなかった——エブラーナの王エッジだ。

エッジは周囲をゆっくりと見まわしたあとで王妃へ向き直り「幻獣王は不在か」と訊いた。アスラが頷くと、「それは好都合だ」と微笑んだ。

「私に話があるというわけですか」

「単刀直入に言うが……もうここへリディアを来させないでもらいたい」

「なぜです」

「わからないか」

エッジの鋭い視線にアスラは微笑みを返す。「親と子がともに暮らすのが悪いとでも？」
「あいつをこのまま幻界に住まわせるつもりか」
「人間界へも頻繁に顔を出しているではありませんか」
「だがミストが復興したことで、その回数は減ってきている」
「それは私の知るところではありません。恐らく彼女は自分の責任を果たしたと考えているのでしょう。そもそもあの子は、自ら望み、自らの意思でここ幻界で暮らしているのです」
「あいつの時間は、あのときから止まっている」
「あのとき――？」
「お袋を亡くし、故郷を失ったあの瞬間からだ」エッジが語気を強めた。「確かにリディアはここでの生活を通して大人になった。だが、あいつは幻獣じゃない」
「種族の差など、何の問題となりましょう。大切なのは、あの子がそれを望んだという事実。その意思を、我らは尊重するだけです」
「――ふざけるな！」
「では訊きます。彼女の居場所を、あなたは作ってあげられたのですか」
沈黙。エッジの双眸が鋭さを増した。何かを言いかけてくちびるを開いたが、そこから言葉は生まれてこなかった。大きく息を吐いたあとでアスラに背を向ける。「邪魔したな」
男が出てゆく直前、王妃はその背に声をかけた。「納得ができないのなら、つぎは幻獣王とお話をするのがいいでしょう。ただし、きっと同じことを言われるでしょう」

「その必要はない。俺は、あんたと話したかっただけだからな」
「私ならば懐柔しやすいとでも?」
「そうじゃない。あんたなら理解してもらえると思ったんだ」

4

遠く聞こえた悲鳴に、バロンの王セシルは眉根を寄せた。
傍らの王妃ローザと顔を見合わせる。そこに不安の色があるのを見て取るや、セシルはすぐさま玉座から立ち上がった。玉座の間に詰める四人の衛兵たちもその異変に気づいたようで、腰に帯びた剣に手を伸ばし、いつでも抜き放てるようにと身構えている。
ひとりの兵士が、息を切らせて駆けこんで来た。「魔物の大群が、こちらに」
にわかに信じがたい話だった。定期的な掃討作戦が功を奏し、魔物の数は激減している。かつての大戦以来、奴らが町や村を襲ったことなど、ただの一度もなかったはずだ。その状況で闇の者たちが徒党を組み、軍事大国バロンに奇襲をかけるなど、考えられない話だった。
「セシル……」ローザが夫であるバロン王の肩に触れる。
彼女の手が小さく震えていることに気づき、セシルはやさしく微笑んだ。「心配はいらない。私が様子を見てくる。君は、ここで待っているんだ」
何かを言いかけたローザに背を向けると、セシルは走りはじめた。玉座の間を出たところに、

困惑した表情の衛兵が二名。セシルの姿を見とめるや、敬礼の姿勢をとった。
「状況は」セシルは短く問うた。
「正面の城門はすでに封鎖済みですが、それでも魔物の数は増える一方です。奴らがどこから入りこんだのかもわからず、城内は混乱しております。おそらくは相当数の魔物が侵入しているのではないかと。このままの状況がつづけば……」
「私が陣頭指揮を執る」
セシルの言葉に、兵士の顔から不安の陰が消えた。士気が上がったようだった。
「まずは魔物の侵入経路を特定する」セシルは数瞬、思考を巡らせたあとで頷く。「お前たちは、ここで待機していてくれ」
兵士たちは、背すじを伸ばした。「この命に代えても玉座を死守いたします」
ふたりをその場に残し、セシルは城内を駆けまわった。至るところに魔物――ひと抱えもありそうな球状の体に四肢はなく、中央にひとつの巨大な目玉を備え、背に蝙蝠を思わせる翼を生やした――が転がっていた。石造りの壁と床は緑色の体液に濡れている。そして少なくない数の兵士の遺体もあった。玉座の間と城門付近の警護をしている者以外、城内に生存者はなかった。どこかへ避難しているのならばいいとセシルは祈った。
西の塔の調査のため、中庭へ出ようとしたときだった。バロン王の体をやわらかな光が包んだ。〝療光(ケアルラ)〟だった。振り返ったセシルが見たのは、最愛の女性の姿。「どうして――」
ローザは微笑んだ。「私も行くわ」許可を求める口調ではなかった。笑みをたたえているの

はくちびるだけ。目は笑っておらず、強い決意の光を宿していた。
セシルは、首を縦には振らなかった。「君を危険な目に遭わせるわけにはゆかない」
「相変わらず頑固ね」
「君のほうこそ。セオドアが生まれたというのに、あのころのままだ」
「いいえ。ひとつだけ変わったわ」
セシルはローザの目を見据えたまま、つぎの言葉を待った。
バロンの王妃は言った。「愛する人がふたりに増えたわ」
「ならば、変わるべきだ。セオドアのためにもね」
「あなたは――？」
「愛する者を守るために闘う。今までも、これからも」言ってセシルは彼女に背を向けた。これ以上、議論することなどなかった。
あのころ――。それが意味することをセシルは理解していた。かつての闘いのさなか、病み上がりにも関わらずカイポの村で、そして月へ到着した魔導船の内部でローザは、自らの危険を顧みず、セシルとともにあろうとした。彼女に命を救われたのも一度や二度ではない。
「わかった」バロン王はため息をついた。が、そこでローザに背を向けると言い放つ。「しかし、これだけは約束してほしい。もしものときは、君だけでも逃げ延びるんだ」
「……あなたを見捨てて？」

「セオドアのためにだ」覚悟を決めた者だけに許される強い口調だった。

ふたりは西の塔へ向かうために中庭へ出た。降り注ぐ陽光が眩しい。魔物の襲撃が単なる悪夢だったのではないかと思えるほど、気持ちのいい日差しだった。だが周囲を見まわせば、生々しい現実へ引き戻される。そこにはおびただしい数の死体が散乱していた。魔物だけではない、志半ばにして力尽きた兵士の姿もある。

――空か。思い当たったセシルは、弾かれたように頭上を見上げた。魔物は上空からこのバロン城を急襲したのだ。飛空艇団《赤き翼》が不在のときを狙ったのだろうか。

隣で震えるローザが息を呑んだ。彼女の指差す方向を見てセシルも言葉を失った。

5

そこは光に満ちていた。どこかで道を間違い、陽光の降り注ぐ大地へと戻ってきてしまったのではないかと不安になったほどだ。セオドアは足を止め、そのそれほど大きくない部屋の内部をゆっくりと見まわす。奥の壁一面に、赤々と燃える無数の蝋燭があった。それが照らし出すのは、床の中央付近に無造作に置かれている小さな箱。騎士を目指す少年は、吸い寄せられるようにして箱のもとへ歩を進めた。胸が高鳴る。これだ、という確信があった。古ぼけた箱へ伸ばす手が震えている。セオドアは、忘我にも似た境地を味わっていた。施錠されていない箱は、少年の望むままに小気味よい音を立てて開いた。眩い光をたたえた宝石の類か、それと

も勲章か。いずれにせよ、この中に〝騎士の証〟が入っているのは間違いのないところだった。しかし箱を覗きこんだセオドアの顔に浮かんだのは、困惑を意味する表情。震えの収まった指先が、乾燥したひも状の物体をつまみ上げた。これ以外は何も入っていない。とすると、この奇妙な品が、手にした者に騎士の称号を授けてくれるというのだろうか。

セオドアの訝しげな表情が、驚愕へと一変した。靴底を通して、大地の微細な震動を感じる。理由は定かではなかったが、身に迫る危機を察知し、無意識のうちに後方へと跳躍していた。セオドアが着地したと同時だった、先刻まで立っていた場所に亀裂が入る。つぎの瞬間、大地が隆起した。立ち上る土煙。その向こうに、強烈な敵意を放つ何かがいた。少年は悟る、これこそが騎士の称号を守る番人なのだと。

一言で表現するならば亀だった。ただしその大きさが桁ちがいである。無骨な甲羅から突き出した首だけでも、セオドアの身の丈ほどあった。その巨体から想像もできない素早さで亀が動いた。肉食獣を彷彿とさせる牙を剥き、侵入者へと突進する。突然のことにセオドアはかわしきれず、軽々と宙を舞い、背中から地面に落下した。息が詰まり、新鮮な空気を欲して喉がひゅうと音を立てる。苦しんでいる余裕などなかった。器用に向きを変えた魔物が、再び迫りつつあった。セオドアは、剣を杖代わりにして何とか立ち上がる。部屋の出口を見やった。だがそれは一瞬のこと、すぐに亀を模した魔物へ向き直る。逃げるという選択肢は捨てた。父さんも通ってきた道だ、どうして避けることなどできよう。

セオドアは剣を頭上高く掲げると、堂々と迎え撃つ。魔物が間合いに入ってきた瞬間に渾身

の力をこめた一撃を見舞う。手応えはあったが、それだけで相手を葬るほどの技量は、まだセオドアに備わっていない。亀の突進を真正面から食らってしまう形となった。まるで全身の骨が粉々に砕けるような衝撃だった。目の前が闇に染まった。

どこからか自分の名を呼ぶ声が聞こえた。同時に視界に光が戻ってくる。どれほどの時間、意識を失っていたのかわからない。片膝をつく姿勢でいたことが自分でも意外だった。部屋の入り口を見ると、そこに先刻の声の主であるウェッジ、そしてビッグスの姿があった。ふたりが部屋へ足を踏み入れようとした瞬間、セオドアは無意識のうちに叫んでいた。「下がっていてください」彼らに不甲斐ないところを見せるわけにはゆかない。

「しかし――無茶です」ウェッジが剣を抜き放った。

「父上は関係ない。母上も……これは、ぼくの闘いなんだ」全身が燃えるように熱い。体中に刻まれた傷の痛みは、まったく感じられなくなっていた。四肢を鈍らせていた鉛の重さも消え失せている。体の奥で、何かが目覚めようとしていた。淡い闘気に包まれたセオドアが疾風の速さで動いた。「ぼくは、自分の力で前へ進む」

6

エブラーナ城の門をくぐっても、エッジは眉間にしわを寄せたままだった。怒りや悲しみ、そして失望といった負の感情に心を支配されている。自分なりに覚悟を決めて幻界を訪れたつ

もりだったが、狂おしいほどの想いをどうやら王妃アスラに伝え切れなかったようだ。そんな不器用な自分が腹立たしい。「くそ」と、知らぬうちにそんな言葉が口をついて出た。

と――無防備なままのエブラーナ王に、触れれば皮膚が裂けそうなほどの殺気を向ける者があった。その数、四つ。黒装束に身を包んだ影たちが突如、陽の光の下に舞った。いずれの手にも苦無(くない)が光る。影たちはエッジを囲むようにして展開、一切の迷いのない動きで襲いかかった。飢えた野獣が、ようやく見つけた獲物に牙を剥くように。

だが、勝負にさえならなかった。瞬きする間に、四つの影はつぎつぎと大地に伏し、息ひとつ乱さないエッジを驚愕の眼差しで見上げることになった。四人は立ち上がると、観念したように頭巾を脱いでその素顔を陽光の下にさらす。ひとりは老人、もうひとりは無骨な青年、年端もゆかぬ少年、そして刃の美しさをうちに秘めた女であった。

「我ら四人がかりでも赤子扱いとは」老忍ザンゲツが賞賛の言葉を口にする。

「さすがはお館様です」とツキノワという名の少年。

「――悪かった。つい本気になった」肩をすくめると、エッジは自分の弟子たちに背を向けて言った。「考え事をしていたのでな」

「修行に大切なのは時間ではなく密度ではないかと。先につけていただいた稽古も、やがて我らの血肉となるでしょう。忍冥利に尽きまする」忍の青年ゲッコウが頭を垂れる。

「この太平の世に、凶器ともなる術など、なぜ欲する」

「お館様の術は、人を殺めるだけではありませぬ。それも人間としての強さがあればこそ。エ

ブラーナに生を享けた者のひとりとして憧れを抱くのは当然のことでございましょう」と微笑むのは女の忍――くノ一。名はイザヨイ。笑むと美しさの中にわずかな幼さが覗く。

「年頃の女とは思えぬ言葉だな」

エッジは苦笑し、振り返る。が、その表情が曇った。四人がエッジではなく、あらぬ方向を見つめていることに気づいたのだ。忍の王は、彼らの視線の先を追う。雲ひとつない青い空に、それは浮かんでいた。「何てこった。あれは……」そこで言葉を失った。

どれほどの時間が過ぎただろうか。エッジは忌まわしき空から視線を引き剥がすと、四つの影に向き直る。一切の表情が消えていた。「留守を頼む」短く言うと、エッジは立ち尽くす四人を押しのけ、歩きはじめた。己の居城へではない。城門を目指して。

四人は互いに顔を見合わせると頷く。それから風の疾さで動き、主の前に立ちはだかった。行く手を阻まれ、エッジが立ち止まった。「どういうつもりだ」

忍たちは礼を失したことを詫びるように頭を垂れたあとでエブラーナの王を見つめた。

「その役目、我ら四人衆にお任せいただけぬでしょうか」ザンゲツが言った。顔に無数のしわが刻まれていたが、決意の固さを表すように目が輝いている。

「何のことだ」

「あの空を見れば、人心が乱れるは必至。そんなときにこそ必要なのは、お館様のお姿」

「心配性の爺もいます」とツキノワ。「お館様がお出かけになったと知ったら――」

「口を慎みなさい。冗談にもほどがあります」少年をイザヨイがたしなめた。

「お館様は、何でもおひとりで背負おうとなさる。ここは我らに」
ゲッコウの言葉に、エッジは鼻を鳴らした。「――任せろと言うのか。残念だが、まだお前たちを認めたわけじゃあない」
「ならば、この役目で我らをお試しください」ゲッコウは引き下がらなかった。「何よりお館様はこのエブラーナを離れてはなりません。あの塔が、再び――」
「動き出すとでも言うのか」エッジは目を閉じ、思案した。脳裏を過るのは、エブラーナを襲ったあの悲劇。城を棄て、敗走せざるを得なかった屈辱、そして両親との別れが蘇る。もうあのような思いをするのは御免だった。「わかった。頼む」
四人が片膝をつき、頭を垂れた。
「ひとつだけ言っておく」エッジは目を開いた。「命を粗末にするなよ」

7

ひんやりとした風が、やさしく頬を撫でている。まるで空を飛んでいるかのような感じさえした。そう。きっと自分は、これから天に召されようとしているのだろう。
と――背中に規則正しい低音を感じた。セオドアは微笑む。さすがは甘やかされて育ったバロン王国の王子だ。天国へ行くのに《赤き翼》が送り届けてくれるとは。
「何を笑っていやがる」どこからか声が聞こえた。

そこで気づいた。心地よいまどろみを、まぶたを開いて断ち切る。弾かれたように半身を起こした。一面の青い空。頭上の雲が後方へと流れ、消えてゆく。視界にひとりの男が入ってきた。その柔和な笑みが、組織を束ねる男に相応しい険しい表情へと一変した。「新入りの分際で、この《赤き翼》の甲板で大の字になっていびきをかくとはな」

言われて、セオドアは慌てて立ち上がった。踵を合わせ、背すじを伸ばす。ビッグス以外の兵士たちが、みな微笑んでいた。あ、という形にセオドアのくちびるが開く。「新入り、ですか。でも、ぼくは、まだ見習いで――」

「お前が後生大事に握りしめているものを見てみろ」

ビッグスに言われるまま、セオドアは自分の右の拳に視線を落とすと、そっと開いてみた。そこには干からびた短いひものようなものがあった。「それじゃあ、ぼくは――」

「〝騎士の証〟を持ってる奴を見習いと呼ぶわけにはゆかぬだろう」

兵士たちが歓喜の声を上げた。ある者は拳を天に突き上げ、またある者は惜しみなく拍手を送る。ウェッジはうっすらと涙を浮かべていた。「さすがはセオドア様です。素晴らしいお力をお持ちでした。私は……私は心から信じておりました」

セオドアは、まだ実感が湧かなかった。あのとき自分の体を淡い光が包み、不思議な力が満ちてゆくのを感じた。それから、ぼくは――そのあとの記憶はなかった。だが、こうして祝福してくれているのを見ると、自分はあの巨大な亀の化け物を倒したのだろう。「あの……これは、本当に〝騎士の証〟なのでしょうか」

「それは、干からびた鼠（ねずみ）の尻尾だ」ビッグスが鼻で笑った。「証を手に入れたから騎士となるのではない。これは騎士になろうとするその意思と意地を確かめる試練だったのだ」

「心配はいりませんよ」そこにウェッジが割って入った。「きっと将来は、セシル様に負けない立派な聖騎士（パラディン）になることでしょう」

「まだ聖騎士（パラディン）を目指すと決めたわけではありません」セオドアは視線を自分の爪先に落として呟いた。「それは戻ったら、父にも話そうと思っています」

「帰還したときの心配ならば、あとにしろ」ビッグスが吐き捨てるように言った。

弾かれたようにセオドアは顔を上げた。ビッグスだけではない、ウェッジらすべての兵士が少年に背を向けていた。その視線の先にあるものを目にし、セオドアは背すじを凍らせる。後方に、闇よりも濃い暗雲があった。それが刻一刻と形を変え、《赤き翼》に迫る。

「このままでは追いつかれてしまいます」

振り返ったビッグスがセオドアを睨みつけた。「新入り、教えておいてやろう。《赤き翼》は敵に絶対に背を向けない。何があろうともな」

傍らに立つウェッジが、セオドアの肩に触れる。「売られた喧嘩は買う、ということです。手荒い宴になるかもしれませんよ」吟遊詩人然とした風貌が、今はなぜか逞しく見えた。

ビッグスの号令の下、兵士たちが散開。腰に帯びた剣を抜き放つと、迎撃の陣を張る。セオドアもそれに倣うが、隠すことのできない不安が震えとなって足に出た。魔物の大群が追いついてきた。その一体ずつの姿を、すでに目視できるほどの距離。球状の体躯に巨大なひとつ目、

背には蝙蝠を思わせる一対の翼があった。数で言えば、こちらの五倍は軽く越えるであろう。乱戦になるのは火を見るより明らかだった。セオドアに注意を払う兵士は、もはや誰もいない。言い換えるならば、自分の身は自分で守るしかないということだった。望むところだ、と思う。今この瞬間、セオドアはバロンの王子などではなく、単なる一兵士に過ぎないのだから。仲間の足を引っ張ることなど言語道断、勝利に貢献できなければ騎士の名折れとなろう。セオドアは、自らを鼓舞するように吠えた。すでに足の震えは止まっている。

魔物の群れが《赤き翼》を呑みこみ、闘いの火蓋が切って落とされた。

8

竪琴の調べが、静寂をやさしく溶かしている。

大陸の北方、広大な砂漠の中央にその城はあった。山脈に隔てられた南のカイポまでを領土に収めるダムシアンは、商いで財を成したミューア家が興した商業国家である。廃墟と化した城の修復作業はすでに終わっており、先の大戦が残した爪痕はどこにも見られなかった、人の心の中を除いては。ギルバートもまた、あの悲劇によって決して癒えることのない傷を負った者のひとりだった。両親を、そして将来を約束した女性アンナを失い、ミューア家の血を引く唯一の生き残りとなってしまった。王という、ある意味で孤独な責務を背負ったギルバートは玉座の間でひとり、空虚な心を埋めるかのように竪琴を奏でている。

多少でも詩に関心がある者ならば、弦を爪弾くギルバートの指にわずかな迷いがあることに気づいたはずだ。それを悟られたくないからこそ、人払いをして自分だけの空間に身を置いている。彼の心をかき乱しているのは、過去と現在がない交ぜになった混沌。その漠然とした不安は、たったひとつの事象に司られている。すなわち月の帰還である。

先刻、ギルバートはふと仰ぎ見た蒼天にもうひとつの月が浮かんでいることに気づき、恐怖におののいた。大戦の終結に伴い、月の民たちの住まうあの星は長い旅へと出たはずだった。それがなぜ、わずか十余年の間に再び姿を現したのか。あらゆる可能性を模索しても、心に焼きついた不安の二文字は消し去ることができない。突如突きつけられた恐怖の再来に、ギルバートは現実から逃避し、ただ震えるしかなかったのだった。

かすかな衣擦れに、弦を爪弾く細い指が止まった。

「悲しい調べですわ。出口の見えない、底無しの闇で怯える小鳥のような……」

ギルバートは玉座にかけたまま、目の前に立つ女性を見つめた。長い髪が、まず目を引く。身じろぎするたびに、さらさらと耳に心地よい音が聞こえそうだった。整った顔立ちを、さらに知的に見せているのが眼鏡。その奥にあるかなしかの笑みをたたえた瞳がある。

「詩の感想を伝えるため、厳重な警備を突破してくれたのかい」

ギルバートの秘書を務める女性ハルは、くすりと笑った。「いいえ、快く通してもらえましたよ」そこで真顔となり、「大臣からの言伝てがございます」

「なるほど。外が騒がしかった理由がわかったよ。それで何と？」

「また財政に関わるお小言ですわ。今期も収支が大きく合わないと」
「そうか」ギルバートは大きく息を吐くと、目を閉じて天を仰いだ。
「ギルバート様、これ以上は隠し通すことはむずかしいかと。先の大戦から十年を越える月日が流れております。そろそろお考えを改める時期に――」
「そういうわけにはいかない」ギルバートは秘書の言葉を遮った。「ファブール、そしてミストがあってこそのダムシアンだ」
「ですが、エブラーナにまで支援をつづける必要はないかと。ご存じのように、我らダムシアンの財政も火の車。このままでは……」
「だからこそ、君の手腕が必要なんだ」
「光栄にございます。しかし――」
「何と言われようとも、私は自分のやりかたを改めるつもりはない。それを踏まえた上での進言ならば、喜んで聞くよ」
「友情の尊さは承知しております。しかし王たるおかた、ときには厳しさも必要かと」
「肝に銘じておこう」
「では、ここからが本題です」
ギルバートは目を開き、視線をハルに戻してから眉をしかめた。「まだ何かあるのか」
「ご安心ください。財務に関わることではありません」
「それはよかった。君と語り合うのは楽しい。いつも新たな詩の糸口を授けてくれる」

ハルは微笑み、「恐縮です」と頭を小さく下げる。しかしすぐに真顔となった。眼鏡の奥の目が、すっと細くなる。「未明に落ちた流れ星についてです」

「ああ、あのときの衝撃がこのダムシアン城まで揺らした。確か落下したのは、ホブス山のあたりのようだが……それがどうかしたのか」

「調査隊を派遣する許可をいただけないでしょうか」

「被害状況を調べるために？」

「それもあります」

「それも？」とギルバートは訊き直した。他にも理由がある、ということなのだろうか。しかしハルは言葉を継ごうとしなかった。黙したまま、ダムシアン王の顔を見つめるばかり。ギルバートは不安になる。流れ星の落下とあの月との間に、何か関係があるのだろうか。長い静寂のあとで、「わかった」とギルバートは短く言った。

「さっそく手配いたします」言い残してハルが退出しようとする。その背中に、

「バロンへ伝令を送ろうかと思う」ギルバートは心に浮かんだままの言葉を投げかけた。

「私も賛成です」振り返ったハルが答えた。

ギルバートは、自分が竪琴を力いっぱい握りしめていることに気づき、苦笑した。全身の緊張を解くと、弦を爪弾く。だが奏でる音が詩となる前に指が止まった。ハルの消えた扉へ視線を転じてから、そっと呟いた。「すまない、苦労ばかりかけて」

しかし、それでも彼女の進言通りに支援を打ち切ることなどできるわけがなかった。彼らが

命を懸け、あの月へ行ってくれたからこそ、今のダムシアンがある。世界が完全に復興するまで、ギルバートにとってのあの大戦は終わっていないのだから。

9

そこは戦場と化していた。

船体が魔物の群れに呑みこまれてしまっているため、《赤き翼》の甲板は黄昏どきのように薄暗い。光を求めて見上げても、青空の欠片が散見できるだけである。隊長ビッグスからの指示は一切飛んでこなかった。このような乱戦では、いかに優秀な指揮官であっても個々の隊員に的確な指示を与えることなどできるわけもない。加えてビッグスがどのような命令を下そうとも、それを周知できないという問題もあった。ぎゃあぎゃあと喚き立てる魔物の鳴き声と羽音とが、あらゆる方角から耳を聾し、己の発した声さえも満足に聞こえない。こうなると頼れるのは己の技量のみ。経験とわずかばかりの運だけが命綱だった。

甲板の中央付近。セオドアは、無心で剣を振るっていた。達観していたわけではない。目の前の敵に集中するしか生き残る術はないと悟り、実践しているに過ぎなかった。単体として見れば、それほど手強い魔物でないことが幸いした。斬り捨てた相手が絶命したのを確認する暇もなく、つぎなる敵が襲いかかってくる。息をつくことを許されぬ現状が、逆に集中力を切らさずにいられる状況を作り上げてくれていた。

ひとつ問題があるとすれば、体力がつづくかどうか、ということだった。磨き上げられた甲板は魔物の死体で埋め尽くされ、緑色の体液に濡れていた。疲労はまず腕に、ついで足にくる。鉛をまとったかのような四肢が本能の命じる動きを再現できなくなった瞬間に、セオドアは足を滑らせ転倒した。集中力が切れたと同時に、魔物の体液の放つ異臭が鼻を突く。勝機と見たのか、一際高い鳴き声を上げて、魔物が襲いかかってくる。立て。剣を握れ。身構えろ。闘え。動かぬ肉体に、思考は空転をくり返すばかりだった。少年は己の死を覚悟し、目を固く閉じる。しかし、いくら待ってもその瞬間は訪れない。恐るおそる目を開く。仲間のうしろ姿があった。すぐに、それがウェッジだとわかった。

「あなたをこんなところで死なせやしません。何があろうとお守りいたします」

振り返らずにウェッジが叫ぶ。その華奢な背中が、このときばかりは大きく見えた。

セオドアは弾かれたように立ち上がると、ウェッジと背を合わせるようにして身構える。ぼくは騎士なのだ、と自分に言い聞かせる。前線に立って敵軍の進攻を食い止め、活路を拓く——国のために、仲間のために我が身が傷つくことも厭わず闘う騎士なのだ。まだ力も経験も不足していたが、この背中だけはどんなことがあっても守り抜くと心に誓う。

そのときだった。遠見をしていた兵士が、声の限りに叫んだ。「バロンに火の手が」

《赤き翼》の乗組員たちの間に、瞬時にして動揺が広がってゆく。魔物と闘いながらも、彼らの意識と視線は針路と同じ方角へ向けられた。

「全速前進。エンジンの出力を最大限まで上げろ」ビッグスが命じるや、甲板が激しく揺れた。

兵士たちが身を屈める。船体を覆う魔物の雲を突き破り、陽光の降り注ぐ光の世界へと踊り出た。眩しさに目をすがめつつも、前方を見やる。見張りの言葉通りに、彼方に霞むバロン城からは確かにひとすじの黒煙が立ち昇っていた。

「心配などいりませんよ。セシル様とローザ様は——」王子を気遣うウェッジの言葉がそこで途切れた。気づいたのだ、セオドアがあらぬ方向を見つめていることに。「セオドア様?」

「月がふたつに——」セオドアが呟いた瞬間、船体が大きく揺れた。魔物の群れは、まだ後方におり、追いつかれていないはずだった。甲板に飛び出してきた機関士が異変をビッグスに報告。動力部が火を噴き、出力が大幅に低下しているとのことだった。断続的な揺れとともに船体が左へ大きく傾く。バランスを崩したセオドアが、甲板を転がった。動いたのはビッグスだった。手にしていた剣を放り捨てると、一目散にセオドアのもとへと走った。

《赤き翼》の高度が下がってゆく。

10

「遅いぞ!　何しとったんじゃ、セシル」飛空艇技師たちを束ねる老人シドが叫んだ。

魔物たちの侵入経路が空だと知ったセシルとローザは、戦況を見極めるために西の塔へ上ろうとした。そこでその東側に建てられた《赤き翼》の乗組員たちの兵舎の屋根で孤軍奮闘するシドを発見、合流したのだった。

「よかった、無事だったのね」ローザの顔が、望外の再会にほころぶ。
「当たり前じゃ。まだまだなまっとらんわい」シドは、上空から飛来する魔物を手にした巨大なハンマーで一撃。伸び放題の髭は真っ白だが、顔は精気に満ち、腕っぷしも強い。とても齢六十を越えた老人とは見えなかった。「じゃが、何でまた急に魔物たちが？」
「わからない」と答えたのはセシル。つぎつぎと襲い来る魔物と闘いながらの会話だった。
「セオドアは、どうした。一緒ではないのか」
「《赤き翼》で遠征に出たままだ」
「何と、まだ戻ってきとらんのか」
「心配はない。ビッグスたちがついている」
「ならば祝いの宴のためにも、こやつらを片づけておかんとの」
にやりとシドが笑ったが、セシルは笑みを返せなかった。南東の空を見てしまったのだ。ふたつめの月を、ではない。暗雲のように黒いそれは、先刻よりも確実にこのバロンへと迫りつつあった。魔物の群れであろうとセシルは目星をつけていた。いったい世界のどこに、これほどまでにたくさんの魔物が潜んでいたのか。そして、この異変はやはり月が戻ってきたことに関係しているのか。わからないことが多過ぎた。
魔物の襲撃は、なおもつづく。
セシルは、決断を下さねばならない時期にあると気づいていた。黙っていても、ふたりは力尽きるまで自分とともに闘ってくれるだろう。そして命を落とす瞬間が訪れようと、恨み言の



ひとつも口にせず、微笑みのまま死に身を委ねようとするはずだ。しかしバロン王としては、そういった彼らの生き様に甘えるわけにはいかない。ふと思い出したのは、賢者として名高い大魔道士テラの顔だった。今は亡きテラは、虚飾と飽食とにまみれた王族を何よりも嫌悪していた。彼の死を無駄にしないためにも、王としてあるべき姿を体現しなくてはならない。たとえそれが己の死を招き寄せる結果となったとしても。

魔物の襲撃は、さらにつづく。もはや猶予はないに等しい。

「――シド、頼みがある」

そうセシルが切り出すと、老技師長は怪訝な表情となった。「何じゃ？」

「ローザを連れて、城から脱出してくれ」王妃が抗議の声を上げたが、セシルは耳を貸そうとしなかった。「このままではバロンは陥ちる」

「バロンと最期をともにするつもりか」

「私も残るわ」とローザが懇願するようにセシルの腕にすがりつく。

「これは国王としての命令だ」セシルは、愛する妻と目を合わせようとしなかった。「セオドアを頼む」言って、くちびるを強く噛んだ。「《赤き翼》が帰還すれば、きっと戦況を覆せる。それまでは私はここで持ちこたえる」

「ったく、相変わらず頑固者じゃな」シドが大きく息を吐いた。「じゃが――死ぬなよ」

シドは、足取りの重いローザの腕を引き、姿を消した。

破滅を告げる暗雲は、もうそこまで迫ってきていた。

11

「ローザ、しっかりつかまっとれよ！」

シドが舵輪の左にあるレバーを引くと頭上の天蓋が開き、格納庫を満たしていた薄闇を駆逐した。同時に足元から規則正しい低音が響いてくる。揚力の要となる六つの回転翼が徐々にその速度を上げていった。ふたりを乗せた飛空艇エンタープライズが離陸する。

「アダマン島へ向かって。そこにセオドアがいるわ」足下に黒煙を上げるバロン城が見えたところでローザが言った。頼みの綱は《赤き翼》だけだった。

エンタープライズは滞空したまま、旋回。南東へと船首を向ける。そこでローザとシドは大きく目を見開いた。視界に飛びこんできたのは、刻々とその姿を変える闇色の雲——否、魔物の大群であった。それが間近に迫ってきている。「撃ち落とせない？」

「無理じゃ。この船には武器など積んどらん」

「でも、このままだとセシルが——」ローザがそこで言葉を切ったのは、シドが船首を北へ向けたからだった。

「エンタープライズは装甲も薄い。アダマン島へ向かうには、大きく迂回せにゃならん」

「待って。どこへ向かうつもりなの」

何かを言いかけたローザだったが、思いとどまり顔を伏せた。シドの言う通りなのだ。急ぐあまりに魔物の群れの近くを飛行すれば、奴らの攻撃欲求を刺激しかねない。そうなればこの飛空艇は容易く墜とされてしまうだろう。身寄りを失ったセオドアの、悲しみに暮れる顔が思

い浮かんだ。親の使命は、子の笑顔を守ること。そのためならば、払う犠牲の大きさに決して臆してはならない。だが失うのが、愛する夫だとしたら？　涙が零れ落ちた。
「何じゃ、あれは――！」魔物の一群を避けるために、エンタープライズが北進を開始した直後のことである。シドが素っ頓狂な声を上げた。
弾かれたように顔を上げたローザは、涙を拭うことも忘れ、それに見入った。両者の距離が詰まり、相手を目視できるようになったときにローザは息を呑んだ。「バハムートだわ」
「幻獣神――それじゃありディアか」
シドの言う通り、幻獣たちを統べる竜の背に確かに女性らしき影があった。凄まじい速度で接近するその竜は、バロン城を目指しているように見えた。ローザの本能が警告を発する。記憶と現実との相違に違和感を覚えた。竜の全身を覆う闇色の鱗が言いようのない不安を感じさせる。ちがう、あれはリディアじゃない！
「――シド、逃げて」ローザは声の限りに叫ぶが、すでに遅かった。幻獣神バハムートの顎が真紅の光を発したかと思うと、つぎの瞬間、それがエンタープライズを覆う。光の収縮と同時に内包する熱量が急激に上昇、船体を揺るがす大爆発を巻き起こした。
炎に包まれて高度を下げてゆく飛空艇の横を、バハムートが飛び去ってゆく。すれちがうそのとき、ローザは見た。竜の背にまたがる、空色の髪をした少女を。彼女の目は前方にそびえ立つバロン城を見据えていた。何の感情も示していないその瞳に、ローザは身震いする。
「ローザ、つかまれ。落ちるぞい」シドが声を張り上げるが、ローザの耳に届かなかった。

12

　天翔ける飛空艇は力の、そして何より自由の象徴だった。人間を大地の呪縛から解き放ち、途方もない可能性を与えるものだった。頑強な肉体と不屈の精神を持った者だけが《赤き翼》への入隊を許され、母なる地を睥睨(へいげい)する特権を得る。その代償は、己の命。各国の復興に伴う資材の調達から運搬および支援、要人の警護、各地の巡回など任務の幅は広い。先の大戦を境に魔物の数は減少の一途をたどっているとはいえ、依然として闇の者の脅威は人々を脅かしている。行く先々での戦闘は避けられない状況だった。誇りがなければ務まらない。

　己の命を削ることを生業とする彼らがその極度の緊張感から解放されるのは、皮肉なことに飛空艇から大地へ降り立った瞬間だった。町の酒場の一角を占領し、酒を酌み交わす。過酷な任務に忘れかけていた笑顔を取り戻さんと夜を徹して騒ぐ。セオドアは、それに憧れた。一切のうしろ盾を捨てて騎士の称号を得、成人を迎えるまでに仲間からの信頼を勝ち取る。そして麦酒(エール)の注がれたジョッキをぶつけ合い、絆を深めてゆくことを夢見ていた。しかし夢は夢で終わった。セオドアは突きつけられた冷酷なまでの現実を拒絶するかのように固く目を閉じ、首を激しく振る。全身に刻まれた無数の痛みが、夢見ることを許してくれなかった。

　大破した《赤き翼》の残骸の横で立ち尽くし、セオドアはただ泣いた。みんな死んでしまった。あの厳しかった隊長ビッグスも、自分のことをいつも気にかけてくれたウェッジも、そして騎士となった自分を祝福してくれた大勢の仲間たちも。自分だけが奇跡的に一命を取りとめ

たことに喜びなどない。彼らとともに天に召されることができれば、どれほど幸福か。ようやく見つけた居場所を理不尽にも奪われたセオドアは、怒りと悲しみを言葉にならない声に変えて垂直に立てた喉から絞り出した。その絶叫が突如、途切れる。聞こえたのだ、どこからかすかな声が。セオドアは目を見開き、声の主を捜す。すぐに見つかった。

「隊長――！」ビッグスに駆け寄ると、その隣でひざまずいた。抱き起こそうとするが、甲冑から溢れ出す尋常ではない血の量にセオドアは伸ばしかけた手を引き、くちびるを噛んだ。手の施しようがないのは明らかだった。「……隊長」

対照的にビッグスは、晴れやかな笑みを浮かべていた。「よかった、ご無事で」

それでセオドアは思い出す。《赤き翼》が急激に高度を下げていったあのとき、ビッグスは手にしていた剣を放り出し、転倒したセオドアに駆け寄って覆い被さったのだ。我が身を犠牲にしてでも、この頼りない新入りを守ろうと。「どうして――」涙が止まらなかった。

「セオドア様に、もしものことがあったらセシル様に顔向けできません」

「関係ありません……父も、母も」セオドアは自分が《赤き翼》の一員であることを否定されたかのように感じ、声を張り上げた。「セオドア様なんて呼ばないでください」

「私は、あなたが《赤き翼》に入隊するのに反対だった。兄と慕う陛下のご子息を我らの厳しい規律で縛ることなどできるはずもありません。それに――無礼を承知で言わせていただくならば、私はあなたをじつの弟のように感じていた。華やかに見える《赤き翼》ですが、その内情は常に死と隣り合わせという過酷な部隊。危険でない任務などありませんからね。そう、恥

ずかしながら、私にはあなたをお守りする自信がなかったのです」

「やめてください！」セオドアの感情が爆発した。「ぼくだって、あなたを本当の兄のように思っていました。だからこそ《赤き翼》への入隊を志願したんです、誰から言われたわけでもなく自分の意思で。確かに最初は、あなたの厳しさに戸惑いました。でも、それがうれしかった。ここで認められれば、ぼくは一人前になれるのだと確信したんです。なのに……」

しばしの沈黙のあと、ビッグスが言った。「よく聞け、セオドア」声に以前と変わらぬ厳しさがこめられていた。「何としても戻るのだ、我らがバロンへ」

「ですが、《赤き翼》は――」瓦礫と化した飛空艇を修理する術などなかった。しかもここは祖国と大洋によって隔てられた辺境の地。どうやって帰還すればいいのか。

「この馬鹿者めが！」ビッグスが怒鳴った。その勢いで、口から鮮血が溢れ出る。構わず隊長は先をつづけた。「《赤き翼》とは、飛空艇の呼び名にあらず。国のため、民衆のために命を賭して闘う者だけが名乗ることを許される。いかなる危機に陥ろうとも、その志は変わらない。そう、断じて変えてはならないのだ。覚えておけ」

「隊長……」

「戻るのだ、祖国バロンへ。これが俺の――最後の命令だ」ビッグスは息を引き取った。

セオドアは全身を震わせて涙を流したが、声を上げることも隊長の遺体にすがりつくこともしなかった。それをビッグスが望んでいないとわかっていたからだ。代わりに飛空艇の残骸の中からスコップを探し出し、大地に穴を掘った。墓はあとでできる限り立派なものを建てるつ

もりだった。今は急場をしのぐために、せめて全員の遺体を隠すことだけを考えた。セオドアは知っている、未練と怨念とに憑かれた死体が〝生ける屍〟として蘇ることを、あるいは死肉を好んで食らう魔物が存在することを。闇の魔手から仲間を守るために、今の自分にできるのは、これしかないのだ。だから掘る。掌の皮が破れ、血が流れ出ても構わなかった。

　穴が腰のあたりまでの深さになったころだった。荒い息遣いが聞こえたように思い、作業を中断する。穴の底から視線を上げると、ちょうど目と同じ高さにそれがいた。姿形こそ狼に何ら変わりがないが、全身を覆う真紅の毛並み自体が生命を宿しているかのように揺らめいている。炎だ、とセオドアは直感する。炎で武装した狼であった。

　その奈落のごとき双眸に、セオドアは恐怖する。身じろぎさえするのが躊躇われた。指先ひとつでも動かせば、鋭い牙が容赦なく襲いかかってくるだろう。しかしこうして睨み合っていても何にもならない。陽はすでに中天を過ぎ、傾きかけている。太陽が地平の彼方へと没すれば、さらに多くの危機が訪れることになろう。それは避けなければならない。

　セオドアは覚悟を決めた。手にしていたスコップを魔物めがけて放り投げると、背を向けて穴から這い上がる。振り返りつつ剣を抜く。身構えようとした瞬間、狼の顎がセオドアの右の手首を捉えた。予期せぬ激痛に剣が落ちる。闇雲に腕を振って何とか魔物を引き剥がすと、じりじりと間合いを広げ、呼吸を整えようとする。噛まれた腕が火に炙られているように熱かった。無手のままでは勝ち目などあろうはずもない。彷徨うセオドアの視線が、やがて目的のものを見つけ出す。右手やや前方、距離にして十歩といったところか、ウェッジの亡骸が剣を手

にしている。セオドアは大きく息を吸いこむと、大地を蹴って走りはじめた。
あと数歩というところで左の足首に焼けるような痛みを感じ、転倒する。身をよじって魔物へと向き直った瞬間、胸部を圧迫されて息が詰まった。灼熱の毛皮を持つ狼がセオドアの胸に前脚を乗せ、その顔を覗きこんでいる。吐き出される息までが熱かった。もはや打つ手は残されていない。自分にできるのは、この狼の空腹を満たすことだけなのだろう。
と――魔物の視線が、セオドアからはずされた。頭上を見上げている。セオドアがその視線を追おうとしたと同時に、降り注ぐ陽光が翳った。大気を裂く白刃が、狼の額から侵入して一気に炎に包まれた体躯を両断。やや遅れてセオドアの足元にひとつの影が降り立った。
慌てて立ち上がったセオドアは、しばし呆然と絶命した魔物を見つめていたが、はっと我に返り、恩人の背中に声をかける。「ありがとうございました、あの――」
男は振りかえろうとはせず、ただ瓦礫と化した《赤き翼》を見つめていた。

13

飛空艇エンタープライズが火を吐きながら墜落してゆくのを目にし、セシルの心に忘れて久しい感情が湧き上がっていった。すなわち殺意である。《赤き翼》の兵舎の屋根に立ち尽くし、凄まじい速度でこちらへ向かってくる竜に刃のごとき念を送る。セシルは本能的に感じ取っている、この魔物の襲撃は天災の類ではなく、何者かの意図によって引き起こされたものなのだ

と。となれば、あやつが――バハムートの背に乗る女こそが首魁なのであろう。

幻獣神は、城の上空でしばらく旋回したあとでセシルの待つ兵舎の屋根へと降り立った。身の丈は、人の三倍はあろうかという巨躯である。女が軽やかに跳躍、セシルの前に立ちはだかる。間近で見るとその顔は想像以上に幼く、少女と呼ぶべき年頃であろうと推測できた。一切の感情を排した表情が、空色の髪と相まって不安感を煽る。

「――お前がセシルか」ふいに少女が言った。

バロン王は眉根を寄せる。「なぜ私を知っている」必死で記憶の糸を手繰るが、この娘に関することは何ひとつ思い出せなかった。自分に対する私怨か、あるいはバロン転覆を願っての行動なのか、まずはそこを明らかにしておきたかった。闘うのは、それからだ。

しかし少女はその問いに答えなかった。「……行け」短く命じただけ。

少女の背後に控える竜の顎が真紅の光を宿した。直後、光はセシルを中心とした場所へ転移して収縮を開始する。内包する熱量が急激に上昇、臨界点へと達するや凄まじいまでの爆発を引き起こした。ふいを突かれたセシルは、それをまともに食らい、崩れ落ちる。

意識を失う直前に、少女の声を聞いた。「――しょせんは半分の血か」

14

エンタープライズの甲板でシドが腕組みをし、座りこんでいた。ローザはその横に立ち、バ

ロン城のある南方を不安げな表情で見つめていた。シドが機転を利かせ、バロンの北の山岳地帯へ軟着陸させたため、どちらもかすり傷程度しか負っていないが、ふたりの表情には絶望の翳が差していた。無理もない話だった。飛空艇の損傷は思ったよりも激しく、これ以上の航行は不可能だった。人里離れたこのような場所では、助けを呼ぶこともできない。

「また飛べるようになるには、どれぐらいかかりそう？」ローザは訊いた。

しばらく考えこんでいたシドだったが、やがて重そうに口を開く。「どんなに少なく見積もっても、三日はかかるじゃろうな」言いたくないことを言うときの口調だった。

ローザは引き下がらなかった。「夜明けまでに何とかならない？」南の空から老技師長に視線を転じる。「お願い、時間がないの」

「不可能という言葉をわしが嫌いなことは、お前もよくわかっておるじゃろう」シドは小さく首を振った。「しかし、これぱっかりは、どうにもならん」

「人手が足りないの？　それとも資材が？」

「……両方じゃよ」

言われて、ローザは顔を伏せ、小さく首を振った。

バハムートは、あのままバロン城へ向かったようである。あのセシルのことだ、幻獣神が現れたとしても逃げ隠れするとは思えない。とはいえ闘っても果たして勝ち目があるかどうか。そして《赤き翼》で遠征に出かけたセオドアの安否も心配で仕方がなかった。ローザが見る限りでは、まだバロン城へ帰還していない。これほど遅くなるのは、どう考えてもおかしい。何

いて、わずかな望みが潰えるには十分過ぎる日数なのだ。

シドには、彼女の言っている意味が理解できなかったようで、眉根を寄せただけだった。

ローザは顔を上げ、シドを見つめた。「私、行くわ」

ローザがつづける。「ダムシアンへ向かう」

「ギルバートのところへか。じゃが、どうして――」

「この異変が、単なる魔物の反乱だとは思えないの。何らかの強大な意思が、この大地を滅ぼそうとしている。それを食い止めるには、みんなの力が必要だわ」

「ここで時間を浪費するわけにはゆかんというわけか。なるほど、一理ある。しかしな、ローザよ。この険しい山々を越えるのは並大抵の苦労ではないぞ。道なき道を進まねばならん。魔物に出くわす可能性もあるじゃろう」

「私は、あのミストの崩れた山をたったひとりで登ったことがあるわ」

「ダムシアン砂漠はどうする。疲れ切った体であそこに足を踏み入れたら――」

ローザは言葉を返すことができなかった。かつてローザは、セシルを追ってミストの崖を越えたあと、砂漠の熱にやられて高熱病に倒れてしまったのだった。もしも幸運にもセシルとの再会を果たせなかったら命を落としていただろう。

「ローザ、ここは他の手立てを――」

「嫌よ」ローザは溢れる涙を拭おうともしなかった。「私は行くわ」

沈黙が訪れた。しばしののち、シドは大きく息を吐いた。「相変わらず頑固じゃな。わかった、エンタープライズには悪いが、こいつはここに残してわしも――」
「いいえ、エンタープライズは必要だわ」
「お前ひとりで行くというのか」
「ダムシアンを訪れたあと、ファブールへ向かう。さっきも言ったでしょう、みんなの力が必要なのよ。一刻も早くこの異変を知らせなければならないわ」
「――」
「シド、あなたはエンタープライズの修理が終わり次第、私を追ってきて」
何があってもローザの決意は揺るぎそうにない。
それを悟ったのか、老技師長は何度目かのため息をついた。頷くしかなかった。

15

窮地を救ってくれた男の助けもあり、セオドアは何とかビッグスらの遺体を土に埋めることができた。その粗末な墓を前にして、背すじを伸ばす。全身が鉛のように重く、ところどころに激痛が走るが、それを気にする余裕さえ今のセオドアにはなかった。対する男は、汗ひとつかいていない。細身ながら極限まで肉体を鍛え上げているのだろう。
「――ビッグス隊長」セオドアは踵を合わせ、敬礼の姿勢をとる。

これから先は自分ひとりの力で進まなければならない。任務の重さが、ずしりと肩に食いこむが、なぜか今はそれが心地よい。誇りを胸にやり抜こうと決心を固めた。
「最後の《赤き翼》、これよりバロンへ帰還します」
そんなセオドアを醒めた目で見つめていた男が言った。「飛空艇なしでか」
「《赤き翼》は飛空艇の名にあらず」少年は男を振り返る。「たとえ翼をもがれようとも、ぼくは国のため、仲間のためにバロンへ戻らなくてはなりません。命令は絶対なのです」
「西のミシディアからならば、バロンへ行ける」男は切れ長の目をさらに細めた。
「船があるのですか?」
「もっと便利な、そしてやっかいなものだ」
セオドアは、その言葉の真意を量り兼ね、眉根を寄せた。
男は微笑んだ。「心配するな。私もともに行こう」どことなく寂しげな微笑だった。
「いいのですか?」
「私も行かなくてはならんのだ、バロンにな」
「ありがとうございます」と頭を下げたあとでセオドアは、「あの……ぼくはセオドアといいます。よかったら、あなたのお名前を――」
「名など捨てた。とうの昔にな」
男は肩まである金髪を翻すと少年に背を向けて歩きはじめた。
セオドアには、納得できなかった。出自や素性を明かせと言っているわけではない。命を助

けてくれた恩人の名を知りたいと思うのは、ごく自然なことのはずだ。それとも、名乗れない理由でもあるのだろうか。まさか誰かに追われているとか——。

「急がねば、日が暮れてしまうぞ」

その声にセオドアは我に返り、遠ざかってゆく男の背中を慌てて追いかけた。

16

いったい、いくつの昼と夜とがくり返されたのだろう。

「あんた言ってたよな、風の具合がよけりゃあ三日ほどで到着するって」この台詞を口にしたのも何度目か。だが仕方ない。怒りの矛先を向ける相手は他にいないのだから。

船長が申し訳なさそうに背を丸める。「申し訳ありません……」

「謝って済む問題じゃねえだろ。もう何日、漂流してると思ってんだ」

「そうですね……かれこれひと月になるでしょうか」

「そんなに経ってるわけねえだろ」

「ですが、三十回ほどは寝ているはずですし……」

「やることがないからって食っては寝てをくり返してるから、日付の感覚がなくなっちまったんだろうが。まったく、どこの素人だよ」

その言葉に、船乗りのひとりが反応した。「てめえ、黙って聞いてりゃあ調子に乗りやがっ

て。船長に何て口をききやがるんだ！」

しかし、その威勢のよさも長つづきしない。「文句あるわけ？」と睨むや、船乗りは顔を真っ青にして口ごもった。そして愛想笑いを浮かべて船長のうしろに隠れた。

荒くれ者として知られる海の男たちも、さすがにミシディアの天才黒魔道士が相手では勝手がちがうようだった。逆らえば魔法で黒焦げにされると信じているのかもしれない。

パロムはため息をついた。「羅針盤を壊しちまったのは、まあ仕方がない。でも、あんたら船乗りなんだろ？　太陽とか星の位置で現在位置を割り出すとかできんじゃないの？」

「え、ええ……頑張ってはいるのですが」

もうこれ以上は何を言っても無駄だろう。パロムは肩をすくめると、船乗りたちに背を向けて海の彼方を見やる。夕陽が海面を赤く染め上げていた。だが、その息を呑む美しい光景も苛立ちを鎮めてはくれない。まったく、こんなことになるぐらいならばトロイアからの依頼など断ってしまえばよかったのだ。とんだ災難である。

事の発端は、森と湖の都トロイアによりもたらされた要請だった。新たな神官の修練のために、腕の立つ魔道士を派遣してほしいという。ミシディアの長老は、双子の姉ポロムではなく、弟のパロムを選んだ。そのときから、パロムは嫌な予感がしていた。

統治する八人の女性神官の方針で、トロイアでは黒魔法の使用を禁じられていた。代わりに白魔法が発達を遂げることになった。その習熟度は非常に高く、ミシディアに匹敵すると言う者もいるほどである。そんなトロイアへ、なぜ黒魔道士の自分が行くことになったのか、パロ

ムには理解できなかった。それでも長老の命に従ってひとり船に乗りこんだのは、狭いミシディアでの修行に飽きていたからだ。パロムは賢者となることを夢見ている。そのためには各地を旅して、習得した魔法の数々にさらなる磨きをかける必要があるのだ。

航海が順調ならば、今ごろは長老やポロムの小言から解放され、快適な日々を送っているはずだった。パロムは背中越しに船長を見るが、もう嫌味を口にする気力もなかった。

ふと空を見上げる。ふたつの月が目に入った。

いったい、何が起ころうとしているのか。だが船の上では何も知りようもない。一刻も早くトロイアへ行き、それを確かめたかった。

17

祈りの館は、ミシディアの北に位置していた。

館の裏手からは、突き出すようにして塔がそびえ立っている。その白い外壁が残光に赤く染まっていた。重い扉を押し開けて館に足を踏み入れたセオドアの鼻腔を、薄く香の煙がくすぐる。大きく息を吸いこむと、不思議と落ち着いた気分になった。室内は昼間のように明るかったが、どこにも光源が見当たらない。これも魔法の力によるものなのか。

塔へ上るためのものと思しき階段の前に、ひとりの少女が立っていた。室内のよりもさらに明るい髪をしている。恐らくは染めているのだろう。少女はセオドアたちの姿を認めるや、見

なれぬ顔を不審に思ったのか小首を傾げる。「どのようなご用件でしょう」
セオドアは躊躇った。突然このようなことを切り出して怪しまれないかと不安になったのである。しかし館の中に他に人影はない。仕方なく、旅をともにすることになった男から聞いた言葉を口にする。「あの……〝魔の道〟の封印を解いていただけないでしょうか」
訊かれて少女が眉根を寄せた。「あなたは――?」
「ぼくはバロンの《赤き翼》――セオドアといいます」
「まあ、あなただったのね」少女の表情が明るく輝いた。「こんなに大きくなって」
今度はセオドア怪訝な表情を浮かべる番だった。「ぼくをご存じなのですか」
「覚えてないのも無理はないわ。ポロムよ」
セオドアは、その名を両親から何度も聞かされていた。ミシディアにはふたりの天才魔道士がいる、と。姉が白魔道士ポロム。確か弟のほうは黒魔道士だったはずだ。
「〝魔の道〟を使いたいと言っていたわね」
「ぼくの乗っていた《赤き翼》が魔物の群れに墜とされてしまいました」セオドアは、くちびるを噛みしめた。「何としてもバロンに戻らなくてはなりません」
「不穏な空気が立ちこめていたのは、そのせいだったのね。いいわ、これを持っていきなさい。きっと長老もお許しくださるはずだから」言ってポロムは、懐から取り出した鍵をセオドアに手渡す。「これがあれば〝魔の道〟の封印を解くことができるわ」
と――そこで白魔道士の少女は、少年からその背後、開け放したままの扉の横で佇む男へと

視線を転じる。「あの人は――?」
　男は何も応えず、ふたりに背を向けると夕闇の中へと消えていった。
「魔物に襲われたところを助けていただいたんです」とセオドアが説明する。「〝魔の道（デビルロード）〟のことも、あの人から教えてもらいました」
「私の知っている人と……とてもよく似ている」
「え――」
「でも気のせいよね」ポロムは微笑むと、セオドアに向き直る。
「あの……ところで〝魔の道（デビルロード）〟というのは、何なのでしょう」
　ポロムが目を大きく見開いた。「あら、知らなかったの?」セオドアが頷くと、少女は深刻そうな表情となる。「その名の通り、とても恐ろしい空間よ。時と場所とが捻じ曲げられていて、足を踏み入れた者の魂を消耗させる。覚悟しておきなさい」
「そんな――」
「私もついていってあげたいけど」ポロムは、左手の奥の寝台を見やる。そこにはひとりの老人が静かに横たわっていた。「長老が病に伏せていらっしゃるから、ミシディアを留守にするわけにはいかないの。生憎、パロムも旅に出てしまっているし」
「いえ、いいんです」言いながらも、セオドアは顔を伏せた。
「どうしても〝魔の道（デビルロード）〟を通りたくないのならば、あとは船しかないわね」
「船が出ているのですか?」弾かれたように顔を上げる。

「不定期な連絡船よ。つぎは、いつやって来るのかもわからない。それを待てるというのならば、そちらのほうがずっと安全よ」
「いいえ、ぼくは行きます。これは——任務ですから」
「とてもいい顔をしてるわ」ポロムは微笑んだ。「さすが《赤き翼》ね」
セオドアも微笑む。「バロンへ向かいます。いろいろとありがとうございました」魔道士の少女に頭を下げると、男を追って夕闇の中へ走っていった。

18

「——どのようなご用でしょうか」
玉座の間へと入ってきた初老の大臣が、うやうやしく頭を垂れた。
「いったいハルは、どこへ行ってしまったのだ」ギルバートは訊いた。国政の多くの部分は、公設秘書である彼女の手腕に頼ることが多い。そのハルが、午後になってからというもの、一度も姿を見せていない。こんなことは今まで一度もなかったはずだ。
まさか——とギルバートは考える。各国への経済援助を打ち切るようにとの進言を断られたことに腹を立てて行方をくらませたのだろうか。いや、ハルは分別のある大人だ。そのような子供じみた理由で公務を放棄するとは思えない。では、なぜ——。
「陛下のご命令だったのではありませんか」大臣が不思議そうな顔をした。

「私は、ハルに何も命じてはいない」
「ハル殿は兵士を率いて、流れ星の落下地点の調査へ向かわれましたが」
ギルバートは、言葉を失った。やられた、と思った。ハルが行くと言い出せば、ギルバートは決して許さなかっただろう。彼女が調査隊の構成を一切口にしなかったのは、こういった理由だったのだ。まったく……知恵がまわる分、分別のない子供よりもやっかいである。
「調査隊は、まだ戻ってきていないのか」
大臣が、はいと頷くと、ギルバートは頭を抱えた。すでに日は暮れている。流れ星の落下跡に何の異常も見られないのなら、すでに城へ戻ってきていなければおかしい。それはつまり、調査隊に何かあったということなのだろう。
「捜索隊を出しましょうか」たまりかねたように大臣が言った。
「いや、いかに魔物の数が減ってきているとはいえ、光の加護のないときに行動するのは危険過ぎる。日の出を待とう。心配ない。ハルのことだ、きっとうまくやってる」
「本当でしょうか」大臣がギルバートの目を見据えた。「私を言いくるめようとしているのか、あるいは無理にご自身を納得させようとしているのか。そのいずれかに聞こえます」
「ああ、そうかもしれないな」ダムシアン王は反論しようともしなかった。
「遅いといえば――」大臣が話題を変えた。「バロンへ送った伝令も、まだ戻ってきておりません。こちらも日没前に帰還するものと思っておりましたが」
「ああ、そうだな」とだけ短く答えた。

ギルバートは、足元に立てかけてあった竪琴を手にする。
その意味することを悟ったのか、大臣は頭を垂れたあとで玉座の間から退出した。
薄闇の中、ギルバートは無意識に促されるようにして弦を爪弾く。案の定、千々に乱れる想いがそのまま奏でられる音となり、楽曲としての体をなさなかった。
ハル……君は今、どこで何をしているんだ。
今夜はとても眠れそうになかった。

19

時刻は真夜中。静まり返った夜の闇に、扉のきしむ音が小さく爪を立てた。ミシディアへとつながる〝魔の道（デビルロード）〟から現れたのは、ふたつの影。先頭をゆく少年は、静寂に沈む町並みを見まわしたあとで身震いした。昼間の喧騒が嘘のようである。動く者どころか、家々の窓から漏れる明かりさえも、そこにはなかった。まるで積み重ねてきた大切な思い出の数々が突然、消え失せてしまったかのような錯覚に陥る。生まれ育った故郷の町に自分の知らない顔があることを知り、セオドアは戸惑いを隠せなかった。
——そう、町にさえ隠してきたもうひとつの顔があるのだ。
「お前の家はどこにある」男が訊いた。
少年は男を振り返る。「ぼくは城で暮らしています」

「そうか、《赤き翼》には兵舎があったな。ならば、ともに城へ行くか」

「一緒に……ですか」

セオドアは眉根を寄せた。男の真意がわからなかった。親切心から城まで送ってくれるとでもいうのだろうか。だが、おかしな話だ。ここはすでにバロンの城下町。町を出て北へ向かえば、すぐに城門が見えてくる。このような夜更けであっても危険など皆無に等しい。

誰にでも、もうひとつの顔がある――。

少年は、男の顔を見つめた。この人にも、もうひとつの顔が？　セオドアはすぐにそれを否定した。命の恩人を疑うなど、どうかしている。男から視線をはずし、顔を伏せた。素性を明かさないことが、どうだというのだ。彼だって、ぼくのことは何も知らない。訊こうともしない。それなのにこの人は、見ず知らずのぼくを助け、ここまで導いてくれたではないか。

セオドアは己の無礼を心の中で詫びると、顔を上げて微笑んだ。「行きましょう」

町をあとにし、北へ歩を進めるとすぐにバロン城の城門が見えてきた。

門を守る衛兵はふたり。甲冑に身を固め、不動の姿勢を保っている。セオドアたちが間近に迫っても、なぜか誰何の声さえかけてこようとしなかった。

じれたセオドアが、男を置き去りにして門兵へと駆け寄る。

突然、兵士たちが剣を抜き放った。「何人たりとも通してはならぬ。陛下のご命令です」

セオドアは立ち止まると抗議の声を上げた。「ぼくだ、セオドアだ」

しかし虚ろな目をした兵士は、

「何人たりとも通してはならぬ。陛下のご命令です」同じ言葉をくり返すばかり。
「どうして……ぼくがわからないのか」
——誰にでも、もうひとつの顔がある。
「行くぞ、セオドア」少年の背後で男が言った。
セオドアは振り返ると、「でも——」
「時間の無駄だ」男はバロン城に背を向け、歩きはじめた。

20

バロンの城下町の広場に座りこんだセオドアの目は、泣き腫らして真っ赤だった。
「——落ち着いたか」
男に問われ、少年は小さく頷く。「すみませんでした。でも……怖かったんです」
「怖かった——あの兵士たちがか?」
「ぼくの記憶や思い出はすべて幻で、居場所のなくなったぼくは殺される運命にある。そんな風に考えてしまいました。そうしたら急に涙が止まらなくなって」
「——」
「おかしいですよね、そんなことを考えるなんて」セオドアは照れ隠しに笑おうとした。しかしうまくゆかず、顔がぎこちなく歪んだだけだった。

男は大きく息を吐いた。「何を見たのだ」
「――え？」
「見たのだろう、〝魔の道〟で」
しばらくしてからセオドアは、「はい」と消え入りそうな声で答えた。「バロン城の玉座の間で、父がぼくに刃を向けていました。でも、あれは夢か、そうでなかったら幻で――」
「現実だ、残念ながらな。〝魔の道〟は、時と場所とが捻じ曲げられた異空間。そこでは過去と現在、そして未来までもが渾然一体となっている。お前の《幻視》した光景は、恐らく未来。やがて己に振りかかるであろう運命が映し出されたのだ」
「そんな――」
「だが、気に病むことはない。襲い来る苦難を恐れぬのならば、未来などいくらでも変えようがある。それともお前は、定められた道を進むことしかできないのか」
セオドアは、びくりと体を震わせた。しばしの沈黙のあと「ぼくは……自分の道は自分の力で切り拓くつもりです」目に強い光が戻っていた。
男は微笑んだ。「それでこそ《赤き翼》だ」
セオドアも笑みを浮かべる。が、それは一瞬に過ぎなかった。すぐに真顔に戻ると、「お願いです、力を貸していただけないでしょうか」
「何をするつもりだ」
「ぼくは、何としても城へ戻らなければなりません」

「過酷な運命が待ち構えているかもしれんぞ」
少年は、力強く頷いた。「それが任務ですから」
男は、セオドアの決意の固さを推し量るかのように、その顔を見つめた。セオドアも、それに真っ直ぐな視線を返す。ややあってから男が口を開いた。
「バロン城の外堀は、この町の地下にある古い水路とつながっている」
「そういえば聞いたことがあります。でも、どうしてあなたがそんなことを――」
「小耳に挟んだことがあるだけだ」
「水路を管理しているのは、確か――シドの家族だったと思います」
「行って来い」
「あの……こんな夜更けに、ですか」
「夜が明けることですべてが好転すると思うのならば、急ぐ必要はないがな」
「行きます」セオドアは即答すると、男をその場に残して駆け出した。

21

東の空の闇が心なしか青みを帯びてきていた。
しかしポロムは、それに興味がないといわんばかりに、ただ北の彼方を一心に見つめている。
夜明けを予感させる爽やかな風が、彼女の明るく染め上げた髪を揺らし、どこへともなく消え

去っていった。ミシディアの北に位置する、祈りの塔の最上階である。
ポロムは、みなが寝静まってから塔を上り、それからずっとここに佇んでいた。
パロムがトロイアへ旅立ってから、はや十日。あの騒がしい弟がひとりいないだけで、こんなにも村が静かになるとは思わなかった。日々の祈りも修行も順調そのもの。だが、その平穏に言いようのない不安を感じていることも、また確かなのだった。
怯える心が呼び寄せたわけではないだろうが、ここ数日でいくつもの心配事が降って湧いた。長老の病状の突然の悪化。魔物の動きが活発化したとの知らせ。〝魔の道（デビルロード）〟をゆくセオドアは、無事にバロンへ到着しただろうか。
パロムが旅立った直後は、今まで味わったことのない解放感に胸を躍らせていた。ようやく手に入れた自由に、心ばかりか体まで軽く感じられたほどだ。ふと、自分も何日か村を空けても大丈夫かもしれないと思い立った。そう、パロムがいない今だからこそ、自分の本当にやりたいことに時間を割くことができるはずなのだ。
近年、目覚しい発展を遂げているカイポへ行ってみるのも悪くない。それともバロンの町で流行りの服を買おうか。あるいは——。いろいろと計画を立てるのは、じつに楽しかった。だが、そうしているうちに、今に至ってしまった。いざ行動に移す段になると、持ち前の用心深さが災いし、躊躇（ためら）ってしまう。結局、パロムが戻ってくるまで、自分はこの魔道士たちの集落に縛りつけられている運命なのだ。何て嘆かわしいことだろう。
そう。すべての原因は、パロムにある。

遠いトロイアの地にいながら自分に迷惑をかける弟が、ポロムは疎ましかった。
パロムさえいなければ、すべてうまくいっていたはずなのに……。
魔道士の少女の頬を涙が濡らした。ちがう。そうじゃない。パロムは何も悪くないのだ。
彼女の周囲の人間は、ポロムがこれまでずっと弟パロムの面倒を見てきたと思っている。しかし、それは正しくない認識だった。パロムに引っ張られて、自分はここまできたのだとポロムは自覚していた。彼がいなかったら、彼と血がつながっていなかったら、今の自分はきっと存在しなかったにちがいない。
ポロムは、自分の胸をしめつける感情の正体に気づく。それは恐怖。ふと、パロムがこのままミシディアに帰ってこなかったら、と想像してしまう。
もうパロムの世話を焼く必要はなくなる。
そして、自分は有り余るほどの自由を手に入れる。
しかし、そうなったらもう自分が自分ではなくなってしまうように思えた。
いったい、自分は何のために、誰のために生きてゆけばいいのか。
それを教えてくれる者は、どこにもいなかった。両親が生きていたなら、私を導いてくれただろうか。私たちふたりを残して天に召された父と母――今は、ただ彼らに会いたくて仕方がなかった。教えてもらいたいことが山ほどある。
暗天が涙に溶け、揺らめく。
パロム、早く帰ってきて。私が自分を嫌いになるその前に――。



第2章

FINAL FANTASY IV THE AFTER

ファイナルファンタジーIV ジ・アフター

月の帰還

1

まるで廃墟のようだった。

白みはじめた空の下、少年と男はバロン城の城内への侵入に成功した。

ふたりが緊張を解いたのは、安堵からではない。どこを見ても動く者の姿がない。耳を済ませても風の音以外は聞こえない。この時刻ならば、一日のはじまりに備えて城内が慌しくなるのが常であるはずなのに。人の気配すら感じ取れないのは妙だった。

ふたりが足を踏み入れたのは、城の西側の中庭である。そこには血の臭いが色濃く残されていた。石床を濡らす魔物のものと思しき緑の体液。壁をどす黒く染め上げているのは兵士の血だろうか。ここで人間と魔物の壮絶な戦(いくさ)がくり広げられたことは間違いない。

「アダマン島から帰還するときに、バロン城に火の手が上がっているのを見ました。ぼくたちの《赤き翼》を落とした魔物の群れも、その後、城へ向かったのだと思います」

「バロン城が陥とされたとはな」

「そんな――父さんたちが、魔物なんかに負けるはずがありません」男の言葉に、セオドアは声を荒げた。「《赤き翼》が不在でも、バロンには近衛兵団があります」

「ならば、この状況をどう説明する。私には廃墟にしか見えぬが」

「城門に衛兵がいました」

「私もそれが気になっている。おかしいとは思わぬか」

「……どういうことでしょう」セオドアは問われた意味を理解しかねて訊き直した。
「わからん。だが――この城で何かが起きている。よからぬ何かがな」
「父と母を捜してきます」
「両親も、この城で暮らしているのか」男が驚いたように目を見開いた。「名は？」
「父はセシル、母はローザといいます」
「――そうか」言って男は自分の爪先に視線を落とした。
「あの……様子を見てきます」
駆け出したセオドアの背に男は「用心しろ」と声をかけた。

＊

「そうか、お前がふたりの子か」王子の姿が見えなくなってから、男は小さく笑った。自嘲という名の笑みだった。言われてみれば、ふたりの面影が感じられる。
男は、セオドアのあとを追うようにして歩きはじめた。その足取りに迷いはない。セオドアと同じように、男もまた〝魔の道(デビルロード)〟でやがて訪れる運命を《幻視》していた。それは玉座の間へと至る、控えの間で待ち受けているはずだった。そこで男は、捜し求めていた宿敵との再会を果たし、剣を交えることになるのである。
一歩、さらに一歩。過去を確認するように、今この瞬間を噛みしめるように歩を進める、未

来へと向かって。城内に入ると左手に折れ、さらに奥へ。ここまで城の者の姿を見ていなかった。男にしてみれば、むしろ好都合である。無用な争いはできることならば避けたい、自分が刃を向ける相手はたったひとりで十分なのだから。

と――歩きつづける男の足が、一瞬だけ躊躇うかのような動きを見せた。それでも立ち止まることがなかったのは、苦い過去に背中を押されたからだ。もう覚悟は固まっている。やるべきことをやるだけだ。そのあとに何が起ころうとも知ったことではない。

ついに控えの間へ足を踏み入れた。《幻視》した通りならば、ここに奴が姿を現すはずだった。男は目を閉じ、そのときを待った。だがどれほどの時間が経とうとも、男の魂の渇きを癒してくれる相手との再会は叶わなかったのだった。まだ時が満ちていないのか、あるいは無意識のうちに未来を変えてしまったのか。理由は定かではなかったが、このままでは時間を浪費するばかりだ。男は緊張を解き、目を開いた。

セオドアのことが心配だった。あのふたりの子だというのなら、余計に放っておくことなどできない。面倒に巻きこまれる前に、ここから退散したほうがよさそうだ。そう思い、引き返そうとしたときのことだった。背後から生じた異様な気配に男は振り返る。

この控えの間の向こうには、玉座の間があるはずだった。セシルは果たしてそこにいるのだろうか。あるいは別の何者かがセシルになり代わり、王として君臨しているのか――？

次第に強くなってゆく気配に誘われるかのように、玉座の間へ入る。

男はそこで足を止めた。予想に反して、そこには誰もいなかった。あれほど強烈に感じられ

ていた気配も、いつの間にか消失している。気のせいだったか、と踵を返したときだった。耳にしたことのある声が聞こえた。「何者だ」

弾かれたように振り返る。玉座にかける王の姿があった。「無事だったのか」

「愚問だ」セシルは嗤った。「我がバロン王国は不滅なのだ」

「――変わったな」

「まるで私を知っているかのような口ぶりだが」

「バロン王の人となりなど、辺境の者でも知っている」

「なるほど。では訊こう。私に何の用だ」

「用などない」男はセシルに背を向けた。「邪魔したな」

＊

襲いかかってくる絶望感から逃れるように走る。右手の控えの間から男が現れたのを目にし、セオドアは立ち止まった。荒い息遣いのまま言葉を絞り出す。「誰の姿もありません」

「そのようだな」男は感情を押し殺した声で言った。

「やはり、みんな魔物に――」

「少なくともまともな人間は、この城にはおるまい」

「脱出した人がいるかもしれない、ということですか？」

「絶望するのは勝手だが、希望まで捨てる必要はないだろう」
「……そうですね」セオドアはくちびるを噛みしめた。「シドの飛空艇、エンタープライズが格納庫から消えていました。父も母も城を棄てたのかもしれません」
男はそれに応えず、目を細めた。「長居は無用だ。出るぞ」
セオドアはその言葉の意味するところがわからなかったが、城門へと急ぐ男に従った。ここまで導いてくれた彼を疑うような真似はしたくなかった。城を出なければならない理由についてなど、落ち着いてからゆっくりと訊けばいいだけなのだから。
城門をあとにしても男の走る速度は落ちなかった。
「どこへ向かうのですか」それだけは訊いておきたかった。
「北西――ミストの洞窟だ」

2

「これは――」眼前に広がる光景に、ギルバートは言葉を失った。
陽が間もなく中天に差しかかろうかという時刻である。そのやわらかく暖かな日差しの中にあっても、そこは黄昏どきのような朧な闇の気配に満ちていた。
ホブス山の西の麓にほど近い平原。豊かな緑の大地に巨大な穴が穿たれていた。広さで言うならば、ダムシアン城の敷地よりも遥かに広い。もしもこの流れ星が城や村に落ちていたとし

たら、一瞬にして瓦礫の山と化していただろう。漂う薄闇の正体は、立ち昇る瘴気であった。かすかな大気の流れにも敏感に反応するそれは、深く吸いこむのを躊躇ってしまうほど毒々しい色をしていた。ハルたち調査隊は、この瘴気にやられて壊滅してしまったのかもしれない。ギルバートは、穴の底のほうを見通そうと目をすがめた。だが、生ある者の影は、どこにも見当たらない。やはり、ひとりで来るべきではなかったか。ギルバートは、己の軽薄さを恥じて首を小さく振った。だが、どうしようもなかったのだ。

昨晩、ギルバートは寝台に横になりながら、これまでのこと、そしてこれからのことについて想いを巡らせていた。今日も大臣からの進言があった、世継ぎについてである。

このまま後継者が生まれなければ、ミューア家の血筋はギルバートの代で途絶えてしまう。一方でギルバートがまだアンナを忘れられずにいることは、城の者たちすべてが知っていた。王の心情を慮って、世継ぎについて誰もが口をつぐんでいたのは、彼らなりのやさしさだったのだろう。その中で大臣だけはちがっていた。自ら憎まれ役を買って出てまで、ミューア家の血筋を守ろうとしてくれたのである。ギルバートは、そんな大臣に心から感謝していた。とはいえ妃を娶るかどうかは、また別の問題だった。

寝つくことができず、何度目かの寝返りを打ったときだった。ギルバートは、弾かれたように寝台から半身を起こした。目の前の闇に、ふたつの朧な影が浮かび上がっていたのだ。ギルバートには、それが誰なのかすぐに見当がついた。「アンナ……テラさん」

ふたりは何も語ろうとしなかった。ただ真っ直ぐにダムシアンの王を見つめるだけ。その視

線を受け止めているうちに、ギルバートはいつしか涙を流していた。彼らの間には、もはや言葉など必要なかった。現れたときと同様に、影は唐突に姿を消した。再び寝台に横になったギルバートだったが、千々に乱れる感情が睡魔を寄せつけようとしなかった。結局、一睡もすることができないまま、東の地平が白みはじめてゆくのを目にすることになった。急いで身支度を整え、足音を忍ばせながら城をあとにする。無論、行き先は誰にも告げていなかった。

大きく息を吐いたあとで、ギルバートは腐った大地を踏みしめ、穴の深部へと下っていった。ハルたちに何かがあったのであれば、急がなくてはならない。手遅れにならないうちに、何とかして彼女らを見つけ出す必要があった。そのためならば——。

歩を進めるたびに、不安が増大してゆく。前方に動く影を発見したのは、そのときだった。息を呑み、身構えるが、つぎの瞬間にギルバートの全身から力が抜けていった。ダムシアンの王は足を速め、影に駆け寄った。「——ハル！」

ふいに背後から名を呼ばれたにも関わらず、その女性秘書は驚いた様子もなく、ゆっくりとダムシアンの王を振り返った。「あら、ギルバート様。どうしてここへ——」

「それは私の台詞だ」ハルの前までやってきたギルバートは、呆れたように首を小さく振ってため息をついた。「君が調査隊に同行するという話は聞いていない」

「それは陛下がお尋ねにならなかったからですわ」

「まったく……私がどんな想いで眠れぬ夜を過ごしたのか、君にはわからないだろうな」

「——え？」

「い、いや、何でもない。それよりも、何かわかったのか」
ハルは顎に手を当て、考えこむような仕草をしたあとで「何もわかりません」
ギルバートは眉根を寄せた。「夜を徹しての調査活動を行なっておきながら、何ひとつわからなかったというのか。君がいながら、どうして――」
「日が暮れてから平原に退避し、そこで夜営しておりました。ですから実際の作業時間は、それほど多くありません。夕刻までに何かつかめればと思っていたのですが……」
「そうか。収穫はなしか」
「ひとつあるとすれば――奇妙な魔物を目にしたことでしょうか」
「奇妙な魔物？　それは新種のという意味か」
「いえ、この地に生息しているものに酷似していました。ですが、亜種といっていいのかどうか……。まるで複数の魔物を掛け合わせたような、そんな姿でした」
「大地が汚染され、突然変異が誕生したとは考えられないか？」
「たった二日で、ですか？」
「そうだな。それはあり得ない話だ」
そこで会話が途切れた。手がかりがないのであれば、この流れ星を異変の予兆とするのは早計だった。ギルバートは思わず天を仰いだ。雲ひとつない青空に、ふたつの月が浮かんでいる。きっと何かが起こる。いや、それはすでに誰も知らないところでこの大地を蝕んでいっているのかもしれなかった。早急に手を打たねば、取り返しのつかないことになる。

「――陛下ではありませんか」
見れば、落下跡の底を調査していたふたりの兵士が崖をよじ登ってくるところだった。
「あの二名が、今回の調査に尽力してくれました」ハルが説明する。
兵士たちが目の前までやってきてからギルバートは「何かわかったか」と訊いた。
「いえ、これといった収穫はありませんでした」
「そうか」予想した通りの答えだったとはいえ、わずかに残された希望もこれで潰えてしまったことになる。「ありがとう、大変な任務だったろう。今日はこれで引き上げ、ゆっくり体を休めてから対策を練ることにしよう」
ギルバートを先頭にハル、そして二名の兵士は、腐った大地を踏みしめて、穴の出口を目指す。ようやくまとわりつく瘴気から逃れ、緑豊かな草原にたどり着いたときだった。
「ギルバート様、あれを――!」
ハルの指差す方角を見たギルバートは、心臓をわしづかみにされるような衝撃を受けた。
バロンの飛空艇《赤き翼》が、ダムシアン城に迫りつつあったのだ。

3

「どうして――」リディアは、王妃の真意が理解できず思わず声を上げた。
母を亡くしたリディアは七つのとき、幻獣王リヴァイアサンの導きによってこの幻界にはじ

めて足を踏み入れた。人間界とは時の流れかたの異なるこの世界で長い年月を過ごしたのも、すべては強大な闇と闘う仲間たちのためだった。旅立ちの日を迎えたリディアの手を、幻獣の王妃はやさしく握り、言った。「リディア……私たちは、あなたの味方ですよ」あの暖かな笑みが今でも鮮明に思い出せる。「帰りたくなったら、いつでも戻っていらっしゃい」

それ以来、幻界はリディアの第二の故郷となった。先の大戦が終結したのちも、彼女は事あるごとにここを訪れ、幻獣たちと親交を深めてゆく。いつしか幻獣王を父、王妃を母として慕い、彼らの輪の中へ解けこんでいった。

今日もまた住み慣れたミストの村を抜け出し、幻界へと足を運んだ。いつものように歓迎してくれるものだとばかり思っていたのだが、王妃アスラはリディアの顔を見るなり「何をしに来たのです」と冷たい言葉を浴びせかけたのだった。

驚くリディアは、「みんなに会いたくなって……」と何とか声を絞り出す。

だが王妃は容赦なかった。「もう十分でしょう。さあ、帰るのです」

リディアには、彼女の豹変の理由がわからなかった。

「堅いことを言うでない」困惑するリディアに、王妃の隣にいた幻獣王が助け舟を出す。「リディアは我が子同然。たまに来るぐらいは——」

「なりません」王妃は聞く耳さえ持とうとしなかった。

「どうして——お願いです、理由を教えてください」

食い下がるリディアに、王妃は背を向けて呟いた。「ここでは、あなたが本当に学びたいと

思っていること、学ばねばならないことを教えられないからです」
「そんなことはありません。それに……人間界でも同じだと思います。私を産んでくれた母は、もうこの世にいないのですから」
「だから、ここへ逃げこんだのですか」
「ちがいます」リディアの目に涙が溢れた。
「あなたは幻獣ではありません」
「姿形に惑わされてはならない。大切なのは心……そう教えてくださったのは――」
「ええ、私です。しかし住む環境がちがえば、常識もおのずと異なってくるもの」
「まさか……私が何かしてしまったのでしょうか。それならお詫びします。もう二度とそのようなことはしないと約束します。だから、お願いです」
アスラが、ゆっくりと振り返った。
「王妃様……?」
「リディア、あなたは好きな人はいないのですか」
「――え」予想外のことに召喚士は言葉を失う。
「いないのですか」王妃アスラは、さらに強い口調で問うた。
リディアは顔を伏せた。「わかりません。本当のことを言えば、好きという感情がよくわからないのです。大切な人はたくさんいるのに――」
「それが答えですよ」

リディアが顔を上げると、王妃の顔に笑みが宿っていた。その慈愛に満ちた微笑が、記憶の中の母の笑顔と重なる。「……王妃様」
「あなたは、きっと幸せなのでしょう。でも、それで満足していてはいけません。今度は他の人を幸せにできる人間におなりなさい。大丈夫、あなたならば、きっとできます」
その励ましは、リディアの心を激しく揺さぶった。別れの言葉でもあるからだ。
「わしも、そなたに何か言葉を贈りたいところだが――」幻獣王の双眸が細くなる。「残念ながら、そのような時間は残されておらぬようだ」
リディアは気づいた。ふたりの視線が自分ではなく、その背後に向けられていることに。
「リディアよ、もうここには来てはならんぞ」幻獣王が右手を高く掲げる。ふた呼吸ののちに振り下ろした掌から光が生まれ、それがリディアの体を包みこんだ。
〝転移(テレポ)〟の魔法だった。リディアの体が次第に透き通ってゆく。その最中に背後を振り返る。王の間へ入ってくる者の姿があった。あれは――と思った瞬間にリディアの視界は闇に塗り潰され、束の間、肉体を失って精神だけの存在になった。
リディアが実体化したのは、幻獣の町へとつづく洞窟の内部だった。
胸騒ぎがする。あれはいったい誰だったのだろう。王の間へと入ってきたのは、空色の髪をした少女だった。一切の感情を排した表情を思い出し、背すじが凍える。
リディアは小さく頷くと、走りはじめた。幻獣王の言いつけを守るつもりなどなかった。確かめなければならない。幻獣王様、王妃様、どうかご無事で――！

4

「――陛下、バロンより使いの者が」
ギルバートたちが城門をくぐるや、待ち構えていたかのように大臣が飛び出してきた。
「伝令も戻ったのか」
「それが――」と大臣が口ごもる。ギルバートが先を促すと、ようやく言葉を継いだ。「伝令などバロンには来ていないと使者は言い張るのです」
「わかった。とにかく会おう」
ギルバートとハルは、先導する大臣のあとを追い、玉座の間へ急いだ。
足早に進みながら、ハルはギルバートに囁いた。「おかしいと思いませんか」
「君も、そう感じたか」同じように小声で返す。
伝令がバロンへ到着していないのならば、なぜ使者をよこす必要があるのか。そこがわからなかった。セシルのやりかたとは、どこかちがうような気がしてならない。彼ならば、どんなに公務に追われようとも、自ら飛空艇を駆ってダムシアンを訪れようとするだろう。ギルバートの知っているセシルは、そういう男のはずだった。
大臣につづいて玉座の間に入った。ギルバートは玉座に腰かけると周囲を見まわす。眉をひそめた。「バロンからの使者は、どちらに?」
「陛下を待つ間、城内を案内してほしいとのことで……」兵士のひとりが答えた。「どうやら

復興を遂げたダムシアンに興味がおありのようでした」
「なるほど、視察も兼ねているわけか」
「――どういうことでしょう」玉座の右手に立つハルが声を潜めて訊いてきたが、それにギルバートは答えなかった。
　間もなくバロンからの使者が戻ってきた。
「ようこそ、ダムシアンへ。どうか楽にしてください」
　ギルバートが声をかけると、バロンから来た男は片膝をつき、頭を深く垂れた。
「セシル殿はお元気ですか」
「はい」使者が顔を伏せたまま、短く答えた。
「ローザ殿は？　セオドアもすっかり大きくなったことでしょうね」
「失礼ながら」男が顔を上げた。「世間話をするために参ったのではございません」
「ほう、これはこれは。では、うかがいましょう。セシル殿は何と？」
「流れ星の調査はバロンに一任されたし――以上でございます」
「なぜでしょう」
「理由までは聞かされておりません」
「わざわざ使者を送るほどのこととは思えませんが」
「陛下に、そうお伝えいたしましょう」
「もうひとつ。ダムシアンからの伝令は？」

「ここしばらく他国からバロンを訪れたかたはおいでになりません」
「そうですか。では海難事故にでも遭ったのかもしれませんね」
言ってからバロンからの使者が立ち上がった。「では、これにて」
ギルバートらが見つめる中、男は悠然と踵を返すと、そのまま玉座の間から退出した。
「陛下。これは、いったい……」大臣が玉座の前に小走りにやって来た。
「セシルなりの考えがあってのことだろう」
「しかし――」
納得のいかない表情の大臣に、ギルバートは言った。「彼に会おうと思う」
「陛下直々に、でございますか」
「ああ。彼の真意を、この目で確かめてみたい」
「ですが、何やら不吉な予感がいたします」そこで大臣は声を潜めた。「あのバロンよりの使者も、どことなく様子がおかしかったように思いませぬか」
ギルバートは頭上を仰ぎ、「気のせいだろう」とぼけて見せた。
「わかりました。しかし衛兵をお供としてお連れください」
「兵を率いて事を荒立てたくないのだが」
「なりませぬ」
「わかったよ」ギルバートは大臣に視線を戻すと微笑んだ。「さっそく準備しよう」玉座の横の花瓶に活けてある黄色い花を、そっと懐に仕舞いこんだ。

5

闇を淡く照らし出す薄もやの中、セオドアは名も知らぬ男とともに歩いていた。
ミストの洞窟と呼ばれるそこは、バロン領とダムシアン領を隔てる山脈を貫く、唯一の陸路である。しかし海路の整備が進んだことで、わざわざこの危険な〝街道〟に足を踏み入れる者はなく、結果として魔物の巣窟と成り果てていた。
「ミストの東の山は、まだ崩れたままだと聞きます。もしも追っ手がかかったら、逃げ場がなくなります」前を歩く男の背に、セオドアは先刻から感じていた疑問をぶつけてみた。
「お前も、そう考えるか」それが男の答えだった。
少年は意味がわからず、仕方なく「追っ手がいれば、の話ですけどね」と言い添えた。
あり得ない話だった。なぜ王子である自分が、自国の兵士に追われなければならないのか。まず、その理由が思いつかない。確かに城門を守る衛兵たちの様子はおかしかった。だが、それ以外の兵士は、城のどこにもいなかったのだから、追っ手をかけること自体が不可能だ。そこでセオドアは思い当たった。追われているのは自分ではなく、この男のほうなのではないかと。少年は、すぐにその考えを否定した。つい先刻、彼を信じると心に決めたばかりではないか。しかしどうしても疑念を晴らしておきたかったのも事実だ。だからこそ、遠まわしに訊いたのである。「どうしてあなたは、ぼくにこんなによくしてくれるのでしょう」
「別にお前のためではない」

「でも……あなたは、バロンに用があったのではありませんか」
「私は、ある男を捜している」
「その人がバロンにはいなかったから――？」
「船を使ったのでなければ、行き先はひとつしかないからな」
セオドアは頷くと、もうそれ以上訊くまいと心に決めた。この人には、この人なりの事情があるのだろう。それについて他人である自分があれこれと思いを巡らせたところで何にもならない。ならば、自分の本能を信じよう、この人を信じてみよう。
「――やはり来たか」
その言葉で我に返った。前方に一際眩しい光があった。出口なのだろう、セオドアはようやくこの不気味な洞窟から抜け出せることを心の底からよろこんだ。だが男はそちらを見ていなかった。その視線の先を追い、セオドアは息を呑んだ。
薄もやの奥に動く者たちがあった。見覚えのあるその甲冑に体が震える。バロン兵――それは男の言う通りに、自分たちに追っ手がかかったということだった。早く逃げなければ、と前方へ向き直る。しかしそこにも影が生じていた。恐らくは飛空艇で先まわりでもしたのだろう、このミストの洞窟で挟み撃ちにする作戦なのかもしれない。
そのときだった。
『動いてはなりません』耳元で囁くような声がした。
洞窟の内部に満ちていた薄もやが動いた。大気は変わらず澱んだままであったが、淡く発光

する霧に、奇妙な流れが生じている。まるで意思を持っているかのような動きだった。
「動くな。静かにしていろ」この異変にも男は動じた様子はなかった。
周囲が乳白色に染まる。先刻よりも霧が濃くなっていた。やがて目の前に立つ男の背も目を凝らさねば見えなくなっていた。
ふたりの周囲にいくつもの軍靴の音が近づいてきた。追っ手の兵士に間違いない。
「ミストにもいなかった」ふいに声がした。
別の兵士がそれに応える。「ならば、やはりバロンか」
さらにもうひとりが、「セオドアらしき子供も一緒だったとか」
「素性の知れない男同様に始末せよとの陛下のご命令だ」
「バロンへ帰還する。何としても捜し出すのだ」
兵士たちの放つ殺気が、次第に遠ざかってゆくのがわかった。
しばらくしてから、ゆっくりと霧が晴れていった。セオドアは、体の震えが止められなかった。先刻の兵士の言葉が耳から離れない。陛下のご命令で――ぼくを始末する？
男はそんな少年に背を向けると、「行くぞ」短く言って歩きはじめた。
ようやく陽の光の下に出たが、セオドアの体は冷え切っていた。「あの霧は――まるで、ぼくたちを守ってくれたようでした」
「――ああ、感謝せねばな」男は立ち止まろうとせずに歩きつづける。
このまま行けば、ミストの村が見えてくるはずだった。召喚士たちの暮らすその小さな集落

に身を隠そうとでも言うのだろうか。
そんなセオドアの考えを見透かしたかのように、男は小さく笑った。「まだ休めるとは思うなよ。大変なのは、ここからだ」
「どういうことでしょう」
「崩落で塞がれた谷を越える。それでしばらくは時間を稼げるはずだ」
追われる身であれば、わざわざ退路を断つような真似はしない。言い換えれば、そういった常識を覆した行動を取らねばならないほど自分たちは追いこまれていることになる。
セオドアは、ふと男の追う相手も、こうやって逃げているのだろうかと考えた。
「その人を見つけたら――どうするつもりなんですか」
軽い気持ちで訊いた。返って来たのは、重い一言だった。「――殺す」
「何者なのでしょうか、その男というのは……」
男はしばらく沈黙したあとで、呟いた。「竜騎士だ。元バロンのな」

6

「ようこそ、はるばるトロイアへ」パロムが神官の間へ足を踏み入れると、待ち受けていた七人の神官たちが一斉に立ち上がり、深々と頭を垂れた。「お待ちしておりました」
「まったくだよ。だけど俺のせいじゃあないぜ」パロムは、もう思い出したくないとばかりに

首を振った。「乗った船が悪かった」
「なるほど、それは災難でしたね」言ったのはパロムの正面に立つ神官だった。「しかしご無事で何よりです。パロム様にもしものことがあれば――」
「多大なる損失になるからな」ミシディアの黒魔道士は、にやりと笑う。だが、それは一瞬のこと。すぐに真顔に戻る。「ところで、あんたらトロイアの神官は、世界の情勢ってやつにくわしいそうじゃないか。それでひとつ訊きたいんだけど」
「どのようなことでしょうか」
「世界で何かが起こっているという話は聞いてないか」
「――何かとは？」
「それがわからないから、こうやって訊いてるんだけど」じれたパロムは、思わず声を荒げていた。「なら言ってやるよ。異変だよ、異変」
「――異変ですか」
「月が、またふたつになった。何かが起こる前触れだと俺は睨んでいる。バロンでもファブールでも、エブラーナのことだっていい。何かおかしなことが起こったって話があんだろ？」
「何かあれば、私たちの耳に入ってくるでしょう。ですが――」
「世界は変わらず平和なままってわけか」
「ええ。とはいえ、私たちも決して事態を楽観視しているわけではありません。ふたつの月といえば、かつての戦乱を思い起こさずにはいられません。再びあのような悲劇を生み出さない

ためにも、常に危機的状況に対処できるよう準備を整えております」
パロムは不満げに鼻を鳴らした。それから、自分を取り囲むように立つ神官たちをぐるりと見渡した。この神官が言っているのが真実かどうかは、じきにわかる。切羽詰まっている様子がないことから、パロムはそれ以上問い詰めるのはやめておいた。「まあ、いいや」
この話題はもう終わりだと言わんばかりに、神官は言った。「レオノーラ、入りなさい」
すぐに舌足らずな声が応じ、ひとりの少女が神官の間へ入ってきた。腰まである栗色の髪をうしろでまとめた、清楚な感じのする娘である。年はパロムとあまり変わらないようであった。
少女はミシディアから派遣された黒魔道士の前に立つと、両手を胸の前で組み、頭を下げた。
それがこのトロイア流の挨拶なのだろう。「レオノーラと申します」
「……なるほどね。新たな神官の修練が、俺の役目ってわけか」
神官たちから感嘆のため息が漏れた。「お察しの通り。さすがはミシディアの天才魔道士と謳われるパロム様です。驚きました」
「んなこと、誰だってわかるだろ」パロムは神官からの世辞を軽く受け流し、くちびるの端を吊り上げた。「トロイアの神官は八人だって聞いている。言い換えれば、八人いないと、その役割が保てないってことだ。ところが、ここには七人しかいない。恐らく病にでも伏してるんだろうな。で、新たな神官を早急に育成する必要が出てきた。――そんなとこか？」
「おっしゃる通りです」神官は、そこでレオノーラと名乗った少女に視線を転じる。「彼女は、八年ほど前にこのトロイアへやってきました。それからすぐに神官を志願し、頭角を現しまし

た。その資質は我らも認めるところで――」

「前置きはいいよ」パロムは神官の言葉を遮り、面倒くさそうに目の前に立つ少女の顔を見つめた。「まあ、確かに修練が必要そうな顔だな」

その辛辣な言葉にも、少女は微笑んだだけだった。

それがパロムは気に入らなかった。「あんたらは、こいつに才能があるって言うけど、それなら何で修練が必要なわけ？　他人に教えを請わなきゃ神官になれないんだったら、そりゃあ才能がないってことにならないか？」

「それは……」神官は口ごもった。

パロムは、なおも言った。「それに第一、神官てのはクリスタルに仕える身。普通に考えれば、白魔法の修練をするもんだろ？　俺が何を教えりゃいいんだよ」

神官は沈黙したままだった。

「し、心配はいりません」代わりに言ったのはレオノーラだった。「黒魔法も白魔法も、精神の修練であることに変わりはありません。すべてはクリスタルのお導きのままに」

パロムは肩をすくめた。「まあ根っこの部分は一緒なんだろうけどな。でも、このトロイアでは黒魔法はご法度じゃなかったか？」

レオノーラが、助け舟を求めるかのように神官を振り返った。

「これからは、柔軟な発想が求められる時代です」神官は頷き、言った。「伝統やしきたりを重んじるのは大切ですが、そこに固執し、縛られることは進化と発展を妨げる結果となるで

しょう。我らトロイアは、そうなることを避けねばなりません」
「へえ、いいこと言うな」とパロム。皮肉ではなかった。「まったく、うちの長老に聞かせてやりたいぜ」
「では、レオノーラに黒魔法の手ほどきを――」トロイアに少しだけ好感を持った。
「ま、このまま帰ったら単なる無駄足で終わっちまうからな」
「あ、ありがとうございます！」レオノーラが、膝に額がつくほど頭を下げた。
「で、場所は？　まさか、ここでやるってわけにはいかないだろ」

7

眩い日差しが、祈りの塔の最上階に降り注いでいる。
朝の祈りを終えたポロムは、今日もここで彼方までつづく大洋を見つめていた。とはいえ海を眺めたかったわけでも、弟パロムのことを考えているわけでもない。得体の知れない胸騒ぎから逃げ出したくて、ひとりになれるこの場所を選んだに過ぎなかった。
ミシディアの民は毎朝、クリスタルに祈りを捧げるのを日課としていた。今日もまたポロムはクリスタルのたたえる光を一身に浴びながら、意識と無意識の間を漂っていた。だが、求めていた精神の平静が、ついぞ訪れることはなかった。ポロムは戸惑った。自分の心に迷いがあるのは確かだったが、それでもクリスタルはいつも変わらぬ安らぎを与えてくれたはずである。

なぜ今日に限って自分を惑わす精神の混乱を鎮めてくれようとしないのだろう。
――クリスタルが怯えている？
そうとしか考えられなかった。しかしその突拍子もない考えを誰かに打ち明けられるはずもなく、ポロムはひとり物思いに耽ることを選んだのだった。
空に浮かぶふたつの月には、目を向けようとしなかった。見れば余計に不安になってしまうのがわかっていたからだ。やはりこの大地に、再び異変が迫りつつあるのかもしれない。クリスタルはその気配を敏感に察知し、怯えているのだろうか。
こんなときにパロムがいてくれたら、と思わずにはいられない。彼ならば、そんな不安を笑い飛ばしてしまうだろう。そのはったりが、どれほど自分を励ましてくれていたのか、ポロムはようやく思い知った気がした。パロムが戻ってくるまでの辛抱だ。長老が病に伏せっている今、自分が村のみんなを引っ張っていかなくてはならない。
「――ここにおったか」
ふいに背後から聞こえてきた耳慣れた声に、ポロムは驚いて振り返った。
寝こんでいるはずの長老が、介護の者も連れず、たったひとりでそこに立っていた。
「長老――お体はよろしいのですか」
「このような状況で、寝ているわけにはゆかぬじゃろう」老人は小さく笑う。
自分の横に立ち、海を眺める老人にポロムは訊いた。「どういうことでしょうか」
しかし長老はそれに答えず、「パロムのことが心配か」と逆に問うた。

「それは……」ポロムは口ごもる。

「本当はな、お前をトロイアへ送りたかった。今や白魔法の総本山とも言われるトロイアの文化に触れることで、お前が大きく成長してくれるとの期待があったのじゃ」

「では、どうしてパロムを」

「それがトロイアの神官たちの意向であったからな」

その言葉に、ポロムは眉根を寄せた。「トロイアは黒魔法を禁じているはずです」

「これまではな」長老は隣に立つポロムを見つめた。

「――え？」

「そうせねばならぬ理由がトロイアにできたのやもしれんぞ……。神官たちが何を考えているのかわからぬが、わしは、これを〝予兆〟と感じた。だからこそ、敢えてパロムをトロイアに行かせ、お前をここミシディアに残したのだ」

ポロムは長老の言葉を理解できなかった。まるで謎かけだ。

そんな少女に気づいたのか、老人は視線を眼下の海へ転じた。「ポロムよ、お前には聞こえぬのか。次第に大きくなってゆく、竜の哭くその声が」

白魔道士は、父と慕う老人の視線の先を追った。穏やかな大洋が陽の光を受け、美しく輝いている。予兆――異変の兆しということだろうか。ならば、竜の声とは――？

突然、ポロムはそこで思い当たった。あまりにも突拍子のない考えではあったが、再び月がふたつになった今、それを否定することなどできなかった。

「――来るぞ」
長老が呟いた瞬間、大気が震えた。臓腑が細かく揺すられる。
いつの間にか海面に生じていた渦が、瞬く間に大きくなっていった。そこから浮上したのは、月の民の手によって建造されたと言われる飛空艇――魔導船だった。それは海面から離れてもなお上昇をつづけ、やがて空の彼方へと消えていった。
それを見届けたことで力尽きたのか、長老がその場に崩れ落ちた。
ポロムはその干からびた細い体を抱き起こすと、声を張り上げた。「――誰か！」
「クリスタルの発していた警告は、やはり真であった」か細い声で老人が言った。
「長老、お体に障ります。喋ってはいけません」
「よいか、ポロム。これより試練の山へ向かうのだ」
「嫌です、私は長老のお側を離れません」ポロムの瞳から涙が溢れてきた。
「あの忌まわしい過去がくり返されるとしてもか」
「――」
「噂が正しければ、かの竜騎士は今も試練の山にいることだろう」
「竜騎士――カインさんが？」
「こうしている間にも、異変は確実に我らの大地を蝕んでゆく。手遅れにならぬうちに、カイン殿の力を借りねばならん。それが叶わなければミシディアは、いやこの大地は――」
「そんな――」

「ポロムよ、急ぐのだ。一刻の猶予もない」
白魔道士の少女は、涙を拭い、頷いた。

8

視界が真紅に染まると同時に、全身が熱風に包まれた。まるで燃え盛る炎の中に投げ出されたかのような感覚だった。流していた涙が一瞬にして干上がり、息苦しさに眩暈を感じる。意識が遠のいていき、四肢から力が失われていった。幻獣の洞窟を抜けたリディアは、灼熱の地下世界へ戻ってきたところで力尽き、気を失いかけた。

崩れ落ちる寸前で、その体を抱き止めたのは、ドワーフの少女だった。

「ルカ、ごめん」リディアが自分の足で体を支えられるようになっても、ルカは不安げな表情を浮かべたままだった。

「大丈夫？」リディアは安堵を意味する微笑を浮かべた。

「――何かあったのね」と今しがた彼女が出てきた洞窟を見やる。

リディアは頷いた。先の大戦ののち、シドに弟子入りしたルカは、譲り受けた飛空艇ファルコンの整備や改造に余念がなかった。リディアはそんなルカに誘われ、ここドワーフたちの故郷、地底世界でファルコンの試験飛行に立ち会っていた。思ったように出力が上がらないと調整をくり返すルカの邪魔にならないようにと、リディアは幻獣たちの町へひとり足を伸ばしたのだが、そこで思いがけない事件に遭遇してしまったのである。

「幻獣たちが――？」リディアの話を聞いていたルカが、丸い目をさらに丸くした。
「私が幻獣王様のところへ戻ったときには、もうあの空色の髪をした女の子は、姿を消したあとだったわ。みんな魂を抜き取られたように石になってしまっていた」
「きっとリディアを巻きこみたくなかったんだね」
「私、あの子を捜そうと思うの。みんなを元に戻すために」
「すぐに見つかると思うけどね」とルカは遠い目をした。「最近、私がファルコンの試験飛行に熱中してるように見えるだろうけど、それにはちゃんと理由があるんだよ」
「どういうこと？」
「魔物の動きが活発化してる。まるであのときみたいにね」
「――あのとき？」
「ゴルベーザが《赤き翼》を駆って、地底の闇のクリスタルを奪いに来たときと同じってこと。月がふたつに戻ったのを見て、間違いないって思ったよ」
リディアが何かを言おうとして口を開いたときだった。地響きにも似た震動が、ふたりの足元を揺らし、体に這い上がってきた。
ルカが弾かれたように背後を振り返る。同時に叫んだ。「しまった」
見れば、溶岩の海の彼方にドワーフ城が陽炎のように揺らめいていた。そして上空には《赤き翼》があった。軍事大国バロンの象徴ともいうべきその飛空艇は、ドワーフたちの居城へ容赦ない爆撃を浴びせていた。城壁が砕け、黒煙の上がる様が、ここからでも確認できる。

リディアの思考は空転をくり返した。
光と闇の戦乱は、十年以上前に終結している。悪の元凶であるゼロムスは光の牢獄に封印され、自分を取り戻したゴルベーザは、月の民として生きることを望んで月に残り、いずこかへと旅立ったはずではなかったのか。
「急いで！」ルカの悲鳴にも似た叫びで我に返ったリディアは、近くに停泊していたファルコンに向かって走り出す。甲板へ駆け上がったと同時に、ファルコンが離陸を開始した。
《赤き翼》がドワーフ城を奇襲する理由など考えつかない。いや、ひとつだけある、とリディアは思った。闇のクリスタルだ。異変はすでにこの地底世界を呑みこもうとしている。幻獣たちが石にされてしまったのは、絶望の序章でしかなかったのかもしれない。
幻獣王様、王妃様——待っていてください。必ず、みんなの魂を取り戻します。

9

その塔はトロイア領の南のはずれ、大洋に突き出した岬の先端にあった。
何だってこんな辺鄙（へんぴ）な場所に建てたんだよ、と文句を言うパロムに苦笑しつつ、レオノーラは塔の扉に施された封印を解くと、内部へ足を踏み入れた。
質素な石造りの回廊を、ふたりは無言で歩いてゆく。どこまで行けども、何もない。
「——気に入らねえな」パロムが、ぼそりと呟いた。

「わ、私もはじめて中に入りましたが、何だか不気味なところですね……」
「そういう意味じゃねえよ」パロムは、隣をゆくレオノーラを一瞥したあとで、再び前方へ視線を転じた。「何なんだよ、ここは。何もないじゃねえか」
「あ、あの……気を散らすものがないことは、せ、精神の集中を助ける意味でも――」
「なら、別に城の地下にでも修練の場を作ればいいんじゃないの？　第一、こんな不便な場所だと往復するだけで疲れちまうだろ」
レオノーラは微笑んだ。「すべてはクリスタルのお導きです」
さらにしばらく進んだところで、突然パロムは足を止めた。「行けども行けども薄汚れた通路がつづいているだけ。いったい、どこまで行けばいいんだよ」
「と、塔の最上階に〝修道の証〟があると聞いています。そ、それを手に入れれば……」
「へえ、晴れて神官ってわけか」パロムは鼻を鳴らした。「足腰を鍛えるだけで神官として認めてもらえるとは、まったくトロイアってのは――」
「やめてください」レオノーラが声を上げた。
「な、何だよ……」少女の真剣な眼差しに、ポロムはたじろぎ、立ち止まった。
「私は何を言われても構いません。ですが、神官様を侮辱するのは……」言い終わる前に、レオノーラは顔を伏せた。「わ、私は、トロイアのやさしく大らかなところが大好きなんです。有り余るほどの才能を持ったあなたには、わからないかもしれませんが……」
「そ、そんなつもりはなかったんだ」パロムは、ばつが悪そうに頭を掻いた。「でもよ、ひと

つ言わせてもらうと……才能なんてないほうが幸せかもしれないぜ。有り余る才能ってやつは、努力することを疎かにさせる」

レオノーラが顔を上げた。「パロム様……」

「ひと言、言っとくけど。その、パロム様ってのやめてくれない？」

「で、ですが……」

「俺とあんたは、同じような歳だろ？」

「あ……わ、私のほうがふたつだけ年上です」

「あっそ。でも俺は、あんたのこと、さん付けで呼ぶ気はないよ」

「け、結構です、パロム様」

「だから！　様はやめろって」パロムが食ってかかると、

レオノーラは顔を赤らめ、恐るおそる言った。「は、はい……パ、パロム」

ミシディアの黒魔道士は、少女から前方へつづく回廊に目をやった。「まあ、このまま〝修道の証〟とやらを手に入れたんじゃ、俺がわざわざトロイアくんだりまで来た意味がないからな。ここいらで黒魔法の基礎ぐらいは手ほどきしといてやるか」

「ほ、本当ですか」

「まずは、基本中の基本である〝炎撃（ファイア）〟だな。〝炎撃（ファイア）〟てのは……」

「は、はい」少女は唾を飲みこみ、姿勢を正して聞き入った。

「火だ」

「そ、そうですね」思わずレオノーラは苦笑した。
「——以上」
「え……あ、あの、それだけですか？」
「神官が言ってたぜ。あんた、才能あるんだろ？」
「で、でも……」少女は困惑したように顔を伏せた。
パロムは構わず先をつづける。「魔法ってのは、まず頭にその効果を思い描くことからはじまる。呪文の書き取りをくり返すのも、そういった意味があるわけだ。ま、俺はそういう地味な修行は大嫌いなんだけどな。で……雑念を消し去り、心に純粋な火を描き、それを外界に転移させる。これが黒魔法の基本原理だ。——わかるか？」
「な、何となく、ですけど……。白魔法とは、やっぱり少しちがうんですね」
「白魔法は、まず最初に祈りがあるからな。回復魔法てのは一般的に〝癒す〟って勘違いされがちだけど、原理で言えば、負った傷の存在を否定して、本来の無傷の状態に〝戻す〟ことを指している。まったく、とても同じ魔法とは思えないよな」
レオノーラは驚いたように顔を上げた。「さ、さすがです」
パロムはそれには答えず、「百聞は一見にしかず、だ。見てろ」
回廊の奥に向けて、魔法の詠唱をはじめる。つぎの瞬間、前方にわだかまる薄闇が真紅の業火に包まれた。大気に焦げた臭いが混じったかと思うと、レオノーラの長い髪が吹き荒れる熱風に舞った。〝炎獄（ファイガ）〟と呼ばれる、最上級の炎の呪文だった。

「す、すごいです……」
呆然とするレオノーラの横で、パロムは胸を張った。「まだまだ、こんなもんじゃないぜ。おつぎは、氷の魔法を見せてやる」

10

ポロムは、岩肌が剥き出しとなった険しい山道を登っていた。
日が中天に差しかかり、汗ばむほどの陽気となったが、この地に足を踏み入れてからというもの、ポロムは体の芯まで凍えそうなほどの冷気に身を震わせていた。ここ試練の山は、草木ひとつ生えぬ不毛の地として知られ、〝生ける屍(アンデッド)〟の巣窟となっている。いつその亡者たちが襲いかかってくるのかという緊張感と恐怖とが、ポロムの背に張りついて離れなかった。供をつけるようにとの長老の忠告を無視し、ひとりでやって来たことを、今さらながらに後悔する。だがいくら悔やんでも、もう遅すぎた。もはや一刻の猶予もないのだ、となれば魔物に出くわさないようにと祈りながら、先を急ぐより他にない。
竜騎士カインが、この試練の山にこもって修練の日々を送っているとの噂は、ポロムも耳にしたことがあった。彼はセシルとローザの婚礼の儀を兼ねた戴冠式に姿を見せず、以来、かつての仲間とも決して連絡を取ろうとせずに今に至る。果たしてカインは、噂通り、いまだにここで己の腕を磨きつづけているのだろうか。耳を澄ませても、聞こえてくるのは風の音だけ。

生ある者の気配すら感じ取ることができず、ポロムは途方に暮れた。

ひとつ、気がかりがあった。昨日の夕刻、セオドアとともに祈りの館を訪れた男のことである。はっきりと顔を見たわけではなかったが、彼の漂わせている雰囲気がカインのそれと酷似していたようにポロムには思えたのだ。とはいえ、確証があるわけではない。男がカインであったのならば、あれほどよそよそしい態度を取るのは妙である。十年を越える断絶があるとはいえ、近況ぐらい尋ねてくるのが普通だ。しかもセオドアとともにバロンへ行くというのならば、余計に素性を隠す意味などないであろう。となると、あれは自分の気のせいに過ぎず、カインはいまだにこの試練の山にこもっているのかもしれない。

やがて山頂が見えてきた。

奇妙な石碑の建てられている一角へ、長い吊り橋がかかっている。それを中ほどまで渡ったところで、ポロムは足を止めた。前方に人影を認めたのだ。カインか、とは思わなかった。吹きつける風に吐き気を催すほどの腐臭が溶けていた。〝生ける屍（アンデッド）〟である。しかも一体ではない。ポロムの気配を感じ取った亡者が、その精神的な飢餓を満たそうと群れをなして襲いかかってきたのだ。とてもではないが、相手をできる数ではなかった。

引き返そうと振り返ったポロムは、息を呑んだ。後方からも〝生ける屍（アンデッド）〟の大群が押し寄せてきていたのである。吊り橋の上では逃げ場などあろうはずもない。かといって闘ったところで生き延びる自信はなかった。

前方、そして後方からゆっくりと〝生ける屍（アンデッド）〟たちが迫ってくる。

ふいに降り注ぐ陽光が翳った。ポロムが見上げるよりも速く、その影が目の前に落下した。青黒い甲冑を身にまとったその男が、白魔道士を抱き上げて再び跳躍。死人の群れを飛び越して大地に降り立ったのだった。男の腕から解放されたポロムは、全身から力が抜け、崩れ落ちるようにその場に座りこんでしまう。

男は、なおもポロムをあきらめようとしない〝生ける屍(アンデッド)〟に向き直ると、凄まじい速さで突進した。その間、わずかふた呼吸ほど。瞬く間に亡者の群れを殲滅させた男が、手にしていた槍を肩に担ぎ、少女の前に立った。

「――カインさん」ポロムは、震える声で男の名を呼んだ。

「俺を知っているのか」竜騎士が重い声で問う。「お前、どこかで……」

「ポロムです」と白魔道士は立ち上がった。「あれからずいぶん経ちましたから、わからないのも無理ありません」薄いピンク色に染めた髪に照れたように触れる。

「なぜミシディアの魔道士が、ここにいる」

「月がふたつになり、それに呼応するかのように魔導船が飛び立っていきました。長老によれば、これは異変の予兆なのだそうです」

「――異変？」

「あの忌まわしい過去がくり返されるかもしれないとか……」

「過去か」カインと呼ばれた男は、竜を模した兜の下で細い笑みを浮かべた。「どうやら無駄足だったようだな。俺には関係のない話だ」

「どうして――あなたの祖国バロンにも闇の力が及ぶかもしれないのに」
「知っているだろう。俺は、とうに棄てたのだ。過去を、そしてバロンをな」
「嘘です。あなたは自分の心に嘘をついています」
「――なぜ、そう思う」
「セシルさん、そしてローザさんとの絆は断ち切れるものではないはずです」
カインは顔を伏せた。「ふたりは息災か」
「はい。今でもカインさんの帰りを待ちつづけています」
しばらくの沈黙のあと、男が言った。「わかった、行こう」

11

乾いた砂が水を吸収するかのように、教わったばかりの黒魔法を自分のものとしてゆくレオノーラ。彼女の修練の様子を眺めているうちに、パロムは自分の認識を改めるべきだろうと思いはじめていた。
舌足らずな喋りかたといい、緩慢な動作といい、気に食わないことは多かったが、神官たちが口を揃えるように、確かに彼女にはある種の才能があった。それは、疑うことを知らない真っ直ぐな心だった。言われたことを、言われたようにやれば、きっと自分にもそれができる――そう信じることが彼女に力を与えているのである。

今もまた、ぎこちなさを残しながらもレオノーラは教わったばかりの〝雷撃〟の詠唱に成功し、満足げに飛び跳ねている。「パロム、見てください。……で、できました！」

ミシディアの黒魔道士は、自分の修行時代を思い出さずにはいられなかった。あのころの自分と比べて、レオノーラの進歩の度合いは格段に上だった。それが納得できない。

――こいつが、天才魔道士と呼ばれた俺に肩を並べるだって？

冗談じゃない、とパロムは思った。凄いのはレオノーラではなく、自分なのだ。そう、彼女がここまで来られたのは、自分の教えかたが優れていたからに他ならない。

冷たい石の床から立ちあがると、パロムは「まあまあ、といったとこだな」と言って両手を上に突き出して伸びをした。「問題は実戦で使えるかどうかだ」

「じ、実戦……ですか？」レオノーラの表情が曇る。

「練習でなら、誰だってこれぐらいまではできる。魔物を前にしても、いかに精神の平静を保てるかが重要なんだ。でなけりゃ、魔物と闘うことなんてできやしないだろ」

「せ、精神の平静……へいしんのせいせい……」

実戦という言葉に緊張したのか、突然レオノーラの表情が固くなった。

「やっぱり俺の勘違いか」パロムは肩をすくめる。

「――え？」

「何でもない」言ったあとで歩きはじめた。「基本的なことは教えてやった。あとは、これを発展させて上位魔法に昇華させていくだけだ。あんたの努力が試されることになる」

「じょ、上位魔法……ですか？」レオノーラが小走りにパロムについてゆく。
「威力が高くなるにつれて、より高い集中力が必要になる。これぱっかりは他人が教えてやれるもんじゃない。実戦で磨いてゆくしかないぜ」
「は、はい。がんばります。ところで……どこに行くのでしょう？」
「言ったろ、もう俺が教えることはない。さっさと最上階へ行って、〝修道の証〟とやらを手に入れちまおうぜ」
「――は、はい！」
いくつもの石造りの階段を上り、いつ終わるとも知れない回廊を進んでいった。
何度目かにパロムが悪態をついたところで、その巨大な扉が姿を現した。
「なるほどね」そう言うとパロムは、その場にどかっと腰を下ろした。「あの向こうに、あんたのほしがってたものがあるみたいだ。……ほら、行ってこいよ」
だがレオノーラは、「で、でも……」と尻ごみをするばかり。
無理もなかった。扉の前には、巨大な影がうずくまっていたのだ。それはふたりの気配に気づいたのか身じろぎし、ゆっくりと立ち上がった。人間ではない。魔物だった。
「忘れたのか。黒魔法の技術を磨くのは実戦あるのみって言ったはずだぜ」立ち尽くすレオノーラに、パロムはなおも言った。「あんただって、こうなることは覚悟してたんだろ？」
「――え？」
「とぼけるなよ。どうして塔の中に魔物がいる。あれは最上階への扉を守る番人だろ」

「こ、こんな辺境の地ですから、魔物が中に入りこんだとしても――」
「入り口には封印が施されていた。それを解いたのは、あんたじゃなかったか」
「あ、あの……何がおっしゃりたいのでしょう」
「神官たちがあの番人を用意した。そう、俺がここに派遣されたのは長老の気まぐれでも、偶然なんかでもない。……トロイアは何を企んでる？」
「わ、私は、ただ――」
「言いたくないなら言う必要はないぜ。あとで神官たちの口から、きちんと説明させるだけだからな」パロムは肩をすくめた。「さっさと番人を倒してトロイアへ戻ろうじゃないか」

12

これが地下世界の最後の希望なのだと思うと、慎重にならざるを得なかった。リディアは手にした闇のクリスタルを握りしめると、ルカと肩を並べて飛空艇ファルコンへ急いだ。
つい先刻のことである。
リディアとルカを乗せたファルコンがドワーフ城へ帰還したときには、すでに《赤き翼》は姿を消していた。追跡すべきかとも考えたが、まずはドワーフたちの安否を確認することが第一だった。ふたりはファルコンをあとにし、破壊の傷跡の残る城内へ足を踏み入れた。
ドワーフたちの王ジオットは、精魂尽き果てたと言わんばかりの表情で玉座の背にもたれか

かっていた。だが娘とその親友リディアの姿を認めると立ち上がった。
「父上、ご無事でしたか」ルカがジオットに駆け寄る。
「それは、こっちの台詞じゃ！　まったく、勝手に飛空艇で飛びまわりおって……。第一、このジオットの城は、あれしきの爆撃では陥ちはせんぞ！」
強がりなどではなかった。それが証拠に、傷つき疲弊していたがドワーフたちの士気はまったく落ちていない。口々にラリホーと奇声を上げ、跳ねまわっている。
「お久しぶりです、ジオット王」リディアが玉座の前に進み出た。
「リディア殿、久しいな」ルカの父親の顔に笑みが宿る。「元気そうで何よりじゃ」
「教えてください。なぜ《赤き翼》が、この城を——」
「クリスタルじゃよ」ジオットの顔から笑みが消えた。「恥ずかしながら、我ら屈強なるドワーフ部隊をもってしても守り切れなんだ。娘っ子ひとりにな」
「奪われてしまったのですか」ルカが声を上げた。
ジオットは、うな垂れるように顔を伏せた。
「娘……それは、まさか空色の髪をした——」リディアが訊いた。
「知っておるのか」王が弾かれたように顔を上げた。
「彼女の手によって、すべての幻獣たちが石のようにされてしまいました。何らかの方法でみんなの心を奪ったのだと思います」
「それで合点がいく。奴はリディア殿、そなたと同じ術を使いおるのだ」

リディアは眩暈を感じた。同じ術——それは幻獣たちを召喚するということである。心を奪われただけでなく、望まぬ殺戮と略奪に荷担しなければならない彼らの無念を思うと、悲しみで胸が張り裂けそうになった。

「でも、わからないな」言ったのは、ルカだった。「どうしてそんな娘に、《赤き翼》が力を貸すんだろうね。セシルさんは何を考えてるんだろう」

「考えられんことじゃな、セシル殿が健在ならば」

「健在ならばって——」ルカが声を荒げた。「父上、セシルさんに何かあったみたいな言いかたを……」そこで眉をひそめる。「まさか、セシルさんの身に?」

「そうとしか考えられんじゃろう」

「でも、それじゃあ、まるでかつての戦がくり返されているような……」

ルカとジオットは、そこで言葉を失った。最悪の事態を想像してしまったのだろう。

「ジオット王、残る闇のクリスタルは——?」

リディアの問いかけに、ドワーフの長は渋面を作った。「奴は、すでに三つの闇のクリスタルを手にしておる。残るは、封印の洞窟のクリスタルのみ」

リディアとルカは顔を見合わせ、頷いた。

こうしてふたりは、再びファルコンを駆り、封印の洞窟へ向かったのだった——。

付近に《赤き翼》の船影はなかった。洞窟の封印が破られた様子もない。

ルカの首飾りで入り口の封印を解いたあと、慎重に最奥部を目指し進んでゆく。

しばらく行ったところで、「クリスタルを手に入れたら、どうするつもり？」リディアが傍らを歩くルカに訊いた。「あの子は、きっと私たちを狙ってくるわ」
「大丈夫、城には戻らないよ。そのまま地上へ行ってシド師匠たちに知らせる」
「……できるかしら」
「師匠から譲り受けたファルコンだよ、振り切ってみせる」任せておけとばかりに、ルカは自分の胸をどんと叩いた。「リディアだって、セシルさんたちのことが心配だろ？」
リディアは無言で頷いた。
それからふたりは言葉を交わすことなく、歩を進める。
闇のクリスタルは、洞窟の最奥部に設えてある台座に安置されていた。それを手にしてもリディアの顔に笑みは浮かばなかった。あの少女が姿を現さないのはともかく、ここまで一度として洞窟に巣食う魔物からの襲撃を受けていないのは、どう考えてもおかしい。こちらの隙を窺っているのか、それとも何かに怯えて隠れているのか。リディアは、後者のように思えて仕方がなかった。魔物も感じ取っているのだろう、あの娘の恐ろしさを。
洞窟の出口が近づくに従って、リディアの歩みが遅くなっていった。彼女の心に何度も響き渡っているのは、ドワーフ城でルカが口にした言葉である。
〝まるでかつての戦がくり返されているような――〟
それはリディアも薄々感じていたことだった。悲劇に彩られた過去が、再び現在に現出し、世界を蝕もうとしている――その思いが、彼女の足取りを重くしている。そう、私たちは無事

にファルコンにたどり着くことはできない。この闇のクリスタルは奪われ、私たちはその冷酷な現実にただ絶望するばかりとなる。運命は、すでに定められているのだから。
だから洞窟の出口まであと数歩というところで、足を止めることになってもリディアは驚きはしなかった。やはり——と思っただけだった。
目の前には、空色の髪をしたあの少女が立っていた。一切の表情を浮かべずに。
反射的にリディアは詠唱を開始していた。相手は、たったひとりで幻獣たちを石に変えるほどの力を持っている。どうしても先手を取る必要があったのだ。だが、リディアの意に反し、いかなる超自然的な現象も少女に振りかかることはなかった。「どうして——私の呼びかけに応えてくれないの」言ったあとで気づく。幻獣たちがリディアの召喚によって人間界に現出しないのは、この娘に心を奪われてしまったからなのだと。
少女が、くちびるの端を奇妙に歪めた。笑ったのかもしれない。「お前が呼び出そうとしていたのは、この者か」右手を掲げると同時に、周囲が真紅に塗り潰された。
その中に浮かび上がった姿に、リディアは見覚えがあった。「イフリート！」
闇に汚染された炎の魔人イフリートは、虚ろな双眸でリディアを見つめたあとで動いた。周囲の炎が大気の流れを無視して暴れ狂った。その灼熱の激流に翻弄され、リディアとルカは死の舞踏を強制される。気がついたときには、リディアは大地に伏していた。懸命に顔を上げると、立ち去ろうとする少女の背が見えた。その手には闇のクリスタルが握られている。
こうして闇のクリスタルは、すべて彼女の手に渡ってしまったのだった。

13

「――では、バロンはすでにドワーフたちの地下世界を制圧したというのですね」
トロイアの神官の言葉に、ひざまずいたままの姿勢で女性兵士が頷いた。「つぎに彼らが狙うのは、地上のクリスタル。ミシディア襲撃がその口火になるかと思われます」
囁きに近いその会話に、「まったく、こそこそしやがって！」
突然、割りこんできた声があった。七人の神官と女性兵士が全身を大きく震わせ、弾かれたように振り返った。そこに腕組みをしたパロムの姿があった。その背後で、レオノーラが顔を伏せて佇んでいる。「あんたらの企みは、もうすっかりバレてんだよ」
ふた呼吸ほどののち、神官の驚愕の表情が笑みに変わった。「レオノーラ、ずいぶんと早い帰りですね。それで……〝修道の証〟は――」
少女は消え入りそうな声で答えた。「と、塔の最上階にある石碑に触れてきました」
神官が頷いた。「やはり、そなたには神官としての資質が備わっていたようです」
「何を無責任なこと言ってんだよ」パロムがふたりの間に割って入った。「ここに派遣されたのがポロムだったら、こいつは死んでたかもしれないんだぜ」
「パロム様、それはどういう意味でしょう」
「とぼけるなって。修道の塔に、なぜ番人の魔物がいる。長老は言わなかったんだが、あんたらは黒魔道士の派遣を要請したんだろ？　どうしてトロイアに黒魔法が必要なんだよ」

「我らがトロイアにも自衛の手段は必要です」
「へえ。……で、バロンがまたクリスタルを奪うために動き出したって言うわけかい。ふざけんなって」パロムは、レオノーラの静止を振り払って神官たちの前へ。「あんちゃんが、そんなことをするわけがねえだろ！」
「パロム様、私たちは事実を申し上げているだけです」
「つぎに狙われるのがミシディアだって言ってたな？」
「それにつきましては、様々な情報から導き出された憶測に過ぎません。しかし……恐らくは間違いのないところでしょうね」
「理由を聞かせろよ」
「簡単なこと。ミシディアとバロンは〝魔の道(デビルロード)〟によってつながっております。かの封印さえ解ければ、ミシディア侵攻は、じつに容易いはず」
「そんなはずは……ねえ。絶対に――」パロムは顔を伏せ、全身を震わせた。
と、レオノーラがその横に立ち、神官たちに向かって頭を垂れた。「神官様、どうか失礼をお許しください。パロム様はお疲れなのです。覚えの悪い私のせいで」
神官は微笑んだ。「レオノーラ、あなたも疲れたでしょう。今日はゆっくりとお休みなさい。これから忙しくなりますよ」
「はい、ありがとうございます」レオノーラはもう一度深く頭を下げたあとで、パロムの手を引いて神官の間から出ていった。彼女が案内したのは、城の西の区画にある小さな部屋だった。

足を踏み入れると、薬品の臭いが鼻を刺激する。
「何だよ、ここは――」
「あ、あの……すみません。ここは医務室です。ほ、他にお部屋をご用意できなくて」
「こんなとこに閉じこめたって、俺の口の悪さは直せないけどな」
レオノーラは微笑んだ。「よかった。あ、あの……落ちこんでるかと思って……」
パロムはそれには応えず、部屋の片隅に置かれている寝台に、ごろりと横になった。神官を志す少女に背を向けて言った。「あんたも疲れたろ。もう休みな」
「……はい」レオノーラは頭を下げたあとで、医務室をあとにした。扉を閉めるときに、小声で呟く。「あ、ありがとう。……パロム」
扉の閉まる音を聞くと、パロムは寝返りを打ち、天井を見つめた。あの神官たちの口ぶりからすると、しばらく前から彼女らはやがて起こる異変に気づいていたのだろう。だからこそミシディアに使者を送り、黒魔道士の派遣を要請した。トロイアへ到着したパロムに異変について何も教えようとしなかったのは、そのまま故郷へとんぼ返りすることを恐れたからにちがいない。嘘は言わないが、代わりに本当のことも告げない彼女らのやり口が、パロムは気に入らなかった。だが、今はそんなことに腹を立てている場合ではなかった。単なる噂話で、トロイアがこれまでの伝統を捻じ曲げて黒魔法に手を出すわけがない。これは真実なのだ。ならば、早急に対策を講じる必要がある。最善の策を求めて、パロムは思案する。あらゆる可能性を考慮したが、結局、自身が納得できるようなものをひねり出すことはできなかった。

夜が更けてゆく。パロムは、いつしか眠りに落ちていた。
どれほどの時間が過ぎたのか、パロムは名を呼ばれて目を覚ました。半身を起こすと、申し訳なさそうに顔を伏せるレオノーラの姿があった。「……どうした」
「お、お休み中、ごめんなさい。じつは信じてもらえないかもしれませんが、あの……」
「何だ？」パロムは寝台を降り、レオノーラの前に立つ。
「ク、クリスタルが……怯えているような気がして」
パロムは舌打ちした。「くそ、もう時間がないってことか。クリスタルはどこだ？」
「神官様がおいでになる広間の奥に――」
「急ぐぞ！」言ってパロムは走り出した。

14

「パロム様、悪い知らせが入りました」神官の間へと駆けこんだふたりを、七人の神官たちが迎えた。「バロンの飛空艇が、このトロイアへ向かっているとのことです」
パロムは奥歯を強く噛んだ。
その横で「そんな――」とレオノーラが言葉を失う。
神官はつづけた。「彼らの狙いは、土のクリスタルに間違いないでしょう」
「で、俺に前線に立って闘えってのか」

「そうは申しません。まずは相手の出かたを窺おうと思います」
「あんたら甘いな」パロムは大きく息を吐いた。「クリスタルは俺が預かる」
「――どうなさるおつもりで？」
「どうするつもりもねえよ。いいか、バロンの兵士がやって来ても歯向かったりするなよ。クリスタルはどっかの賊に盗まれたとでも言っておくんだな」
「しかし……」神官は納得できぬ様子だった。
それを察知したのか、「わ、私も行きます」レオノーラが言った。
「足手まといだ」
「私も土のクリスタルに仕える神官です。……し、新米ですが」レオノーラは、今にも泣き出しそうな顔でつづけた。「で、でもクリスタルを守る義務があります……だから！」
パロムは舌打ちし、肩をすくめた。「そうきたか」
「いいでしょう。レオノーラ、クリスタルをお願いしますね」
神官の許可を受けた少女は満面に笑みを浮かべ、「お任せください」
ふたりは広間の奥にある扉を開け、その中へ入っていった。
「取ってきます」レオノーラは部屋の中央にある台座へ駆け寄り、そこに安置されていた土のクリスタルを手に取った。「これを持って逃げるんですよね」
「ああ。そのつもりだったが、ひと足遅かったようだな」
何かを言いかけたレオノーラを片手を上げて制し、「来やがったぜ」

息を殺すふたりの耳に、神官の間のやり取りが届く。
「土のクリスタルは、どこにある」一切の感情を排した女性の声だった。
それに神官の凛とした声が応じる。「なぜクリスタルを必要とするのです」
「劣等種に答える必要などない」
「土のクリスタルは、我らトロイアの象徴。それを黙って差し出すなど、できようはずもありません。それがバロン王、セシル殿のお考えなのでしょうか」
「――やべえな」パロムが吐き捨てるように言った。「このままじゃあ、袋の鼠だ」
「パロム、こちらへ」レオノーラが、部屋の右の壁際で手招きをしている。その壁を押すと、人がひとり通れる程度の大きさに奥へと沈む。巧妙に隠された扉だった。
「神官様が、もしものときのためにお作りになったものです」
「さすが、用意周到だな」パロムはクリスタルを受け取ると、先陣を切って扉の向こうへ飛びこむ。しかしレオノーラは動こうとしなかった。「おい、何やってんだよ」
「パロム、行ってください。わ、私は、やっぱりここに残ります」
部屋に戻ってきたパロムは、少女の腕をつかむと力いっぱい引き寄せた。「あの人たちも馬鹿じゃない。これ以上、被害が広がるような真似はしないはずだ」
「で、でも……」
「尊敬してんだろ、神官たちを」レオノーラを覗きこむ。「なら、信じてやれよ」
しばしの沈黙のあと、新米の神官が頷いた。

「よし、急ぐぞ」ふたりは、揃って扉の奥の暗がりに身を投じた。
レオノーラが扉を閉めると、通路は闇に塗り潰された。唯一の光源は、ときおりパロムが詠唱する“炎撃(ファイア)”のみ。ふたりは互いに手を取り、慎重に進んでいった。背後からの物音は聞こえてこない。まだ隠し扉の存在は気づかれていないようだった。とはいえ安心などできるはずもない。今はできるだけここから離れる必要があった。やがて通路が行き止まりになった。レオノーラが突き当たりの壁を探ると、頭上から岩と砂とがこすれるような音が聞こえて、光が差しこんで来た。ちょうど城門のあたりだった。「さてと、どこへ逃げたもんかな」
「磁力の洞窟は、いかがでしょう。あそこなら追っ手を防ぐ手立てがあります」
「へえ。そいつは、どっちだ?」
「ここから北東へ。川を越えますので、黒チョコボの力を借りましょう」
ふたりは城門をくぐり、トロイア城をあとにした。

15

「リディア、つかまって。大穴を抜ける!」ルカが叫ぶと同時に、まとわりつく熱気を置き去りにして急上昇。世界が闇に閉ざされたかと思うと、すぐに眩いばかりの光に満たされた。
飛空艇ファルコンは、そこでしばし滞空。アガルト村の北にそびえ立つ山の頂の上空であった。ルカはそこで目をすがめつつ、周囲の状況を確認した。すでに《赤き翼》の船体は、どこ

にも見えない。だが、どこまでも追いかけてやるつもりだった。
地底世界の闇のクリスタルをすべて手に入れたあの少女が、つぎに地上のクリスタルを狙うのは考えずともわかること。このままクリスタルを持つ城や町を襲うのか、あるいはその前に一度バロンへ帰還するのか。ルカは後者だと睨んでいた。もっとも、さしたる理由があるわけではない。言うなれば、ドワーフの勘である。
「バロンへ向かうよ」ようやく地上世界の明るさに慣れたルカが言った。
リディアに異論などあるわけもなかった。ふたりには、バロンへ行かねばならない理由があるのだ。ルカは師匠シドの安否を確認し、リディアはセシルに会ってドワーフ城襲撃の真意を尋ねる。すべては、そこからはじまるのだから。
ルカは、アガルトの上空でファルコンを旋回させると、船首を南へ向けた。
それに気づいたリディアは、「待って。バロン城は、ここから北のはずよ」
「あいつらだって、あたしらのことを警戒してると思うんだ。だからここは大陸の反対側にまわって、北からバロンに接近する。裏をかかなくっちゃね」
ファルコンが発進した。ルカは迷わず出力を最大にした。やがて水平線の彼方に陸地が見えてくる。トロイアの森を越えれば、バロン領まですぐだった。
船首で前方を見つめていたリディアが声を上げた。「あれは——!」
「黒チョコボ」ルカも、それに気づく。紫色の羽毛に覆われたその鳥は、森の木々をなめるようにして頼りなさげに北へ飛行をつづけていた。背に、ふたりの人間を乗せている。

リディアは目を疑った。「——パロム！」黒チョコボの背中に必死でしがみついているひとりが、ミシディアの黒魔道士パロムだったのである。そのうしろに乗っている人物は、どうやら少女のようだった。「どうして、こんなところに——」
そのときだった。「まずい！」ルカが舌打ちした。
「——え？」リディアは前方、すなわちパロムたちの後方に視線を転じ、息を呑んだ。
トロイア城の近くの森から、一艇の《赤き翼》が浮上した。船首のあたりが光ったかと思うと広大な森の一画に着弾。明らかにパロムたちを狙っての砲撃だった。
「ルカ、応戦できないの？」
「無理よ。シド師匠にきつく言われてて、武器は載せてないの」とはいえ、黙って見ていることなどできるはずもなかった。「奴らの気をそらす」ルカは面舵を取る。ファルコンの甲板が右に傾き、一気に高度が下がった。ちょうど《赤き翼》とパロムたちの乗る黒チョコボの間に割って入った形となった。そこから急上昇。取り舵をいっぱいに取り、左へ旋回。
その間、ずっと船首で《赤き翼》の動向を探っていたリディアが叫んだ。「こっちに気づいたわ」《赤き翼》の甲板に設置されている砲台が動いているのを確認した。
これでパロムたちの当面の安全は確保できた。問題は、代わりにファルコンが背負うことになった危機をどのように乗り切るかである。仮に相手を振り切れたとしても、こちらの存在が知れてしまった今、バロンは警戒態勢を取るはずだ。そこへ乗りこむのは難しい。とりあえずどこかにファルコンを降ろし、ほとぼりが冷めるまで時間を置くのが最善だろう。

「逃げるよ」言ってルカが舵輪の右にあるレバーを引いたときである。
轟音とともにファルコンの甲板が激しく揺れた。《赤き翼》からの砲撃を受けてしまったのだった。ルカの浮かべた表情が、被弾による損傷の大きさを物語っていた。今はとにかくバロンから離れることだけを考えなくてはならない。北へ針路を取ったファルコンに、《赤き翼》が容赦なく砲撃をくり返す。トロイア領の森を抜け、眼下に海が広がった。再び被弾。高度が次第に下がってゆく。海の上に落ちるという最悪の事態だけは避けたかった。海中に没した飛空艇を引き上げる術はない。師匠シドから譲り受けたこのファルコンを失うことは、ルカにとって死を意味するほどに重いのだ。祈りが天に届いたのか、前方に小さな陸地が見えてくる。そこにそびえ立つ大きな岩山にリディアは見覚えがあった。地上と地下世界とをつなぐ〝門〟――アガルト鉱山である。結局、ここへ戻ってきてしまったのか、とリディアは嘆息した。
ファルコンの高度が、さらに落ちる。このままでは山へ激突する恐れがあった。ルカは運を天に任せ、舵輪の横のレバーをいっぱいまで奥に押しこんだ。足底に感じられていた規則正しい低音が消えた。推進力を失い、飛空艇は急激に失速した。

16

「――血の臭いだ」前方から吹きつける風に、ふとカインが呟く。
ミシディアの村まで、もうわずかというところでの出来事だった。胸騒ぎを覚えたポロムは、

カインが同行していることさえも忘れ、走った。嘘だ、そんなことがあるわけがない、必死で自分に言い聞かせながら。しかし現実は無慈悲だった。村の至るところに、仲間の魔道士たちが倒れていた。ある者は全身を鮮血に染めたまま動かない、またある者は呆然と立ち尽くし、涙に暮れている。ポロムは無意識のうちに祈りの館を目指していた。

「突然のことでした。封印が破られ、〝魔の道（デビルロード）〟より魔物が溢れ出したのです」と白魔道士のひとりが体を震わせ、殺戮の状況を振り返った。多数の犠牲者を出したものの、かろうじて魔物を撃退。長老が死力を振り絞り、さらに強固な封印を〝魔の道（デビルロード）〟に施したことで、ようやく事態が収拾したらしい。その長老は、祈りの館の寝台に静かに横たわっていた。

「長老、申し訳ありませんでした」ポロムは、目を閉じたまま浅い呼吸をくり返す長老の横に立ち、涙した。「私の帰りが遅くなったばかりに……」

「カイン殿は」くちびるをわずかに動かし、長老が言った。

「はい、こちらに――」ポロムは自分の隣に立つ竜騎士を見やるが、すぐに長老の横たわる寝台へ向き直った。「ご安心ください。バロンへ戻る決心が固まったそうです」

長老は薄っすらと微笑み、歌うような口調で囁いた。「再び月がふたつとなり、時を同じくしてバロンは魔物の手に陥ちた。そしてその魔手は、ミシディアに向けられておる。そこから導き出される結論は、ただひとつ。奴らの狙いは――」

「クリスタルか」とカイン。

ポロムは長老に訊いた。「いったい何者の仕業なのでしょう？」

「わからぬ。〝魔の道(デビルロード)〟の封印も、いつまで持ちこたえられるかわからん。手遅れになる前に、手を打たねばならんじゃろう」
どうすべきなのか、ポロムには想像もつかなかった。ふと、パロムならば、こういうときに何を考え、そして行動するのだろうかと考えてしまった。
「俺がバロンへ行く」ふいにカインが言った。
「わ、私も行きます。連れていってください」ポロムは隣に立つ竜騎士を見上げた。
「やめておけ」カインは短く言うと、ポロムに背を向けて歩きはじめた。
「カインさん、どこへ――」
しかし竜騎士は答えず、どこへともなく姿を消した。
残された白魔道士の少女の頬を涙が濡らした。何もできない自分が不甲斐なかった。バロンへともにゆくことも許されず、かといってミシディアに残っても、今の自分に魔物の群れを食い止めることなどできない。いったい自分は、何のために存在しているのだろう。何のために生まれてきたのだろう。そんなことさえ考えてしまった。
ポロムが感じているのは、孤独だった。みんなが故郷の、そして世界のために命を懸けているというのに、その輪に入ることができないでいる。彼女は、心から変わりたいと願った。自分が変われば、彼らの中に入ってゆけるはずなのだから。
突然、少女の思索を悲鳴が切り裂いた。我に返ったポロムの脳裏を過ったのは、最悪の事態。目を閉じて横たわっている長老に小さく頭を下げると、祈りの館から飛び出した。

村の中心部にある広場には、四人の魔道士たちが倒れていた。それを無感情な瞳で見下ろしているのは、ポロムと同じぐらいの年頃の少女である。空色の髪の下の端整な顔立ちは、一切の表情を浮かべていない。それで確信した、この娘が元凶なのだと。

「——何者です」ポロムは対峙する少女に固い口調で訊いた。

「お前に理解できるとは思えぬ」抑揚のない声が返って来た。

「〝魔の道(デビルロード)〟の封印を破ったのも、あなたですね」

「あの程度の障壁で、私があきらめるとでも思ったのか。さあ、クリスタルを渡せ」

「嫌です」言ってポロムは身構えた。そのときだった。「待たれよ」声がした。

ポロムの振り返った先に、長老の姿があった。「長老、お体は——」

その言葉はミシディアをまとめ上げる老人の耳には届かなかった。「そなたが魔物どもの首魁であるならば都合がよい。ここで……悪夢を終わらせる」

「歯向かうのならば、それもよかろう」言って、少女は右手を頭上に掲げた。つぎの瞬間、振り下ろした指先から、一条の雷が放たれる。老人はその一撃で崩れ落ち、動かなくなった。

ポロムは駆け寄り、その細い体を抱き起こした。「——長老！」いくら呼んでも、目を開こうとしなかった。ポロムの全身が怒りに震える。

「つぎはお前だ」少女の虚ろな目が射止めたのは、ポロムだった。再び手を掲げる。

「——待て」男の声が、空色の髪をした娘の動きを止めた。

祈りの館から出てきたカインが、ポロムと少女の間に立った。

「これだろう、貴様の探しているのは」その手に、水のクリスタルが握られていた。
少女が目を細めた。「本物のようだな」
「それほどほしいのならば、くれてやる。ただし……条件がある」
「ほう……言ってみるがよい」娘が掲げていた右手を下ろした。
「バロンの国王に会いたい」
「会ってどうする」
「この手で殺すのだ、セシルをな」
少女の顔に、笑みらしきものが浮いた。「おもしろいことを言う」
「まだ生きているのだろう、セシルは」
少女が頷くと、「安心した」カインが嗤(わら)った。
しばらく視線をぶつけ合っていたふたりは、やがて少女を先頭に〝魔の道(デビルロード)〟へと姿を消す。
残されたポロムは、長老の体を抱きしめ、ただ泣くしかなかった。

17

パロムとレオノーラが逃げこんだ洞窟は、その名の通り強烈な磁力に支配された空間だった。不可視のその力は、内部の岩肌から発生しているようだった。金属製の武具を身に着けていたら最後、たちまち磁力に絡め取られて自由を奪われる寸法である。レオノーラの言う、追っ手



を防ぐ手立てとは、このことを意味していたのだろう。法衣と杖という出で立ちのふたりは、いずれやって来るはずの追っ手に備え、洞窟の深部を目指していた。どれほどの距離を進んだだろうか、やがて彼らの前にひと目で人の手によるものとわかる部屋が現れた。その中央には、豪奢な台座。まるでそこにクリスタルを安置してくれといわんばかりである。
「行き止まりか」パロムが舌打ちをした。「入り口からここまで、それほどの距離があるわけじゃない。追いつかれるのも時間の問題だな」
「そ、そんなことありません。バロン兵は、きっと洞窟に入ったところで……」
「奴らが、そんなに馬鹿だと思うか？　装備をはずして追ってくるだけだろ」
「でも、丸腰の兵士が相手なら……」
パロムは呆れたようにため息をついた。「追っ手の数を考えてみな。俺たちの精神力は無限じゃない。数で押されれば、そのうち魔力が底をついちまう」
「どうして――」レオノーラの瞳が揺れた。「そんな悲観的なことばかり言うのです」
「教えてなかったか。魔道士ってのは、常に最悪の事態を想定してなけりゃならないんだよ。それが心に余裕を持たせるための最良の手段ってわけさ。焦りなどは精神の平静を乱し、魔法の失敗を誘発してしまう。そうなったら命取りだからな」
「そんなの、あなたらしくありません」涙に濡れた目でパロムを見据えた。
「あんたに、俺の何がわかるってんだ？」
「そ、それは――」とレオノーラが、顔を伏せたときだった。肌を突き刺すような冷気が周囲

に満ちた。大気中の水分が氷結したかと思うと、それがふたりを中心にして吹き荒れる。パロムはレオノーラを抱きかかえると、彼女を下にして床に伏せた。氷が刃となってパロムの背中に無数の傷を刻む。荒れ狂う吹雪が、次第に血の赤に染まっていった。

動かなくなったパロムを不思議に思い、レオノーラがその体の下から這い出す。真紅に濡れた黒魔道士の背を見て、全身を震わせた。「ま、待っていてください」

神官の少女が唱えた〝療光（ケアルラ）〟によって、つぎつぎと傷が塞がっていった。

「へへ、死ぬかと思った」パロムは立ち上がると、部屋の入り口を見つめた。そこに立つ、白い法衣をまとった人ならざる者の影が、次第に薄れ、消え失せた。「どこかで見た術だと思ったんだが、ようやく思い出した。今のはシヴァだ」

パロムに肩を貸すレオノーラは、驚きに目を丸くした。「幻獣のシヴァですか」

「ああ、間違いない。追っ手の中に召喚士がいるってことだ」

ふたりが見つめる中、ひとつの影が姿を現す。空色の髪が印象的な少女だった。「クリスタルを渡せ」一切の感情を排した言葉で命じた。

「あんた……バロンの人間じゃねえな」

少女は答えずに、「クリスタルを渡せ」とくり返した。

パロムは口元を手で隠し、レオノーラに囁いた。「あんたは逃げろ」

「そ、そんな――」神官も小声で返す。

「言うこと聞けよ。俺の弟子だろ。心配すんな。とっておきの秘策があんだよ」

レオノーラは目を輝かせた。「――本当ですか」
「ああ、俺を信じろ」囁いてから、パロムは手を下げた。「あんたが探してるのは、こいつだろ?」少女に手にしたクリスタルを見せた。
「劣等種め、ようやく渡す気になったか」
「ってことは、こいつには用はないわけだろ」言って、レオノーラを突き飛ばした。
レオノーラは短い悲鳴を上げたが、立ち止まるわけにはゆかず、そのまま少女の傍らを駆け抜けて部屋から逃げ出すことに成功する。残されたのはパロムと少女だけになった。
「――劣等種だって?」天才魔道士は、にやりと笑った。「その劣等種に出し抜かれるとしたら……あんた、どうするつもりだい?」
「どういう意味だ?」少女が無表情のまま、首を傾げる。
「こういう意味さ」パロムはクリスタルを握りしめたまま、詠唱を開始。その矛先は相手ではなく、自分に向けられていた。魔法が発動した。黒魔道士の肌からは温もりが失せ、瞳から生気が消えてゆく。〝石化(ブレイク)〟と呼ばれる呪文により、パロムは彫像と化したのだった。
「クリスタルとともに石化するとは……。劣等種にしては上出来だ」空色の髪の少女は、ゆっくりとパロムに近づく。「ならば、その身を打ち砕き、クリスタルを回収するまで」
少女が足を止めたのは、「――待って!」と背後から声がかかったからだった。
逃げたはずのレオノーラが、そこにいた。彼女は少女が見つめる中、石像へ駆け寄るとその前に立ち、両手を広げた。「パロムに触らないで」

「我らが必要とするのはクリスタルのみ」

「わかったわ。私が石化を解きます」言うと動かぬパロムに向き直り、呪文を詠唱する。効果はすぐに表れた。〝解呪(エスナ)〟の魔法によって、パロムは石の呪縛から解放される。

「馬鹿野郎、何で戻ってきやがった」

「クリスタルのお導きです」

「な、何だと――？」

「このままだと、あなたは粉々にされていたわ」

「馬鹿。そんなもん、あいつのはったりだってわからねえのかよ」

「それは、あなたのほうよ。そう、昔からずっとそうだった」

レオノーラの顔を見つめるうちに、パロムの脳裏に幼少時の記憶が蘇っていった。

そう、あれはあの大戦が終結してしばらくしたときだった。幼馴染の女の子が両親とともに遠くへ移り住むことになり、突然ミシディアから姿を消した。俺よりもふたつ年上のくせに、すごい泣き虫で……そのくせ、いくらいじめても俺から離れようとしなくて。そうそう。あいつは、いつも俺の自慢話に耳を傾けてくれたっけな。小川のほとりにちょこんと座り、両膝をしっかりと抱えて、目をきらきらと輝かせてた。あの子の名前……何といったかな。

思い出した――レオノーラだ。「あんた、あのときの……」

「昔からあなたは、ずっとそうだった。みんなを元気づけるために、はったりばかり。絶対に弱音を吐かず、どんなに苦しいときでも胸だけは張っていた」

「ああ、そうだな」パロムは微笑んだ。「こんなの、俺らしくねえよな」
ふたりは、揃って少女に対峙した。
「時間切れだ。さあ、クリスタルを渡せ」
「断る」パロムは即答した。
少女の顔が心なしか強張った。「生存の可能性を自ら否定するとは理解しがたい思考だ」
「確かにな。神官失格だよ、こいつは。けどな——」パロムは、隣に立つレオノーラの頭に手を乗せると、その栗色の髪をくしゃくしゃにした。「俺の相棒としては合格だ」
ふたりの間に結ばれた絆は、何者にも断ち切れぬほどの強固なものだった。しかし、それでも圧倒的な力の差を埋めることはできなかった。再度、人間界へと召喚されたシヴァの巻き起こした冷気にまずレオノーラが倒れ、つづいてパロムがそのあとを追った。
クリスタルは、少女の手に渡ってしまう。
力尽きてもなお、ふたりは互いの手を握ったままだった。

18

アガルト鉱山の麓に不時着したファルコンの甲板に、リディアとルカは腰を下ろしていた。
幸い、ふたりとも軽傷で済んだが、その顔に笑顔はない。それほどまでに飛空艇の負った損傷は激しいものだった。ルカが軽く見積もったところでは、リディアが手伝ってくれたとしても

修理には最低二日かかるという。バロンへ向かうのは先送りにするとしても、その間、他の国に異変を知らせることや物資の調達さえできないのは大きな痛手だった。また、もしもファルコンがここに墜落したことが知れたら、《赤き翼》からの激しい空襲にさらされるのは避けられない。飛空艇を失ってしまえば、ふたりがこの島から出る手段はなくなってしまう。

状況は最悪だった。

早く行動を起こさねば、手遅れになる。それをわかっていながらもリディアたちが甲板で呆けたように座っているのは、この状況に絶望しているからである。こうしているうちにも、バロンの侵攻はつづくだろう。幻獣たちを召喚する力を持ったあの少女ならば、この地上にある四つのクリスタルのすべてを手にする日も、そう遠くはないと思われた。何せ、あの軍事大国バロンをすでに手中に収めているほどなのだ。

リディアは、立てた右の膝に頬を乗せ、前方に広がるアガルトの村を眺めていた。小さな村であったが、遠くから眺めていても活気に満ちていることがわかる。《赤き翼》が大地を睥睨し、人々を恐怖のどん底に叩き落そうと画策しているというのに、ここだけはまるで別世界のような平穏に包まれている。リディアは知らぬうちに涙を流していた。

降り注ぐ暖かな日差しが、ふいに翳った。リディアとルカは同時に立ち上がっていた。村の西のはずれに、それはいた。岩を削り出したかのような巨人が、地響きを立てながら前進を開始した。「――タイタン!」リディアは突如、姿を現した幻獣の名を叫び、走り出した。タイタンが足を踏み入れただけで、村は壊滅的な打撃を受けて廃墟と化してしまうだろう。それだ

けは避けなければならない、召喚士の誇りにかけても。
ふたりは、タイタンの正面に立ちはだかった。リディアの胸のうちに不安が渦巻いている。なぜタイタンが、ここに召喚されたのか——それが気がかりだったのだ。墜落したファルコンを完膚なきまでに破壊するため？　ならば、なぜタイタンは飛空艇ではなく、アガルトの村へ向かうのか。村までの距離は、もうさほどない。異変に気づいたのだろう、背後で人々の怒号や悲鳴が聞こえた。罪のない村人を、どうして？　ここにはクリスタルなんてないのに。
「リディア、山だよ。山に向かってるんだ」
ルカの言葉で、リディアも悟った。タイタンはアガルト鉱山へ歩を進めているのである。不幸なことに、その通り道に村があったというだけなのだろう。タイタンは鉱山をその拳で砕き、地上と地底とをつなぐ唯一の〝門〟の破壊を画策している。
何としても止めなければならない。
「お願い、タイタン。思い出して、私よ、リディアよ！」リディアは必死に声を張り上げ、幻獣の心に訴えかける。「タイタン、止まって。この先に村があるの。お願い」
見上げんばかりの巨人は、しかしその歩みを緩めようともしない。
「リディア、危ない。逃げて！」ルカが叫んだ。
ミストの召喚士は、動かなかった。
幻獣王や王妃の心までも奪ったあの少女の術は、生半可なことでは解けないと承知していた。命を投げ出すほどの勇気を見せても、タイタンが己を取り戻してくれるかどうか。だからリ

ディアは決して引こうとしなかった。弱い心を見せてはいけない。強い気持ちで接し、自分たちの育んできた絆を思い出させるより他はないのだ。

と――タイタンの足が止まった。

期待したのは一瞬だけ。リディアは、はっきりと感じ取る、タイタンが抱いている強烈なまでの殺意と敵意を。私を思い出して。タイタンが大樹を彷彿とさせる両腕を頭上高くに掲げた。私よ、リディアよ。双眸に宿るのは血の色のような攻撃色。両の拳が、リディアめがけて振り下ろされた。その一撃は小さき召喚士から命を奪い、単なる肉片と変えてしまうだけの力を秘めていた。……お願い。リディアは覚悟を決めたかのように目を閉じた。

ルカの悲鳴が上がった。それにつづくのは静寂。

いつまでも訪れない死を不審に思い、召喚士が目を開く。そこに岩の巨人の姿はなく、代わりに見知らぬ男が立っていた。浅黒い肌を申し訳程度に漆黒の布が包んでいる。そこから鍛え上げられた筋肉の束が見て取れた。男は、それまで幻獣のいた場所を見つめている。

「タイタンは――？」とリディアは訊いた。

「この人が倒してくれた」答えたのはルカだった。

「――倒した？」リディアは、自分の胸に手を当て、そして知った。タイタンが死んでしまったわけではないのだ、と。悪しき者の支配はいまだにつづいているようだったが、それでも友とも呼べる幻獣が大惨事を引き起こさずに済んだことが素直にうれしい。「ありがとう」

しかし黒衣の男は、その礼の言葉にも表情ひとつ変えずに、西の空を見やった。

「あの、あなたは……」と、リディアが声をかけても何の反応も見せない。

「何なのよ」じれたルカが不満の言葉を漏らした。「助けてもらったことには感謝するけど、その態度――」

「あの忌まわしい過去が、くり返されようとしている」男が遮った。低い声だった。

何かを言いかけたルカを片手で制し、リディアが口を開く。「やはり、そうなのですね。でも、私たちには翼がありません。この島から出る手段がないのです」

「あんたも手伝いたいって言うんなら、特別に許可してやってもいいよ」

ルカが腕組みをして、背後のファルコンを親指で指差す。

そこで男はようやく表情を崩した。あるかなしかの笑みである。

「ならば、修理を急がねばならんな。我らには時間がないのだ」

「――え?」

「あの塔へ向かう」

黒衣の男の指差した方角に、遠くエブラーナ領に屹立する巨大な塔が霞んでいた。これだけ離れていてもなお、塔の放つ不気味な輝きが見て取れた。



第3章

FINAL FANTASY IV
THE AFTER

ファイナルファンタジーIV
ジ・アフター

月の帰還

1

少女につづいてバロン城の城門をくぐろうとしたカインの目の前で、ふた振りの剣が交差した。門の両脇を固める二名の兵士が声を揃える。「何人たりとも通してはならぬ。陛下のご命令です」やや遅れて虚ろな双眸が、カインに向けられた。

竜を模した兜の下で、カインのくちびるが吊り上った。手にしていた槍に力をこめる。体内で膨れ上がった殺気を解き放とうとした瞬間だった。

「——通してやれ」先をゆく少女が、振り返らずに言った。

兵士たちは剣を引いて道を開けると、不動の姿勢を取った。

カインは何も言わず、少女のあとを追う。ふたりは城内へ足を踏み入れた。

「貴様は、あそこで何を見た」唐突にカインが訊いた。

少女は足を止めずに答える。「言っている意味を理解できぬが」

「とぼけるな、〝魔の道（デビルロード）〟だ。貴様も見たのだろう」

「お前は、あの不可思議な空間で夢でも見たのか」

「——夢？　ああ、そうだな」カインは嗤（わら）った。「素晴らしい夢だった」

ミシディアとバロンをつなぐ〝魔の道（デビルロード）〟で、カインは《幻視》していた。返り血で全身を真っ赤に染めた自分が、バロン城の玉座の間で王セシルと対峙している。カインの姿を目にしたセシルの顔には、戸惑いの表情が浮かんでいた。カインは相手が何かを言いかけた瞬間に動

いた。何も聞くつもりはなかった、何も訊かれたくなかった。望んだのは、目の前の男の死のみ。セシルの開いたくちびるから漏れたのは断末魔の悲鳴だった。そして槍に串刺しにされ、ぴくりとも動かなくなったバロン王の骸を、カインは冷たい視線で見下ろす。

――それが、カインの見たすべてだった。

単なる白日夢などではない。〝魔の道（デビルロード）〟は、時と場所とが捻じ曲げられた異空間である。そこでは過去と現在、そして未来までもが渾然一体となっていると言われていた。つまり、あそこで目にした光景は、やがて訪れる未来に他ならない。

幼馴染のローザを異性として見るようになった瞬間から、カインはセシルへの敵意を抱きつづけてきた。そのころは、まだ彼との友情を重んじ、その感情をひた隠しにしていた。しかしセシルとローザが互いに友情を越えた感情を育んでゆく姿を目にするようになると、敵意はいつしか殺意へと姿を変えた。セシルさえいなければ――まるで呪文のように、何度その言葉を心の中でくり返しただろう。だが、間もなく悲願が成就する。歩を進めるたびに、歓喜の瞬間が近づいてくることを実感し、魂までもが震えた。

控えの間を抜け、ふたりは玉座の間へ足を踏み入れた。

兜の下に隠された、カインの双眸がすっと細くなる。「――謀ったか」

空色の髪をした少女が、ゆっくりと振り返った。「何のことだ」

「言ったはずだ、セシルに会うのが目的だと」

「簡単に会えると思ったか」

言われて、カインはくちびるを噛んだ。ここで感情の赴くままに行動するのは容易い。しかし、そうなれば自分もただでは済まないだろう。

少女がつづけた。「我らには、まだやらねばならぬことがある」

「――クリスタルか」

「いかにも。残るは風と火のクリスタル」

「ファブールとダムシアンか。それが手に入れば――？」

「セシルをどうしようと、お前の勝手だ」

「つまり、それがセシルに会うための条件というわけだな」カインのくちびるに強烈な笑みが宿った。「飛空艇と兵を用意しろ。手はじめにファブールのクリスタルを奪い取る」

2

油断が窮地を招いてしまった。

廃墟と化したと思っていたバブイルの塔の内部である。エッジは配下の四人衆を密偵として各地に送った手前、エブラーナ城で彼らからの報告を待つ心づもりだった。しかしかつての大戦の象徴であるバブイルの塔が、あのころのように不気味な輝きに包まれたのを目にしては、じっとしていられるはずもない。誰にも気取られないように居城をあとにし、西の洞窟へと足を運んだ。そこには、彼の両親の墓が人目を忍び、ぽつんと建てられていた。

「親父、お袋。またあの塔が動き出しやがった」エッジは、控えめな墓標に手を合わせたあとで呟いた。「わかってるって。もう、あんな思いをさせちゃならねえ。誰にもな」
　それからエッジは、そのまま洞窟を抜けてバブイルの塔へと潜入したのだった。
　内部へ踏みこんだ当初は、全身に緊張感を漲らせていたものの、その行動は次第に大胆になっていった。魔物の姿どころか、邪悪なる者の気配さえもないのだから無理もない。塔を再稼動させた勢力は、いったいどこへ消えたのか。そのことばかりに気を取られ、周囲への警戒を怠ったのが己を窮地へ追いこむ原因となってしまった。
　エッジを取り囲むようにして間合いを詰めてくるのは、生命を持たぬ殺戮兵器たち。人型こそしていたが、感情は持ち合わせておらず、ただ目の前の敵を殲滅することだけを目的としていた。気配が感じ取れないのも当然である。不意を突かれたエッジは、防戦一方となった。飛び交う無数の熱線をかろうじてかわしつづける。反撃の糸口は見つからなかった。
「こいつは、やべえな」エッジが舌打ちしたときだった。忍の王の周囲に影が湧いた、その数四つ。「――てめえら！」エッジの顔に望外の笑みが浮いた。
　瞬く間に兵器を破壊したその影たちは、王の前で片膝をつき、頭を垂れた。主の危機を察知し駆けつけた、エブラーナ四人衆である。代表して一番年配のザンゲツが言った。「お館様、我ら四人衆、ただいま密偵より戻りました」
「ああ、無事で何よりだ」エッジは破顔した。
「お館様の苦戦なさるご様子、はじめて拝見いたしました」と悪戯ぽく笑うのは、年のころ七、

八歳と思しき少年ツキノワ。しかし隣に控えるくノ一、イザヨイに「口が過ぎる」と睨まれると、肩をすくめて再び頭を垂れた。

最後に忍びとは思えぬごつい体をした青年、ゲッコウが口を開いた。「塔が輝きに包まれたのを目にし、帰還した次第にございます。とはいえ、それなりに収穫はあったかと」

「聞かせてくれ」エッジの顔から笑みが消えていた。

「わしはドワーフに扮し、彼らの城でともに汗を流しておりました」老忍ザンゲッが一歩、進み出た。「しかし突然《赤き翼》の空爆を受け、クリスタルを奪われてしまいました」

「ちょっと待て。《赤き翼》だと?　――そいつはセシルの指示か」

「指揮を執っておりましたのは、空色の髪をした少女でございます。兵のひとりも率いず、たったひとりで城へ乗りこみ、ドワーフの部隊を蹴散らすという勇ましさ」

エッジは眉根を寄せた。が、口を開かず、ザンゲッのつぎの言葉を待つ。

ザンゲッがつづけた。「結論から申しますと、地下世界の闇のクリスタルは、四つすべてあの娘の手に渡りました。とはいえ、それも無理からぬ話。奴は、幻獣を召喚するのです」

「――幻獣を?」

「リディア殿によれば、幻獣たちが心を奪われ、つぎつぎと石と化したとか」

「ちょっと待て。リディアもそこにいたのか。それで、あいつはどうした」

「闇のクリスタルがすべて奪われたあと、《赤き翼》を追い、ルカ殿とファルコンにて地上へ向かったようです。しかしその後の足取りは……」

「――そうか」エッジは奥歯を強く噛んだ。

今度は、湿しき忍ゲッコウが進み出る。「自分は、ホブス山の西に落ちた流れ星の落下跡を調べておりました。同じように調査に訪れたのでしょう、ファブールのモンク僧の一団もおりましたが、彼らは無残にも空色の髪の娘に……」ゲッコウはそこで言葉を切った。

「先を聞かせてくれ」

エッジに促され、再び口を開く。「あの屈強なモンク僧の一行が、あれほど一方的に壊滅させられるとは思いませんでした。助太刀することも考えましたが、自分は隠密の身。ここで命を捨てることはできぬと思いとどまり、こうして恥をさらし戻って参りました」

「いや。よくぞ生きて戻り、このことを知らせてくれた」

「つぎに機会があらば――」ゲッコウの握りしめた拳が震えていた。「自分はこの命を投げ打ってでも、あの娘とやり合う覚悟です」

「ああ、そのときは存分に暴れてもらう」

つぎにイザヨイが顔を上げた。「私は、神官見習いとしてトロイアに潜伏しておりました。そこに、ミシディアよりいらしたパロム殿のお姿が。妙だと感じ、早速調べてみたところ、黒魔法の手ほどきをするためおいでになったとのことでした」

「黒魔法を――トロイアがか？」

イザヨイは頷き、先をつづけた。「神官たちは、しばらく前からクリスタルのお告げによって、この異変の予兆を感じ取っていた節があります。それで黒魔法を修得し、来るべき異変に

備えようとしたのでしょう。しかしバロンの動きは、迅速でした」
「すでにトロイアにまで――」
「はい。前触れもなくかの娘がトロイア城に現れ、クリスタルを差し出すよう迫ったのです。パロム殿が機転を利かせ、クリスタルを持ち出して逃げました。しかし《赤き翼》の執拗な追跡は、なかなか振り切れるものではありません。恐らくは――」
エッジは舌打ちした。「……ここでも幻獣を使役する娘か」
最後に少年の忍ツキノワが報告をはじめた。「ぼくは孤児としてミシディアに潜りこみ、魔法の教育を受けていました。とても平和でしたが、魔導船が浮上して空へ消えていってから、すべてが変わりました」
「魔導船が――？」
「はい。長老は、それを異変の予兆と言っていました。そこでポロムさんが試練の山へ登ることになったんです、カインさんを捜すために」
「それでカインは見つかったのか」
「はい、見つかりました。ですが……」ツキノワは、つづく言葉を呑みこんだ。
「どうした」
しばしの沈黙のあと、少年は呟いた。「カインさんはミシディアの水のクリスタルを奪い、件の少女と〝魔の道(デビルロード)〟に姿を消してしまったんです」
「あの野郎、まさか――」エッジはくちびるを噛みしめると小さく首を振った。「いや。奴の

ことだ、何か策があるんだと信じたい」
四人の報告を聞き終えたエッジは胸の前で両腕を組み、静かに目を閉じた。
気になる点が、ひとつあった。ふたつの月、《赤き翼》による襲撃、クリスタルの強奪、そしてバブイルの塔の稼動――歴史はくり返す、とはよく言われるが、エッジには何者かが意図的に過去を模倣しようとしているのではないかと思えてならなかった。
これは、単なる偶然ではないはずだ。
と――そこでエブラーナの王は、目を開いた。そのわずかな気配を見逃すほど、まだ衰えてはいない。「それじゃあ行くとするか」
四人衆が揃って首を傾げた。「どちらへ」
「集中してみな。お前らも感じるだろ、この胸くそ悪くなるほどの気配を」

3

鋭い呼気を吐き出すや、三人のモンク僧が疾風の速さで動いた。
常人ならばかわすことなどできようはずもないその攻撃を、ヤンは冷静にさばく。彼には三つの闘気の流れが見えていたのだ。一拍にも満たない未来であるが、闘いにおいては十分すぎる。気が乱れるであろう場に身を置いて迎え撃つ――ただ、それだけだった。
頭頂部の髪を編んで残し、他をきれいに剃り上げるのは、このファブールにのみ伝わる風習

である。その弁髪を戴いた屈強な男たちは、ヤンのくり出した拳をみぞおちに受け、苦悶の表情を浮かべて体を折った。が、元より全力をこめた一撃ではない。すぐに三人のモンク僧たちは立ち上がると、胸の前で手を合わせてうやうやしく頭を垂れた。

「さすがはヤン様にございます」左手のモンク僧が言った。

つづいて右手の弁髪が、「我らは三人がかりだというのに」

「お前たちは、なぜ敗北したのか、その理由がわかっているのか」ヤンは問うた。

「それはヤン様がお強いからでは」と中央の僧兵。

ファブールの王は小さく首を振った。「それはちがうぞ。思いをひとつにせねば、力が分散されて逆に弱まってしまうことがある。今のお前たちは、その状態にあった」

三人は、その意味を理解しかねている様子だった。

ヤンは頷き、言葉を継いだ。「どうして他人が存在するのかといえば、自分にできない何かを成すためなのだ。そう考えられるようになれば、相手が敵であれ味方であれ軽んじることはなくなる。いかなるときでも敵を見くびることなかれ。また仲間がいるならば己を信ずるよりも先に同志を信じよ。さすれば己が成すべきことは自然と見えてくる」

モンク僧たちは、王の助言に聞き入っている。

ヤンは微笑んだ。「闘いに極意があるとすれば、まさにこれだ。絆を深めてゆけば、お前たちもさらに強くなれるだろう。忘れてはならんぞ」

三人が稽古を終え、下がろうとしたときだった。

「――父上」凛とした声が、ファブール城の広場に響き渡った。
一人娘の走ってくる姿が目に入った。「アーシュラか」
王の前までやって来た少女は、息を弾ませながら父の顔を見つめた。「お願いです。私にも稽古をつけていただけないでしょうか」
「ならぬと言ったはずだ」ヤンが答えた。
「なぜです。王女である前に、私も誇り高きファブールの民。身も心も強くありたいと願うのは、むしろ当然のこと」
食い下がる娘にヤンは背を向けた。「その必要はない、お前にはな」
「父上、どうかこちらをご覧ください。私は――」
「ヤン様、一大事にございます」アーシュラの言葉を遮る声があった。
城から飛び出してきたのは、必死の形相の大臣だった。
「どうした」相手の顔色に気づき、ヤンは眉をひそめた。
大臣は三人のモンク僧を、つぎにアーシュラを見やり、最後にヤンに向き直った。「大至急、玉座までおいでください」他の者には聞かれたくない内容のようだった。
王は頷くと、アーシュラに視線を転じた。「お前は、ファブールの王女。いかなるときも、それを忘れてはならん。軽率な行動は慎むのだぞ」
そう言い残して、ヤンは大臣とともに玉座の間へと急いだ。
そこには王妃シーラとひとりの老人、さらに三名の衛兵の姿があった。

「またアーシュラかい」ヤンの渋面に気づき、シーラが訊いた。
「ああ。誰に似たのか、頑固な娘だ」ヤンは玉座に腰を下ろすと大きく息を吐いた。
「そりゃあ間違いなくあんただね。あたしは、あんたほど石頭じゃないよ」
「何度言えばわかる。あんたと呼ぶのはよさんか」
「あの……ヤン様」恐るおそる大臣が口を開いた。
「おお、済まぬな。で、どうしたというのだ」
「誠に申し上げにくいのですが、バロンに不穏な動きがあるとの報告が入りました」
ヤンは笑った。「何かの間違いであろう。セシル殿が治めておるのだぞ」
大臣は固い表情を崩さなかった。「すでに、いくつかのクリスタルがバロンの手に渡ったとの情報もございます」
「そんなはずはない」
「国王よ……」玉座の左手に立つ老人が、そこで口を開いた。
ヤンは立ち上がり、背すじを伸ばす。「ヤンで構いませぬ、先王様」
老人は、ヤンに玉座に座るように促したあとで言った。「確かにセシル殿は、そなたらとともにこの母なる大地を救った英雄である。しかし、忘れてはならぬぞ。バロンの先王も騎士として名を馳せたが、あの大戦で邪悪なる魔物にとって代わられた」
ヤンが再び玉座から立ち上がった。「ですが、セシル殿に限って、そのようなことは」
「セシル殿だからこそ、あり得る話だと思うのだがな」

ヤンは眉根を寄せた。「どういうことでしょう」

「何者にも平等で、懐疑の念を抱くことのないセシル殿だからこそ、魔物の姦計にはまるとは考えられまいか。その可能性は十分にあると思うがな」

そのときだった。息を切らせ、ひとりの兵士が玉座の間に駆けこんで来た。

「ヤン様、姫様が我らの制止を振り切り、城の外へ」

「——またか」ヤンは深いため息とともに、首を小さく振った。「ホブスの山だね」

王妃のシーラが何かをおもしろがるように言った。

「私が行く」と玉座の間をあとにしようとしたヤンの背に、

「しかしバロンの件は——」と大臣が声をかけた。

「私はセシル殿を信じておる」自分に言い聞かせるような口調でヤンは言った。

4

小細工などするつもりはなかった。次第に強く、確かなものとなってゆくその気配を足早に迫っていたエッジは、空色の髪をした少女の姿を認めるや、雷のごとき疾さで迫った。心のどこかで、あのころと同じだと思いながら。

短い渡り廊下を越えた先。扉に手をかけていた少女の動きが止まった。「どこからか鼠が迷いこんだとは思っていたが——」エッジらを振り返る。

「訊かせてもらおうか。何が目的で、この塔を動かしてやがる」
「劣等種が、それを問いてどうする」
「──劣等種だと?」少女の挑発にエッジは笑みで返した。「ああ、そうかもな」
「ほう、自覚があるか」
「だがよ、人間てのは成長するもんなんだぜ」
少女の目が細くなった。目の前の男を値踏みするときの視線だった。「なるほど。ならば、その芽は早めに摘み取っておくべきだな」言って右手を頭上へ掲げる。同時に大気が熱を帯びた。汗ばむほどといった生ぬるいものではない、肌を焦がすほどの熱気だ。大きく息を吸いこめば、肺が焼かれてしまうのではないかと思えてくる。
エッジらの前に現出したのは、幻獣イフリートだった。火を司る獣が、喉を垂直に立てて吠える。逆巻く突風が熱を孕み、発火した。呼び出された炎は、いつしか真紅の鱗をまとった竜と化し、五人の忍を蹂躙する。現れたときと同様、唐突に燃え盛る風が消えた。地獄もかくやというその惨劇は、わずかにふた呼吸ほどの出来事。しかし恐れを知らぬ人間に絶望を味わわせるには十分過ぎる時間だった。
イフリートが喉を鳴らす。喜悦の笑みなのだろうか。
旗色が悪い。苦悶する仲間を見やり、エッジは決めた。「この場は引くぞ」
王の命に四人衆が立ち上がった。少女とイフリートに背を向け、渡り廊下へ走る。その足が止まった。いかなる術を用いて転移したのか、そこに空色の髪の少女が立ちはだかっていた。

肩越しに振り返ると、イフリートの姿が目に入った。状況はさらに悪化したようだった。
「灰となるか、血を流し絶命するか。ふたつにひとつ」
「果たしてそうかな」エッジは、わずかな可能性にすべてを賭けた。懐から取り出した握り拳大の玉を、自分の足元の床へ投げつける。砕け散った玉から、白い霧のような気体が勢いよく噴出する。代々エブラーナに伝わる煙玉だった。
　エッジは四人を従え、疾風のごとき速さでイフリートの横をすり抜けた。先刻、少女が開けようとしていた扉を蹴破ると、小部屋の中へと雪崩れこむ。
　そこはエッジの記憶と寸分も違うことのない——床と壁、天井までが水晶で作られた部屋だった。豪奢な台座が八つ。そのいずれにもクリスタルは安置されていない。
　五人は、部屋の中央で足を止めた。
　すぐに少女が追いつく。「逃げ場はない」
「さあて、そいつはどうかな」言ってエッジは一歩、後退った。いかなる術を使ったのか、つぎの瞬間、その体が消失した。「——来い」という言葉を残して。
　見れば、エッジの立っていた場所の床が消えていた。エブラーナ四人衆は、王の言葉を信じて、つぎつぎと穴へ飛びこんでゆく。降り立ったのは、塔のひとつ下の階層だった。
「お館様、あの穴はいったい——」とツキノワ。
「昔と何も変わらねえってことさ」エッジは肩越しに背後を振り返る。その視線の先には、炎の幻獣イフリートを従えた少女の姿があった。「手を出すな。逃げるぜ」

エッジを先頭にして忍たちは走りはじめた。背後から凄まじい熱気が迫ってくるのが感じられた。少しでも速度を落とせば、地獄の業火に呑みこまれて魂まで焼き尽くされることになるだろう。追っ手を振り切ろうと、五人はひたすた無機質な床を蹴りつづけた。じきに息が上がった。背後を見やる余裕はなかったが、イフリートとの距離は変わっていないようだった。このままでは、遠くない未来に追いつかれるのは間違いない。仲間たちのそんな不安を察知したのか、エッジは荒い息遣いの中、「もうじきだ」と言った。

五人の前に扉が立ちはだかった。エッジは躊躇することなく、そこに肩口からぶつかる。勢いで扉が開いた。部屋の中へ雪崩れこんだ忍たちは、息を呑む。そこは暗闇に突き出した桟橋の上だった。足元を覗きこめば、果てのない奈落が目に飛びこんで来る。落ちれば、万にひとつも助かる見こみはないであろう。背後で扉の閉まる音がした。少女がそこに立っていた。彼女のうしろにイフリートが控えている。もう逃げる手立てはなかった。

「これで終わりか」少女が、ゆっくりと足を踏み出した。

桟橋の先端まで後退したエッジは、「さすがにね」と両手を広げる。そのあとで「なあ、冥土の土産にひとつだけ訊かせてもらえねえか」と切り出した。

「――何だ」

「なぜ、クリスタルを集める」

少女の足が止まった。目がすっと細くなる。

エッジのくちびるの端がわずかに吊り上った。「答えたくねえか。だが、これで確信が持て

たぜ。やはり歴史はくり返されているんだな」言ってからエッジは、少女に背を向ける。四人の仲間に小声で囁いた。俺について来な、と。彼らが頷く前に、エブラーナの王の体が暗闇に舞った。一瞬ののちに、忍たちもそれにつづく。

桟橋に残された少女は、眉根を寄せた。「理解不能だ、自ら死を選ぶとは」

しかし――エッジには死ぬつもりなどなかった。わずかな可能性を信じて、束の間、闇に身を躍らせたに過ぎない。すべては生きるためだった。

背に強い衝撃を感じ、落下が止まった。

「――エッジ！」女の声がした。

エブラーナの王は周囲を見まわし、四人の忍の無事を確認してから立ち上がった。「よう、リディア。天国じゃねえよな、ここは」ファルコンの甲板の上だった。

「どうして空から――」

「お前を驚かせるためだ」にやりと笑った。

「このためだったのね、あたしたちをここに向かわせたのは……」ルカが言った。

エッジは舵輪を握るドワーフの少女を見やるが、彼女はあらぬほうを向いていた。その視線を追い、思わず息を呑んだ。そこには黒衣に身を包んだ男が立っていた。

「てめえは、まさか――」

その視線に気づいたのか、男は無言のままエッジに背を向けた。

5

三名のモンク僧を率いて、ヤンはファブール城をあとにした。目指すは西にそびえるホブス山である。アーシュラが向かったのは、かの地をおいて他にはない——というのが娘の性格を知り尽くしたヤンとシーラの共通した見解だった。

ホブス山は、西のダムシアンと東のファブールとのちょうど国境にあたり、旅人の往来も決して少なくはない。そこに目をつけたのか、人肉を食らう魔物たちが生息するようになった。モンク僧にとって、魔物は自己鍛錬の格好の相手。しかも旅人の安全に寄与できるとなれば、ここを修練の場に選ばないほうがおかしい。以来、揺るぎない精神と鍛え上げられた肉体を欲する者たちが、こぞってここへ足を運ぶようになったのだった。

案の定、山頂付近でアーシュラの姿を発見する。それでもヤンは、すぐに彼女に声をかけようとはしなかった。どことなく様子がおかしいと感じたからである。型の練習をくり返すわけでもなく、また魔物を探す素振りも見せない。迷いのない足取りで、草木一本生えない岩だらけの山道を進んでゆくのみだった。いったい、どこへ向かっているというのか。

背中に注がれる父親の視線に気づいたふうもなく、アーシュラはさらに歩を進める。山頂を過ぎ、道が下り坂になった。国境を越え、隣国ダムシアンの領土に入ったことを意味している。

そこでようやくヤンは娘の名前を呼んだ。

弾かれたように振り返ったアーシュラは、父と三人のモンク僧の姿を認めるや、顔を伏せて

その場に立ち尽くした。ヤンたちが目の前にやってきても動かなかった。
「修練のためにここへ足を運んだわけではなさそうだな」
アーシュラは、何も答えようとしなかった。
ヤンはため息をつく。「いったい、どこへ行こうというのだ」
「二日前に、ホブス山の西に流れ星が落ちました」アーシュラは観念したように、のろのろと言葉を紡いだ。「そこで何があったのか……調べるつもりでした」
「調査隊ならば、すでに送ってある。アーシュラ、お前もそれは──」
「戻ってこないではありませんか」ファブールの王女が、顔を上げた。「おかしいと思いませんか。きっと……何かあったのです。よくない何かが」
「わかった。だがな、アーシュラ。それはお前が成すべきことではない。ちょうどいい機会だ、私が調べてこよう。お前は、ファブールへ戻るのだ」
「子を想う父の言葉ですか、それとも王としてのご命令でしょうか」
「どう受け取られても構わぬ。さあ、城へ帰るのだ」
しばらく何事かを考えていたアーシュラだが、やがてヤンに背を向けた。「父上、私が無事に城へ戻れるよう、どうか祈っていてください。道中、魔物が多数生息しておりますゆえ」
「父を脅すか」
「どう受け取られても構いません」
同じ言葉でやりこめられ、ヤンは小さく首を振った。「まったく、誰に似たのか達者な口だ。

よかろう、ともに来るがよい。ただし、心するのだぞ」

アーシュラは父に向き直ると、してやったりと笑みを浮かべた。

こうしてヤンとアーシュラ、そして三名のモンク僧たちは、ダムシアン領へ入り、流れ星の落下跡を目指すことになったのだった。

ホブス山の麓から大地に穿たれたその大穴までは、目と鼻の先だった。

しばらく言葉を失っていたヤンが、ようやく声を絞り出した。「これは、いったい何という光景だ。まるで大地が腐ってしまったようではないか。しかも、それだけではない」

隣に立つアーシュラが頷いた。「圧倒的な威圧感に満ちています」

大穴の底を目指し、ヤンたちは慎重に歩を進めた。立ち昇る瘴気が視界を曇らせ、遠くまで見通すことができない。五人は互いを見失わないようにと、固まって移動した。

時折、魔物の咆哮と思しき声を耳にした以外は、異変に遭遇することはなかった。

やがて大地の傾斜がなくなった。どうやら穴の底へたどり着いたようだった。

ヤンの目を引いたのは、そこに建てられた粗末な墓標だった。盛り上がった土の上に死者を悼む形で石が積み上げられている。その傍らには、金属製の爪が置かれていた。見紛うことなどあるはずもない、ファブールのモンク僧が好んで使用する武具である。考えるまでもなかった、調査隊の末路がこれなのだ。一行は膝を折り、彼らの無念を胸に刻み、その魂が天に召されることを心より祈った。誰もが頬を涙に濡らしていた。

解せないのは、誰が仲間たちの最期を看取り、弔ってくれたのかである。立ち上がり、周囲

を見まわしたが、動く者の影はどこにもなかった。
と――そのときだった。ヤンの周囲に三つの光が生じた。掌ほどの大きさのその光は、不規則に大気中を舞いながら、次第に本来の姿を取り戻してゆく。
「――シルフか」ヤンは立ち上がって叫んだ。シルフ――風を司る幻獣である。
『ヤン、気をつけて』
『私たちのつぎには』
『クリスタルを――』
言葉の断片だけを残し、光が霧散した。シルフの気配は一瞬にして消え失せていた。
呆然とするヤンの横で、アーシュラがゆっくりと空を見上げる。そこには、ふたつの月が浮かんでいた。「やはり、あの月は異変の予兆なのでしょうか」
しばしの沈黙のあとで、ヤンは東を見やる。「ファブールへ戻ろう。嫌な予感がする」

6

猛烈な眩暈に視界が歪んだ。重力が消失したかのような感覚に陥り、平衡感覚がなくなる。体の芯が傾いでゆくのがわかったが、それに抗う気力はすでに残されていなかった。
崩れ落ちそうになるハルを支えたのは、ギルバートだった。
場所はダムシアン城の遥か南。オアシスの村カイポへ抜ける唯一の陸路である洞窟の内部

だった。ギルバートが三名の兵士を従え、セシルの真意を確かめるために居城を出立したのは、昨日のことである。難色を示す王を何とか説き伏せ、ハルも一行に加わったが、予想を上まわる過酷な旅に、ついに体が悲鳴を上げ、倒れてしまったのだった。

「ハル殿のことは、どうかお任せください」兵士のひとりが言った。すぐ近くにいるはずなのに、なぜかその言葉が遠くから聞こえてきたようにハルには思えた。

「いや、これは私の役目だ」今度はギルバートが言った。こちらは不思議と耳元で囁かれているような感じがする。「ハルの同行を許可したのは私だ。その責任は取る」

「しかし陛下は――」

「身分など関係ない」言い張るギルバートに、兵士が折れた。

王の背中は広く、そして暖かかった。彼が歩を進めるたびに、心地よい震動が伝わってくる。睡魔に誘われるかのように、ハルはゆっくりと意識を失っていった。

気づいたときには、見知らぬ民家の寝台で横になっていた。目の前に、心配そうな表情を浮かべた老夫婦の顔があった。「大丈夫かい」と老婆のほうが言った。

ハルは何かを言い返そうと口を開いたが、声がかすれて言葉にならない。そこで気づいた。全身がまるで炎天下にさらされているかのように熱かった。どうして、と思うが、思考は空転をくり返すばかり。記憶の糸を手繰ってみても、混濁するばかりの意識からは何も引き上げることはできない。今はとにかくギルバートの顔が見たかった。

「あんたは高熱病にかかっちまったんだよ」老人が言った。「体が疲れとるときにな、このカ

イポの砂漠に入ると、乾いた風にやられちまうのさ」
「でも、安心おし」老婆があとを引き継ぐ。「ギルバート様が、じきに〝砂漠の光〟を持ってお帰りになるはずだからね」
老人が小さく何度も頷いた。「ギルバート様の何と勇敢なことか。供のひとりも連れずに、たったひとりで地下水脈に引き返し、アントリオンの洞窟へ向かわれたのだよ」
どうして、そんな無謀なことを──ハルは切れそうになる意識を必死でつなぎ止め、王の安否を気遣った。私なんかのために、なぜそこまで。
「思い出すわね。もう十年以上も前になるかしら」老婆は夢見るような表情となった。
老人の顔にも笑みが宿る。「そうそう、今回と同じようなことがあったな。砂漠に行き倒れになった恋人を救うために、若者が命を懸けて〝砂漠の光〟を求めて旅立った」
ハルは知らぬうちに涙を流していた。
老婆は、そんな彼女の髪を孫をあやすようにやさしく撫でた。
「あんたは、きっと幸せになれるよ」

7

ヤンが玉座の間へ戻るや、大臣が青ざめた顔で駆け寄ってきた。
「一大事にございます。バロンの《赤き翼》がファブールへ向かっているとのことです」

ヤンは玉座に腰を下ろすと、頷いた。
「……先刻、ホブス山の山頂で、南の空にそれらしき船影を見た」
「となれば、狙いはクリスタル。どうする、ヤン」玉座の左手に立つ先王が口を開く。
答えぬ王に代わり、アーシュラが言った。「風のクリスタルは我らファブールの象徴。それをみすみす差し出すなど、ファブールの誇りを捨てるも同じです」
先王は小さく首を振った。「だが、みだりに闘えば多くの命が失われる」
「ですが――」
「やはり、セシル殿の身に何かあったのだろう」ヤンは立ちあがった。「それを確かめることができぬ今、クリスタルを差し出すわけにはゆかぬ」
「ほう。では迎え撃つつもりか」と先王。
「まずは私が城門まで出向き、様子を見ようと思います」
「私も行きます」アーシュラが名乗りを上げた。
「ならぬ。万が一のときは、お前が守るのだ。母上や民たちをな」
うつむく娘に背を向け、ヤンが声を張り上げた。「僧兵を集めよ。守りを固めるのだ」

*

「間もなく到着いたします」

その声にカインは顔を上げ、《赤き翼》の船首へと歩を進める。ファブール城の威容が、間近に迫っていた。ふいに、くちびるにあるかなしかの笑みが浮かぶ。鍛え上げられた、屈強なるモンク僧たちは、やっかいな存在であることに間違いはない。それでもカインには不安などなかった。歩兵部隊が、甲板上に整列する。着陸後に全軍でファブール城へ攻め入り、再び離陸した《赤き翼》が上空からの砲撃で援護する手筈になっていた。

すでに運命は定められているのだ。そう、あのときと同じように。

殺戮の火蓋は、切って落とされた。

＊

――これでは、まるであのときの再現ではないか。

魔物へと姿を変え、つぎつぎと襲いかかってくるバロン兵。《赤き翼》による爆撃に城が揺れる。仲間と信じていた者の中にさえ、魔物が混じっていた。そして――。

何もかもが、あのときと変わらない。

ヤンは、かつてファブール城が落とされたときと同じように、クリスタルの安置されている〝水晶の間（クリスタルルーム）〟まで撤退を余儀なくされていた。ヤンの命に背いて避難せず、玉座の間に残っていたシーラとアーシュラも今は一緒である。この命に代えても、ふたりには指一本触れさせるわけにはいかない、ヤンは拳を固めると、魔物が現れるのを息を殺して待った。来るなら、来

い。ファブールの誇りを、とくと思い知らせてやるつもりだった。
だが、いくら待てども闇の者からの襲撃はなかった。背後に控えるシーラやアーシュラも、当惑しているようである。圧倒的な戦力でファブールを壊滅状態に追いこみながら、目的を果たさず帰還する理由などあるとは思えない。ならば、どうして――。
急いてはならぬぞ、とヤンは自分に言い聞かせた。この場合、結論を急いだところで何にもならないのだから。ファブールの王は、雑念を振り払い、集中するために目を閉じた。扉の向こう――玉座の間の気配を探る。動く者はいないように思われた。とすると、やはり何らかの不測の事態が発生し、《赤き翼》は撤退するしかなかったのかもしれない。
――そのときだった。玉座の間に何者かが現れた。闇が凝り固まったかのような気配がひとつ、こちらを目指しゆっくりと移動してくる。ヤンは目を開いた。――来る。
扉が開いた。入ってきた男を見て、ヤンは思わず拳を開いていた。「カイン殿！」
「あのバロンの竜騎士の……」アーシュラがヤンとの隣に立ち、頭を下げた。「はじめてお目にかかります。ファブールの王女アーシュラと申します」
「カイン殿――どうして、そなたがファブールに」
「俺の力が必要だと聞いたのでな」槍を手にした男が微笑む。
「かたじけない」とヤンは胸の前で両の掌を合わせた。「そなたに力添えいただけるなら、これほど心強いことはない」



「勘違いするな」
「──え？」ヤンの表情が凍りついた。
「父上」アーシュラが叫んだが、間に合わなかった。
カインの槍による一撃を側頭部に受け、ヤンが昏倒する。
倒れた父親に駆け寄ると、娘は裏切った竜騎士を睨んだ。「──どうして」
「クリスタルをいただきに来た」
カインの答えを聞くや、アーシュラが動いた。怒りをこめた拳を放つ。しかしその渾身の一撃は、カインの右の掌の中に易々と収まってしまった。「さすがは血筋だな」言うと、カインが右の膝を娘の腹部に突き刺した。アーシュラは体をくの字に折り曲げ、崩れ落ちた。
「カインさん、あんた正気なのかい」シーラが訊いた。
「歴史はくり返す。だが、すべてがそのままというわけではない」カインは部屋の中央にある台座に向かい、安置されている風のクリスタルを手にした。「俺はあのときとはちがう。これは己の意思でやっていること。そう、俺の心は解き放たれたのだ」

8

混沌とした意識の渦に、秩序が戻ってきた。火照った体が、ゆっくりと冷めてゆくのがわかる。ハルが目を開くと、そこに疲れ果てた表情のギルバートがいた。彼はハルが目覚めたのを

知るや、満面の笑みを浮かべる。「よかった、間に合ってくれて」
「ギルバート様、申し訳ありませんでした。私の身勝手な行動で——」
「気にすることはない」そこでダムシアンの王は真顔に戻る「それよりも……立てるか？」
「え——」
「立てなければ、君をここに置いてゆく」
「立てます。ご心配には及びません」ハルは急いで寝台から降りた。
「無茶でございます」看病をしていた老婆が言った。「少なくとも、あと一日は安静にしていないと、また倒れることになってしまいます」
「ギルバート様も、どうぞお休みください」今度は老人が口を開く。「アントリオンの洞窟へ行った足で、そのまま旅をつづけるなど、正気の沙汰ではありませぬぞ」
そんなふたりに王は微笑んだ。「ありがとう。しかし私たちには、もう時間がありません。一刻も早くバロンへ行かなくてはならないのです」
ギルバートたちは、老夫婦に別れを告げると、オアシスの村カイポをあとにする。砂漠を東へ渡ると、すぐに港が見えてきた。ここからは海路でバロンを目指すことになる。
一行が乗りこむと、間もなく船が出航した。風向きがよければ、半日で到着するだろうと船長は言っていた。ギルバートは、左舷の手すりに体を預けて空を見上げていた。
そこには、ふたつの月が浮かんでいる。
「あの月は、本当に帰ってきたのでしょうか」王の横に立つハルが呟くように言った。

「――どういうことだい？」ギルバートは頭上を仰いだまま訊いた。
「当時の私は、まだ年端もゆかぬ少女でした。ですが、そのときの記憶を今でも鮮明に思い出せます。あの月は、以前の月とはどこかちがうような……そんな感じがするのです」
「じつはね、私もそう感じていたんだ」
「――え」
「気づかないか。あの月は現れたときよりも、心なしか大きく見える。まるで――」
ギルバートは、そのつづきを決して口にしようとはしなかった。

9

「セシル様は、私たちにお会いになってくださるでしょうか」アーシュラが訊いた。
前方の水平線を見つめながら、ヤンは答える。「わからん。だが、門前払いされるようなことがあれば――」
それは、バロン王の身に何かが起こった、ということである。セシルが乱心したのか、あるいは心に闇を抱く者によって亡き者にされたのか。いずれであっても、状況としては最悪だった。バロン領に足を踏み入れたが最後、生きて戻れる保証はないのだ。
ファブール港より出航した船は、一路、バロンを目指していた。空は晴れ渡り、雲ひとつない。甲板を通して足裏に伝わってくる規則正しい震動が、航海の順調を物語っていた。

　しかしヤンは、この快適な船の旅を恨めしく思っていた。やはり、アーシュラを連れてくるべきではなかったのだ。なぜ、自分は娘の同行を許してしまったのか。考えずとも、ヤンにはわかっていた。アーシュラに、かつての仲間の姿を重ね合わせてしまったのだ。

《赤き翼》が立ち去ったあと、避難していた者たちが城へ戻ってきた。先の大戦からようやく復興を遂げたというのに、これまでの苦労はいったい何だったのか……。もはや怒りなどなく、拳を握りしめる気力さえも失せていた。そんなときにアーシュラが言ったのである。

「まだ、すべてが終わったわけじゃない。クリスタルだって取り戻せるはずです」

　かつて同じようにクリスタルを奪われたときに、似たような言葉を口にして、みなを勇気づけてくれた仲間がいた。ヤンは、あのときのことをよく覚えている。リディアだ。彼女は、打ちひしがれる仲間を鼓舞するために、そう言ったのだった。

　王女の言葉を聞いたことで、みなの目に光が戻った。高まる士気に背中を押される形で、ヤンはバロンを訪れる決心を固めた。アーシュラからの同行の申し出を断ることができなかった。娘の姿がやけに大きく、そして力強く見えたのだ、そのときは。

　背後を振り返ると、すでに故郷のファブールは水平線に呑まれ、見えなくなっていた。もはや後戻りはできなかった。ヤンは再び船首の先へと視線を移すと、大きく息を吐いた。後方で悲鳴が上がったのは、ちょうどそのときだった。再び背後を見やったヤンは、つぎの瞬間には動いていた。甲板に魔物の姿があった。その数、五匹。魚と人間とを掛け合わせたような、悪

夢じみた姿をしていた。逃げ惑う船員たちの間を巧みにすり抜け、飛ぶように走る。アーシュラも、そんなヤンに併走する形で魔物に迫っていた。

ヤンはさらに加速し、その勢いをすべて右の拳に乗せた。魔物はその一撃から身を守ろうと鱗に覆われた両腕を前方で交差させる。拳は、それを容易く打ち抜き、半人半魚の頭部を粉砕した。生臭い体液が四散する。ヤンは振り抜いた拳を引き戻そうとはせずに、そのまま甲板を蹴って宙を舞う。前転する形で振り下ろした左の踵を、つぎに控える魔物の顔面に叩きこんだ。これで二匹、仕留めた。右手に視線を転じる。アーシュラがちょうど一匹を始末し、つぎなる魔物に向かおうとしているところだった。ヤンも援護のために走る。ふたりに挟まれる格好となった闇の者は、さしたる抵抗もできぬまま、ふたつの拳を受けて絶命した。

「強くなったな」ヤンは拳を下ろした。

「いえ、まだまだです」そう言いながらも、アーシュラは微笑んだ。

と——再び、どこからか悲鳴。ふたりは顔を見合わせたあとで、慌てて周囲に視線を走らせる。もう、どこにも魔物の影はなかった。だがヤンは思い当たる、先刻、自分が目にした魔物の数は五匹だった。では、残る一匹は、いったいどこに？

「——父上」アーシュラが、開け放たれたままの扉を指差した。

そこは、確か機関室へと通じているはずだった。

ヤンは弾かれたように突進した。扉をくぐり、下り階段を一気に飛び降りる。眩いばかりの空の下から、いきなり光源の乏しい場所へ足を踏み入れたため、視界が一気に闇に閉ざされた。

まるで洞窟の中に迷いこんだかのようだ。視覚に頼るのをあきらめ、目を閉じた。
すぐに動く者の気配を察知。ヤンの姿を認めたのか、助けを求める声が上がった。襲う者と襲われる者——どちらが倒すべき存在なのか、考えずともわかった。ヤンは雷光の疾さで動き、邪悪な気配をまき散らす者へ拳を見舞う。確かな手応えがあった。
呼吸を整えてから、目を開く。後方へと吹っ飛んだ魔物が、壁際で絶命していた。機関長と思しき男が、床に座りこんで、王の勇姿をただ見上げていた。ヤンが微笑むと、ようやく男の顔にも笑みが浮かんだ。
ヤンは階段を上がり、アーシュラの待つ甲板へと戻った。
魔物の遺体は海にでも投げこんだのだろう、すでに見当たらなかった。数名の船員たちが、飛び散った魔物の体液を、海水で洗い流している。
「——父上、船です」
娘の声で、ヤンは右舷を見やった。その言葉通りに、併走する船があった。
「ダムシアンからの船でさあ」と船長がヤンを振り返る。
やや前方を走る船に、ヤンはかつての仲間の顔を見つけ、思わず右舷の手すりへ駆け寄った。間違いない、ダムシアンの王ギルバートだった。
「ギルバート殿、そなたもバロンへ向かわれるのですか」声の限りに叫んだ。
それは風にかき消されずに彼の耳に届いたのだろう。ギルバートが手を振った。
ヤンは眉根を寄せた。隣に立つアーシュラも、気づいたようだった。

「船の速度が……落ちてる」

王女の言葉を裏づけるように、ギルバートたちの乗る船が次第に小さくなっていった。

10

ヤンの安否が気がかりだった。船の速度が急激に落ちたことから、動力部に何らかの異常が生じたと見るべきだろう。修理が可能ならばいいのだが、それができないとなると大きな問題となる。ギルバートは、船乗りのひとりに、それとなく訊いてみた。彼らがあのまま大海原を漂流することになりはしないか、と。

船乗りは笑った。「ギルバート様、北の海で揉まれた男たちを甘く見たらいけませんぜ。俺たちゃ、南の連中とはちがうんです。奴らは星の動きどころか、海図さえもまともに読めねえし、おまけに安物の燃料油を使ってやがる始末。ですがね、俺たちゃ北の船乗りは、客の安全と航海期日を守ることを誇りとしてるんでさ。自慢じゃあないですが、これまでに一度たりとも事故を起こしてませんからね。なあに、心配いりませんて。じきに、何事もなかったかのようにバロンに到着するでしょうよ」

それを聞いてギルバートは納得はした。すべてに対して安心したわけではなかったのだが。ヤンもバロンへ向かっていると言っていた。彼もまた王でありながらセシルの身を案じて城を飛び出したのであろう。いったいヤンは、何を根拠にバロンに不審の目を向けたのか——船上

で言葉を交わしたときに、ぜひとも訊いておくべきだったと後悔する。それがこの先のセシルとの会談で、とても重要な意味を持つように思えてならないのだ。

それゆえギルバートは、悩んだ。港にとどまり、ヤンの到着を待つか。それともこのまますぐにバロン城へ向かい、セシルとの会談に臨むのか。船を下り、港に立ち尽くして海を眺める。いくら目を凝らしても、水平線に船影を見つけることはできなかった。熟考の末に後者を選んだのは、やはりセシルを信じていたからだ。こうしてギルバートはハル、そして三名の兵士を率いてバロン城を訪れたのであった。

「久しいな、ギルバート」

ダムシアンの王が玉座の間に通されると、その姿を認めたセシルの顔に笑みが浮かんだ。

ギルバートは、兵士を城の外で待機させ、ハルとふたりでここまでやって来た。まずは、こちらに敵意がないことを見せなくてはならないからだ。片膝を床につき、深く頭を垂れたあとでギルバートは親愛を意味する笑みで応えた。「久方ぶりでございます」

「どうか楽にしてくれ。私とそなたの仲ではないか」

「恐縮です」ギルバートは、もう一度頭を下げてから立ち上がった。それから、ゆっくりと周囲を見まわす。玉座の間には、自分とセシル、そしてハルの三人しかいない。大臣や近衛兵を置かないのはセシルらしいとも解釈できたが、王妃であるローザや王子のセオドアの姿さえないのが引っかかった。だが、この話題を切り出すのは少し早いような気がした。

黙したままのダムシアン王にじれたのか、セシルが口を開いた。「突然の訪問に少々驚いて

いる。どうしたのだ、ダムシアンの王たる者が直々に」
「私どもが送りました伝令のことです」
「そういえば――」セシルは少し考える素振りを見せてから、言葉を継いだ。「そのような者たちが遥々ダムシアンよりやって来たことは覚えている。確か……」
「ギルバート様」と背後でハルが囁いた。
それを片手で制したあと、ギルバートは微笑んだ。「ホブス山の西に流れ星が落ちたことをご報告させていただきました」
「あ……ああ、そうだったな。だが、伝令の者に申し渡したはずだ。その調査は、我がバロンに一任してほしいと。……もしや、それを不満に思ってやって来たわけか」
「いえ、そうではありません」ギルバートは笑みを絶やさずに言った。「ただ、そのあとセシル殿は、ダムシアンへ使者をお送りくださいましたね」
「あ、ああ――そうだったか」
「その理由をお教え願えないかと」
「――聞いて何とする」
セシルの表情にわずかな変化があったことをギルバートは見逃さなかった。「どうか、誤解なきよう。私が申し上げたいのは、使者より賜ったお言伝てが、セシル殿のお言葉とは真逆なのではと感じたからです」
「……ほう。使者は、そなたに何と伝えた」

「流れ星の調査は、ダムシアンに一任する、と」
セシルは無言だった。決して短くないときが流れた。
「それで、これはセシル殿の真意を確かめねばならないと考え、こうやってお伺いしたわけです。お聞かせください、我らはどうすればよろしいのでしょうか」
「……そうか。それは苦労をかけたな。使者が私の言葉を誤って解釈したのかもしれぬ」
「では、我々が流れ星の調査をする必要はないのですね」
「ああ、もちろんだ」
「承知いたしました。これで合点がいきました」
ギルバートが微笑むと、セシルも笑みを返してきた。
「それでは、これにて失礼させていただきます」
ギルバートが頭を垂れると、「もう帰ってしまうのか。急ぐ必要などなかろう」
「久方ぶりにお会いできて光栄でした」
玉座に背を向け、歩きはじめようとしたときだった。セシルが立ち上がった。「あれを持たせてやれ」するとひとりの兵士が現れ、持ってきた小箱をギルバートに差し出した。
「――これは？」
「遠路はるばる来てくれた友人への私からの気持ちだ」
ギルバートは、言われるままそれを受け取った。「そうだ、すっかりと忘れておりました。私からも手土産がございました」と懐から、黄色い花を取り出すと、それを玉座の横の花瓶に

活けた。「友情の証として」
「花か。そなたらしいな」セシルが鼻で笑った。
こうしてふたりはバロン城をあとにし、ダムシアンへ向かう船に乗りこんだのだった。
三人の兵士たちを船室でくつろぐように命じたあとで、ギルバートとハルは左舷の手すりに持たれかかりながら、水平線を見つめていた。出航までは、しばらく時間があるらしい。
「彼は――セシルではないかもしれない」ギルバートが小声で言った。
「とてもバロンの実権を掌握しているとは思えない言動でしたね」ハルがそれに頷き、同じように小声で返す。「別の者がバロン王に成り代わっているということでしょうか」
「いや、それはわからない。何らかの術によって心を支配され、操られているということも考えられるからね」
「それを探ろうとして、あの花を――?」
「ああ」ギルバートは、懐からもう一本の黄色い花を取り出した。
〝ひそひ草〟と呼ばれるその花は、遠く離れた場所の声や音を伝える性質を持っている。耳を済ませると、やがて何者かの声が聞こえてきた。
「あの男、なかなかに用心深い性格をしております。私の記憶の欠落を探り出そうとするかのような言動でした。何とか誤魔化すことはできたようですが」セシルの声だった。
「生命力の弱い種ほど警戒心が強いもの」今度は女性と思しき声。
「とはいえ、単なる猜疑心の強いだけの男に過ぎません。あと半日もすればダムシアンは火の

海に呑まれ、容易くクリスタルを手に入れることができましょう」
　女が嗤った。「これですべてのクリスタルの回収が完了か」
　ギルバートは、手にしていた花を海に投げ捨てた。
　ハルが驚き、声を上げる。「どうして――」
「これ以上は危険だ。奴らに感づかれる可能性がある」
「で、ですが……」それでもハルは納得できないようだった。
「それよりも、大変なことになったな」
「ええ」ハルの顔に暗い影が差す。「ダムシアンのクリスタルが最後だとすると、すでにファブールは陥ちたということになります」
「ヤンがバロンへ向かっていた理由は、それだったのか」
「どうしましょう。船を降り、ヤン様と合流すべきかと思いますが」
「ああ、そうだな」そう言って手すりから体を離そうとしたときだった。
「な、何だ、ありゃあ?」船乗りのひとりが声を上げた。
　その指差す方向を見て、ギルバートは全身を震わせる。
「ギルバート様、あれは――」
　遠く水平線の近くに、巨大な大渦が生じていた。そこから巨大な海竜がゆっくりと浮上する。
　十年以上前の恐怖が、まざまざと蘇った。
「――リヴァイアサン」

幻獣たちの長が、何のために姿を現したのか。
考えるまでもなかった。ヤンたちの船を呑みこまんとしているのだ。

11

動かぬはずの船が動いていた。先刻の魔物の襲撃で動力部が破損し、ヤンたちの乗る船は波間を漂うだけとなっていたはずなのだが……。それに最初に気づいたのは、ヤンである。船首へ駆け寄ると、前方の海面を見つめる。不規則な動きをくり返すはずの混沌の波に、秩序が生まれていた。周囲のすべてを吸い寄せようとするかのような巨大な渦がそこにあった。
「父上、あれは――」いつの間にかヤンの横に来ていたアーシュラが声を上げる。
「リヴァイアサン――大海原の主にして、幻獣たちの王」
「ご存じなのですか」
「ああ」そこでヤンはアーシュラの顔を見つめた。たっぷりとふた呼吸ほどの間である。娘をこの腕で抱きしめたい衝動に駆られたが、それを何とかこらえると言った。「船乗りたちを連れて、船尾から海へ飛びこめ」
「――父上？」
「いいな、東の方角へ脇目も振らずに泳ぐのだ。今ならまだ間に合う」
ヤンの目に宿るただならぬ光に気づいたのか、アーシュラは何も言わずに頷いた。それから

言いつけ通りに甲板の中央に走り、船乗りたちにこれから成すべきことを告げた。
ファブールの王は、前方へと向き直る。渦は、さらにその大きさを増していた。
「間違いない。あの忌まわしい過去が甦り、現在を侵食しているのだ」
あのときヤンは、幻獣王リヴァイアサンの作り出した渦に呑まれ、意識を失った。そしてゴルベーザによって心を支配されて、あろうことかセシルを亡き者にしようと襲いかかったのだった。あの屈辱が、再び自分に振りかかろうとしている。ヤンは拳を固め、挑むような目つきで渦の中心を睨みつけた。やがて、そこからリヴァイアサンが姿を現すはずである。
ヤンは、逃げるつもりなどなかった。自分と行動をともにすれば、アーシュラや他の船乗りたちも〝過去〟に引きずりこまれてしまうのではないか、と恐れたのである。そう、自分が、自分だけがここで犠牲になれば、彼らは助かる。あのときのリディアのような、あるいはギルバートのような目に遭わせずに済むはずだった。だから逃げない。
波が大きく、激しくなっていった。真っ直ぐ立っていることさえ難しい。そのとき、渦の中心から何かが浮上する。大洋の支配者は、あのときと寸分違わぬ姿をしていた。異変を告げるかのように、雲ひとつない晴れ渡った空を幾本もの雷が疾る。
船が、圧倒的な質量を持つ波と激突した。船体が傾いたかと思った瞬間、ヤンの背後で悲鳴が上がった。弾かれたように振り返ったその先にアーシュラがいた。立っていることができずに、甲板に両膝ついた態勢で父を見つめている。
「なぜ、戻ってきた」ヤンが震える声で問うた。

「私は――父上の娘です」
ヤンは、肩越しに後方のリヴァイアサンを見やる。だが、すぐにアーシュラに向き直った。もうこの渦から逃れることは不可能だと思えた。できることといえば、自分の覚悟を娘に伝えるぐらいだろう。「アーシュラ、来い」王女を傍らに呼び寄せた。
見上げんばかりの幻獣の王の前で、ヤンは娘の手を強く握った。
「父上？」
「私たちは、間もなくあの大渦に呑みこまれることになる。だが、決してあきらめるな。あきらめたが最後、死よりも過酷な運命が待ちうけていると思え。よいな？」
「はい」
身構える父娘に、巨大な水の壁が襲いかかった。船体が砕け散り、ふたりは宙を舞い、荒れ狂う海へと投げ出される。それでも互いの手を離しはしなかった。渦に抗い、懸命に泳ぐ。しかし逆巻く激流から逃れることはできない。腕が足が鉛のように重い。鼻に、耳に、口に海水が容赦なく入りこんでくる。呼吸することさえ困難だった。
握っていた手を強く引かれた。声を出す余裕などない。何かの合図かと思い、波をかき分けながらアーシュラを見やる。ヤンは奥歯を強く噛んだ。娘は目を閉じていた。恐らくは意識を失ってしまったのだろう。渦に逆らうだけでも難儀しているところへ、彼女の分まで泳がねばならないことになった。折れそうになる心を支えたのは、ファブールの港を出る際に、妻シーラが言ってよこした言葉だった。

「あんた……もしアーシュラの身に何かあったら、フライパンじゃ済まないからね」
ヤンの顔に笑みが浮く。少しだけ力が湧いてきたように思えた。必死の形相でアーシュラを引き寄せると、彼女を背負って再び激流に抗う。泳げども、前に進んでいるのか、それとも渦に引き寄せられているのかわからない状態がつづいた。
どれほどの時間が経っただろうか。あれほど強烈に感じられていた幻獣の気配が消失しているのに気づいた。アーシュラを背負っているため、背後を振り返ることができないのがもどかしい。気がつくといつしか渦は消え、海があの穏やかさを取り戻していた。
シーラよ、見たか。私はアーシュラを守ったのだぞ。
ヤンは勝ち誇ったかのような笑みを浮かべたが、そこまでが限界だった。腕と足から力が抜けていき、まぶたが閉じられた。ふたりはゆっくりと波間に没していった。
そのときアーシュラが覚醒した。気道に入りこんだ海水にむせるが、それも一瞬のこと。すぐに状況を把握し、沈みかけていたヤンを引き上げた。父が自分を助けてくれた、ここからは自分が父を助けなければならない。相手の胸を左手で抱いて後方を向かせると、太陽の高さから方角を割り出し、アーシュラは泳ぎはじめた。
ファブールの王女は当初、このままバロンへ向かうつもりだった。敵はリヴァイアサンを使役し、船を破壊してまで自分たちをバロンへ行かせないようにした。ファブールの父娘に来られては面倒なことになる、と踏んだのであろう。しかし、しばらく泳いだのちにアーシュラは疑問を抱いた。本当にそうなのだろうか、と。

気を失うまでの記憶を、もう一度ゆっくりとたどってみる。リヴァイアサンは確かに船を破壊し、私たちを渦の中へ引きずりこもうとした。だが、そこに殺意があったようには思えなかった。ふたりの命を奪おうと考えているのならば、あのような手のこんだことをする必要はないのだから。突然、アーシュラは思い当たった。そう、あれは警告だったのだ。バロンへ行けば待ち受けているのは悲劇――それを何とか回避させようとして、リヴァイアサンが現れた。突拍子もない考えだとは思ったが、アーシュラは自分の勘を信じることにした。

目指すは北西、オアシスの村カイポである。

泳ぐうちに四肢が重くなっていった。穏やかさを取り戻したとはいえ、海はやはり海だった。陸地は遠く、水平線しか見えない。このまま目を閉じ、すべてを波に委ねることができたら、どれほど楽なことか。永遠の眠りという甘い誘惑が、アーシュラの耳元で囁きをくり返す。運命に逆らっても、ろくなことはないよ、と。アーシュラの顔に笑みが浮いた。ここで死ぬのが定め？　冗談じゃない。それが運命だというのならば、力ずくで変えるまでだ。アーシュラは泳ぎつづける。そのひと掻きごとに、未来が変わってゆくのを実感しながら。

12

「本当に、この崖を登るのですね」セオドアは呟いた。男に訊いたのではなく、自分を納得させるための言葉だった。かつての戦乱の影響で、ミストの村の東にある山が崩落し、谷を塞い

だのだとセオドアは聞かされていた。以来、十数年というもの、ミストとカイポをつなぐ街道は閉ざされたままとなっている。ミストの復興と発展を考えるならば、早急に崩れ落ちた岩の除去作業を行なうべきなのだろう。事実、ミストとカイポを領土に収めるダムシアンの王は、その心づもりだった。ところがそれにミストの村の者たちは首を横に振った。幻獣と心を通わせることのできる唯一の人間たち――召喚士。その稀有な血を守るには、いかに不便を強いられようとも、閉鎖的であることのほうが好ましいというのである。

男に促され、セオドアは覚悟を固めた。崩れ落ちた無数の岩が作り上げた断崖に手をかけ、よじ登りはじめる。命綱などあろうはずもない、危険な登攀（とうはん）だった。手を、あるいは足を滑らせたら最後、地面に叩きつけられて命を落とすことになるだろう。

苦戦するセオドアを尻目に、男は慣れた身のこなしで崖を登ってゆく。後発であったはずなのに、半分もゆかぬうちにセオドアを追い越していた。セオドアは遅れまいとして、男の動きを注視した。どの岩をつかみ、どこに足をかけ、どうやって己の体を引き上げるのか。彼の動きをそのまま再現できれば、少なくともこれ以上、差を広げられることはないと思ったのだ。甘かった。セオドアは、自分の思慮の浅さに苦笑する。まず第一に、自分と男とでは体の大きさがちがいすぎた。彼が易々とつかむ岩が、セオドアにとって遥か遠くにあるように感じられた。そして体力。目的の岩をつかめたとしても、今度は体を引き上げることができない。結局、頼りになるのは自分だけなのだと痛感したセオドアは、先行する男のことは頭から振り払い、自分のペースを確立し、一歩ずつ確実に登っていくのを心がけた。

やがて崖の頂上に手が届いた。大きな岩の上に腰を下ろしている男が、肩で息をする少年を涼しげな表情で見つめている。セオドアは頭を下げた。「すみません、遅くなりました」と、男の目が細くなった。「血が出ている」セオドアの左の腕から決して少ないとはいえない出血があった。男は立ち上がると、少年の腕を取って傷口を確かめる。

「大丈夫です」とセオドアは慌てて腕を引っこめた。「大したことはありません」

「両親から受け継いだ血だ。もっと大切にしてもいいのではないか」

セオドアは、返す言葉を探し出せずに顔を伏せ、沈黙した。

しばらくしてから男が言った。「偉大な両親を持つがゆえの苦悩か」

「……はい」少年は顔を上げた。「誰ひとりとして、ぼくをセオドアとして見てくれません。誰もが〝セシルの息子〟という型にはめようとしてくるのです」

「それが重荷か」男は微笑んだ。「だが、お前にもきっと理解できるときが来るだろう。その血を誇りに思える日がな」

「もう半分はあきらめています」少年は昏い笑みを浮かべる。「出自や、これまで歩んできた過去は消せませんからね。自分の力で乗り越えてゆくしかないんです」

「その過去を消せるとしたら――」

「――え？」

セオドアに問い返されたが、男は答えなかった。代わりに

「下を見てみろ」と顎で相手の背後を示した。

セオドアは振り返り、恐るおそる足元を見下ろす。思わず息を呑んだ。目も眩むような高さだった。「ぼくは、こんなところまで登ってきたんですね……信じられません」
「ああ、自分の力でな」
セオドアは、男に向き直った。「いいえ、あなたのお陰です」
少年は微笑んだ。「いいえ、あなたのお陰です」
「私は機会を与えたに過ぎない。それを乗り越えたのは、お前自身の力だ」
少年は微笑んだ。「あなたのおっしゃりたいことが、その……少しだけ理解できたような気がします」はにかみとも、自嘲とも受け取れる曖昧な笑みだった。「過去を否定することは、じつは簡単なんですね。でも、そうしたら今この瞬間が、そして未来が消えてなくなってしまう。積み重ねてきた過去こそが、本当の自分の姿なのかもしれません」
そこでセオドアは気づく。男の視線が自分ではなく、背後に向けられていることに。何気なく振り返ったそのとき、男が叫んだ。「伏せろ！」
少年は、我が目を疑った。そこには一艇の飛空艇があった。凄まじい速度で、こちらへ向かってくる。父は、ここまでしてぼくを殺そうとしているのだろうか。そう考えると、四肢が麻痺したように動かなくなってしまった。
男に引きずり倒される。その頭上を轟音が通過していった。
「――《赤き翼》か、いったいどこへ」男が言った。
「あれは《赤き翼》じゃありません」セオドアは反論した。「《赤き翼》は　誇り高き飛空艇団。あんな心のない者たちが操る飛空艇は《赤き翼》のはずが……」

「ああ、そうだな」言って男は立ち上がった。すでに飛空艇は北の空へと遠ざかっていた。もう見つかる心配はなかった。「あの方角にはダムシアンがある」
「そんな……」
「急ぐぞ」という男の声で、ふたりは断崖を降りはじめた。

13

当初はダムシアン砂漠の中心に位置するオアシスの村カイポへ立ち寄るつもりだった。夜を徹してバロンから逃れてきた上に、休む間もなく断崖を登り、そして降りたのだ。セオドアの肉体はすでに限界を越えている。ともに旅をつづける男が休息を取るよう薦めたが、そうせずにダムシアン城を目指すことになったのは、セオドアがそれを強く望んだからだった。
砂漠の熱は、疲弊した体を芯まで焦がした。乾いた風が運んでくる高熱病に罹る可能性もある。だが、ふたりは言葉を交わすこともなく、ただ前方を真っ直ぐに見つめ、歩きつづけた。間もなく、バロンとダムシアンの戦がはじまるだろう。開戦を止める手立てはない。それをわかっていながら、歩く。足を止めれば、涙を流す人が、血を流す人がそれだけ増えてしまうのだから。一人でもいい、自分の力で誰かを救いたかった――それがセオドアの切なる願いである。いくら刺客を差し向けてこようとも、父は父に変わりはない。今、自分がやらなければならないのは、父セシルの犯す罪をひとつでもいいから軽くすることなのだ。



砂に覆われた大地を抜けた先に、洞窟が口を開けていた。ダムシアン領の広大な砂漠を東西に二分する山岳地帯を穿つこの横穴は、これまでの過酷な旅路が嘘と思えるほどの湿気に満ちている。大きく息を吸いこむたびに、乾き切った体に瑞々しさが戻ってくるような気がした。

だが、それも最初のうちだけで、すぐにこの息苦しいまでの湿度の高さに閉口するようになっていった。環境の急激な変化に打ちのめされながらも、ふたりは無言で歩を進める。洞窟を抜ければ、ダムシアン城が見えてくるはずだった。

——父さん、母さん。待っていてください。すぐに行きます。

14

カインは配下の兵士たちに「ここで待機しろ」と命じたあとで《赤き翼》を降り立ち、ひとりでダムシアン城の城門をくぐった。クリスタルの安置されているであろう〝水晶の間(クリスタルルーム)〟の位置は、先にこの城を訪れた使者から報告を受けている。迷いのない足取りで向かう。

城内に人影はなかった。どこかに隠れているのか、あるいは《赤き翼》の船影を目にして急いで避難したのか。クリスタルを持っていったとなれば少々面倒だが、城の者たちをまとめて逃がすのは容易いことではない。おのずと場所は限られてくるはずだ。見つけ次第、何人かを血祭りに上げれば、口を割る者も出てこよう。

城の最上階に玉座の間があった。その豪奢な椅子に腰かける男の姿を目にし、カインは足を

止めた。「――すでに人払いをしているようだが、貴様の浅知恵か」

「そろそろだと思ってね。だが、君が来るとは想定外だった」ギルバートが立ち上がる。

「セシルの玉座の横に花が活けてあった。貴様の贈り物だな」

ギルバートは答えず、ただ微笑んだだけだった。

「こちらの目的はわかっていよう」カインが言った。

「残念だが、火のクリスタルならば渡すことはできない」

「ならば、力ずくで奪うだけだ」カインは浅く腰を落とし、身構えた。

ギルバートは動じなかった。「あの女は何者だ。なぜクリスタルを狙う」

「俺の知るところではない。興味も湧かぬことだ」

ダムシアンの王が眉根を寄せた。「なぜ、あの女に従うのだ」

「俺は取り引きをしただけだ」カインは嗤（わら）った。「セシルに会うためのな」

「まさか、君は――」

「俺の目的は、セシルを亡き者にする、ただそれだけだ」

ギルバートは大きく息を吐き、首を小さく振った。それから眼前に立つカインの顔をじっと見つめる。「もう一度だけ訊こう。君は心を操られているわけではないんだな」

「くどい」カインが手にしていた槍を握りしめた。「俺は、あのときとはちがう。わかるか、俺はようやく自由を得たのだ」

「ならば、闘うしかないようだね」

「安心しろ、すぐ楽にさせてやる」

ギルバートが竪琴を手に身構えた。カインはじりじりと間合いを詰める。そこでふたりの動きが止まった。張り詰めた殺気を女性の声が切り裂いた。「――やめて」

カインが弾かれたように振り返った。そこにローザの姿があった。

女はふたりの間に割って入ると、カインの顔を見つめた。「あなたは、また――」

「これは俺自身の意思だ」

「どうして？　何のために、こんなことを」

「セシルを殺せば、ローザ、お前は俺のものになる」

「カイン……」女の目に涙が溢れた。

と――玉座の間に軍靴の音が響き渡る。ひとつやふたつではない。

「時間切れのようだ」カインが言った。

《赤き翼》に搭乗していたバロン兵たちが、一斉に雪崩れこんできたのだった。その数、およそ二十。ギルバートたちを取り囲むようにして散開した。

しかしダムシアンの王の顔には、あるかなしかの笑みが宿っていた。焦る様子も見せずに、懐から小さな箱を取り出す。「これに見覚えはあるかな」

「そいつは、まさか――」

「ローザ、下がって」ギルバートが叫ぶ。バロンの王妃は、その言葉通りに、ギルバートの背後に身を隠す。吟遊詩人の指が弦を爪弾くような優雅な動きで小箱の蓋を開けた。

視界が一瞬にして真紅に染まったかと思うと、箱から炎の玉が噴き上がった。その玉が、頭上で破裂して四散する。飛び散った無数の小さな火球が持ち合わせているのは、破壊の意思のみ。本能に命じられるままに、玉座の間を縦横無尽に跳ねまわった。数瞬の殺戮劇であった。周囲が本来の色彩を取り戻したあと、床は正体を現した魔物の焼け爛れた死体で埋め尽くされていた。立っているのはギルバートとローザ、そしてカインのみである。
「――ボムの指輪か」竜騎士に動じた様子はなかった。
「セシルからの手土産さ」ギルバートが、ローザを守るようにして一歩踏み出した。
カインのくちびるが笑みの形に吊り上がる。「余興はおしまいだ」

15

地下水脈を抜けたセオドアたちの前に、再び砂の海が広がった。揺らめく大気の向こうに、ダムシアン城がそびえ立っている。ふたりは躊躇することなく、砂漠に足を踏み入れた。
城門の前に、バロンの飛空艇《赤き翼》があった。その船影が疲弊し切ったふたりの背中を押す。急げ、まだ間に合うはずだ。足にまとわりつく砂を蹴って懸命に城を目指した。セオドアの心を焦がすのは、足元から立ち昇る熱気にあらず。自分たちの誇りである飛空艇を、殺戮と強奪に利用されることに我慢ならなかったのである。目の前に、ビッグス隊長とウェッジの、そして大勢の仲間の姿が見えるようだった。彼らの抱きつづけてきた夢を汚すことなど断じて

許されることではない。ぼくは最後の《赤き翼》なのだから。
しかし現実は無慈悲であった。少年の決意を嘲笑うかのように、飛空艇が離陸を開始。巻き上げられた砂煙に、ダムシアン城の威容が霞んでいった。
その落胆を、背後から聞こえてきた轟音が断ち切る。ふたりの頭上を、飛空艇エンタープライズが通り過ぎていった。二艇の飛空艇が翼をかすめるようにしてすれちがった。飛び立った《赤き翼》は南へ、そしてエンタープライズはダムシアン城の上空で着陸態勢を取った。
その光景を呆けたように見つめていたセオドアは、
「急ぐぞ」という男の声で我に返った。
そうだ、まだすべてが終わったわけではない。
エンタープライズには恐らくシドと母ローザが乗っているはずだ。
希望は潰えたわけではない。むしろ、ここからはじまるのだ。

*

セオドアは男とともにダムシアン城へ駆けこむと、最上階の玉座の間を目指した。
そこには数え切れないほどの魔物の屍骸が転がっていた。玉座の前には、見慣れた老人がいた。彼は床に両膝をつき、ひとりの男を抱き起こしていた。
「――シド」セオドアは、その懐かしい背中に駆け寄った。

突然、名を呼ばれ飛空艇の老技師が驚いたように振り返る。「おお、セオドアではないか。無事じゃったか。よかった」涙声になっていた。「よかったのお」

シドに抱きかかえられていたギルバートが起き上がる。「セオドア……」

少年は周囲を見まわす。「母さんは……シド、一緒じゃなかったの？」

ギルバートが、顔を伏せた。「済まない、私のせいでローザは——」

「いや、お主のせいではないぞ」シドがダムシアンの王の言葉を遮った。「わしがローザと一緒におればよかったんじゃ。そうすれば、こんなことには……」

セオドアは彼らの言葉の意味が理解できずにいた。ひとつはっきりしているのは、母がここにいないということ。彼女の身に何かあったようだった。

ギルバートが吐き捨てるような口調で言った。「クリスタルだけじゃない。ローザも連れ去られてしまった、事もあろうかカインの手によってね」

「カインさんに？　それじゃあ、さっきの《赤き翼》に、まさか——」

その問いに答えようとする者はいなかった。誰もが口をつぐんでいる。

セオドアが、さらに言葉をつづけた。「何かの間違いです。あのカインさんが、母をさらっていっただなんて……」

「すべての鍵はバロンにあるようだな」セオドアの背後に立っていた男がそう言って玉座に背を向けた。「急がねば手遅れになる」

＊

エンタープライズに乗りこむと、シドは舵輪を握った。バロンが誇る最新鋭の飛空艇が砂煙を上げながら急浮上。ダムシアン城の上空で針路を南に向けると、そこでシドはレバーを目いっぱいまで引く。エンタープライズは最大出力でバロンに向けて発進した。

甲板の上で、セオドアは両の拳を握りしめて、全身を小さく震わせていた。堪え切れない涙が、吹きつける風にちぎれてどこかへ飛び去ってゆく。少年は、突きつけられた現実を受け入れられずにいた。事あるごとに父や母から、竜騎士カインの活躍を聞かされた。両親だけではなく、城の者たちすべてが彼を英雄視し、決して悪く言うことはなかった。その彼が、ダムシアンのクリスタルを奪い、母をさらったという。何かの間違いに決まっている――。

ギルバートが呟いた。「彼はローザを傷つけるような真似はしないはずだ、絶対にね」

「それは、どうしてでしょうか」

「カインはローザを愛している。セシルと同じぐらい、いやそれ以上かもしれない」

「そんな――」

「彼は本気だ。心の底からセシルを憎み、亡き者にしようと考えている」

「やめてください」セオドアは両の耳を塞ぎ、甲板に膝をついた。

カインがその本性を周囲に隠し通してきたのか、あるいは長いときを経て次第に変わってしまったのかは、少年には想像もつかない。セオドアは、カインと言葉を交わすどころか、その

顔を目にしたことさえないのだから。

セオドアは耳を塞いだまま、ゆっくりと顔を上げた。船首に立つ男の背が目に入る。カインを追い求め、命を狙う男――一切の素性を明かそうとしない彼は、いったい何者なのだろう。これまでの過酷な旅が、つぎつぎと脳裏に浮かんでは消えてゆく。セオドアは、自分をここまで導いてくれたその男に感謝しながらも、同時に彼と出会わなければよかったのかもしれないと思いはじめていた。そうすれば、こんな目に遭わずに済んだのだから。

やがて地平の果てにバロン城が見えてきた。

＊

両手で顔を覆い、涙に暮れるローザの腕をつかむと、カインは《赤き翼》から引きずり下ろした。女が悲鳴を上げても容赦しなかった。バロン城の城門の前に、ふたりの衛兵が立っていた。「開けろ」狂気に蝕まれた竜騎士が獣のごとく吠える。「手に入れたぞ、クリスタルを。そしてローザをな」衛兵が無言のまま門を開ける。

「離して」女がカインの腕を振り払った。

逃げ出そうとするローザの髪をつかむ。そのまま無造作に引き寄せた。互いの息が感じられそうなほどの距離である。「どこへ行こうというのだ。玉座はそちらではないだろう」男はなおも抵抗しようとする彼女の腕を軽々と捻り上げると、城内へ足を踏み入れた。

「お願い。もうやめて、こんなこと――」
「ローザよ、なぜ泣く」カインは歌うように言い、玉座を目指す。「それではよく見えぬぞ。俺がセシルを八つ裂きにする様がな」
もうすぐだ。間もなく、この女は自分のものになる。

＊

「飛空艇の留守は預かる。みんなは早くローザを」
ギルバートの言葉を合図に、三人の男たちがつぎつぎとエンタープライズの甲板から飛び降りた。先頭をゆくのは、セオドアとともに旅をつづけていた男である。
城門の警護に当たっていたふたりの兵士が、三人に気づいたのか、手にしていた剣を交差させて進路を塞ごうとする。「何人たりとも通してはならぬ。陛下の――」
みなまで言うことはできなかった。
「――どけえっ！」男の抜き放った剣が、衛兵たちの首を刎ねたのである。男はそのままの勢いで開いたままになっている門をくぐり抜ける。セオドアとシドも、それに倣った。
城内に他の兵士の姿はなかった。
玉座の間へとつづく扉の前である。ついにカインに追いついた。ローザが最後の力を振り絞ってその戒めから抜け出すと、セオドアと抱き合った。

竜を模した兜から覗くカインのくちびるが、怒りに歪んだ。「貴様――」その強烈な視線が射抜くのは、ひとりの男であった。「この死にぞこないめ」
セオドアを背後に押しやったローザが、息を呑んだ。「あなたは……カイン」その視線は、息子とともに現れた男に向けられていた。
「――え」
「な、何じゃと」セオドアとシドが、驚いたように男の顔を見つめる。
「どうして、カインがふたりも――」とローザ。
しかし男は、それに応えず、ただ闇に侵された竜騎士を睨みつけるのみ。
男と対峙するカインが叫ぶ。「こやつは、生き恥をさらす抜け殻に過ぎん。この俺こそが本当のカインだ」背負っていた槍を手に握った。
そのときセオドアが動いた。ローザの脇をすり抜けると、剣を抜き放ってカインに斬りかかったのだ。無意識に背中を押されての行動だった。後方に引いた刃に殺意をこめて、相手が間合いに入った瞬間に一閃する。
しかしカインには通用しなかった。鋭く振り抜かれた槍に剣を弾き飛ばされてしまう。無手となったセオドアの首を、カインがわしづかみにした。
「――セオドア」ローザが声を上げ、駆け寄ろうとする。
その足を竜騎士の鋭い視線が止めた。「この餓鬼が、お前の息子か」仕留めた獲物を誇るように、少年の体を片手で持ち上げた。セオドアの顔が真っ赤に膨れ上がる。「セシルが、お前

に産ませた子なんだな」セオドアが必死で暴れるが意に介さない。
ローザは顔を伏せると、くちびるを噛みしめて無言を貫いた。
何と答えるかで、息子の生死が決まるような気がしたのだ。
セオドアが必死でもがく。その動きが次第に緩慢になっていった。
「この餓鬼を助けたいか」カインが嗤った。「ならば、言え。俺を愛していると」
ローザは弾かれたように顔を上げた。固く結んでいたくちびるが、心にない言葉を紡ごうとしたのと同時に、もうひとりのカインが自分の名を名乗る竜騎士に突進する。
カインは掲げていた少年を投げつけた。男がそれを抱き止めた瞬間を狙い、手にしていた槍を突き出す。
それに気づいた男は、少年を守るかのように迫りくる切っ先に背を向ける。体の芯に激痛が走った。セオドアを解放すると、カインに向き直る。
ローザが崩れ落ちた息子に駆け寄ると、その体を抱き上げる。少年の無事を確認すると、顔を上げてカインと対峙する男の、血の噴き出す背を見つめる。「あなた、カインよね。それなら、どうして。あなたの前にいるカインは、いったい誰なの」
「あれは、私だ」男は答えた。
「笑止。俺こそがカインの本質。それが証拠に、こやつは試練の山で俺に敗北した」
「――嘘だ」ローザの腕の中でセオドアが叫んだ。「この人はお前なんかに負けない」
「ほう、好かれたものだな」カインが嗤った。楽しくてたまらないといった様子だ。「ならば、

お前にも見せてやろう。こやつの不甲斐なさを」
　それが闘いの合図となった。
　男が一気に間合いを詰めると、溜めこんだ怒りを爆発させるかのように強烈な一撃を見舞う。カインは反応できなかった。左の肩を痛打され、よろめく。男はそれを見逃さない。手にしている剣を闇雲に叩きつけた、たとえ防がれようともまったく意に介さず、何度も何度も。いくつかの刃が致命的ともいえる傷をカインの体に刻みこむ。
　誰もが男の勝利を疑わなかった。
　最初に気づいたのは、セオドアだった。「体が――透けている」
　ローザが、シドがそれに頷く。少年の言葉通りに、男の体が立ち昇る陽炎のように揺らめき、その輪郭から鋭さを奪っていた。崩れ落ちたカインが、男の背を通して見える。
　男は、それでも攻撃の手を緩めない。
　カインのくちびるに笑みが浮いた。「どうした、お前の怒りはこの程度か」
「過去のお前を否定すれば、今の自分の存在が揺らぐのは道理。だが、私はお前を決して許さない。私が消えるのが先か、それともお前が滅するのが早いか。勝負だ」
「駄目だ」呟いたのはセオドアだった。母親の手を払いのけ、男の背に一歩近づく。「ぼくに教えてくれたのは、あなたです」
　その言葉が、男の動きを止めた。
　セオドアはつづける。「あなたは言ったじゃないですか、ぼくにその血を誇りに思える日が

きっと来るって。それはあなたにだって――」
「私が、自分の犯した罪を誇りに思うだと……そんなことができると思うか」
「思うわ」ローザが叫んだ。その場に居合わせた全員の視線が、彼女に集まる。ローザは浮かべていた涙を拭うと言った。「私に向けてくれた感情は本物だった」
シドが頷いた。「ギルバートは元気じゃぞ。エンタープライズで待っておる、お前をな」
「みんな、あなたたちふたりを信じているんです」セオドアは、男に駆け寄った。「それなのに、どうしてあなたは自分を信じようとしないのでしょう」
カインが立ち上がった。被っていた兜を投げ捨てる。男と寸分違わぬ顔が現れた。その表情が憤怒に醜く歪んでいた。「俺を信じるだと、ふざけるな」カインは、先刻と同じようにセオドアの首をわしづかみにした。「二度と生意気な口を――」
「あなたには、ぼくを殺せない」
「何だと――」
「さっきのは、もうひとりの自分を怒らせるためのものだった」
カインの全身がぶるぶると震えはじめた。口元には、もう笑みは浮いていない。
「もう、やめておけ」男が言った。「ようやくわかった。私が間違っていたのだ」
カインはセオドアを解放すると、手にしていた槍で男の腹部を突いた。
男は避けようという素振りさえ見せなかった。全身を駆け抜ける激痛に顔をしかめながらも、笑みを浮かべる。

「私は、過去に縛られていた。過ぎ去った日々を葬らねばならんと思いこんでいた。だが、そうではなかった。すべての過去が今の私自身なのだ。喜びも悲しみも、憎しみさえも」
「やめろ」
カインの手から槍が落ちた。
「私はお前を否定しない」幼い我が子に言い聞かせるような口調だった。
カインは両手で頭を抱え、床に伏した。そして絶叫。「嫌だ、俺は消えたくない」
「安心しろ。お前は死なぬ」男は片膝をつくと、体を丸めて震える自分の背にやさしく触れて言った。「お前も俺自身だからだ。――やり直そう、ふたりで」
視界が白一色に染まった。どこからか、囁くような声が聞こえてくる。
『それで……よい。頼む、我が……息子たちを……』
世界が色彩を取り戻すと、すでにカインはひとりになっていた。その身を包むのは、竜を模した青黒い甲冑にあらず。純白の鎧が眩いばかりの光を放っている。
セオドアは息を呑んだ。「まるで……聖騎士(パラディン)」
「カイン――」つづく言葉が涙となり、ローザの頬を濡らした。
「待っておったぞ」シドの目も潤んでいた。「みな、お前の帰りをな」
「済まなかった」カインは深く頭を垂れた。「みんなのお陰で、俺はようやく自分を取り戻すことができた。心から礼を言う。……ありがとう」
「しかし、お前がセオドアと一緒だとは思わなかったぞ」シドが言った。

「カインさんが、ぼくをここまで導いてくれました」セオドアが説明する。

「いや、それはちがう」カインは首を振った。「お前と出会ったからこそ、俺は運命に抗い、未来を閉ざす闇を打ち払うことができた。俺が導いたのではない、お前が俺を導いたのだ。セオドア——セシルとローザの血を受け継いだお前がな」

カインは、床に落ちていた三つの——水、風、そして火のクリスタルを拾い上げた。

そのときだった。玉座の間へとつづく扉が、ゆっくりと開いた。

「よく帰ってきてくれた」

扉の奥から現れたのは、バロンを統べる王セシルだった。



第4章

FINAL FANTASY IV
THE AFTER
ファイナルファンタジーIV
ジ・アフター

月の帰還

1

「――よくぞ、戻ってきてくれたな」
玉座に腰を下ろしたセシルが言ったが、その言葉を喜ぶ者はいなかった。カイン、ローザ、セオドア、そしてシド。いずれの顔にも戸惑いが色濃く浮かんでいた。玉座のすぐ脇に、見たこともない少女が立っていた。不吉な気配を漂わせながら。
「セシル、この娘は――」カインは訊いた。
「劣等種は物忘れが早いと見える」少女が答える。
「俺は、貴様など知らぬ」
少女は目を細めた。「お前が言ったのではなかったか。セシルに会わせろ、と」
それでカインは思い出した。自分の片割れ――闇の衝動に突き動かされていたカインが、同じくこの玉座の間で少女と言葉を交わしたことを。
「約束だ。クリスタルをもらう」言うと少女は右手を頭上へ掲げた。いかなる力が作用したのか、水、火、風の三つのクリスタルはカインの指をすり抜け、少女の手に収まった。
「これで、すべてのクリスタルが我らのもとへ戻った」
セシルのその言葉に、カインは眉根を寄せた。「――戻った、だと」
「ああ、その通りだ」セシルが嗤(わら)った。「正当な所有者の手にな」
「セシル、どうしてこんな――」ローザが夫へ駆け寄ろうとした。

それをカインが片手を上げて制した。「下がっていろ」
「ほう……この私と剣を交えるつもりか」
「父さん」セオドアが叫んだ。「お願いだ、やめて」
「自分が何を言ってるのか、わかっとるのか」シドも声を上げる。
しかしふたりの必死の願いも、セシルの耳には届かなかった。
カインは引くつもりなどなかった。「お前が望むのならばな」
その殺気を感じ取ったのか、セシルのくちびるが吊り上った。「おもしろい」ゆっくりと玉座から立ち上がる。その手には、殺意の光を宿した剣が握られていた。
空色の髪をした少女は、黙したままその光景を見つめているだけだった。

2

「塔を抜けるよ、つかまって」舵輪を握るルカが叫んだ。
耳を聾(ろう)する風の音に引き千切られるようにして周囲の闇が消し飛んだ。バブイルの塔から脱出したエッジら一行は、陽光の降り注ぐ大地へと帰還したはずだった。しかし——
リディアが息を呑んだ。そこに広がるのは、まるで黄昏どきのように不吉な薄闇に沈む世界だった。まだ日が落ちるには早過ぎる時間のはずである。
ふと見上げると、禍々しい月が視界に飛びこんできた。エッジはそのあまりの巨大さに言葉

を失った。月がこの母なる大地に接近しているのだ。
「てめえ、いったいこれはどういうことだ」エッジは黒衣の男に詰め寄った。
彼は今しがた脱出したばかりのバブイルの塔を見上げていた。塔は不気味な輝きに支配されている。「次元エレベータが稼動をはじめたようだ」
リディアが悲鳴を上げた。破砕音と同時にファルコンの甲板が激しく傾いた。右舷後方の船体の一部が、ごっそりともぎ取られていた。敵襲ではない。天から無数の流れ星が降り注いでいた。その威力は、黒魔法の〝堕星(メテオ)〟の比ではなかった。緑の大地を穿ち、森を焼き、すべてを滅ぼそうとしている。城や村に落ちれば、それだけで動く者のいない廃墟となろう。
黒衣を身にまとった男が、ルカの握る舵輪を左へまわした。
「ちょ、ちょっと何すんのよ」ファルコンの針路が北に変わっていた。
「この方角は——バロン」リディアが言った。

3

「できぬことをほざくものではない」セシルの手にする刃が血の赤に染まっていた。
その前でカインが左の脇腹を押さえて片膝をついていた。ローザが駆け寄った。
「——やめろ」セオドアが剣を抜いた。
セシルの双眸が殺意を宿したまま、息子を見据えた。「父に剣を向けるか」

「父さんは、こんなことをする人じゃない。ぼくは……ぼくは――」
「答えろ、セオドア」
少年はびくりと肩を震わせたあとで、ゆっくりと切っ先を下げた。
つぎの瞬間、セシルの剣がセオドアの腹部を貫いていた。少年は、くちびるをあという形に開いただけだった。ローザが髪を振り乱して絶叫した。
剣が引き抜かれると、血が噴き出した。セオドアは両膝を床につき、背中から倒れる。床に伏せる寸前で駆け寄ったシドに抱きとめられた。

4

バロン城は、不気味な輝きに包まれていた。
「くそっ。バブイルの塔と同じじゃねえか」エッジが吐き捨てるように言った。
その光は城を外界と遮断する役割を持っているようだった。通り抜けようとして輝きに触れると、凄まじい衝撃とともに弾き返されてしまう。
ルカが大きく息を吐いた。「くやしいけど、どうしようもないね」
「幻獣の力を借りればよかろう」黒衣を身にまとった男が言った。
「あんたは知らないから、そんな適当なことが言えるんだろうね」ルカは男を睨んだ。「幻獣たちは、あの娘に囚われてしまってる。どこにいるのかもわかんないんだよ」

「ならば、この気は何だ」
「――え？」
言われたことの意味がわからず首を傾げるルカに、リディアが言った。「感じるわ、幻獣のみんなの気配を……。まるで幻界にいるかのように、たくさんの気に満ちている」
「ちょ、ちょっと待てよ」エッジが割りこんだ。「この人間界で、幻獣が何してんだよ」
リディアの目に涙が浮かんでいた。「幻獣たちは悲しみと怒りに駆られて、己を制御できなくなっている。早く止めないと、世界が――！」
「急げ。時間がない」黒衣の男が言った。
一行の乗りこんだファルコンが、ただちに離陸を開始した。

5

ローザの〝療光(ケアルラ)〟によって瀕死の状態から立ち直ったカインとセオドアは、覚悟を決めていた。手加減の通用する相手ではない、殺すつもりで挑まねば、自分たち全員がここで命を落とすことになるだろう。絆を捨てねば生き残れないのである。シドとローザにも、ふたりの意思が伝わったようだった。いつでも動けるようにと腰を浅く落とし、セシルを見つめている。
さしものバロン王も、四人を同時に相手にしては分が悪いはずだった。だが、セシルのくちびるからは笑みが消えなかった。長い長い沈黙のあとで、「この私に挑もうとは、見上げた心

がけだ。ならば、それに応えてやらねばならんな」死の宣告を下した。
一行は我が目を疑った。セシルが召喚したのは見上げんばかりの白馬に跨った、巨躯の剣士だった。山をも両断できそうな大剣を担いでいた。幻獣オーディンである。
「――バロン王」カインが、ローザが、シドがその名を呼んだ。バロンの先王の魂が幻界に迎え入れられ、そこで肉体を得て幻獣と化したのがオーディンだった。
「斬れ」セシルが命じた。
しばしの沈黙のあと、オーディンが雷鳴の如き声で応えた。「断る」
セシルの顔に驚愕を意味する表情が浮いた。「なぜだ、私は――」そのつづきは言葉にならなかった。オーディンが大剣を一閃。セシルは体を大きく震わせたあとで崩れ落ちた。
「――セシル」ローザが口を押さえた。一行は倒れたバロン王に駆け寄る。
「案ずるな」オーディンが言った。「我が太刀が斬ることのできるは、悪しき闇のみ」それはセシルが無事だということだった。
オーディンが姿を消すと、空色の髪をした少女が動いた。「くだらぬ茶番だ」
「返してもらおう、俺たちのクリスタルを」カインが少女に向き直る。
と――玉座に飛びこんできた者たちがあった。エッジ、リディア、ルカ、そして黒衣を身にまとった男である。エンタープライズで待機していたギルバートの姿もあった。
「おう、お前たち無事じゃったか」とシドが歓喜の声を上げた。
「ええ。各地のみんなや幻獣たちも助けたわ」リディアが老技師に片目をつぶる。

「——ゴルベーザ」カインが黒衣の男を目にしてその名を呼んだ。
一同がどよめいた。かつてこの大地に戦乱を巻き起こしたあの男——ゴルベーザは、漆黒の甲冑の下に隠された素顔を明らかにしないまま、月とともに空の彼方へと姿を消したはずだった。だが、なぜこうして再び舞い戻ってきたのか、誰もその理由を訊こうとはしなかった。
言葉など必要ない。信じているのだ、セシルのじつの兄を。
一隊は少女を囲むようにして展開した。退路はない。
しかし娘に動じた様子はなかった。「次元エレベータが稼動を開始した。この星での我らの役目は、これで終わりだ」言い終わった瞬間に、その姿が消えた。転移したようだった。
「奴はクリスタルを月に運ぶ気のようだ」ギルバートが言った。
「そんな……止めないと！」とローザ。
ルカがシドに言った。「あたしと師匠で飛空艇を改造してあの月に——」
しかしシドは首を振った、「わしは不可能という言葉が嫌いでな、こんなことは言いたくないんじゃが……残念ながら、この大地の引力から逃れるほどの技術は……」
「そんな——」
「手立てならば、ある」ゴルベーザが鉛の声で言った。
シドが目を見開いた。「それは、まさか……」
月から戻ってきた男は頷いた。ミシディアから飛び立った魔導船に乗って、ゴルベーザは母なる大地へと帰還した。あの船ならば、月へ向かうことができるはずである。



第5章

FINAL FANTASY IV THE AFTER

ファイナルファンタジーIV ジ・アフター

月の帰還

1

安堵は、その瞬間に再び不安へと逆戻りしていた。

月よりやって来た少女の呪縛から解き放たれたセシルだったが、それ以来、目を覚ますことはなかった。死んでしまったわけではない。小さくはあったものの鼓動は生を刻みつづけており、肌には生気がある。すぐに意識を取り戻してくれると誰もが信じていた。しかし仲間たちの期待をよそに、そのまぶたが開くことはなかった。いかなる呪いがかけられているのか。もしもセシルが、このまま永遠に眠りについたままだとしたら——言葉にすれば、現実になってしまいそうで、誰もが口をつぐんでいた。それでも、そんなセシルを魔導船に乗せ、迫り来る月を目指すのは、ローザがそうすべきだと主張したからである。

魔導船内後部に設えてある寝台に、セシルは横たわっていた。

寝台を取り囲むようにして、その寝顔を覗きこんでいるのはローザ、セオドア、エッジ、そしてリディアの四人。やや離れた場所にカインとゴルベーザが顔を伏せ、立っていた。

一刻の猶予もなかった。月はさらに接近してきており、彼らの暮らす大地に甚大な影響を及ぼしはじめている。陽光が遮られて世界は薄闇に沈み、潮の干満差が激しくなった。海流はその勢いを強め、外洋は極めて危険な地域となり、船を出すことができなくなってしまっている。大気が荒れ狂い、地震も頻発。人々は家から出ることができず、孤立していった。その中で魔物だけが我が物顔に振る舞い、己の腹を満たしてゆく。

こうしている間にも、状況は悪化の一途をたどっている。最悪の事態を迎える前に、何としても落ちてくる月を止めなければならなかった。だが、一団の精神的な柱であるセシルなくしてそれが可能かどうかは、誰にもわからない。だから彼らは祈るような気持ちで、昏睡状態のバロン王を見つめるのだった。

星空を航行する魔導船が、間もなく月の重力圏に入るかというときだった。父の顔を見つめていたセオドアが息を呑んだ。彼らの祈りが届いたのか、セシルがゆっくりとまぶたを開いたのだった。ローザとリディアの目に涙が浮かぶ。エッジの眉間からしわが消えた。その中でセオドアだけがちがった反応を見せた。目覚めた父親に背を向けたのである。

「セシル……」ローザは震える声で呼びかけた。

起き上がる素振りも見せず、セシルは虚ろな目でただ宙を見つめていた。リディアにも名を呼ばれるが、視線を動かそうとしない。そこで、ようやくふたりも気づいたようだった。

「セシル、私よ。どうしてわからないの」ローザは声を上げた。

「やめておけ」それまで無言で成り行きを眺めていたカインが言った。「今のセシルは抜け殻だ。どこにも心が感じられない」

「そんな――」

「あの娘、セシルに何をしたのだ」ゴルベーザが、誰にともなく呟いた。

一方、船内前部では飛翔のクリスタルに手をかざして舵を取るシドのまわりに、パロムやポロム、ギルバート、ヤンらが集まっていた。

「着陸態勢に入るぞ」シドが言った。
傍らのルカが頷き、計器を調べはじめるが、すぐに眉をしかめた。「師匠、速度が――」
「妙じゃのう。速度がちっとも落ちぬぞ」
「引力じゃねえの、あの月のさ」とパロムが口を挟んだ瞬間、魔導船が激しく揺れた。
悲鳴を上げてよろめくレオノーラをポロムが支えた。「つかまって」
「――父上」とアーシュラ。
「動じるな」ヤンが娘を一喝する。「慌てたところで、どうなるものではなかろう」
異変の到来を告げる震動は収まる気配はなく、さらに激しくなっていった。
セシルの看病をつづけていたエッジが、そこに駆けこんでくる。「何があった」
「月に引き寄せられてるんです」ポロムが答えた。
「ルカ、不時着じゃ」月の地表が迫って来る。
エッジは舌打ちし、再び後部の寝台へと戻る。やがて来る衝撃に備えるよう仲間に警告するつもりだった。だが、開いた口から漏れたのは、「どうした」という言葉だった。
「月が近づくにつれて、苦しみはじめたの」ローザが呟いた。
寝台に横たわるセシルが、苦悶の声を上げていた。砂漠で立ち枯れた老木のように虚空に突き出した両腕。背を弓なりに反らせ、血走った目を大きく見開く。
ゴルベーザが拳を強く握った。「何と闘っているのだ、セシル」
魔導船を強い衝撃が襲った。

2

母の匂いでセオドアは目を覚ました。「——母さん」不時着した際に床に打ちつけられたのか背中が痛んだ。彼女の手を借りて立ち上がると、「父さんは」と問うた。

ローザは顔を伏せ、小さく首を振るだけだった。

寝台の上に先刻と変わらぬ姿勢で横たわる父セシルの姿があった。目は虚ろで、弛緩した表情には何の感情も浮かんでいない。だらしなく開いたくちびるから、意味をなさない声が漏れていた。苦しんでいる様子はないが、状況が好転したわけではない。セオドアも思わず顔を伏せてしまう。あの自信と威厳に満ちた父の面影は、どこにもなかった。

「——どうやら、みんな無事なようだな」エッジが船内を見まわした。

怪我のないことを喜ぶ者はいなかった。無事という言葉が魔導船内に空虚に響いた。ここから先、死ぬよりもつらいことが待ち受けているかもしれないのだから。

全員が、魔導船内の前部に集まった。

シドから船の破損状況の報告を受けたあとで、カインは切り出した。「幸い、魔導船の損傷は軽微であるようだ。だが、安心することはできない。月の探索を開始する前に、二手に分かれようと思う」仲間たちの間にざわめきが広がった。カインは構わずつづける。「一方は、ここで待機。シドとルカの補修作業の補助と、魔導船の護衛を担当する。もう一方は、月の探索を行ない、クリスタルの奪還と月の軌道修正を目的とする」

異を唱える者はいなかった。母なる大地を守ることを第一に考えるべきとはいえ、この魔導船はここに集った者たちの生命線である。また不測の事態に備える必要もあるのだから。問題となるのは、誰が未知の地へ挑むのか、という一点だった。

「俺が行くぜ」パロムが名乗りを上げた。

「パロム、あなた自分が何を言ってるのか――」ポロムが弟に詰め寄る。

「わかってるに決まってんだろ。第一、俺が行かないで、いったい誰が行くんだよ。あの女には借りもあるしな」

「――待て」魔導船の制御盤を見つめていたシドが叫んだ。

「何だよ、俺は――」言いかけたパロムの言葉を、魔導船の揺れが呑みこんだ。魔導船はすでに月の地表へと降り立っているはずである。ならば地震の類か、あるいは――。

ルカが外部へとつながる左舷の昇降口へ駆け寄ると、右側のボタンを押した。しゅっという小気味よい音とともに扉が上部へせり上がり、外気が船内へ流れこんできた。ルカはそこで息を呑み、体中の力が抜けたかのように尻もちをついてしまう。ゴルベーザが動いた。腰を抜かしたように動けなくなったドワーフの王女の首根っこをつかむや、力任せに後方へ投げ捨てる。つぎの瞬間、抜刀し、船内へ飛びこんできた魔物を両断した。宙を舞うルカをシドが受け止める。ゴルベーザがボタンを押すと、扉が閉まる。それに抗議するかのように、扉を叩くような音が聞こえ、同時に魔導船が激しく揺れた。

「あれは――」広げた掌ほどの大きさをした船窓に駆け寄ったギルバートが声を失った。月の

地表は、魔物の群れで溢れ返っていた。無数の、といった形容しかできない数である。それらのすべてが、この魔導船へと群がっているのだ。

おぞましい光景に堪えかねたように、レオノーラが両手で顔を覆い、泣きはじめた。その震える肩を、傍らに立つポロムがやさしく抱き、何事かを耳元で囁いた。

「状況は思った以上」カインは、士気の下がった仲間たちを見まわした。「どうやら魔導船を守るには、多くの人員を割かねばならんようだ」

「ならば、月の探索を行なう者たちは」ヤンが訊いた。

「五人が適当だと考えている」

竜騎士が答えると、みな一様に床に視線を落とした。確かにあの魔物の大群から魔導船を守り通すには、それだけの人数は必要だろう。しかしその代償として、たった五人で異形の群れを突破しなければならないというのだ。誰もが言葉を失うのは当然だった。

重苦しい沈黙のあとで、「私が行きます」ローザが固い口調で呟いた。

彼女が名乗り出るのを予想していなかったのか、カインは眉根を寄せた。「しかし――」

「セシルも連れていくわ」ローザがつづけた。「セシルをここに残していっても、絶対に自分を取り戻せない。私にはわかるの、だから……」

「私も行こう」ゴルベーザが一歩、進み出た。

カインは肩をすくめる。「いいだろう、俺もだ」これで四人。残る枠はひとりとなった。

「セオドア――」言ったのはシドだった。

一団の視線が、名を呼ばれた少年に集中する。セオドアは両の拳を握りしめたまま、顔を上げようとしなかった。とはいえ、それを責める者はひとりとしていない。偉大なふたりの英雄の血を引いてはいるが、彼はまだ幼く、肉体的にも精神的にも成熟にはほど遠い。たった五人で魔物の群れの中へ飛びこむことを強いるわけにはゆかなかった。

「俺が行くぜ」パロムが言った。セオドア同様に成人は迎えていないが、ミシディア一の黒魔道士の肩書き通り、その実力は疑いようがない。「誰にも文句は言わせねえよ」

荷が勝ちすぎていると言う者など現れるわけもなかった。いや、ひとりだけいた。弁髪のファブール王、ヤンである。「私が行く」

パロムはヤンを睨みつけた。ヤンもまたパロムに強い視線を向けている。たっぷりふた呼吸の間を置き、黒魔道士が折れた。「ったく、何て目をしてやがんだよ。くそっ。わかった、譲ってやるよ」パロムは目をそらすと、吐き捨てるように言った。

魔導船は、なおも激しく揺れている。綿密な策を練る時間も、別れを惜しむ暇もない。ヤンはエッジに歩み寄ると、その手を強く握った。「娘を頼む」他の者には決して聞き取ることのできない、小さな小さな囁きだった。

エッジは頷くと、「死ぬなよ」そう短く応えた。

ゴルベーザがセシルを背負ったのを見るや、カインは言った。「扉が開くと同時に、俺たち五人を先頭に、全員がいったん外に出て魔物を迎撃する。余裕のある者は、俺たちの援護を頼む。ただし危険を感じたならば、何をおいても魔導船への避難を優先してくれ」

五人が扉の前に立った。ヤンが後方を振り返らずに言う。「パロム殿」
「な、何だよ——」
「みなの運命は、そなたにかかっておる」
「へっ。んなのわかってるって」パロムの顔にようやく笑みが浮かんだ。

3

扉が開くと同時に、五人が魔導船から月の地表へと飛び出した。先頭をゆくのはカインとヤン。魔物の壁を槍で薙ぎ払い、討ち漏らした異形の者を拳が屠る。そのうしろにはセシルを背負ったゴルベーザとローザがつづいた。突如、姿を現した獲物に、魔物たちが歓喜の奇声を上げる。空腹を満たそうという本能が、一瞬にして彼らの持つ、魔導船への破壊衝動を打ち消した。圧倒的なその数に、五人が押し潰されそうになった瞬間だった。
「——焼き尽くしちまえ！」背後でパロムの叫ぶ声が聞こえた。
幻獣たちの心を取り戻すことに成功したリディアが詠唱を開始。遠く幻界より召喚されたのは、炎を司る獣人イフリート。カインたち五人を中心として大気をも焦がす業火が逆巻いた。それに呑みこまれた魔物たちが一瞬で炭化し、崩れ落ちた。五人は構わず先へ進む。
一部の魔物が、五人を援護する一団の存在に気づき、足を止めた。食餌行動を邪魔されたことによって敵意を覚えたのではない、本能とはもっと単純である。魔導船近くに展開する異邦

人の数のほうが多いからだった。魔物の群れがふたつに割れた。
パロムがそれに気づかないわけもなかった。〝炎獄（ファイガ）〟の詠唱を終えると「いったん引くぞ」と叫び、魔導船へと引き返そうとする。そこでポロムと目が合った。姉の顔にあるかなしかの笑みを認め、黒魔道士は舌打ちし、視線をそらせた。「な、何なんだよ」
「たった半月ほどなのに、大人になったんだね」寂しそうな笑みだった。
「お前もな」
パロムは、退却命令を無視し、なおも覚えたての〝炎撃（ファイア）〟を撃ちまくるレオノーラの頭を拳で殴りつけた。「おい、聞こえねえのかよ。逃げるぞ」
新米神官は、涙目になりながら頭を押さえた。「ご、ごめんなさい」
「まったく……」パロムは大きく息を吐き、少女の襟をつかむとそのまま引きずり、魔導船へ急いだ。「お前の本分は白魔法だろ。そんな覚えたての黒魔法で何をしようってんだよ。それとも、あれか。こいつもクリスタルのお導きってやつか？」
「い、いえ……」そのあとの言葉をレオノーラが継いだのは、ふたりが船内へ逃げこんでからだった。「あの……ク、クリスタルの光が見えないんです」
最後まで船外に残っていたエッジとその配下の四人衆が腰を浅く落とし、迫り来る魔物の群れを待ち受けていた。ぎりぎりまで引きつけてから奥義を使おうとの腹である。
「見せてやれ、エブラーナの究極奥義を」
エッジの言葉を合図に、忍たちが動いた。五つの影が混じり、溶け合い、異形の者と化す。

その姿が巨大な鳥となった瞬間に、翼に真紅の炎が宿った。煉獄鳥は周囲を焼き払いながら先行する五人を追うようにして飛翔。彼らを追い越したあとも、前方の道を切り拓くべく魔物の群れを殲滅していき、やがて消失した。

魔導船の前に闇が凝ったかと思うとそれが四散し、エブラーナの忍たちの姿となった。

「カイン、セシルのことは頼んだぜ」エッジは、そう呟いたあとで、配下の四人につづき船内へ避難した。あとは運にすべてを委ね、祈るしかなかった。

4

闇雲に前に進むことだけを考えていたわけではない。地表のどこを見渡しても、建造物らしきものは存在しないように思えた。ならば、地下に何らかの施設があると考えるべきである。その見解にゴルベーザが異を唱えなかったことから、カインは自分を信じ、目に見える中でもっとも高度のある山を目指していたのだった。

一行の進む速度は、著しく低下していた。原因は、いまだに己を取り戻すことのできないセシルにあった。いかに魔人として恐れられていたゴルベーザでも、成人男性ひとりを背負っていては、いつまでも全力疾走などつづけられるものではない。その足取りは鉛のごとく重く、もはやかろうじて歩いている程度でしかなくなっていた。

「振り切ったみたいよ」肩越しに後方を見やったローザが言った。

「代わろう」前方を歩いていたヤンがセシルを背負う役目を買って出た。
しかし黒衣をまとった男はその言葉に耳を傾けようとさえしなかった。ただ歩くのみ。
カインがその前に立ちふさがった。「聞こえないのか」
それでようやくゴルベーザは足を止めた。「これは私に課せられた使命だ」
「自分の犯した罪の重さというわけか」とカイン。
「どう受け取られても構わぬ」
「こんな状況でなければな。だが、今は一刻の猶予もない。お前がすべてを背負いこむことで苦しむ者が出るのならば、俺はぶん殴ってでもそれを阻止する」
ゴルベーザは応えなかった。
ローザが気遣うように、その肩に触れる。「お兄さん……」
「——兄だと?」くちびるに自嘲とも取れる笑みがかすかに浮いていた。「誰がお前の兄なのだ。私はゴルベーザだ」
カインは小さく頭を振ると、男に背を向けて再び歩きはじめた。「行くぞ」
やがて目指していた山の麓に、巨大な穴が穿たれているのが目に入った。ローザが後方を確認。魔物の影は、どこにも見当たらない。当面の安全は確保されたかに思えた。しかしそれに安堵する者はいなかった。あの闇の者たちが全滅したとは思えない。自分たちから魔導船で待つ仲間へと、牙を向ける相手を変えただけに過ぎないのだから。
洞窟内に足を踏み入れた一行は、そこで足を止めた。その意味を理解できなかったのは、己

を失ったセシル、そしてヤンのふたりだけだった。
草木の一本さえも生えない不毛の地に、このような場所があったからではない。カインとローザ、そして何よりゴルベーザの体を震わせたのは、そこが月の民の故郷ともいうべき地下渓谷に酷似していたためである。何千年もの時の間、風と水とによって磨かれた複雑な岩肌が遥か地下へ向かって伸びている。どこか不吉な予感を漂わせながら。
「ここは月の地下渓谷――」ローザが訊いた。「あなたが安住の地と決めたあの月……」
「いや、ちがう。我らが月はあの娘の襲撃を受け、永遠に封じたはずのゼロムスが甦った」
「フースーヤは、どうした」カインが訊いた。
「私は彼のお陰で窮地を逃れ、青き星へ向かうことができた。そこから先はわからぬ」そうゴルベーザは言い、セシルを背負ったまま再び歩きはじめた。

5

五度目の撤収である。決して引くことのない魔物の群れを相手に、一隊はさすがに疲労の色を隠し切れなかった。窮地に陥る前に魔導船内へ退避し、戦力の立て直しや肉体および精神の回復に努める。しかしそうしている間にも魔物は容赦なく爪を、拳を、あるいは牙を魔導船の外装へと突き立ててくる。緊張を解く暇などあろうはずもなかった。やがてどこかに船内への侵入口を作られ、この唯一の安息の地が血に染まる――誰もがそういった最悪の光景を想像せ

ずにはいられなかった。当初は自信を漲らせて陣頭に立っていたパロムも、今では床に腰を下ろし、抱えた両膝に額を押しつけていた。そんな彼に声をかけてあげる者はいない。他人を気遣う余裕など、すでになくなっていたのだから。

揺れつづける魔導船の内部で、一隊はひたすら祈っていた。ここが魔物に占拠される前に、奪われたクリスタルを手にした五人が帰還してくれれば、と。そうなれば、この圧倒的に不利な戦局をも覆せるにちがいない。光を取り戻したセシルが、手にした剣で魔物の群れを壊滅させてゆく――その光景を思い浮かべるのは、じつに容易かった。だが、その夢が現実となるまでには、短くない時間が必要であろう。だから祈る。果てしなく遠い未来を、一瞬でも早くこの手でつかみ取らなければ、迫り来る死に呑みこまれてしまうのだ。

ふいに大気が沈黙した。魔導船の揺れも収まっている。一隊は互いに顔を見合わせたあとで、のろのろと立ち上がった。エッジが船窓に駆け寄り、ガラス越しに外の様子を見つめた。エッジは眉根を寄せたまま、そこから動こうとしなかった。

「――お館様」忍のひとりが、じれたように主に声をかけた。

ややあってから、エッジは船窓から視線を引き剥がし、期待と不安が入り混じった表情を浮かべる仲間たちに向き直る。「どう判断したものか、と思ってな」

「ふむ」と入れ替わりで外を眺めていたシドが顎のひげをしごいた。「魔物どもが引きおったな。撤退というわけではなさそうじゃがな。離れた場所から、こっちを窺っとるわい」

「意味がわかんねえよ」パロムがくちびるを尖らせた。

「なら、奴らに訊いてみるんだな」エッジは笑った。
　言われてパロムが、エブラーナの王を睨みつける。
「冗談のつもりじゃねえんだけどな」エッジは肩をすくめた。「奴らは疲れて休んでるようには見えない。あきらめたとも思えねえ。敢えて言うならば――待っている、ってところか」
「待ってる――何を？」
「意外と俺たちのことかもしれないぜ」言うと、エッジは配下の四人に目配せをする。すぐに忍たちがエッジの前に集まり、片膝をつく。そんな彼らとともにエッジは、外へと通じる扉へ向かった。「ちとばかり、外の空気を吸ってくる」
「お待ちください」アーシュラが言った。「お供いたします」
　エッジは振り返らずに片手を上げ、それを小さく横に振った。「あんたには、あとでたっぷりと働いてもらう。それまでは、ゆっくり体を休めておけ」
「しかし――」
　つづくアーシュラの言葉を断ち切るように、扉が小気味よい音を立てて開いた。一隊に緊張が走る。外へ踏み出そうとしたエッジが言った。「俺たちに何かあったら絶対に外へは出ずに、急いで扉を閉めろ。――わかったな」
　エッジと四人の忍は、月の地表へ降り立った。周囲に敵意を持った者の気配はなかった。あれほど執拗に魔導船を襲っていた魔物たちも、今は前方で一塊となって大人しくしている。こちらの姿は見えているはずだが、動こうとはしなかった。エッジの感じたように、奴らは何か

を待ちつづけているようだった。
それに最初に気づいたのは、エッジだった。頭上から迫り来る強烈な気があった。エッジが、そして四人の忍が息を呑んだ。闇色の鱗を身にまとった巨大な竜がそこにいた。
「――幻獣神様」背後からの女の声。
エッジは我に返り、背後を見やる。バハムートの気配に気づき、魔導船から出てきたのだろう、リディアの姿があった。彼女を守るようにして幻獣たちを統べる竜と向かい合う。いつでも動けるように、浅く腰を落として身構えた。
「これから、お前たちの最後の希望とやらを握り潰す」バハムートの背に乗る、空色の髪をした少女が言った。「精々祈っておくがよい」
言い残してバハムートは、去っていった。待機していた魔物の群れも、それを追うようにして姿を消す。奴らが向かったのは、セシルたちが旅立っていったあの方角であった。

6

先頭をゆくカインのやや前方に突然、淡い光が浮かび上がった。まるで一行が来るのを待ち構えていたかのようだった。警戒心を抱かぬはずはなかったが、それでも湧き上がる好奇心に背中を押され、カインはその光へと駆け寄る。やや遅れてその横にローザ、そしてヤンがやって来る。セシルを背負ったゴルベーザだけが、三人の背後で立ち尽くしていた。

「――クリスタルか」カインが囁くような声で言った。
彼らの見つめる鉱石は、間違いなくクリスタルであった。見えない糸で吊り下げられているかのように宙に浮き、水平方向へゆっくりと回転している。クリスタルの放つ光は神々しくはあったが弱々しく、辺りの闇を完全に駆逐する力はなかった。そのせいで周囲の闇は多彩な濃淡を持ち、見る者を余計に不安にさせる。
月の地下渓谷に酷似した迷宮を抜けた一行は、文明の変遷を体験するかのように刻々と様相を変えてゆくいくつもの遺跡を過ぎ、その末にここへたどり着いた。歩を進めるたびに強く感じられるようになるのは、何者かの放つ強烈な気配。だが、聖とも邪とも判別のつかないその気の主は、いまだに姿を見せようとしなかった。本当にこのまま進んでもよいのだろうか、と不安になっていたところにクリスタルが現れたのである、一行はそれが意味するところを読み取ろうと、必死で光の奥を見つめていた。
「我らの世界にあったものとは、どこか異なるように思えるが」とヤン。
「そうね」とローザが同意する。「だとしたら、お兄さんたちの月の――？」
三人が背後のゴルベーザを見やった。弟を背負った男は、首を小さく振る。「我らの月のクリスタルではない。似てはいるがな」
魅入られたように水晶を見つめていたセシルが、ふいに暴れはじめた。ゴルベーザの背から転げ落ちると、よろよろと立ち上がり、クリスタルに手を伸ばす。「しれんの……やま」
その体を支えようとしていた三人は驚き、目を大きく見開いた。セシルが言葉を発したから

ではない。クリスタルの放つ光のその奥に、見たことのある光景が映し出されていたのだ。草木一本も生えぬ不毛の地。その岩だらけの険しい山道を、乾いた風が砂塵を巻き上げて吹き抜けてゆく。頂を照らし出すのは、太陽とは異なる光——。

　セシルの指先がクリスタルに触れた瞬間だった。五人を取り囲むようにして六つの邪悪な気配が湧いた。大気に溶けた腐臭から、それが〝生ける屍（アンデッド）〟だと知れる。四人がそれぞれの得物を手に身構えた。セシルだけは迫り来る危機を気にしたふうもなく、弛緩した表情でクリスタルを呆けたように眺めているだけだった。

〝生ける屍（アンデッド）〟たちが生贄と定めたのは、そのセシルだった。両腕を前方に伸ばし、おぼつかない足取りで包囲網を狭めてゆく。他の四人がどのような攻撃を仕掛けてこようとも、狙いを変えるようなことはなかった。やがて一体の指先がセシルに届いた。

　自然界の理を無視した亡者は、生気を食らって現世に自分をつなぎ止めている。その指先に触れられたセシルは、声にならない叫びを上げた。眼球が反転し、白目を剥く。だらしなく開いた口から唾液を垂れ流しながら昏倒した。四肢が痙攣している。

　すべての〝生ける屍（アンデッド）〟たちを土に還したあとも、四人は倒れたセシルに駆け寄ろうとはしなかった。できなかったのだ、さらに強烈な闇の気配が現出したからである。それは、身の毛もよだつほどの禍々しさを伴って、クリスタルの光の届かない闇の奥にうずくまっていた。

　ゴルベーザが信じられないといったふうに首を小さく振った。「——なぜ甦ったのだ」

　闇の中にうずくまっていたそれが、ゆっくりと立ち上がり近づいてくる。双眸を染め上げて

いるのは血の赤。屍の王にしてかつてのゴルベーザの配下、スカルミリョーネであった。
「なぜ、お前がここに――」再びゴルベーザは問うた。十年以上も前に試練の山の頂でセシルの剣によって滅せられたはずの魔物が、遠く離れたこの月で甦るのは道理に合わない。
「我は、土のスカルミリョーネ。これより先へ進ませるわけにはゆかぬ」色素を失った蓬髪を振り乱し、屍の王がたどたどしい口調で囁いた。
「止まれ」ゴルベーザは切っ先を向け、叫んだ。
しかしスカルミリョーネはその歩みを止めない。異様に長い腕を頭上高くに掲げ、のろのろと距離を詰めてきた。零れ落ちそうなほど飛び出た眼球が、ぎょろりと一回転したあとで、倒れたままのセシルに固定される。肉のただれたくちびるが、笑みの形に吊り上った。「見つけたぞ見つけたぞ。我にこのような仕打ちをした張本人を」
ゴルベーザは両者の間に自分の体を滑りこませた。「止まらぬなら、私がお前を滅する」
「これはゴルベーザ様」スカルミリョーネが、ようやく気づいたといったように立ち止まった。腐り果てたその顔から笑みが消えていた。「なぜ、そちら側においでなのです。ゴルベーザ様は、闇より生まれ、闇に生きるが宿命のおかた。ともに闘おうではございませぬか」
「――断れば？」
「ならば、生きながらにしてその臓腑を食らってやりましょうぞ」
スカルミリョーネの言葉が合図となった。ヤンとカインが左右に展開すると同時に、ゴルベーザは詠唱を開始した。ひんやりとしていた闇が、瞬時にして息苦しいまでの熱気を孕む。

大気に腐肉の焦げた臭いが混じったかと思うと、つぎの瞬間、スカルミリョーネの全身が真紅の炎に包まれた。〝業焔(ファイラ)〟である。炎をまといながらも、死人の王はゴルベーザへ突進した。その両側からヤンとカインが一気に間合いを詰める。
「やめろ」そうゴルベーザが叫ぶと、ふたりが拳を、あるいは槍を振り上げたままで足を止め、納得のゆかぬ表情を浮かべる。しかしゴルベーザはその理由を語ろうともせず、不動の姿勢のまま迫り来るスカルミリョーネを待ち受けた。
両者の距離が次第に詰まり、ついに互いの間合いに入った。
と――スカルミリョーネが、そこで立ち止まった。以前の主を亡き者にしようと異様なまでに長い両腕を振り上げる。「グオオオォルブエェザさぁまあぁぁぁっ！」吠えた。そこで動かなくなる。見えない力に抗っているかのように、まだ盛んに炎を上げつづけている体をぶるぶると震わせた。「魂まで腐り果てる前に、どうか……どうかご慈悲を」
ゴルベーザは、手にしていた剣でスカルミリョーネの体を両断した。
崩れ落ちたスカルミリョーネの顔に、笑みが浮いていた。「ありがたき……幸せ。醜い私を認めてくださったあなただけが、私の真の――」そこで息を引き取った。
「お前、こうなることがわかっていて俺たちを……」カインが言った。
しかしゴルベーザは応えなかった。かつての同志の遺体に「許せ」と小さく頭を垂れたあとで背を向けた。ローザの肩を借りて立ち上がるセシルの姿があった。そのセシルは、まだクリスタルに執着しているようだった。ふらふらとローザの元を離れ、宙に浮く水晶に近づく。指

先で触れようとした瞬間だった、まるでその役目を終えたかのようにクリスタルの表面にひびが入り、そして砕け散った。スカルミリョーネの遺体を食らいつづける炎だけが光源となった。ゴルベーザはセシルを背負うと、さらなる闇の中を無言で進んでいった。

7

「――罠だとは考えられないでしょうか」ハルは言った。

空色の髪をした少女を背に乗せたバハムートが魔物の群れを引き連れて消えたあと、一隊は船内へ戻り、今後の対策を協議していた。魔導船の外装の点検、補修作業のためにシドとルカのふたりは外へ出ていたが、それ以外の十三人全員がここに集まっている。

「いや、そうとも言い切れないだろう」とギルバート。

「そうね」リディアも、それに同意した。「幻獣神様の力をもってすれば、私たちをこの船ごと葬り去ることはむずかしくない。でも、それをしなかった……」

「では、なぜあの娘は、わざわざセシル様を狙うなどと言い残していったのでしょう」ハルは納得できない様子だった。「セシル様のお命を狙うのでしたら、私たちをここに釘づけにしておくほうが確実性が増すはずなのに」

その疑問に答えられる者はいなかった。

「あの娘の考えることなんざ、俺たちが理解できるわけねえだろ」エッジが笑った。「わから

ない――それでいいじゃねえか。わからないからこそ、何としても確かめに行く必要がある。動機としては十分過ぎると、俺は思うぜ」

そこに魔導船の補修作業を終えたシドとルカが戻ってくる。

エッジが真顔に戻った。「どうだ、船の損傷は」

「思った以上に軽微なものだね」答えたのはルカである。「応急処置程度しかできなかったけど、この月から逃げ出すことぐらいなら、今すぐでもできる」

「何だよ、あんだけの数がいながら、じつは大したことねえってわけか」パロムが言った。

「そうだといいんじゃがな」シドは大きく息を吐いた。

当惑の表情を浮かべるシドに、エッジが訊く。「――どうした」

「奴らは、本気でこの魔導船を壊そうとしていたのじゃろうか」

「どういう意味だ」

「おかしな言いかたになるが――まるで、わしらを怖がらせ、怯えさせようとしていただけじゃないかと思えてならんのだよ」

「餓鬼の遊びじゃあるまいし。俺たちを怖がらせて、どうしようってんだ?」

「わからん」シドは肩をすくめた。「わしらを船の外に誘い出そうとしていたのかもしれん。いずれにせよ、船体の損傷は違和感を覚えるほどに少なかった。そういうことじゃ」

「あ、あの……魔導船を壊したくなかった――そ、そう考えられないでしょうか」

言ったのはレオノーラである。何人かが、それに小さく頷いた。

「俺たちからこの船を奪おうって魂胆か」とパロム。
「は、はい。それなら、つじつまが合うと思われます」
「ならば、くれてやるか」エッジが言った。「罠であろうと、あの魔物の大群がセシルたちを追っていった事実は変わらない。放っておくわけにはゆかねえだろ」
シドは、床に座って顔を伏せたままのセオドアに近づくと、その横に腰を下ろした。しばらくそうしてから、隣の少年に問うた。「——残るか？」
訊かれた瞬間、セオドアは小さく体を震わせた。それはセシルたちを援護するための部隊に加わるか、あるいは魔導船を守るためにここで待機するか、との問いである。シドは少年を気遣い、その意思を尊重したいと思ったからこそ、敢えてそう尋ねたのであろう。しばらくの沈黙のあとで、セオドアは顔を上げた。「ぼくは行く」
「無理をすることなどないぞ」
「ぼくは行かなくちゃならない」セオドアはシドに微笑んだ。力ない笑みだった。「目を閉じると、父さんの悲鳴が聞こえてくるんだ」
「わかった」とシドは立ち上がった。「ならば、わしとルカのふたりは、ここで——」
「いや、全員で行く」エッジが老技師を遮った。
「魔導船を、ここに放置してか」
「俺たちの戦力を二分して、奴らに立ち向かえると思うか。セシルたちに追いつくことも、船を守ることもできなくなっちまうだろう。飛空艇技師のあんたとルカには申し訳ねえが、魔導

船なんざ奪われても取り返すことはできる。だが、セシルたちは――」
エッジに異を唱える者はいなかった。

8

魔導船をあとにした一隊はセシルたちを、そして少女を乗せたバハムートを追って旅をつづけていた。ほどなくして一際高い山の麓に巨大な洞窟を発見、中へと足を踏み入れる。
十五人もの大所帯での行動である、ふいの魔物からの襲撃に備える必要があった。先頭をゆくのは、エッジとアーシュラ。そのうしろにセオドアとシド。さらにパロムとポロム、レオノーラ、リディア、ハル、ギルバートとつづき、殿はルカとエブラーナの四人の忍が務めていた。被害を最小限に抑えるには、慎重に進んでゆく以外に方法はなかったが、エッジはそれをよしとはせず、後続を引き離さない程度に足を速めた。
「よもや、お前が行くと言い出すとは思わなんだ」シドが横を歩くセオドアに言った。
少年は前方を見据えたままで答える。「……ぼくは騎士ですから」
「だが、それならなぜ、真っ先にセシルとともにゆこうとしなかった」
咎めるような口調ではない。純粋に少年の心境の変化に興味を持ったというところであろう。
そう解釈したセオドアは苦い笑みを浮かべる。「怖かったんだ」
「――魔物が、か」

セオドアはそれに答えず、言った。「今もぼくでは、父さんの役に立てない。足を引っ張って、みんなをがっかりさせたくなかったんだ。それは、ぼくの血を汚すことになるから」
「あの短い旅で、ここまで変わるとはのう」
「――え」セオドアはシドの顔を見つめた。老技師の顔に暖かな微笑みがあった。少年は照れたように視線をそらせた。「カインさんのお陰だよ。まだ吹っ切れたわけじゃないけど」
シドは頷くと、セオドアに倣って前方を見やる。
これで何度目だろうか、先ほどとは周囲の景観が大きく変わっていた。下の階層に足を踏み入れるたびに、まるで異なる文明のただ中に放り出されたときにも似た眩暈を感じさせる。しかもそのいずれもが廃墟としか呼べないほど朽ち果てていた。だがシドは気づいている。下層へ進むごとにその文明の栄えていたであろう年代が、明らかに古くなっていくことに。月の中心部にいったい何があるのか――それを想像するのは愉しくもあったが、同時に不安も掻き立てられた。もしかしたら自分たちはセシルたちを追っているつもりで、じつはまったく見当違いの方向を目指しているのではないかと思えてもくるのだった。
「セシルはな――」シドは、そんな胸騒ぎを振り払うように言った。「自分の親の顔を知らずに育った。それが意味することが、お前にわかるか」
セオドアは、しばらく考えてから答えた。「自分にどんな血が流れているのかがわからずに育ったということ？」
「ああ、そうじゃ。導いてくれる者の不在が、あいつを惑わせ、不安にさせた。だからこそお

前が生まれたときに、セシルは喜びながらも深く悩んだのじゃろうな」

セオドアは黙っていた。悩む父の姿など想像できなかった。

シドはつづける。「真の父の姿を知らぬ自分が、果たして立派な父親になれるだろうかとセシルはいくつもの眠れぬ夜を過ごした。だが、セシルはそれでもお前に背を向けなかった、たった一度もな。親として我が子に向き合い、子のお前から理想の父親像を学ぼうとした。信じていたんじゃよ、自分に流れる血を、そしてお前に流れている血をな」

「父さんが、ぼくの血を信じてくれていた……」

「セシルは今も必要としておるぞ。お前が自分を信じてくれることを」

9

奈落に架けられた橋の両脇に、数え切れないほどのクリスタルが浮いていた。それは一切の光を宿しておらず、ただ惰眠を貪っているかのようにも見える。

足場は、人間がふたり並んで歩けるかどうかといった幅しかない。手すりの類は存在せず、誤って足を滑らせたら最後、底の見えない闇へ落ちて命を落とすことになりそうだった。ここで魔物と交戦することにでもなれば、無事では済まないだろう。橋は薄闇を貫くようにして遥か前方に伸びており、その終着点はまだ見えてこなかった。

橋を中ほどまで渡ったときのことである。右手のひとつと左手のひとつのクリスタルに突然、

淡い光が灯った。先頭をゆくゴルベーザが、そこで足を止めた。偶然などではないようだった。明らかにクリスタルは、一行の存在を感知して光を放ったのである。兄は弟を背負ったまま、再び歩を進めた。すると、その歩調に合わせるかのごとく、漆黒の沈黙を通してきたクリスタルが、つぎつぎと淡い光に包まれてゆく。

ゴルベーザのうしろをゆくローザが言った。「歓迎の証、かしら」

「あるいは、破滅への道標か」とゴルベーザ。

一つひとつは心細い明かりでも、それを灯すクリスタルが増えれば周囲の闇は次第に薄くなる。一行が互いの表情を読み取れるほどの明るさとなったところで、ふいにゴルベーザの背でセシルが暴れはじめた。喉を垂直に立て、髪を振り乱し、迸る感情をそのまま声にしたかのように吠えた。セシルは自分を背負うゴルベーザの首すじに肘を突き刺す。たまらず膝をついた兄の手から逃れ、剣を抜き放つとローザを振り返った。目に喜悦の光があった。

「――やめて、セシル」ローザが言ったが、夫の耳には届いていなかったようだ。

ローザの背後にはヤン、そのさらにうしろにカインが控えている。しかしこの狭い足場の上では、うかつに動くことはできない。ローザの無事を確保できても、当のセシルが足を滑らせて転落してしまえば、取り返しがつかなくなる。

「カイン殿――」ヤンが自分の背後にいる竜騎士に囁いた。「セシル殿を頼めるか」

「ああ、任せておけ」言うとカインは跳躍した。ヤンだけでなく、ローザやセシルまでも飛び越える。膝をついたままのゴルベーザのすぐ向こう側で着地した。

それを見届けるや、ヤンが動いた。「御免」と右手で震えるローザの腰を抱く。セシルの手にした剣が、クリスタルの投げかける淡い光を弾いた。振り上げた刃を掲げたまま、妻に斬りかかる。ヤンはローザを抱えたまま左へ反転。凶行に及ぼうとするセシルに背を向ける形となった。バロン王は止まらない。その勢いのまま、無防備なままのヤンに突進する。ヤンの左足が真っ直ぐセシルの腹部へ吸いこまれていった。虚を突かれたセシルはその一撃をまともに食らい、後方へ弾き飛ばされる。そこに待ち受けていたのがカインである。カインは気を失った親友を軽々と受け止めると、その手から凶器を奪い、セシルの腰へ戻した。

「ここからは、俺が引き受ける」セシルを肩に担ぐと、カインはようやく立ち上がったゴルベーザに背を向けて歩きはじめた。

ヤンの腕から解放されたローザは両手で顔を覆った。

理性の欠片も感じさせない、まるで獣のようなセシルを想い、泣いた。月の深部へと進むごとに彼の症状は悪化しているように思えてならない。だが、もはや後戻りをすることなどできるはずもなかった。こうしている間にも、月は容赦なく母なる大地に接近している。大勢の仲間たちのためにも立ち止まってはならないのである。

助けを求めるように、淡い光を放つクリスタルに目を向ける。そこで気づき、ローザは顔を伏せた。スカルミリョーネや、かつての敵がそこからつぎつぎと姿を現したように、もうクリスタルは自分たちを守ってくれる存在なのではないのだ、と。

10

セオドアの口から、言葉にならない声が漏れた。

心臓を握り潰されるような痛みとともに、暗転した視界に父セシルの苦痛に歪む顔が映し出される。耳鳴りがして、気が遠くなっていった。新鮮な空気を求めて口を開く。が、苦悶の声を抑えることができず、息を吸えない。ふと誰かが自分を呼んでいるような気がした。

「――セオドア！」ひとりの声ではない。仲間が口々に自分の名を叫んでいる。

悪夢から覚めたように、一瞬にして胸の痛みが消え去り、視界に光が戻ってきた。荒い息遣いではあるが、呼吸は正常にできている。大丈夫です、と言おうとして顔を上げた。目に飛びこんできたのは、多量の血で塗りたくられた地獄絵図だった。セオドアの意識が無意識の底に沈んでいたわずかな間、魔物たちからの奇襲を受けてしまったようである。

いったい、どこにこれほどの数の魔物が潜んでいたのか。決して広いとはいえない通路の前方と後方から魔物が押し寄せてきている。その組織だった動きは、空色の髪の少女が仕組んだものだと思われた。前後のどちらから奇襲を受けても対応できるようにと、あらかじめ魔道士たちを中央に配した陣形を取っていたことが幸いし、ここまで大きな被害は出ていない。しかし、それも時間の問題であろう。相手にしなければならない魔物の数が、あまりにも多過ぎた。このまま闘いつづければ、いずれ力尽きるのは明らかだった。

「――突破するぞ」エッジが喉も裂けんばかりに声を上げた。

一隊がそれに従い、少しずつ前進をはじめる。前後の魔物の壁の厚さを比べ、前方のほうが薄いとエッジは判断を下したのだろう。それを突き破れば光明が見えてくる。

「火力を上げて一気に行くぜ」

エッジの指示でシドが下がり、ルカとともに殿（しんがり）を務める。白魔道士のポロムとレオノーラが〝療光（ケアルラ）〟と〝防殻（プロテス）〟でふたりの援護をしつつ、追ってくる魔物に〝遅延（スロウ）〟。代わりにエブラーナの四人の忍が立ち位置を上げ、エッジとアーシュラの脇を固める。

魔物の壁を突破したが、これで終わったわけではない。闇の者たちは追撃の手を緩めようとせず、執拗に一隊のあとを追ってくる。奴らを振り切るまでは決して気を抜けない。

やがてそれぞれの区画を区切る扉が見えてきた。門と呼ぶことさえできそうなほど巨大なものだ。殿のシドとルカが通り抜けたのを確認すると、エッジとアーシュラがそれを閉める。

ルカに目配せしたあとで、シドが言った。「ここは、わしらが食い止める」

「ふざけるな」エッジが声を荒げた。「んなことできるわけねえだろ」

しかしシドも引こうとしない。「このまま敗走をつづけたところで何になる」

エッジはくちびるを噛んだ。

シドは、さらに言葉を継ぐ。「安心しろ。わしらに強い味方がおるんじゃ」

ルカの横に、二体の人形が立っていた。人形たちはエッジと視線が会うと、うやうやしくお辞儀をした。「カルコとブリーナだよ。あたしが改造したんだ」ルカが胸を張る。

「セシルとローザの子の顔を見るまでは、と思っていたが――」シドが笑った。「ここまで来

たら欲が出てな、セオドアの子を見るまでは死ぬつもりなんぞない」
エッジは大きく息を吐いた。「……わかったよ」言い争う時間などないのだ。
「心配するな。ある程度、時間を稼いだらお前たちを追いかける」
「シド、ルカ。――死ぬなよ」言ってエッジはふたりに背を向けた。
「――シド」セオドアの目が涙に揺れていた。
「よいか、セオドアよ。セシルを救えるのは、お前しかおらんのだ。……頼んだぞ」

11

シドとルカが魔物の追撃を食い止めている間に、決して少なくない距離を稼いだはずだった。立ちはだかる扉をくぐるたびに周囲の景観は一変し、そのたびに今度こそ人外の包囲網から逃れられたのではないかと思う。だが、どこから湧いてくるのか、人ならざる者たちはあらゆる影から這い出してきては、エッジらに爪と牙とを突き立てようとしてくる。
「ねえ、パロム」ポロムは弟に声をかけた。「まだあなたは賢者になりたいの?」
「――は?」一瞬、間の抜けた表情になったパロムだが、すぐに真顔に戻り、白魔道士を睨みつける。「なに言ってんだよ、こんなときに」
パロムの言う通りだった。間断なくつづく魔物の襲撃に誰もが疲弊し、それでも歯を食いしばって闘っている。その最中に訊くようなことではなかった。「わかってる」ポロムはそう

言ってから、なおも言葉をつづけた。「でも、どうしても聞いておきたいの。まだパロムは、尊敬するテラ様の跡を継いで賢者になりたいと考えてるの？」

パロムの〝炎獄（ファイガ）〟が魔物の群れを一掃した。「じっちゃんの跡を継ぐかどうかなんて、今の俺にはわかんねえよ。考えたこともねえ」

「でも、賢者にはなりたいんでしょ」

「当たり前だろ、それが俺の夢なんだから」

「そうだね」ポロムは微笑んだ。

「お前、どうしたんだよ。何か変だぞ」

「パロムは、ずっと変わっていないんだね」

「人なんて、そう簡単に変わるもんじゃない」

突然、ポロムは拳で弟の頭を殴りつけた。パロムは頭を押さえ、うずくまる。が、すぐに立ち上がると「いてて、何しやがんだよ」姉に食ってかかった。

「ほんとだ」ポロムの目に涙が浮かんでいた。

パロムは大きく息を吐くと、ポロムに背を向けて新たに現れた魔物の一団へ呪文の詠唱を開始する。わずかな間を置いて〝氷塊（ブリザガ）〟が発動。「お前は、何でそんなに必死なの」

「――え？」ポロムは弟の背中を見つめた。

「無理に変えようったって、うまくいくわけねえだろ。どんだけ時間が経とうとも、お前はお前なんだから」

一隊は、魔物の襲撃をかわしながら、なおも前進をつづけている。つぎの扉が見えてきた。あの向こうにも、恐らく魔物たちが待ち受けているのだろう。だが、進むしかなかった。

扉をくぐったところで、パロムが足を止めた。「わかってんなら、止めんなよ?」

ポロムは、その言葉の意味が理解できなかった。

エッジがそれに気づき、声を荒げる。「てめえ、何する気だ」

「あんたも気づいてんだろ? ここらで時間稼ぎをしとかないと、さすがにまずいって」ミシディアの黒魔道士は笑う。「心配すんなって。俺にとっておきの秘策があるんだよ」

レオノーラが、パロムの横に立った。寄り添うようにして、エッジを見つめる。

「——クリスタルのお導きか?」パロムはレオノーラに訊いた。

「い、いいえ。これは、わ、私の……意思です」

「声が震えてるぜ」

「む、武者震いに決まってるじゃないですか」

「へっ。はったりも、なかなか様になってきたじゃねえか」パロムの顔に笑みが宿った。

「は、はい。だって、パロムの弟子ですから!」レオノーラの顔にも笑み。

パロムは、そこでポロムを見やる。ポロムも弟を見た。

「そういえば昔、親の顔を知らないことを悲しんでたよな」パロムが言った。

「うん」ポロムは涙を拭いながら頷く。

「きっと親父は、俺のように生意気だったんだろうな。で母親は多分、お前のように口うるさ

かったんだと思う」
「うん」
「いいか、俺たちは変わる必要なんかない。自分を正直に貫いてりゃあ、きっと〝そこ〟までたどり着ける。心配すんな、血が導いてくれるさ」
ポロムは泣きながら、パロムの頭を小突いた。
「ああ、その調子だ」パロムはにやりと笑い、「セオドアたちを頼むぜ」
パロムとレオノーラは背後の扉を振り返ると、そこに両手を当て、力いっぱい押した。扉が閉まると同時に、そのままの姿勢で呪文の詠唱をはじめる。エッジが、両の拳を握りしめ、視線をそらせた。ふたりの肌から、次第に生気が失われていった。〝石化(ブレイク)〟の呪文である。
何かが激突するような音がして扉が激しく揺れた。これならば、パロムの言うようにしばらく時間を稼げそうだった。ふたりの決意を無駄にすることはできない。
「パロム、レオノーラさん、必ず戻ってくるから」ポロムはそう誓うと、顔を伏せるエッジに向き直った。「行きましょう、セシルさんの元へ」

12

先刻までの激闘が嘘のように周囲は静まり返っていた。
薄闇に支配されたその小部屋にいるのは、ギルバートとハルのふたりだけである。

いかに相手の追撃を振り切ったところで、最奥部を目指す限りは新たなる魔物との遭遇は避けられなかった。もちろんシドやルカ、そしてパロムとレオノーラの行ないが無意味だったわけではない。彼らの自己犠牲がなかったら、一隊はすでに全滅の憂き目に遭っていたはずである。しかし、まともに相手をするには魔物の数があまりにも多過ぎた。仲間が減ってゆくたびに、一人ひとりの負担が大きくなっていった。その結果が、これだった。

なおも溢れ返る魔物の群れに、ギルバートとハルは仲間の姿を見失い、孤立した。自分たちの身を守ることだけで精一杯だった。追いすがる魔物を何とか倒して逃げこんだのが、この小さな部屋だったのである。他に扉はなかった。見つかったら最後、逃げ道はない。それでもギルバートは敗走を重ねることを拒むかのように、床に腰を下ろした。ハルもそれに倣う。もうふたりに余力は残っていなかった。

「すまなかったね、君まで巻きこんでしまって」ギルバートは言った。

「この月へ来たことをおっしゃっているのでしょうか」ハルが首を傾げて訊く。

「それ以外に何があるというんだ」

ハルは小さく首を振った。「私は自分の意思で来ました。ギルバート様の秘書だからではなく、母なる大地を愛し、守る者のひとりとして」

「そうか……」そのギルバートの呟きを最後に、ふたりは沈黙した。ひんやりとした大気に、触れ合う肩だけが温かかった。ややあってからハルが口を開いた。

「ですが、そう言っていただけるのならば、ひとつだけお願いがあります。私のために……私

だけのために歌ってもらえないでしょうか」
ギルバートの前には、血にまみれた竪琴があった。ダムシアンの王は、それをただ見つめるだけだった。命よりも大切にしていたそれに、手を伸ばそうとしない。
「私は、もう歌うことを辞めようかと思ってたんだ」
「――どうしてです」
「吟遊詩人は過去に生きる者。でも私は、今この瞬間を大切にして生きていきたいんだ」
「ギルバート様……」
「過ぎ去ったことに、いつまでもしがみついているわけにはいかないだろう。過去を忘れるわけじゃない。過去を否定するわけでもない。でも、いつまでも思い出にしばられていたら、本当の明日はやってこない……そんなふうに思えるんだ。このままだと、まるで誰かの思い出の中、定められた道を歩いているだけじゃないか、とね」
ハルは、前方の薄闇を見つめたまま、静かに男の言葉に耳を傾けている。
ギルバートはつづけた。「私は、争うことが嫌いだった。だが、王子として生まれたことで陰謀、裏切り、そして闘いの中に身を置かなくてはならなくなった。そこには、輝ける未来などない。そんな閉ざされた未来を否定するために、私は過去を選んだ。いや、そこに逃げこんだというべきかもしれない。そう、私は自分を傷つけたくなかっただけなんだ。そのために、多くの人が傷つくことになったのに――それに気づかないふりをしていた」ギルバートは微笑んだ。「勇気を持てと、みんなに言われたよ。勇気……わかっていたつもりだったけど、その

本当の意味を今になって、ようやく理解した気がするんだ。だから――」
ギルバートは立ち上がった。ハルに手を差し伸べ、その細い体を引き上げる。「だから、私はもう逃げない。何としても君を守り、故郷に戻る」
「それがダムシアンを統べる王としての使命――」
「ちがう」

13

「セオドア、どうだ――？」
ふいにエッジに問われ、少年は戸惑った。間断なく押し寄せる異形の群れに息をつく暇もない。思考は空転をくり返すばかりで、自分が何を求められているのかも理解できなくなっていた。だから無言のまま、襲いかかってくる魔物をひたすら斬り捨てるだけだった。
「まだセシルの気は感じられねえのかってことだ」
そうだ、とセオドアは思った。肉体も精神もすでに限界を超えているが、にも関わらず、こうして死力を振り絞って闘っていられるのは、次第に近づきつつある父の気配に勇気づけられているからなのだろう。「多分、もうすぐです」
「そうか。ならば――」エッジの顔に笑みが浮いた。「ここは俺に任せて先を急げ」
「エッジ！」声を上げたのはリディアだった。「無理よ、ひとりでなんて……」

「へっ。エブラーナの王を甘く見んなよ」
「そういう問題じゃないわ」
「ならば、私がお供いたしましょう」アーシュラが名乗りを上げた。
エッジは答えなかった。
アーシュラが言った。「エッジ様は、たったおひとりで我らの未来を背負おうとなさっている。それができるのは、ご自分だけだと思っていらっしゃる。ここは任せろですって？　私だって未来のために何かしたい。祖国の、世界のためならば、この小さな命を投げ打つ覚悟はできています。私はファブールの王、ヤンの血を引く娘なのです」
「俺はヤンに、お前を頼むと言われたんだ」
「あなたも私に、敵に背を向けろとおっしゃるのですか……」
「馬鹿いうな。ヤンは、このためにお前を残したんじゃねえか。俺はそう解釈してるぜ」
「――え」
「ヤンが、どうしてお前をこの月に連れてきたと思ってんだ？　お前のことが心配で、傷つけたくないなら、奴はお前を城に残してきただろうな。だが、あいつはそうしなかった。それはお前を頼りにしてるからだ」
「父上が……私を――」
「人間はな、少なくとも一生に一度は必ず、こいつがいなきゃ駄目だって瞬間がある」
「今が、その瞬間――」アーシュラが涙を拭った。美しくも凛々しい顔立ちに戻った。

「へっ、いい顔してるじゃねえか。あてにしてるぜ」
「それなら、私の力が必要になります」ふたりの間に割って入ったのはポロムだった。「誰があなたたちの傷を癒すというのでしょう」
「——三人とも、やめて！」リディアが泣き出した。「もう誰も失いたくない。三人が残るというなら、私は行かない」
「リディア、そういうわけにはいかねえんだよ」
「守ってくれるって約束したじゃないの。——あれは嘘だったの？」
エッジは、それに答えなかった。ゲッコウに目配せをしただけだった。
エブラーナの忍のひとりであるゲッコウは、リディアに近づくと「御免」頭を下げたあとで彼女の腹部に拳を叩きこんだ。その一撃でリディアは気を失う。忍の男は、崩れ落ちた召喚士の体を担ぎ上げると、エッジに向き直った。「ご武運を」
「リディアとセオドアを頼んだぜ」
「この命に代えても」

14

リディアが意識を取り戻したとき、すでに周囲の光景が一変していた。それで彼女は、ここがエッジたちと別れた場所から遠く離れているのだと知ったのだろう、また涙した。ひざま

ずいて頭を垂れる四人の忍に感情をぶつけることはなく、ただ泣く。
そんな彼女の涙を干上がらせたのは、前方に生じた気配だった。
これまでのように群れをなした魔物たちの発するものではない。
忍たちもそれを気づき、リディアを守るようにして展開する。薄闇の中から抜け出してきたのは、ふたつの人影。互いの間合いに入る直前でその足を止めた。ひとりは老人のように見えた。漆黒の法衣を目深に被っているが、発散する強烈な殺気は隠し切れない。もうひとりは女性である。老人よりも頭ひとつ分大きく、同じように法衣をまとっていた。吊り上ったくちびるが、どこか見る者を不安にさせる妖しさを秘めている。
リディアが息を呑んだ。「幻獣王様、王妃様――」
『久しいな、リディアよ』老人が囁くときの口調で言った。『待ちくたびれたぞ』
『お友達の数が、ずいぶん減りましたね』女が何かをおもしろがるように言った。
エブラーナの忍たちが、いつでも動けるようにと浅く腰を落とした。
気づいたリディアが声を上げる。「やめて。幻獣王様や王妃様とは闘えない」
それはリヴァイアサンやアスラを相手に生き残れないという意味ではない。幻界を第二の故郷と考えるリディアにとって、ふたりは両親にも等しい存在なのである。いかに空色の髪をした少女に操られて襲いかかってきたとしても、それは変わらない。
だが四人はリディアの言葉に耳を貸そうとはしなかった。主の命令は絶対なのだ。むろん、彼女の自由を奪うつもりなどはなく、できる限りその意思を尊重しようとは思っていた。しか

しそれがリディアの命を脅かすものなれば話は変わってくる。四人は、何としてもリディアを守らなければならない。それでどれだけ彼女に恨まれることになったとしても。

「お願い、やめて——」懇願するように再びリディアが叫んだ。今度はゲッコウやザンゲツたちにではない、殺意を隠そうとしない幻獣王と王妃に対してだった。

セオドアは、自分だけがそこから取り残されているように感じていた。リディアと幻獣たちの間には、当然のことながら血のつながりなどない。それなのに彼女は幻獣王と王妃を本当の自分の両親のように思っている。そして四人の忍は、自分たちの主の命を遂行するため、死さえも厭わない。すべては〝絆〟なのだ、とセオドアは思った。

なぜ自分は、己の体に流れる血に、こんなにこだわっていたのだろう。どうして親子の絆を信じようとしなかったのだろう。

自分にかけられる過剰な期待に背を向けるのではなく、立ち向かわなくてはならない。そう、逃げ出しては何にもならないのだから。父が、母が自分を待っていてくれるのだから。

——と、リディアがセオドアに耳打ちした。「あなただけで逃げて」

「で、でも……」少年は口ごもった。

確かにここで闘えば、命を落としてしまうかもしれない。一刻も早く父の元へ向かいたい気持ちはあるが、自分だけが背を向けるのには抵抗があったのだった。

「心配はいらないわ」リディアは言った。「幻獣王様や王妃様に、私の気持ちは絶対に伝わる、伝えてみせる。だから、あなたも自分の気持ちをセシルに伝えに行って」

その表情にはまだ暗い翳が差していたが、セオドアは気丈に振舞うリディアの気持ちが痛いほど理解できた。ふと見まわすと、エブラーナの四人がこちらを見つめていた。どの顔にも悲壮感などない、暖かな笑顔ばかりがあった。それでセオドアの決心が固まった。
「必ず、父のところにたどり着きます」セオドアは、走り出した。
たったひとりではあったが、心細さなどない。たくさんの仲間の期待が、背中にのしかかっている。今はその重さが、どこか心地よかった。

15

果ての見えない深い闇が、月の底に澱んでいた。切り立った崖から恐るおそる足元を覗きこんでみるが、すぐに眩暈にも似た感覚を覚え、ローザは顔を背けた。
その闇は、死の誘惑に満ちている。血と涙に彩られた現を忘れ、身を委ねたくなる魅力があった。死は、いかなる者にも平等である。身分の差を越えて、等しく永遠の安息をもたらしてくれるのだから。心に巣食う絶望を振り払うには、ここで己の命を捧げるしかないようにも思えてくる。そんなローザを思いとどまらせたのは、カインの声だった。
「――あきらめるな」
ローザは竜騎士を見上げると、のろのろと立ち上がった。彼らのいる崖から、一本の巨大な橋が彼方の闇へと伸びている。その両側には、光をたたえた無数のクリスタルが宙に浮いてい

た。その光景を、ローザはどこかで見たことがあるような気がした。すぐに思い当たる。そうだ、セシルが突然、錯乱し、私に剣を向けたあの場所に酷似している。

白魔道士は、小さく首を振った。先へ進むには、この橋を渡るしかないことは理解していたが、どうしてもその一歩を踏み出す勇気が湧いてこなかった。再びセシルが狂暴化するのを恐れているというわけではない。ローザの本能が告げているのだ、この先の闇の中に、冷酷な現実が横たわっていることを。ローザはまた首を振った。瞳に浮かんでいた涙が、それで零れ落ちる。助けを求めるように、仲間たちの顔を見やった。カイン、ヤン、そしてゴルベーザ。どの顔にも疲労の色が濃く、絶望に沈んでいた。希望の光など、どこにも見出せない。カインの肩に担がれているセシルは、虚ろな目を宙に彷徨わせているだけだった。

このままここに留まっていても、忍び寄る闇に生きながらにして魂を食われてしまうだけだろう。そう判断したのか、カインがみなに頷いた。「俺たちにできるのは、進むことだけだ。わずかでも可能性が残されているのならば、それを信じてみたい」

ゴルベーザが、ヤンが頷いた。ローザだけは、そうしなかった。涙を拭うこともなく、くちびるを強く噛みしめて沈黙していた。ここから一歩も動きたくなかった。

「――セオドアが待っている」ふいにゴルベーザが言った。

その一言が、ローザの心を強く打った。そうだ、あの子が待っている。今でも私たちを信じて待ちつづけている。その純粋な気持ちを裏切るわけにはゆかなかった。「行くわ」ローザは何とか声を絞り出した。心を覆い尽くす闇は依然として晴れなかったが、しかし最初の一歩を

踏み出すには十分過ぎる力は湧いてきたように感じられた。
カインを先頭に、一行は巨大な橋を渡りはじめた。
ローザの不安をよそに、セシルは暴れ出さなかった。その素振りさえも見せない。目は開いているが、カインの歩調に合わせ、垂らした四肢をだらしなく揺らしているだけである。
橋を渡り切った先にあったのは、壁だった。
「行き止まりか」ヤンが言った。それは、この橋を再び渡らなければならない、ということだった。ここまでに枝分かれした通路は数え切れないほどあったはずだ。いったい、どこまで戻ればいいのか——それを考えると、心が折れそうになった。
そのときである。突き当たりの壁の前に闇が凝った。それは一行が見つめる間に複雑に形を変え、やがて色彩を得た。現れたのは、豪奢な玉座。そこに腰掛けていた男が、ゆっくりと立ち上がる。邪悪な気配を隠そうともしていなかった。
一行は、我が目を疑った。男が身にまとう漆黒の甲冑に見覚えがあったからだ。カインの肩から滑り降りたセシルも、その姿を目にして少なからず衝撃を受けているようだった。
「どうしてセシルが、ここにも——」ローザの声は震えていた。
「我らの行く手に現れた数々の魔物と同様に、こやつもクリスタルから産み出されたのであろう」とゴルベーザ。「間違いあるまい、あの娘は我らの〝過去〟を盗んだのだ」
「クリスタルを奪ったのは、そこに記憶されている過去を欲したからか」カインが言う。
ヤンは頷いた。「本物のセシル殿ではないとわかれば、それだけで十分」

「待って」ローザが声を上げた。「本当に大丈夫なの？　この暗黒騎士は、セシルの過去よ。過去を消せば、現在も消えてしまうかもしれない」

「ローザ殿、これは単なる幻影。ここまでに我らが倒してきたスカルミリョーネをはじめとする魔物と、言わば同様の存在なのですぞ。ご心配召されるな」

ヤンの言葉に、しかしローザは引き下がらなかった。「私たちは、実際に四天王を倒したわ。でもセシルはちがう。過去も現在も、まだ生きている。一度たりとも死んでない。今なお生きつづけている過去なのよ」

「では、どうすれば――我らは、ただ指をくわえて見ていることしかできないのですか」

ヤンの問いに、ローザは答えることができなかった。

ふいに暗黒騎士が動いた。いつの間にかその手に漆黒の刃が握られている。狙いは呆然と立ち尽くすセシルだった。闇色の光が閃く。ゴルベーザの剣が、それを受け止めた。しかしローザの言葉が心に重くのしかかっているのだろう、反撃に転じることができない。

暗黒騎士が嗤った。後方へ跳躍して間合いをはずすと、両手で握った柄を右の肩口へ引きつける。そのままの姿勢で切っ先を前方へ向けた。

「――いかん」カインが叫んだが、間に合わなかった。

切っ先から放たれた闇の波動が一行を呑みこんだ。ゴルベーザがセシルの前に立ち、両手を広げる。しかし、庇い切れるものではなかった。光の存在を否定するその衝撃波を食らい、セシルは絶叫、そして両膝を地面につくと、そのまま崩れ落ちた。

ローザがセシルに駆け寄る。それを守るかのように、ゴルベーザとカイン、そしてヤンが暗黒騎士の前に立ちはだかった。彼らは、そうしたところで何が変わるわけでもないのを理解していたが、他にできることがなかったのだ。

暗黒騎士の動きが次第に大胆になっていった。三人が一切、反撃してこないのだから当然のことである。無造作に間合いを詰めては、渾身の力をこめた一撃を見舞ってくる。そのすべてをかわすことなど不可能だった。闇色の刃が真紅に染まり、辺り一面に決して小さくない血だまりをいくつも作ってゆく。ヤンが膝を折り、カインが大地を舐め、ゴルベーザは立ち上がれなくなっていた。残るは涙に暮れるローザと、気を失ったままのセシルだけだった。

「お願い、もうやめて」

「お前が俺の未来を狂わせたのだ」押し殺した声で男が言った。「お前がいなければ、俺は俺を捨てず、俺は俺のままだった。お前は今、ここでその罪を償わなければならない」

自分たちを見下ろす暗黒騎士の足に、女はすがりついた。

心臓を握り潰されるほどの殺気を感じ、ローザは暗黒騎士から身を離した。頭上高くに掲げられた剣が目に入る。大気を切り裂く音がしたと思った瞬間、ローザは自分の胸のあたりに焼けつくような痛みを覚えた。飛び散る血に、自分の死を予感した。全身から力が抜けていき、そのままうしろに倒れる。焦点が合わず、視界が霞む。これから起こる惨劇を見ずに済むのは果たして幸運なのだろうか、などとローザは考えていた。

暗黒騎士が切っ先を下に向けたまま、剣を振り上げる。その動きが止まった。

いつの間にか、目の前にひとりの少年が立っていた。「――父さん?」



真っ直ぐな視線に見つめられ、暗黒騎士はたじろいだ。

「父さん……なんでしょ？　ぼくだよ、セオドアだよ」セオドアは倒れているセシルではなく、殺意を漲らせた暗黒騎士に言っていた。

「ちがう、俺はお前の父親などではない」

「ちがわないよ。あなたは、ぼくの父さんだ」少年の顔に笑みが宿った。「ああ、シドが言ってたのは本当だったんだ」セオドアは微笑みながら泣いていた。

「俺は仲間を斬った。愛しているはずのローザも斬った。つぎは、お前の番だ」

「父さんは、そんなことしない。絶対にしない。ぼくは、そう信じてる」

「——黙れ！」暗黒騎士が剣を振り下ろそうとした瞬間、大地が揺れた。

大気が張り詰めたかと思うと、鼓膜を突き破りそうな高音が満ちる。橋の両側に浮かんでいた無数のクリスタルが振動をはじめた。淡い光をたたえたその表面に、つぎつぎと亀裂が入る。音が消えた刹那、英知の象徴たる水晶が、残らず破裂した。四散した光はしばらく宙を漂っていたが、やがて大きな意思に導かれるようにして動きはじめる。小さな光の糸が次第に激流の激しさを伴って、倒れたままのセシルに注がれた。

セシルは、ゆっくりと立ち上がった。その目に理性の光が戻っていた。

暗黒騎士が、意味をなさない叫びとともに聖騎士（パラディン）に斬りかかった。その漆黒の刃を、セシルは抜き放った剣で一閃する。暗黒の剣は根元から折れ、主を失った刀身が地面に落ちる。

セシルは、そのまま動きつづけた。返す刀で、暗黒騎士に突進。

「──やめて」両者の間に、セオドアが割って入った。父セシルに向かって、首を小さく横に振る。「この人も、ぼくの父さんなんだ。だから──」過去のセシルを振り返った。暗黒騎士が肩を震わせていた。泣いているのだろうか、とセオドアは思った。

「そうか、俺は間違っていなかったのか。俺は正しき道を歩んでいたのだな」

暗黒騎士の言葉に、セシルは頷いた。「ああ、君がいたからこそ、多くの仲間たちと出会い、私はローザと結ばれ、セオドアを授かることができた」

「だが俺は、しょせんは過去に生きるしかない。在ってはいけない存在なのだ」

暗黒騎士が、セオドアとセシルに背を向けた。宙に浮く、漆黒のクリスタルがあった。男はそれをわしづかみにすると、「ありがとう、セオドア」握り潰した。

クリスタルが割れると同時に、暗黒騎士の姿が消えた。

「私からも礼を言おう。ありがとう、セオドア」父が息子の肩に触れた。

「──父さん」少年の目から涙が溢れた。

セシルは微笑んだ。「……ずいぶんと強く、逞しくなったな」

ふたりは手分けして倒れている仲間たちに治癒の呪文を詠唱した。幸い、みな命に別状はなく、ほどなく元気を取り戻した。

「みんな、本当に済まなかった」セシルは頭を垂れた。

「久しぶりだな、セシル」とカインは笑った。

「よくぞ戻られました、セシル殿」ヤンの目に涙が光る。

「きっと帰ってきてくれると信じてた」ローザは夫の胸で泣いた。
「兄さん」セシルはゴルベーザに言った。「兄さんの声が、ずっと聞こえていました。その声のお陰で、ぼくは抜け殻にならずに済みました」
ゴルベーザは、しかしセシルに背を向けた。「挨拶など、どうでもいい」
五人は、彼の視線を追った。行き止まりであったはずの壁がなくなっており、代わりに巨大な穴が穿たれていた。そして、そこにひとりの少女が立っていた。
その娘が目を細めた。「再び光を取り戻すとはな。実験は、どうやら成功のようだ」
「――実験だと？　貴様がセシルから光を奪ったのか」カインは身構えた。
「しかし……いったい、何のために」ヤンが訊いた。
「劣等種が理解できるとは思えぬがな」少女は嗤った。「それでも知りたいと言うのならば、止めはしない。この先を進むがよい。我らが主が、喜んでお前たちを出迎えてくれることだろう。特に――光を取り戻したセシル、お前をな」
言い残して、空色の髪をした少女は姿を消した。
「行こう」セシルが新たに現れた洞窟へ足を踏み入れようとしたときだった。
「待って」セオドアが、先刻渡ってきた橋を振り返った。「みんなを助けに戻らないと」
「そういえば、あなたは魔導船で待機していたはずよね。――何があったの？」
ローザに訊かれ、セオドアはこれまでのあらましを話して聞かせた。
「戻ろう。みんなを見殺しにはできない」セシルが言った。

「我らに猶予がないのを忘れたか」とゴルベーザ。

その通りだった。こうしている間にも、月は彼らの故郷へ確実に近づいている。まるで大地を食らおうとしているかの如く。もしもそうなれば、いったいどれほどの人々の命が失われることになるのか想像もつかなかった。だが仲間を見捨てるわけにもゆかない。

しばらくの沈黙のあと、ヤンが口を開いた。「私が行こう」

「しかし、ひとりでは――」

セシルの不安げな表情を、ヤンは豪快に笑い飛ばした。「ご心配召されるな。バブイルの塔の巨大砲を爆破したときも、そしてあのリヴァイアサンの大渦に二回も呑まれながらも私は生き残った。必ずや仲間たちを救出し、そなたらのあとを追う」

セシルの差し出した手を強く握ったあとで、ヤンは走りはじめた。すぐにその背中が見えなくなった。「どうか、無事で」セシルは祈らずにはいられなかった。

16

その扉は、これまでに目にしたものとどこか異なっていた。

大きさは人の身の丈のおよそ二倍、質素ではあるが堅牢という印象だった。鈍い光を放つ金属でできている。エブラーナの四人の忍たちが力を合わせても開けることができない。どうやら何らかの方法で閉ざされているようだ。だがリディアはあきらめようとしなかった。この向

こうに何があるのかはわからないが、どうしても先へ進まなければならないのだ。
道標となったのは、幻獣王と王妃の助言である。
セオドアがセシルたちの元へ向かったあと、リディアたちは操られていた幻獣王たちの正気を取り戻そうとした。幻獣王はリヴァイアサン、王妃はアスラと、本来の姿となってリディアたちに襲いかかる。それでも五人の心が折れるようなことはなかった。気が遠くなるほどの長い説得の末、突然、大地が揺れた。それがきっかけとなり、リディアの声が幻獣に届いたのだった。幻獣王たちは、リディアと四人の忍に礼を言ったあとで、この扉の存在を教えた。ここにリディアたちの求めているものがあるはずだ、と。
「なかなか手強い扉ですな」と老忍ザンゲツがため息をついた。
「恐らくは、魔法による封印が施されているのでしょう」とゲッコウ。
クノ一が、それに頷く。「差し支えなければ破壊するのが一番の早道かと」
「でも、それじゃあ敵に感づかれてしまうかもしれません」少年のツキノワは頭を抱えた。
四人は、結論を求めてリディアを見やる。
だが、ミストの召喚士の視線は扉に注がれていなかった。大きく見開いたその目が見つめている先を追った四人は、彼女と同じように驚愕の表情を浮かべた。
上空から接近する影があった。五人が見つめる中、その巨竜が急降下をはじめる。細部まで目視できるほどの距離で、竜は吠えるようにして鋭い牙の並ぶ顎を開いた。そこから吐き出されたのは、人ひとりを軽々と呑みこむほどの大きさの火球だった。

「――逃げて！」リディアは叫んだ。五つの影が四方へ散った。
五人のいた場所に火球が着弾し、大地を深く抉り取った。そこに砂塵を上げながら巨大な竜が降り立つ。その背に乗っていた空色の髪をした少女が、竜の傍らに飛び降りた。
「リディア様、この竜はもしや――」ザンゲツが訊いた。
「バハムート……幻獣神様よ」
リディアが答えると、忍たちは揃って眉根を寄せた。幻獣王と王妃の正気を戻すときにも命懸けだった。だが今度はさらに強大な幻獣神を相手にしなければならない、しかもあの少女までもが現れたのだ。どこからか死の足音が聞こえてくるようだった。
「ここまで来るとは想定外だった」少女が言った。「だが、すでに実験は完了した」
「実験ですって？」リディアは訊いた。
「劣等種には関係のないことだ」
「ふざけないで、私たちはここまでに何度も死にかけたのよ」
「ふん、まるで自分たちの力で生き延びたような口振りではないか」
「――え」リディアは言葉を失った。
少女は嗤った。「これまでのように生かさず殺さずというわけにはゆかない。お前たちの役目は、すでに終わったのだ」双眸が漲る殺意にぎらりと光る。
「生かさず殺さずだと――？」ゲッコウが反応した。「我らの命を弄んだと言うか」
少女は答えなかった。代わりにバハムートが吠えた。それが闘いの合図となった。

四人の忍は、幻獣神には目もくれなかった。目指すは少女の首だけ。小細工なしの真っ向勝負である。体格に勝るゲッコウが正面から突進する。その背後、まるで影のように付き従うのは小柄なツキノワ。イザヨイとザンゲツは大きく左右に展開し、そこから一気に間合いを詰める。と——ゲッコウが走りながらその岩のような体を沈めた。うしろを駆けるツキノワが、彼の丸めた背に飛び乗り、さらに頭上高くへ跳躍した。四方から攻められては、さしもの少女も手が出せないと思われた。娘の背後に控えてきたバハムートが、喉を垂直に立てた。

大気がびりびりと振動する。それでリディアは気づく。「——駄目、逃げて！」

竜の顎が巨大な真紅の光を宿したかと思った直後、その光が少女を包みこむ。四人の忍は異変を感じつつも、動きを止めなかった。少女のまとう熱球が収縮を開始した。それに伴い、内包する熱量が急激に上昇、臨界点へ達すると同時に視界を白く染め上げる。

耳をつんざく爆発音が、召喚士の悲鳴をかき消した。

果たして少女の指示であったのか、バハムートは自分を使役する主に向けて〝極核(メガフレア)〟を放ったのである。深く穿たれた地面から、白い煙が噴き出していた。そこから、いくつもの苦悶を意味する声が聞こえてくる。四人の忍は途中で動きを止めることができず、爆発に巻きこまれてしまったようだった。リディアは現実を拒絶するかのように小さく首を振った。

白煙が去ると、そこに少女が立っていた。衣服のところどころが焼け落ち、白い肌を晒していた。今では空色の髪もくすみ、乱れている。だが目から殺気は消えていなかった。

もはや動けるのは、リディアだけになってしまっていた。

「幻獣神様、お願いです。どうか目を覚ましてください」リディアは涙声で訴えた。
「無駄だ」少女が冷淡に言い放つ。「お前の声は、こやつには届かぬ」
リディアは、少女を見つめた。その瞳の奥にある何かを探り出そうとするかのように。しばらくしてから緑の髪をした召喚士は口を開いた。「——嘘だわ」
少女の目が、すっと細くなる。
リディアはつづけた。「あなたは、闘いが長引くのを恐れていた。幻獣神様が私の呼びかけに応えて自分を取り戻すのを、どうしても避けたかった。だから自分の身を犠牲にしてでも一気に勝負をつけようとしたんだわ」
「劣等種にしては想像力は逞しい」
「私が気づかないと思っているのね」
「——何が言いたい」
「幻獣神様の〝極核(メガフレア)〟を受けて無事でいられるはずがないわ。強がっているけど、私の目は騙せない。立っているのがやっとのくせに」
「笑止。お前たちが脅威と思っている幻獣でさえ、我らマイナデスにしてみれば劣等種に過ぎぬ。このような下等生物など、お前たちを始末したあとに滅ぼしてくれよう」
「本気で言ってるの？」
「くどい」少女が叫んだ。
リディアの顔に笑みが浮いた。「ありがとう。私が聞きたかったのは、その言葉よ」言い終

わるや、呪文の詠唱を開始する。足元から魔法風が吹き上がった。
「焼き払え」少女が命じた。その指が指し示すのは、リディアである。だがバハムートは動かなかった。「どうした下等生物。先ほどの技で、この娘を焼き払ってしまえ」それでも幻獣神は微動だにしない。彫像の如く動きを止め、詠唱をつづけるリディアを見つめていた。
「この役立たずめ」少女は舌打ちした。間もなく現出する魔法の効果から逃れようと、大地を蹴った。その足首を何者かが強くつかんだ。ゲッコウだった。「おのれ！」少女の右の掌が瞬時にして発光した。その光を瀕死のゲッコウへ叩きつけようと、頭上に掲げる。振り下ろすことはできなかった。その手首をつかむ者があったのだ。
「——ヤン様」ゲッコウの顔に笑みが浮いた。
つぎの瞬間、リディアの魔法が発動した。逆巻く業火が少女の姿を呑みこんだ。ゲッコウとヤンが慌てて娘の足首を、あるいは手首を離す。少女は炎の勢いに翻弄され、死の舞踏を踊った。全身を焼かれながら言った。「なぜだ、劣等種如きに——」
ゲッコウがゆっくりと起き上がる。他の三人の忍も、ヤンの手を借りて立ち上がった。
「ヤン様、最後の一撃……このゲッコウめにお譲りいただけませぬか」
「理由は？」
「誓いを立てたからにございます。流れ星の落下跡を訪れたときに、この娘とファブールの僧兵が争う場面に遭遇いたしました。本来であれば僧兵に加勢し、ともに闘うべきでありましょう。しかしながらそのときの自分は密偵の身。ただ成り行きを見守るだけでございました」

「では、あの墓はそなたが……」
ゲッコウは深く頭を垂れた。「出過ぎた真似をいたしました」
「いや、心から感謝している」恐縮する忍に、ヤンも頭を下げた。それから、今にも崩れ落ちそうな少女へ視線を転じた。「そなたに任せよう」
「ありがたきお言葉」ゲッコウが少女の前に立った。
少女は声を張り上げた。「バハムートよ、聞こえぬのか。この者どもを焼き払え」
巨竜は、やはり動かなかった。
「無駄だわ」リディアが言った。「幻獣を道具としてしか見ないあなたの声は、絶対に彼らには届かない。畏敬の念を抱くことのないあなたは、召喚士としては失格よ」
ゲッコウが固めた拳を突き上げた。顎を撃ち抜かれた少女は宙を舞い、そのまま地面に激突して動かなくなった。
リディアがファブールの王へ駆け寄った。それでようやく忍たちの顔に笑顔が戻った。
ヤンは、これまでのあらましを話して聞かせた。「ヤン、どうしてここに――」
聞き終わったリディアは涙を零した。「よかった。セオドアは、無事にセシルの元へたどり着いてくれたのね」
ヤンは頷いた。「他にも助けを待っている仲間たちがいるはずだ。リディア、エブラーナの忍たちよ、そなたらの力を貸してもらえぬか」
「もちろんよ」リディアは即答した。「でも、その前にこの扉を何とかしたいの」

一行は固く閉じられた扉を見つめた。
「この奥に、いったい何が?」
「わからないわ。でも、きっと何かある。それは確かなの」
そのとき、彫像のように微動だにしなかったバハムートが動いた。顎に宿った真紅の光を扉へと転移させる。臓腑を震わす轟音とともに、扉が破壊された。
「——幻獣神様」
『リディアよ、苦労をかけたな。ようやく己を取り戻すことができた』
「ありがとうございます」
『我ら幻獣は、いつでもそなたとともにある。忘れるでないぞ』
バハムートの輪郭が次第にぼやけていったかと思うと、その姿が消えた。
「行きましょう」リディアは言った。
一行は破壊された扉を乗り越え、その奥へ歩きはじめた。

17

周囲の景観が一変した。これまでは区画を隔てる扉を抜けても、必ずそこには通路なり部屋なりがあった。それぞれの区画を造り出した文明のちがいによって、受ける印象が大きく変わったのは確かである。しかし今回は、まったくちがっていた。視界は開け、整然と立ち並ぶ

近代的な金属製の建物が散見された。街だ――とリディアは直感した。誰かが、ここに住んでいるのに間違いない。問題は、それが何者なのかということだった。

整備された道が、人工的な明かりに照らし出されている。一行はヤンを先頭にして慎重に進んでいった。動く者の影はなかった。それどころか、気配さえも感じられない。辺りは廃墟のように静まり返っていた。呼吸をするのを躊躇(ためら)うほどの静寂に支配されている。

しばらく進んだところでヤンが足を止めた。その視線が向けられた先に人影があった。一行は息を呑み、身構える。そこに空色の髪をした少女が立っていたのだった。

「間違いなく手応えがあった」ゲッコウが拳を握りしめて呟いた。

忍たちの間に、動揺が広がっていった。それも当然のことである。先刻、少女はバハムートの〝極核(メガフレア)〟、リディアの〝炎獄(ファイガ)〟、そして最後にゲッコウの一撃を受けて事切れたはずだった。少なくとも、そう見えた。しかし今そこに佇む少女は、先ほどの激闘などなかったかのように真新しい衣服に身を包み、きれいに整えられた髪と汚れひとつない肌をしている。まるでバハムートの背に乗って現れたときまで、時間が巻き戻されたかのようだった。

奇妙な点が、もうひとつあった。こちらの存在はすでに知られているはずなのに、少女は動こうとしなかった。瞬きひとつせずに虚空を見つめ、ただ立ち尽くしている。ヤンが拳を固めたまま、少しずつ距離を詰めていった。短くない時間をかけて互いの間合いに入るかどうか、というところまで近づいたが、それは何も変わらなかった。機能を停止しているようだ。

一行は無用の殺生は避けるべきと少女のそばを離れ、街の中心部へ向かった。

空色の髪を持つ娘は、別の場所にもいた。ひとりやふたりでは済まなかった。寸分違わぬ姿形をした少女たちの姿が、街の至るところで目にできた。いずれも一切の気配を放たず、虚ろな目で宙を見つめているだけである。

予想外の光景に毒気を抜かれたのか、一行は押し黙ったままだった。一際大きな建造物の前を通り過ぎようとしたとき、ふいに周囲に耳を聾する電子音が響き渡った。と同時に、大気にいくつもの殺気が満ちた。「警報のようじゃな」とザンゲツが言った。

彼の言葉が正しければ、あの少女たちが目覚めると予想できた。街中を悠長に歩いている状況ではなかった。警報は、なおも鳴りつづけている。リディアは辺りを見まわした。すぐ脇に立つ巨大な建造物が目に入った。一行は互いに顔を見合わせると、建物の中へ逃げこんだ。

内部は薄闇に支配されていたが、やがて目が慣れてきた。

「これは、いったい――」イザヨイが言葉を失う。

左右の壁際にずらりと、金属製の円柱状の装置が立ち並んでいた。そこから伸びたいくつもの管が壁や天井をところ狭しと這っている。装置の前面は透明なガラス張りになっており、中の様子を見て取ることができた。内部は青みがかった液体で満たされており、一糸まとわぬ少女が漂っていた。空色の髪をした、あの娘だった。

「何ということだ」いくつかの装置を見てまわったあとで、ヤンが重く息を吐いた。「こやつはひとりではなかった。よもや、これほどの数がいるとは――」

「これで、はっきりしました」ツキノワが言った。「こいつらを造った者が、この月のどこか

にいる。それこそが、ぼくたちの本当の倒すべき敵なんですね」
扉を閉め切っているが、なおも鳴り響く警報の音がここまで聞こえてくる。それで一行は、自分たちが追い詰められつつあることを思い出した。これほど重要な施設ならば、捜索の手が及ばぬはずがない。じきに彼女らに発見されることになるだろう。
そのときだった。建物の奥の暗がりで小さな影が動いた。ヤンが雷光の疾さで動いた。一瞬だけ遅れてエブラーナの四人の忍が床を蹴る。あっという間に影を取り囲んだ。
ザンゲツが目を細めた。「かわいそうじゃが、見られたからには――」
「やめて」ようやく追いつくと、リディアは声を張り上げた。「相手はまだ子供よ」
そこに立っていたのは、空色の髪をした少女だった。だが、これまで目にしてきた娘たちよりも格段に幼い。十以上は若いだろう。年のころ、五つ程度に見える。
リディアは床に両膝をつき、少女と目の高さを同じにしてから微笑みかけた。「大丈夫よ。私たちは、あなたに危害を加えるつもりなんかないから」
少女は無言で、緑の髪をした召喚士をただ見つめるだけだった。
リディアはつづけた。「ここの建物の出口は、他にない？　そう、裏口と言えばいいかしらね。誰にも気づかれずに外に出たいの」
「存在しない」少女が答えた。感情の感じられない声だった。
「わかったわ、ありがとう」リディアは少女の頭を撫でたあとで立ち上がった。仲間の顔をゆっくりと見まわす。「見つかるのを覚悟で正面から出るしかなさそうね」

「その子の言葉を信じるのですか」イザヨイが言った。
「もちろんよ」リディアは微笑んだ。
それから外へとつづく扉を見やる。警報の音はすでに消えていたが、何やら騒がしい。何者かが争っているようでもある。忍たちが顔を見合わせた。
「行きましょう」リディアが駆け出した。扉に手をかけたところで、背後を振り返る。「あなたは、ここで待っていて」空色の髪の少女に言った。「あなたを巻きこみたくないの」
「ここで待っていればいいのか」リディアが頷くと少女は「了解した」と短く応じた。
一行は扉を開けると、少女をその場に残して外に飛び出した。リディアの想像していた通りの光景が、そこにあった。ヤンが娘の名を叫んだ。ツキノワはミシディアの白魔道士の名を呼ぶ。イザヨイの顔に笑みが浮かんだ。エッジたちが、少女たちと死闘をくり広げていた。
「無事だったのね」リディアは溢れる涙を拭った。
エッジは笑った。「言っただろ、お前を守るって」

18

広大な空間に、数え切れないほどの台座が設えてあった。そのいずれにも、光を失って闇色に染まったクリスタルが安置されていた。さながら宝物庫のようであった。
「青き星だけではないようだ」ゴルベーザが言った。「奴らはあらゆる星からクリスタルを強

奪し、我が物としていたのであろう」
セシルは本能の赴くままに台座から台座へと彷徨い歩き、クリスタルを手に取っていった。
彼の指先が触れると同時に、クリスタルがつぎつぎと眩い輝きを宿してゆく。
「どうして私たちの大地のクリスタルだとわかるの」ローザが訊いた。
セシルは首を振る。「呼ばれたような気がしたんだ、クリスタルに」
土水火風の四つのクリスタル、そして地底世界の四つの闇のクリスタル。合計八つの水晶が一行の手に戻った。あとは、この月の軌道を変えて、故郷の大地を守るだけである。
導かれるようにして、台座で埋め尽くされた大広間をあとにした。
「——私たちを待っている者がいる」セシルが言った。「もう、すぐそこに」

＊

月の中心核に、それはあった。
無数の太い管のようなものが複雑に絡み合い、巨大な半球状の物体を形作っていた。それを稼動させる動力の音なのだろうか、虫の羽音にも似たかすかな音が聞こえてくる。物体の中央部には、青白く輝く扉のようなものがあった。無数の触手がすぼまったような有機的なもので、それがまるで鼓動を刻むかの如く一定間隔で収縮と拡散とをくり返している。
セシルたちは、その〝扉〟の前に立っていた。

内部に何者かがいるのは明らかだった。そして、それがこの月の主だということも。一行がやって来たことは、すでに知られていよう。だが、月を統べる王は姿を現そうとしなかった。今の一行には、相手の登場を悠長に待っている時間はなかった。友好的に話し合おうというつもりもない。月の軌道を変えるためならば、手荒い真似も辞さない覚悟だった。出てくる気がないのならば、力ずくで引きずり出すしかないのである。

セシルとカインが、手にした得物で〝扉〟を壊しにかかった。刃を突き立てるたびに断ち切られた触手が床に落ち、苦悶するかのようにその細い体をくねらせる。

激痛に堪えかねたのか、一斉に触手が引っこんだ。開いた〝扉〟の向こうから光が漏れてきた。直視すると網膜が焼けついてしまうのではないかと思われるほどの強烈な光である。まぶたを閉じるだけでは十分ではなかった。一行は腕を上げ、己の目を庇った。

何者かが、ゆっくりと這い出てきた。

眩い光に包まれているため、その姿を見ることはできなかったが、気配は感じられた。敵意や殺意の類ではなく、ただ冷たい。凍てつく気を容赦なく周囲に発散していた。

「──光浴の儀の最中に騒々しい」それが言った。感情を押し殺そうとしているのか、低く囁くような声だった。「どうやら劣等種は、待つという行為を知らないと見える」

やがて〝扉〟から溢れ出る光が消えた。光浴の儀とやらが終わったということなのだろう。

セシルたちは腕を下げ、声の主を見やる。身の丈は、セシルの腰の辺りまで。年齢でいえば四つか五つか。残光を身にまとっているため細部までは確認できなかったが、それでも幼い印象

は微塵も感じさせない。零れ落ちそうなほど大きく見開かれた双眸は濁り、血走り、気の遠くなるほどの年月を生きた者しか持ち得ない賢と愚とを併せ持っていたからだった。見つめられると、心の奥底まで覗かれているような気分になる。
「……おやおや、心の中が疑問符だらけではないか」それが驚いたように、大きな目をさらに大きく見開いた。「君たちに、そのような知的欲求があるとはね」
「何だと――」カインが手にしていた槍を構えた。
それは、気にした風もなくつづける。「いいだろう、今日は非常に気分がよい。話してあげよう。果たして理解できるかどうかは甚だ疑問ではあるがね」それは血走った目を閉じると、夢見るような口調で語りはじめた。「そう――あれは、遠い遠い昔のことだ。君たちの星とよく似た青き星で私は生を享けた。高度な文明を築いた我々は、それゆえに母なる大地を蝕み、貪り、もう後戻りできないところまで来てしまった。そこで故郷の星を捨てて安住の地を求める旅に出たのだ、月と呼ばれるこの小さな星に乗ってね」
「小さな星だと――この月がか？」カインが訊いた。
「ああ、とてもちっぽけな星だった、当時はね」それは楽しそうに笑った。「だが人工的に作り出した環境では、我々の生命力は退化の一途をたどるしかなかった。この真月は、そのなれの果て。そして私は、我らの種族の最後の生き残りとなってしまった」
「劣等種には、とても理解できぬ悩みだな」
カインの皮肉を、それは聞き流した。「どのような文明を築き、どのように進化すべきだっ

たのか――。私は答えを求め、豊富な知識を身につけ、様々な実験と思索とをくり返した。そしてその過程や結果を克明に記録するために、クリスタルを創り出した」
「過程や結果を記録するために――？」ローザが眉根を寄せた。
「いかにも。君たちは、クリスタルを叡智の象徴と思っているようだ。確かにそういった側面も持ち合わせており、事実、君たちの文明の発展に大きく寄与した。しかしクリスタルの本質は、あらゆる生物の進化を記録するための媒体なのだ。私は、より多くの情報を収集するため、生命の存在する可能性のある多くの星へクリスタルを送り出した」
「劣等種と呼ぶぼくらから、いったい何を学ぼうというのです」セオドアが訊く。
「君たちはここへたどり着くまでに、様々なものを目にしたことだろう。そう、この星――真月には、すべてがある。草木が生い茂り、水は流れ、炎を宿した山もある。それらすべてを私がこの手で創り出した。だが残念なことに、ひとつだけ創ることができなかったものがある。それが何なのか、君たちにはわかるかな」
「――光か」ゴルベーザが言った。
「これは驚いた。まさしくその通りだ」それの声が一段高くなった。「だが勘違いしてもらっては困る。人工的な光などには興味がない。精神と肉体の境界に宿る神秘的な光でなければならないのだ。その光を得られなかったことこそが、我らの種族の滅亡の原因だったのだから。ゆえに私は、光を宿した者がいるとクリスタルを通じて知ったときに歓喜したものだ。ついに収穫の時が訪れたのだと、マイナスたちを君たちの星へ向かわせた」

マイナス――あの空色の髪をした少女の名のようである。
「それで貴様は、クリスタルを奪うだけでは飽き足らずに……」ゴルベーザの鉛の声が震えを帯びていた。「忌まわしき過去をくり返そうとしたわけか」
「仕方があるまい。何百年も生きていると、自然と疑い深くなる。まずはそこに再現性があるのかを探るのが当然であろう。するとどうであろう。今度は別の者が光を宿すという結果が得られたではないか。それで私は確信した、光を手にする論理が存在するのだと」
カインが動いた。手にしていた槍を一閃。切っ先がそれの胸元を貫いた。
しかし、それは動じた様子を見せなかった。
傷口からどろりとした光が溢れるが、すぐに凝固した。
「そこで私は、検証の最終段階へ進むことにした。光を失って闇へ墜ちた者が、再び輝きを宿す可能性があるのか――それを、どうしても知りたかった。結果については言うまでもないだろう。仲間たちの祈りが、見事に光を甦らせた」
それは、セシルを見つめていた。
一行が言葉を失ったのも無理のない話である。ここへ至るまでの過酷な旅路が、魔導船に残った仲間たちをも巻きこんだ壮大な実験だというのだから。
「そろそろ時間だ。お喋りは、この辺りでおしまいにしておこう」それは言った。
「俺も、貴様の御託は聞き飽きたところだ」カインは浅く腰を落とした。
その言葉が合図となり、一行はそれを包囲するように展開した。

「君たちは、何か勘違いをしているようだ。私は君たちと争うつもりなどない」
「これだけのことをしておきながら、今さら命乞いか」
それは小さく首を振ると、右手を小さく掲げた。その瞬間、周囲に殺気が満ちた。数え切れないほどたくさんの空色の髪をした少女が姿を現した。足音ひとつ立てずに、一行を取り囲む。その数は五十は下らないように思えた。
「私がひと声かければ、マイナスたち——マイナデスは容赦なく牙を剥く。果たして勝算があるのか——劣等種とはいえ、それぐらいは理解できるのではないか」
「目的は何だ」セシルが問うた。
「わかりやすく言おう。私は、君になろうと思っている」それはセシルを指差した。
「——私になる、だと?」
「私の計算によれば、光を手に入れるのに、それが最善の方法のようなのだ。難しいことなど何もない。私が君に融合し、同化する。君はただ私を受け入れるだけでいい」
「我らが指をくわえて見ているとでも思うか」ゴルベーザが言った。
それの大きな目が、すっと細くなった。「光をより強いものにするためには、絆が大切なのだと私は理解している。可能な限り、事を荒立てたくないのだよ。そう、もうすぐお前は私の兄になる」それはカインに視線を転じた。「お前は私の友となり」ローザを見やる。「お前は私の妻」最後にセオドアを見つめた。「そして、お前は我が息子となるのだから」
「光を欲するのならば、くれてやる」セシルが言った。「だが、それには条件がある。仲間た



ちの、そしてお前たちが青き星と呼ぶ我らが大地の無事を約束してほしい」
「仲間の大切さは、先刻も言ったように承知している。しかし真月の軌道は変えられぬ」
「――何だと！」
「奇跡に満ちたあの星を我が真月に食らわせてこそ、私は真の創造主となれるのだから」
「ならば、こちらもお前の要求は――」セシルは、みなまで言うことができなかった。それが凄まじい速度でセシルとの間合いを詰め、取り憑いたのだ。
　それの両腕が肘の辺りまでセシルの腹部に没していた。聖騎士（パラディン）は戸惑ったような表情を浮かべるだけだった。痛みはないようである。それは、さらにセシルの心の中を覗きこもうとするかのように、己の顔を相手の胸へと押しつけていった。
　ゴルベーザが、それの背に斬りかかった。しかし苦悶の声を上げたのはセシルだった。融合はすでに進行している。感覚のみならず、肉体をも共有しはじめているのだろう。一行は一切の手出しができず、その光景を見つめるしかなかった。
「――あった。見つけたぞ、光を」セシルが、それの声で言った。セシルの四肢が痙攣をはじめる。同時に顔から生気が抜け落ちていった。代わりにまだ同化していないそれの背中が、さらに眩く光を放った。「どうやら融合や同化など必要なかったようだ」それの体が、セシルの腹部からゆっくりと抜け出していった。
　それから解放されたセシルが崩れ落ちる。ゴルベーザとローザが何とか支えた。
「見よ、この輝きを！　私はついに手に入れたのだ」

神を名乗る者の体が、急激に変貌を遂げていった。少年のような小さな体が、大人のそれへと変わってゆく。そこで終わらなかった、さらなる成長段階に入る。足が大樹の太さになった。背が盛り上がり、山となる。広げた腕から突き出た無数の突起が、縦横に伸びて密林を彷彿とさせる空間を作り上げてゆく。頭部は縦に割れ、そこからとめどなくゲル状の光る物質が溢れ出した。ふた呼吸ほどの間に、それの質量は数十倍となり、なおも増えつづけている。
「自分自身が〝世界〟になろうとしているんだわ」ローザが呟いた。
それで一行は我に返った。セシルが自分の足で立った。生命に別状はないようだった。
「このままだと、ぼくたちも呑みこまれる」セオドアが叫んだ
「逃げよう」セシルの言葉に、一行は走りはじめた。彼らを取り囲むマイナスたちは、膨張をくり返す主をただ見つめているだけで、セシルたちの行く手を阻もうとはしなかった。
と――地表を目指して全力で駆ける一行の前に、いくつもの人影が現れた。
「ヤン」セシルが叫んだ。ヤンだけではなかった。エッジ、リディア、パロム、ポロム、ギルバート、そしてシド。その他、この真月へ乗りこんだ面々がすべて揃っていた。
「へっ。あんちゃん待たせたな。で、黒幕ってのは、どこだ？」パロムが訊いた。
「敵の首魁は、崩壊と増殖をはじめた。急いで脱出する」セシルが答える。
「――どういうことだ」とエッジが首を傾げた。
「ぐずぐずするな、呑みこまれるぞ」ゴルベーザが叫ぶ。
振り返ると、背後に不気味に輝くゲル状の物体が迫っていた。それは一部をあるいは全部を

動物に、あるいは植物に、ときには無機物にとつぎつぎと姿を変えてゆく。たったひとつの体で、この世に存在するすべてを体現しようとしているようだった。

一行は再び走りはじめた。

先頭をゆくリディアが、「こっちよ」と進路を変更する。

「おい、そっちは――」言いかけたエッジだが、舌打ちするとそのあとにつづいた。

一行が入りこんだのは、マイナスたちの居住区だった。一際大きい建物の扉を開けると、リディアはひとりの少女の手を引いて出てきた。空色の髪をした少女である。が、これまで相手にしたのよりも格段に幼い。年のころ、五つか六つというところか。

「リディア、この子は――」セシルが訊いた。

「連れていくわ。ここに残していくなんて絶対にできない」

リディアの決意の固さを感じ取ったのか、セシルは頷いた。「わかった」

それが、マイナスたちの街をも呑みこみはじめていた。どこからか地鳴りのような音が聞こえてくる。靴底を通して感じられる震動は、破滅の前触れだと思えた。

「急ごう」セシルの声に、一行は呼吸を整える間もなく走りはじめた。

障害となる魔物の姿は、どこにもなかった。崩壊の予兆を察知したのだろうか。

セオドアが足を滑らせて転倒した。セシルとローザが立ち止まり、我が子に手を差し伸べる。

少年は微笑み、両親の手を強く握って立ち上がった。肩越しに背後を振り返る。それは、さらに迫りつつあった。もはや呑みこまれるのは時間の問題のように思われる。だがセオドアはあ

きらめるつもりなどなかった。絶対に生き延びようと心に固く誓う。
再び走る。走りつづける。呼吸が乱れ、口が渇き、足がもつれても走った。心が折れそうになるたびに、誰かに背中を叩かれ、あるいは手を引かれた。
しかし一行は、ついにその足を止めてしまう。マイナスたちが立ちはだかっていたのだ。その数、およそ二十。闘うには多過ぎる数だった。
「その子を連れていくつもりか」マイナスのひとりが言った。その視線は、リディアが手を引く少女に向けられていた。「我らの幼体と知っていながら」
「当然だわ。見捨てることなんてできない。この子には何の罪もないのよ」
「――劣等種が、我らの子を育てられると思うか」
「できるわ。確かに私たちは、あなたたちの種族より劣っているかもしれない。でも、私たちには心がある。それをつなぐ絆がある。そこから生まれる愛がある」
「その子は、我らの未来なのだ」マイナスは、そこで顔を伏せた。「できることならば、教えてやってほしい。我らの知らぬ、その愛という感情を」マイナスはそこで顔を上げた。一行の前に築き上げられていた少女たちの壁が、中央からふたつに割れた。
そこに、道ができた。
「行け。もう時間がない」
少女の意外な言葉に、リディアは大きく目を見開いた。「逃がしてくれるの？」
「こうなっては、もう闘う意味などない」マイナスは、一行の背後から迫り来る創造主を見つ

めていた。「すべては終わったのだ」

「あなたたちも逃げて」

今度はマイナスが目を見開く番だった。「逃げる――我らがか？」

「そうよ。無駄に命を落とすことなんかないわ。逃げましょう、一緒に」

「それはできない」

「どうして――」

「あのおかたは、我らの父であり、母なのだ。このままにしておくわけにはゆかぬ」

リディアは、もう返す言葉が見つからなかった。とめどなく涙が零れ落ちる。

「行くぜ、リディア」エッジが言った。「時間がねえ」

リディアは涙を拭うと、マイナスたちの間を走り抜けた。

一瞬だけ彼女たちを振り返る。

「あなたたちにだってあるじゃない。それが心、絆、愛なのよ」

リディアの言葉に、マイナスは微笑んだように見えた。



終章

FINAL FANTASY IV
THE AFTER

ファイナルファンタジーIV
ジ・アフター

月の帰還

ミストの村を、やわらかな風が通り過ぎていった。

降り注ぐ流れ星によって崩壊寸前まで荒廃してしまったが、今ではその剥き出しになった大地に新たな緑が芽吹いている。一年も経たぬうちに、辺りは一面の草原となるだろう。

リディアは強い日差しを避け、大樹に背を預けるようにして腰を下ろしていた。膝の上には真月から連れてきた少女が座っている。ふたりは空を見つめていた。

「月が恋しい？」リディアは、少女の耳元で囁くように訊いた。

少女は少し考えたあとで、首を傾げた。「わからない」

空に浮かんでいる月は、ひとつだった。神になることを夢見た者を乗せた真月は、どこにも見当たらない。あのまま創造主が膨張と増殖をつづけていたら、間違いなくかの月は崩壊していただろう。だが、真月はリディアたちの星を呑みこむこともなく軌道を変え、いずこかへと飛び去った。それはマイナスたちの愛が、彼女らを創り出した主に届いたことの証なのだとリディアは確信していた。知らぬうちに涙が零れ、頬を濡らしていた。半分は喜び、もう半分は悲しみ。もしもマイナスたちとちがう形で出会うことができたら――そう思わずにはいられない。きっと、もっとたくさんの人が笑顔になれたはずなのだから。

「どっか痛いのか」少女が膝の上で体の向きを変え、リディアの顔を覗きこんだ。

リディアは何と答えたらいいのかわからず、曖昧に首を振った。

「サーシャは転ぶとすぐに泣く」サーシャというのは、このミストの村に住む友達の女の子の名だ。「でも、こうするとすぐに笑う」少女は、召喚士の緑色の髪をやさしく撫でた。

リディアは微笑み、少女の額にくちびるを押し当ててから抱きしめた。
とても不思議な気分だった。自分が幼かったころの記憶が、脳裏に鮮明に蘇る。
そう、あのころの私もよくお母さんの膝の上に座って、空を眺めていた。お母さんは事あるたびに私の顔にキスをして、それから抱きしめてくれた。私は幸せだった。他にほしいものなんて、ひとつもなかった。――この子も幸せだと思ってくれるかしら。
左手に足音を聞き、リディアは目を開いた。少女を膝から下ろすと、自分も立ち上がる。
老人と女性の姿があった。「――幻獣王様、それに王妃様。どうして、ここに」
女性は周囲を見まわしたあとで微笑んだ。「ミストの村、よいところではありませんか」
「お元気そうで何よりです」リディアも微笑んだ。「でも、どうしたんです、突然」
「お前が来られぬのであれば、わしらが人間界へゆけばいいと気づいてな」と老人。
少女がリディアの腕を小さく引いた。「……誰？」
「私の両親よ。さあ、ご挨拶なさい」リディアは少女の背中をやさしく押した。
少女は戸惑った表情を浮かべていたが、やがて小さく頭を下げ、「こ、こんにち……は」
「よく似ています、あのころのリディアに」王妃が頷いた。
「名は何と申すのか」幻獣王は膝をつき、少女の顔を覗きこむようにして訊いた。
少女は消え入りそうな声で呟いた。「……クオレ」
「クオレ――〝心（クオレ）〟か。なるほど、よい名じゃな」
「この子のお陰で、昔、母が何を言いたかったのかわかるようになってきました」リディアは

両親に言った。「クオレと過ごす時間を積み重ねるたびに、母との思い出が鮮明に蘇り、記憶の中のその面影と自分とが同化してゆくような……そんな感じがするんです」

と、少女が突然、走りはじめた。残された三人がその向かう先を見やる。そこにはエブラーナの王エッジの姿があった。三人と目が合ったことに気づいたエッジは驚き、隠れる場所を探そうとしたのか、慌てた様子で左右を見まわすが、やがてあきらめたように両手を広げた。

「エッジ、遅い」

飛びかかってきたクオレを受け止め、そのまま抱き上げると「悪い悪い」笑った。

「――彼なのですよ」リディアに近づいた王妃が、そっと耳打ちした。「私たちに、ここに来るように言ってくれたのは」

「――え」リディアは王妃を見つめ、それから再びエッジに視線を転じた。

「よき男ではないか」幻獣王が笑った。

「はい。だから、私は人間界に住むことを決意できたんだと思います」

「――飛空艇だ」ふいにクオレが声を上げた。

そこに居合わせた全員が、空を見上げる。ミストの村の上空、バロンの飛空艇《赤き翼》が轟音を轟かせながら南の方角へ飛んでゆくのが見えた。

その《赤き翼》の甲板では、カインが空を見上げていた。

思い出すのはゴルベーザのことである。この大地へ帰還したあと、彼は同胞たちの待つ月へ

戻るべく魔導船で旅立っていった。残してきたフースーヤのことが気がかりだったようだ。彼らの故郷の月がどうなってしまったのかは、誰にもわからない。ゴルベーザは、それを見届けるのが自分の役目なのだと言った。彼にとっての帰るべき場所は、月以外にないのである。
「――帰るべき場所か」とカインはため息混じりに呟いた。
《赤き翼》は本日の任務を終え、バロン城へ向かっている最中だった。カインは視線を天から引き剥がし、前方を見やる。傾きかけた光の中、バロン城が見えた。その美しい姿に、カインは思わず見惚れていた。同時に、バロンに生まれ、育ち、そして帰れることを誇りに思った。あの城には、自分の帰りを待ってくれている者たちがいる。それが何よりもうれしかった。
「部隊長、間もなく着陸態勢に入ります」
「ああ」と短く返事を返し、カインはセオドアを振り返った。「今日の任務は、これで終了だ。だが、これから、ますます忙しくなる。しっかり体を休めておけ」
「はい」とセオドアは敬礼し、自分の持ち場へ戻っていった。
カインはその背中を頼もしそうに見つめたあとで、再びバロン城を見つめた。城へ戻ったら、真っ先に玉座の間へ向かおうと、心に決めた。そこにはセシルだけではなく、ローザもいるだろう。そう、今ならきっと言えるはずだった。一点の曇りもない笑顔で。
――お前たちを祝福する、と。

ファイナルファンタジーⅣ　ジ・アフター　月の帰還　完

手塚（てづか）　一郎（いちろう）　Tezuka　Ichiro

1966年4月11日生まれ。AB型。……と書くと、必ず二重人格ですか？　と訊かれます。
残念、人格はたったふたつではありません。ちなみに、この小説は三番目の人格が書きました。
三郎は、なかなかの働き者です。スタジオベントスタッフ所属。

GAME NOVELS
ファイナルファンタジーIV
ジ・アフター −月の帰還−

2009年4月16日　初版第1刷発行

原　作◆携帯アプリ用ソフト
「ファイナルファンタジーIVジ・アフター —月の帰還—」

著　者◆手塚　一郎

発行人◆田口浩司

発行所◆株式会社スクウェア・エニックス
〒151-8544
東京都渋谷区代々木3-22-7
新宿文化クイントビル3階
営　　業 03(5333)0832
書籍編集 03(5333)0879

印刷所◆加藤製版印刷株式会社

乱丁・落丁はお取り替え致します。
大変お手数ですが、購入された書店名と不具合箇所を明記して
小社出版業務部宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。
但し、古書店でご購入されたものについてはお取り替えに応じかねます。
定価はカバーに表示してあります。

ISBN978-4-7575-2536-8　C0293

9784757525368
1920293009339
ISBN978-4-7575-2536-8
C0293 ¥933E
定価：本体933円＋税
SQUARE ENIX

